山岳

LIII

F
FF

Caravan

日本山岳会　ヒマラヤ委員会　　創案　指導

全岳連推薦

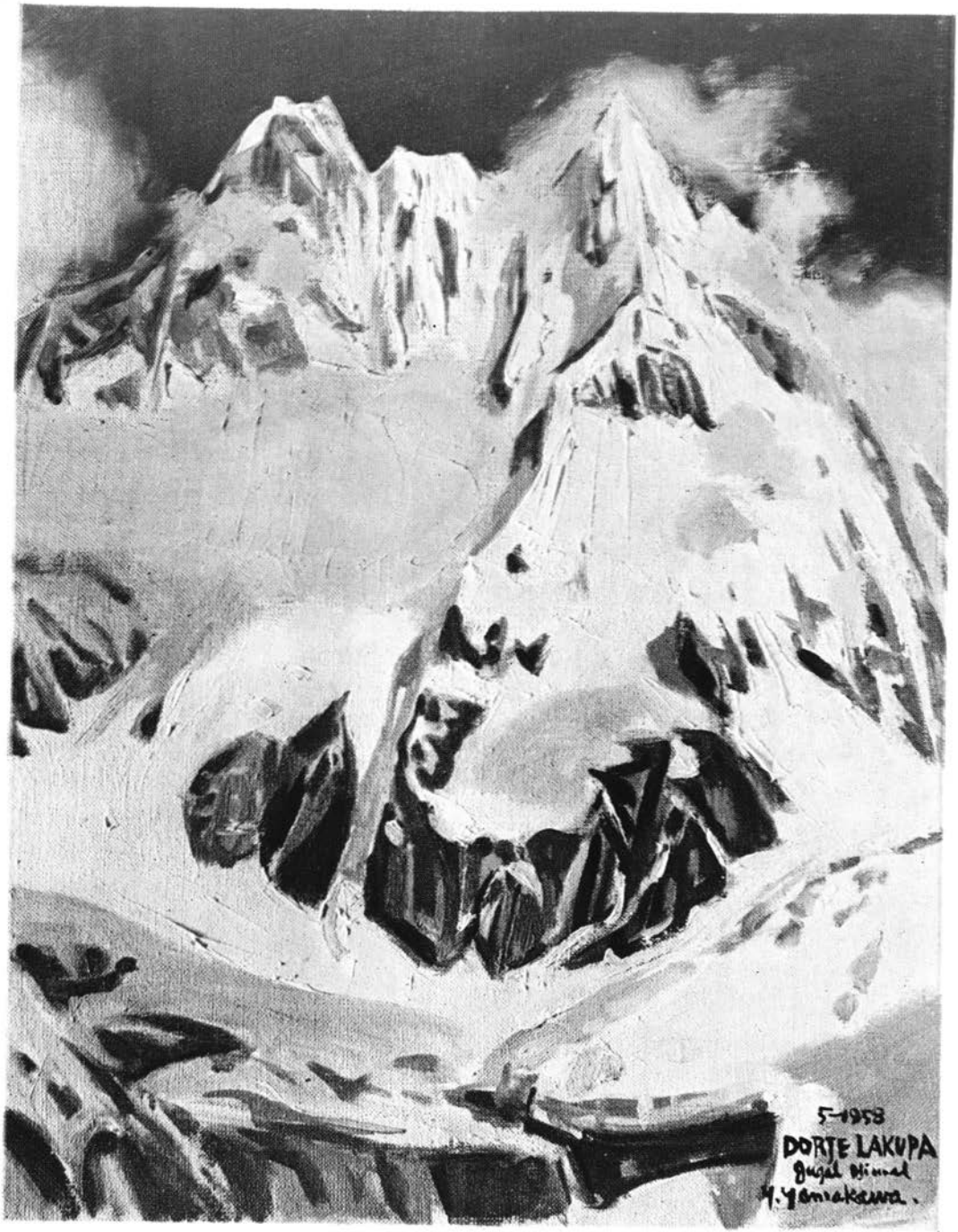
特許
トリコスパイク
滑り止め付

特許パーマケム加工
（水虫殺菌防臭）

PAT.REG.NO.

109710	121850	ビニロン胛布（黒.紺）	1,600
121844	486321	ナイロン胛布（緑.紺）	1,900
121845	492829	テトロン胛布（ 白 ）	2,000

製造元　藤倉ゴム工業株式会社
発売元　株式会社　山　晴　社
東京都千代田区神田駿河台二ノ十一
電　話（28）2722・6905番



ドルヂェ・ラクパ峰　　by Y. Yamakawa.

Dorje Lakpa (6989m.) —Jugal Himal

山岳

第五十三年

日本山岳會藏書之印
2839

183	47.7.18 受入
N	No.
	岩永信雄氏寄贈図書 氏寄贈
日本山岳会	

山岳　第五十三年　目次（一九五八年度）

アレナレス山の初登頂……神戸大学山岳会…一
スワート・ヒマラヤ探検行（一九五七年）……松下　進…三
南極第一次越冬の犬ぞり(1)……北村泰一…四
ジュガール・ヒマールからランタン・ヒマールへ……深田久弥…六
八千メートル峰登山のタクティックス(1)……松田雄一…七
アルパイン・クラブの百年晩餐会とその前後……松方三郎…八
三十年ぶりのスイス……槇　有恒…一〇
富士山での雪崩遭難について……金坂一郎…一〇
積雪期の剣岳付近……同志社大学山岳部…一九
積雪期の黒部下廊下横断……大阪大学山岳部…三
追悼
高頭仁兵衛氏（武田久吉・藤島玄）……一四
岡野金次郎氏（小島栄・岡野とよ・望月達夫）……一三
松尾清秀氏（松方三郎）……一五
登山界のあゆみ……一六
会務報告（一九五八年四月―一九五九年三月）……一七
社団法人日本山岳会定款（昭和三四年三月改正）……一七

絵画・写真

ドルヂェ・ラクパ（油絵）……山川勇一郎…巻頭
ベース・キャンプ付近から見たアレナレスとコロニア
　氷河の末端……依田孝喜…対頁一〇
中の島尾根の突端に建てられたCⅢ……〃……一一
CⅡからセラック地帯を突破してスキー・デポに出た
　ところ……〃……一六
アレナレス頂上から見たパタゴニア氷陸地帯と太平洋
　……〃……松下　進…一七
スワート・コヒスタンのU字谷……〃……一七
スワート・コヒスタンの山とカールと段丘の扇状地
　……〃……三〇
ギザール・キャンプ付近の氷蝕を受けた岩盤〃……三一
ギザール付近のギザール川……〃……三一
ザガール・アンの上に立つザフール・ベグ両教授
　……〃……三六
ナズバール・アンの上で休むポーターたち…〃…三七
ボツンヌーテンの西側と西稜の小さい岩こぶを登る
　中野氏……菊池　徹…五〇
リュツオウホルム湾の海氷上にて……〃……五一
プルビ・チャチュー（六六五八m）……風見武秀…六四
ドルヂェ・ラクパ（六九九〇m）……〃……六五
ビッグ・ホワイト・ピーク（七〇八四m）…〃…七二
ランタン・リルン（七二四五m）……〃……七三
アルパイン・クラブ百年祭晩餐会にて（J・ハント、
　E・ジョーンズ、槇有恒、槇有恒の各氏）……八八
同右（槇有恒、ロングスタッフ、テンジン、松方三郎
　の各氏）……八九
小窓尾根Mピークより三の窓周辺……江上　康…一二四
池の平山西面の岩壁……〃……一二五
黒部下廊下、別山沢落口付近を望む……宍戸　元…一四〇
黒部下廊下、内蔵助谷出合と赤沢の壁……〃……一四一
名誉会員高頭仁兵衛氏……一五二
創期会員岡野金次郎氏……一五三

地図

コークラネ～アレナレス概念図……八
アレナレス登頂ルート図……三〇
ジュガール・ヒマール、ランタン・ヒマール概念図……六六
富士の雪崩概観図……一一〇
一九五四年十一月二十七～二十八日天気図……一二四
黒部下廊下付近の略図……一三七
鳴沢岳西尾根略図……一四二
ボツンヌーテン犬ぞり行路査略図（折込）……六〇
スワートと東部ヒンズークシ概念図（折込）……巻末

表紙カット　牧野四子吉

アレナレス山の初登頂

――日本・チリ合同パタゴニア・アンデス探検（一九五八年）――

神戸大学山岳会

1　チリ、サンチャゴへ

戦前二度にわたる台湾遠征を行つた神戸大学山岳会は、戦後現役山岳部の充実と相まつて早くから単独海外遠征への目を、南米アンデスに向けていた。それは神戸大学山岳会の母体である神戸大学が、前身神戸高商時代から南米へ進出した卒業生を多くもち、又南米文庫をその施設に誇るなど、関係が深く、山岳会会員にとつても馴染みの多い地名であつたからである。それと共にヒマラヤの八千メートル級が殆んど登られ、「より困難な」登攀対象はヒマラヤより寧ろ、アンデスに発見し易いかも知れないという気持が、会員達のアンデス研究に拍車をかけていた。その意向を受けて、一九五六年ブラジルで開催された世界地理学会に出席された山岳会会長田中薫教授は、南米における岳界

の動向を知り、資料を蒐集するため、地理学会終了後アルゼンチン、チリ、ボリビヤの各山岳会を訪問された。この時チリ山岳協会（Federacion de Andinismo y Excursionismo de Chile）で持ち上つた話しが、この計画の発端である。

その後は書簡の往復により、計画は推進された。在チリ全権大使矢口麗蔵氏の懸命の仲介があつたにも拘らず、計画の進行は関係者の気をもました。兎に角航空便の往復は四週間以上を要した。遂には国際電話まで利用した。それでも一九五七年五月の山岳会総会に、正式の議題として提出された時には、チリ山岳連盟との間に、次のような原則の一致を見たのである。

1　経済問題、日本側は登山に必要な一切の装備を携行し、探検終了後チリ側が負担した日本隊のチリ滞在費、探検経費、食糧費等の代償として、チリ側に寄贈する。これは当時外貨事情が頗る悪く、多額のドル貨の使用許可の見込みが立たず、又提供装備を通じて日本の工業水準の南米紹介の一助にもなるという、日本側の気持から提案されたものである。

2　隊員、十五名。日本チリ、各七名ずつ。ただしカメラマン一名は、日本から派遣する。現実には、日本側はパタゴニアからフェーゴ島にわたり学術調査をする必要から、隊員が一名追加され、チリ側も陸軍山岳学校から特別参加したために一名増え、総計十七名となつた。

3　期間、二カ月、一九五八年一月末から三月末まで。時期については、双方において異論臆説が唱えられた。というのは、アンデス南部特に太平洋岸は、安定した季節を結論することが出来ず、記録も実にマチマチで、判断に苦しむのが実情である。一般に、パタゴニアの夏、すなわち十二月から三月にかけては、前半は好天だが風が強く、後半は雨が多いが風はおちるのが通説である。われわれも、一月二月を最良の時季と考えていたが、チリ側は風よりも雨の方が成功の可能性が多いと考え、二月三月を主張し決定した。然し矢張り危惧を持つたのか、出発直前に、本隊

が十二月中にチリへ到着することが出来ないか、との要望があつたが、その時は準備の都合上動かすことが出来ず、運を天に任せて、最初の決定通り探検は実行された。

4　日本側先発隊二名は装備一切を携行、探検実行一カ月以前にサンチャゴに到着、合同探検隊の編成にチリ山岳協会と協力する。

5　共通語は英語にする。

6　目的地は、コークラネ山群（Cadena del Cochrane）、オルトザール山（Cerro Ortuzar）、北部パタゴニア氷陸山群（Hielo Continental Norte）、パイネ山群（Paine）を候補地とし、チリ側で二名の偵察隊を現地に派遣調査し、日本側の先発隊と協議の上、最終決定する。

総会で、実行を決意した神戸大学山岳会は、この計画を具体的に進展させるため、石井光次郎氏を会長とする日チ合同パタゴニア探検後援会を創り、実行委員会として、山中一郎氏を局長とする事務局が、隊員選考、募金活動を直ちに開始した。

いよいよ準備の段階に入ると、先発隊の出発を目前にして、大変な騒ぎになつた。日本からチリまでは、太平洋を渡り米大陸沿いに赤道を越えて南下、約五十日の航海日数を要する。先発隊が十二月中旬にチリのバルパライソに着くためには、遅くとも十月末には横浜を出発しなければならない。一九五七年の夏に始まつた準備に山岳会の全能力は集中された。中でもわれわれを苦しめたのは資材の不足である。パタゴニア地方の頼りに出来る書物は日本では求められず、ローマから取り寄せたアゴスチニ神父の『パタゴニア』と、チリ山岳協会から送つて来たリブテゥリー（Riboutry）の『氷河学――チリの氷河』のみが、当地方の綜合的解説書である。そのため装備の発註は実に困つた。前記二書から漠然と氷河の大きさを推定してテントの数を決定したが、山が岩の困難か、氷の困難か、又気温、風雨雪等は、全然推測出来なかつた。やむを得ず想定し得るあらゆる状態に備えた。

日本側探検隊は、合同登山を主力とするが、同時にパタゴニア全地域にわたつて、地理学的人類学的学術調査を行いたい意向があつたので、その線にも沿うよう隊は構成された。隊員は、山岳会会員の希望者二十名余から選考された。後援新聞社は二名のカメラマンを派遣した。

隊長　田中　薫(59)　学術班　経済学部教授
副隊長　高木　正孝(44)　登山班長　文学部助教授
隊員　高谷　実(41)　渉外　神戸商大卒
　森　正幸(31)　装備　神戸工専卒
　円満字正和(29)　渉外　神戸経大卒
　森田　暁(25)　装備　神戸大学卒
　前田精三(23)　学術班　神戸大学学生
　依田孝喜(40)　写真　毎日新聞社
　田中　正(31)　映画　毎日映画社

このようにして、日本における準備は進められたが、チリとは意志は疎通していなかつた。先発隊高木、円満字が十一月五日、約二屯の装備とともに、川崎汽船聖川丸で横浜を出発した時までには、合同探検の基礎になる経済問題も最終的に決定していなかつた。入国、通関、輸送等必要なことを打合わせている時間もなかつた。予備知識をお互に持たない連中が一つになつて登山隊を編成しようということは、冒険であつたかも知れない。ただ、われわれは登山家の良心に総てをゆだねた。本隊高谷、森、森田、前田、依田、田中正六名は十一月二十八日、装備の残り約一屯半を持つて神戸を出帆した。続いて隊長田中は一月七日空路チリへ飛び本隊に合流した。

チリにおける登山活動の歴史は未だ浅く、一九三〇年代にようやく国民スポーツとして取り上げられたものらしい

が、山岳協会が正式に結成されてから十周年を経て間もない程度である。しかしバルパライソにはドイツ遠足クラブ（Deutscher Ausflugverein）が一九〇八年に創立され、それらのドイツ人達のアンデスにおける足跡は相当古く、またスイス、フランス、イギリスの各遠征隊が、チリ山岳界に装備・技術の面で大きな影響を与えているので、近代登山の上からは彼らの成長は急速に成し遂げられたと言えるだろう。首都サンチャゴ周辺に六千メートル級の氷河の懸つた山が多く、現在でも未探検地帯である恵まれた環境は、彼らの成長を充分促進している。

日本隊が、うんざりする船中生活を送つている間に、チリ山岳協会では会長ボリス・クライツェル（Boris Kraizel Loy）氏を中心に、着々準備を進めていた。探検隊参加志望者は、週三回体操のトレーニングにチリ大学体育場に集り、週末には岩登り訓練及び氷の訓練に出掛けていた。二名の偵察隊は候補地に派遣され、食糧の買付、馬の手配をするとともに、目的地の決定に必要な資料を集めていた。隊員の決定は日本の先発隊の到着まで、持ち込まれていた。先発隊は十二月十八日バルパライソに到着、直ちに山岳協会と協力して、目的地の決定、合同探検隊の組織、通関、国内輸送等山積した問題の処理に当つた。先発隊の到着と時を同じくしてチリ側偵察隊はサンチャゴに帰着していた。われわれはその報告を検討した結果、北部パタゴニア氷陸山群を探検地域とし、その山群の最高峰アレナレス（Cerro Arenales, 3437 m.）登頂を目的とすることに決定した。登攀の困難さで悪名の高いパイネ山群が、イタリア隊に先を越されて政府の登山許可を取られたからには、われわれの大規模の探検隊の目的地は、それしかないというのがチリ側の言い分である。当地方はパタゴニア地方に残された唯一の、そして完全な空白地帯である。そして最高峰アレナレスは、サンヴァレンチン、サンロレンゾにつぐパタゴニアの第三番目の高度をもち、未登で残された最高峰である。その登頂こそ日チ合同探検という新形式の登山対象に、ふさわしい価値をもつものと考えられた。われわれはアレナレス登頂後、出来得れば氷陸地帯を太平洋岸に横断したい意向も持つた。

チリ側隊員の決定は、日本側先発隊二名も交えた二回の最終トレーニング後に発表された。

隊　長　ヘルマン・ミルス（German H. Mills）（28）　バルパライソ
副隊長　エドアルド・ガルシア（Eduardo Garcia）（27）　サンチャゴ
隊　員　アルバロ・ヤーネツ（Alvaro Yañez del Villar）（28）　チリ空軍軍医
カルロス・ピデリット大尉（Carlos Piderit）（29）　陸軍山岳学校教官
クルト・クラウセン（Kurto Claussen）（23）　サンチャゴ　装備担当
ワルド・イトリアーガ（Waldo Iturriaga）（26）　バルパライソ　食糧担当
クラウデオ・ルセロ（Claudio Lucero）（24）　サンチャゴ　輸送担当
ガストン・ムガ（Gaston Muga）（26）　バルパライソ　食糧担当

チリ隊員の職業は、まちまちだが、チリ大学山岳会員は三名いた。チリ隊はチリ全国からの選抜隊である。チリ側隊員の平均年令は、日本側のそれより若かつた。それはチリの登山界の年令を語るものかも知れない。しかし副隊長ガルシアを始め二、三名は素晴らしいアイス・テクニックをもつていた。ロック・クライミングは日本隊の方が幾分優れているように考えられた。

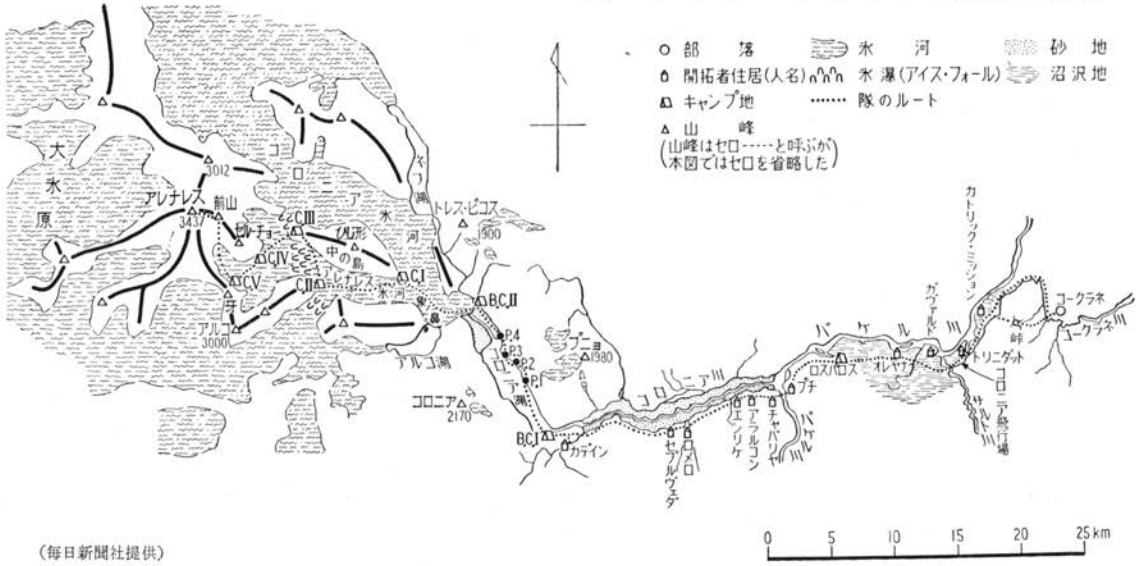
合同探検隊の組織で最も肝要な問題は、指揮系列であつた。クライツェル会長はチリ・日本それぞれの隊は各個に順位を決定し、行動の決定は日本・チリの各隊長、副隊長の四人で構成するリーダース・グループの結論に従うことを提案した。この合同探検隊が均分された力関係で組織されるものである限り、各隊員の社会的地位、経験、年令を考慮する前に、日本とチリの異質の二団体ということを前提として組織を作らなければならないのは当然であり、その意味で彼の提案はわれわれに容れられた。ただ習慣、性格を全然異にする異邦人が、アルピニストの基盤の上のみで団結する隊であるから、命令系統を確認すると共に相互の信頼の上に隊の目的を貫き、隊員同志が友情を作らねばならないことが、お互に強調された。チリ隊の結成式では、このことが取り上げられ、㈠人命の尊重、㈡友情の樹立

㈢リーダーシップ、㈣協力、㈤生活の規定、㈥チリ人として、アルピニストとしての行動等の宣誓が行われ、われわれを感激させた。実際に登頂の過程では、指揮権が一人になかつたため手違いが時々生じたが、双方の良識と友情がこの危機を克服し、最終的に成功に導いたのであつた。

装備の通関は、当時、輸入を全面的に禁止している税関法に抵触するため、通常許可される見込みがなかつたが、遂に大統領の特別通関許可令の発効という前代未聞の方法で解決した。税関ではわれわれの装備が山岳協会に寄贈されるのは、明らかに輸入行為であると見做していたが、チリ政府の積極的な好意で輸入が許可された訳である。チリ官民の本探検に対する好意と協力とは、日本人の想像を超えたもので、日本隊のサンチャゴ滞在中は一流のホテルを観光局によつて提供され、空軍は三台の空軍機で、隊員と装備を現地まで輸送してくれるといつた具合である。これはチリ人と合同でチリの山を登ることが、国民の自尊心に訴え好意を呼んだものであろう。その蔭に日本大使館の働きがあつたことも見逃せない。

一月十七日には日本側隊長田中が空路サンチャゴに到着、十九日に本隊を乗せたチリ丸はバルパライソに入港、全隊員はチリに揃つた。パイネ山群を攻撃したアゴスチニ神父に率いられたイタリア隊は、十二月初めに攻撃を開始し、一月二十日頃既に登頂に成功した。記録によつても、二月、三月を行動期間とした例は僅かにフランス隊のフィッツ・ロイにおけるのみに過ぎない。時期の遅れていることに焦つていたわれわれは、日本・チリ全隊員が一堂に会する日を待つことが出来なかつた。日本側本隊のサンチャゴ到着を待たず、先発隊、高木、ガルシア、クラウセン、ルセロ、ムガの五名は現地コロニア飛行場に向け出発した。一月二十日である。本隊高谷、森、前田、依田、ヤーネツ、イトリアーガは一月二十五日、後発隊、円満字、森田は一月二十八日それぞれチリ空軍機で先発隊の後を追つた。勤務の関係で少し遅れるミルス、ピデリットは二月一日、また学術班として別行動をとつた田中薫、田中正は一月二十七日サンチャゴを後にした。

コークラネ―アレナレス概念図



(毎日新聞社提供)

2　輸送、ベースキャンプまで

コロニア飛行場からコロニア湖畔の第一ベースキャンプ予定地までは、地図上の距離約四十五キロである。道は飛行場を中心とする湿地帯を、ゆるやかに流れるベーカー河に沿つて下降、途中で合流するコロニア河を遡行するのが予定のコースであつた。チリ山岳協会によつて派遣された偵察隊は、当地方を管轄するスタンゲ憲兵中尉の協力を得て、装備・食糧を輸送するため四十頭の馬を契約していた。一月二十一日、先発隊が飛行場とは名ばかりで、旗一本立つていない牧場に降り立つた時には、五十頭の馬と馬方達が、彼らの到着を待つていた。ところが馬方達はわれわれの行先を知らずに集つていたので、われわれがコロニア河を遡行して、コロニア湖まで行くことを知つて、その地帯へ入ることを拒否した。そこに集つた馬方、ピンチェーロ達の誰もがコロニア湖の所在を知らなかつた。その時湿地帯に発生した蚊は物凄く、馬がそのために神経衰弱を起す恐れがあつた。馬方達が、自分達の知らない、そして猛蚊の湿地帯へ危険を冒して入ることを拒否したのも無理のないことと思われた。結局スタンゲ中尉の説得が成功、ただし莫大な金を払わされた後に、馬方の一人は十八頭の馬を率いて同行することに同意した。翌一月二十二日、先発隊は取敢えず装備の一部分を持つて、ベーカー河の南岸沿いに湿地帯を横断して次のエスタンシアへ向つた。湿地帯は、原因不明であるが年一回必ず起るベーカー河の氾濫によつて出来たもので、深い所で馬の腹まで浸る程度に草原の上を水が覆つていた。蚊群の発生は言語に絶した凄まじさで、馬の背と言わず、腹と言わず、人間の手と言わず、顔と言わず、露出している部分に真黒にたかつた。勿論隊員は防蚊頭巾に手袋の完全武装であるが、薄い布地ではそれを通して刺される程だつた。約二十キロ殆んど平坦なこの草原と湿地帯を横断して、コロニア河との合流点に到着、こゝで始めてコロニア湖の所在を知つているアラルコン氏を摑えた。こゝからは、この人の案内でベーカー河を渡り、約二十二キロの行程でコロニア河の右岸沿いに、コロニア湖に辿り着くことが出来た。ベーカー河の渡河地点

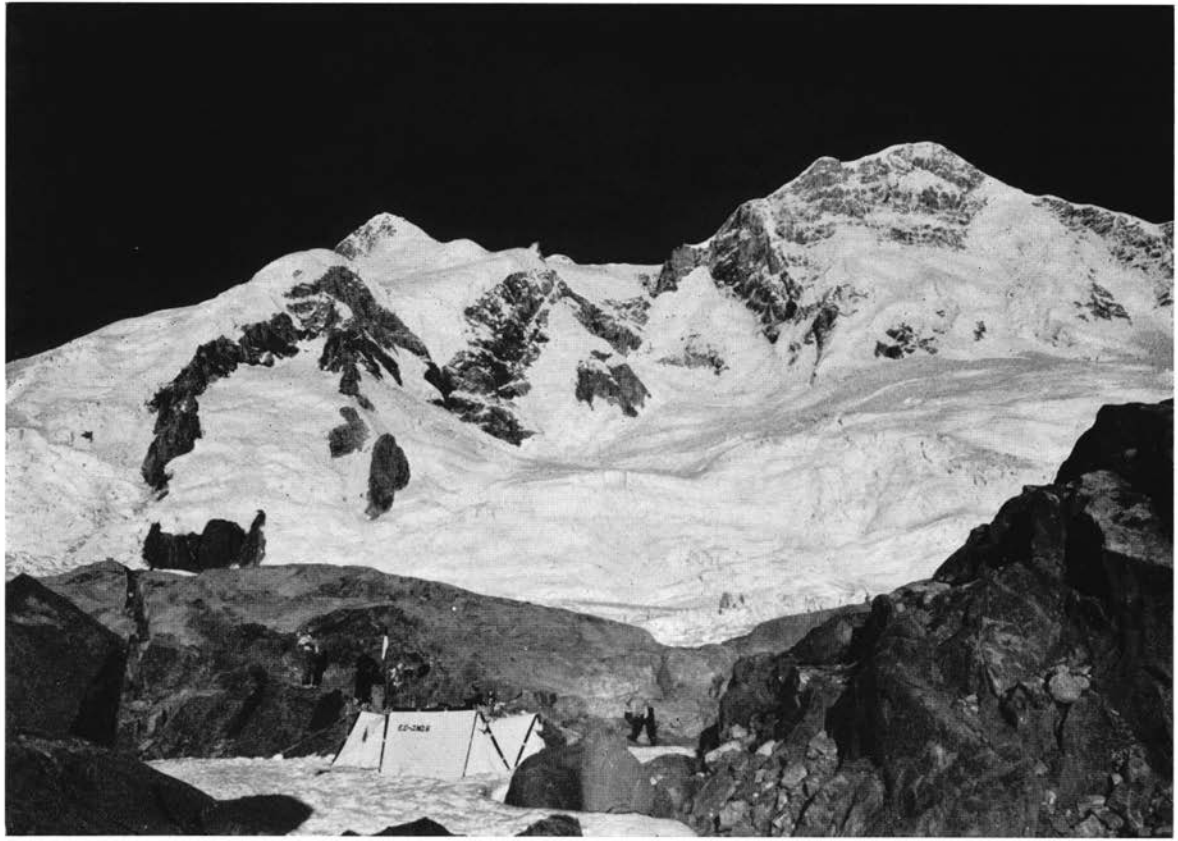
は川幅約五百メートル、相当の急流で直角に流れ込んでいるコロニア河の水流によつて捲き起される渦を利用して、木のボートで渡河するのである。その水流の状態を知らない土地の人以外は、このボロボロの渡し船を操つることは不可能に近い。馬は荷物をはずした後、泳がして渡らせた。渡河後は灌木の中を、高巻き一カ所、支流の渡河一カ所で、踏跡がコロニア湖まで続いていた。ベーカー河渡河に一日を費すため、飛行場からコロニア湖までは最低三日はかかると思われた。

一月二十六日本隊、二十九日後発隊と続いて飛行場へ到着、先に十八頭の馬で運んだ荷物一屯を除いても、三屯半程の荷物が飛行場へ集積されたが、運送する馬の調達は困難を極めていた。馬方達は先発隊の馬が蚊のため神経が高ぶつて恢復するのに相当の日数がかかるのを見て、ますます彼らの馬を探検隊に提供するのを嫌つた。遂にわれわれは馬の調達のために探検用の食糧まで差し出した。それは馬方達が現金に余り魅力を持たず、食糧その他の物資には心を動かされるからである。十里四方に一軒程の人口密度では、貨幣経済は成立しないらしい。チリ隊員の説得とスタンゲ中尉の努力で、徐々に事態は好転し、五頭十頭と小刻みに物資は運ばれた。それだけでは日数が長くかかるので、飛行場から合流点までボートを利用することにした。これは危険の多い、土地の人も企図したことのない事業だつた。しかし木のボート一回で五百キロ近く運べることが魅力だつた。この冒険は見事に成功したが、その作業に従事した隊員ルセロ、ムガは荷物運搬下降後、飛行場へボートを持つて帰る途中、急流のため途中ビバークを余儀なくされ、一晩蚊に攻められ二日間の休養を必要とした。ルセロはその後の疲労も加わつたため、遂に副腎炎を起し、さらに一週間の休養を必要とした。

始めの計画に依れば、コロニア湖畔までの輸送は四、五日で完了し、物資の集積所と学術班の根拠地としての第一ベースキャンプを、設立できることになつていたが、これは大きな誤算だつた。この誤算は次のような理由に基いて起つた。㈠当地方は馬の絶対量が少なく、また探検のような余分の仕事の出来る運搬用の馬はますます少ない。㈡馬

ベース・キャンプ付近から見たアレナレスとコロニア氷河の末端　by T. Yoda.

Cerro Arenales (3437m.) and the snout of the Colonia glacier as seen from the Base-camp.



中の島尾根の突端に建てられたCIII　　by T. Yoda.

Camp III established on the edge of the "Nakano-Shima" ridge.
Cerro Arenales in the background.

主達は危険に飛び込むことは勿論好まないし、現金に惹かれない。㈢猛蚊のため一度運搬作業に従事した馬は長期間の休息を必要とし、続いて使用出来ない。㈣馬は放牧してあるために集めるのが容易でない。㈤ベーカー河の渡河が危険で、一度に少量の荷物しか運べない等のためである。猛蚊に刺されて跳びはねた馬が砂糖の袋を川に取り落し、探検中コーヒーの量を制限するなど笑えない悲劇が起つた。この輸送困難の障害はそれだけに止まらず、スキー等重要装備の一部も遂に断念せざるを得なかつた。現地人との交渉に日本隊は余り役に立たないので、装備の管理と整理にあたつた森田隊員を除いて、前進、コロニア湖の輸送に専念した。従つてこの区域の輸送は、チリ側隊員が主力となつて解決した。結局荷物の大部分を第一ベースキャンプに集結したのが二月八日であつた。飛行場から渡河点まで四十七頭の馬と二隻のボート、渡河点から第一ベースキャンプまでは、六十二頭の馬を必要とした。

踏跡の最終点、コロニア湖を作つたモレーンの上に、第一ベースキャンプを設け、学術班の拠点及び登山物資集積所にして、そこから湖の左岸沿いに、陸路コロニア氷河から湖に押し出している砂洲の上に出るのが、所期の計画であつた。コロニア湖は長さ約八キロ、幅二キロの矩形の湖で、反対側は約四キロの砂洲を経てコロニア氷河に続いていた。先発隊はサンチャゴで出発直前手に入れた空軍の航空写真により、左岸が陸地を通れる可能性があると考えて湖畔まで前進したのだつた。彼らが湖畔に立つたのは、一月二十四日、風の強い日だつた。湖は白濁した水を一杯にたゝえて湖面は強風に波を立てていた。左岸にはセロ・プーニョ（Cerro Puño, 1980 m）の針峯群が鋸歯状に立ち並び、右岸にはセロ・コロニア（Cerro Colonia, 2170 m）が聳え、両岸とも八百メートルから五百メートルくらいの高さの壁が湖に垂直に落ち込み、所々オーバーハングになつているなど湖畔沿いに陸路を続けて取ることは、不可能なことが一見して判つた。先発隊はこの状態を、サンチャゴの山岳協会に連絡するとともに、セロ・コロニアの裏側を大きく迂回する陸路を検討したが、谷筋はブッシュと密林で道をつけたとしても最低一週間はそのためにのみ必要で、時間的に不可能であつた。結局本隊が日本から携行した五人乗用救命ゴムボートがつくまでに、氷河の末端まで

偵察するためと、ボートが到着後荷物をつんで曳行できる筏を作りにかゝつたが、その筏は二人の人間の重量にも堪えられなかつた。その翌日、ボートの木枠を作つて、それにキャンバス・シートを張つた長さ二メートル、幅八十センチ、深さ六十センチのキャンバス・ボートを湖上に浮べた。これは見事に浮んだ。丸太のオールを操つて、先発隊の高木、ガルシアは六時間の悪戦苦闘の末、対岸に接岸できた。このボートは「パタゴニア丸」と命名されたが、少し風が吹けば岸に吹寄せられ、キャンバス・シートは水を含んで重く、とに角困難な代物だつた。それでも、その偵察の結果、右岸は多くの瀑布の懸つた垂直の壁の連続であるに反し、左岸は所々陸路をつけることが可能であることが判つた。

第一ベースキャンプの左岸正面は、セロ・プーニョのピーク直下から落ちているオーバーハング気味の大岩壁が、薄気味悪くそそり立つているが、それの尽きる所から湖岸と岸壁の間に狭い灌木地帯が生じ、水辺のゴロタ石の上を約二キロ高巻き一カ所で前進できる。それより再び岩壁がせり出し、湖上に逃げて約五百メートル、その岩壁の後退するところから高巻きを数カ所することによつて、どうにか氷河に続く砂洲に出られる見透しを立てた。本隊が到着した三月一日から、本隊携行の救命用ゴムボートと「パタゴニア丸」を利用して、荷物の運搬は実行に移された。陸路と水路の中継所は物資集積所として隊員が分散してビバーク、継続して運搬作業に従事した。救命用ゴムボートは「神戸丸」と命名されたが、その積載能力は最大限二人を乗せて二百五十キロに過ぎなかつた。第一ベースキャンプから最初の中継点まで湖を横断して二時間、往復四時間を要し、一日に二往復しか出来なかつた。殆んど連日、午後から強風が吹くため湖上輸送は遅々として捗らず、隊員達は強風中の漕行に精力を消耗していつた。湖水の氷河側の半分は、氷河末端より崩壊して流れでている氷塊が多く注意を必要とした。食糧のうち腐敗の恐れあるものは、氷河末端の貯蔵庫に緊急に保存せねばならなかつた。われわれは「神戸丸」氷河直行便を仕立てて湖水を縦断、ハム、鶏卵を氷河に埋めた。その帰路神戸丸を氷塊に打突け、前半に浸水、乗つていた隊員高木、ガルシア、円満字、前田

は流石に顔面蒼白、一瞬生命の危険を感じた。水温は平均二度で沈没したならば、五分間と生命が保てないことは皆よく知つていた。この危険な輸送作業を続行している最中、チリ空軍は偵察機を飛ばし、薬品を投下応援してくれた。チリ隊員の大部分が後方の輸送にあたつているため、この輸送は主として日本隊員の手で行われた。しかし後方から漸次荷物が第一ベースキャンプに到着、チリ隊員も湖上輸送の応援に駆けつけた。隊員の数が増加するにつれ士気は上つていつた。

一方、サンチャゴの山岳協会では、先発隊の発信になる「湖上輸送困難」の電報を受けて、八方手を尽したが、適当なボートを手に入れることが出来なかつた。最後発のチリ側隊長ミルスは、やむを得ずモーターのみ持参した。われわれはそれを見て狂喜したが、取附ける肝腎のボートが無かつた。ベーカー河の渡河に使用したものを調達し、馬と手で第一ベースキャンプまで曳き上げたが、それに日数を費したのと、モーター用の油の質が不良で、期待した程には役に立たなかつた。それでも「神戸丸」を曳行したモーターボートは威力であり、精神的にも大きな助けになつた。湖を縦断した対岸から氷河の末端までの距離は約四キロだつた。偵察隊は氷河末端に登山用のベースキャンプを設立するために、そこまでの路を開拓した。湖の端から氷河に続いている砂洲へ出るためには、氷河から流れている川に沿つて二キロ程崖ぎわに道をつけねばならない。崖は急流に絶えず侵蝕されて非常に脆く、ガラガラの石が不安定な状態で積み重なつていた。この難場を抜ければ平坦な砂洲に出る。この砂洲は洪水によつて出来たものらしく、幅約三キロ長さ二キロの大きなもので、われわれには砂漠のように感じられた。肩に喰込む重荷に喘ぎながら、この砂漠を過ぎればようやく氷河に辿り着く。この氷河の末端にベースキャンプが設立された。湖の手前に観測班用ベースキャンプを作つたので、これは「第二ベースキャンプ」と呼称された。そこには青草がはえ、清流が流れる傍らで蚊に、湖に、苦しめられたわれわれにとつて、全くオアシスの感じのする所だつた。景色も素晴らしく良かつた。氷河の向うにアレナレスの南壁が、微かに見えていた。こゝで始めて目的の山を見た訳だ。それは余りに遠かつた。

馬の輸送に予定以上の日数を必要とし、そして湖の横断に予想以上の困難に遭遇したため、隊形が非常に長く連絡が不統一となつたので「第二ベースキャンプ」から前進を一時中止した。それまで全隊員が会合したことは一度もなかつた。この探検が日・チ合同探検であるだけに、この種の会合は必要だつた。しかし双方の隊員達はこの輸送期間中にそれぞれ友人を作つていつた。山男達に国境はなかつたのだ。また遠慮もなかつた。われわれはお互の悪口の言葉を、先ず覚えた。双方が近づくには、形式的なもの紳士的なものは必要でなかつたのかも知れない。友情の面では問題なかつたが、登山は問題だつた。このアプローチに二十日余の日数—予定の二倍以上の日数を費した。皮肉にもこの期間は好天気が続いた。砂漠より遠く見えるアレナレスを見て、われわれは嘆息した。二月十七日全隊員は第二ベースキャンプに集合、山に挑む覚悟を新たにするとともに、未だ全然手を着けていない登山の作戦を検討した。

3　前進、第二ベースキャンプから第三キャンプまで

「第二ベースキャンプ」から本格的な山の攻撃は行われた。そこは約五百メートルの海抜高度を地図上に示されていたが、奇怪にもわれわれのバロメーターによる平均高度は、僅かに二百四十メートルであつた。最高峰アレナレスは三千四百三十七メートルであり、第二ベースキャンプからは地図上の平均距離約二十五キロである。

左方からコロニア氷河、右方から第六北部パタゴニア氷陸氷河——これはわれわれによつて「アレナレス氷河」と呼ばれた——がコロニア湖に落ちている。この両氷河の中間に上部に木の密生した黒い岩の中の島があつた。これは形が菱形に似ていたため「菱」と名付けられた。先発隊の出発直前入手した航空写真が唯一の手掛りだつた。その航空写真は、アレナレス氷河もコロニア氷河も、上部ネーベへ到達する手前が、アイスフォール状になつていることを示していた。しかし、そのアイスフォールの上には、明らかにプラトーと判る二本の白線がコルに向つて走り、又そのプラトーは「菱」の上部に続いていた。アレナレス氷河は中央部に大きなモレーンの黒い帯を走らせていた。モレ

ーン沿いに氷河を前進し「菱」の上端に取付いて、それを乗越してプラトーに出る。これがわれわれの計画だつた。第二ベースキャンプまで前進するのに二十日余の日数を費したわれわれは、その精力を相当に消耗しているにも拘わらず、直ちに前進を開始せねばならなかつた。全員が集合した二月十七日作戦会議は開かれた。その前日、第一キャンプへのルートと、氷河の性格を探索するために偵察隊四名が、初めて氷河を踏み、ビバークの後ベースキャンプに帰つていた。作戦は彼らの結論に従つて作られた。サンチャゴにおいて、計画が考えられた時には、アレナレスとアルコの中間コルに前進ベースキャンプを置き、この二峰を攻撃した後太平洋岸に向つて横断することが、議論された。この大きな計画を実現するためには、六人の攻撃隊が二週間以上前進基地に滞在せねばならない。それが不可能なことは、今や明瞭だつた。雨が降る度に見られる雪線の下降は、季節が秋に近づいていることを示していた。食糧計画もギリギリの線だつた。総ての点でわれわれは迅速な行動を要求された。

この作戦会議ではチリ人と日本人の考え方の相違が議論の焦点になつた。日本人がヒマラヤの或いは日本冬季の山を念頭に置いて話しを進めるのに対し、チリ人は、中部アンデスの、或いはパタゴニアにおいてもパイネとかフィッツ・ロイ等のアプローチの容易な山を、考えに置いて議論した。スキー使用の点でも議論が分れた。チリ隊のリーダー達は、雪は既にこの時期には氷化していると考え、スキー使用の必要性を認めなかつた。軍隊において多くの経験をもつピデリット隊員は、日本側隊員の説くポーラーシステムによる攻撃方法を最も早く理解した。リーダース・グループはこの問題を徹底的に議論し、各隊員が完全に自己の任務を了解するよう手配した。

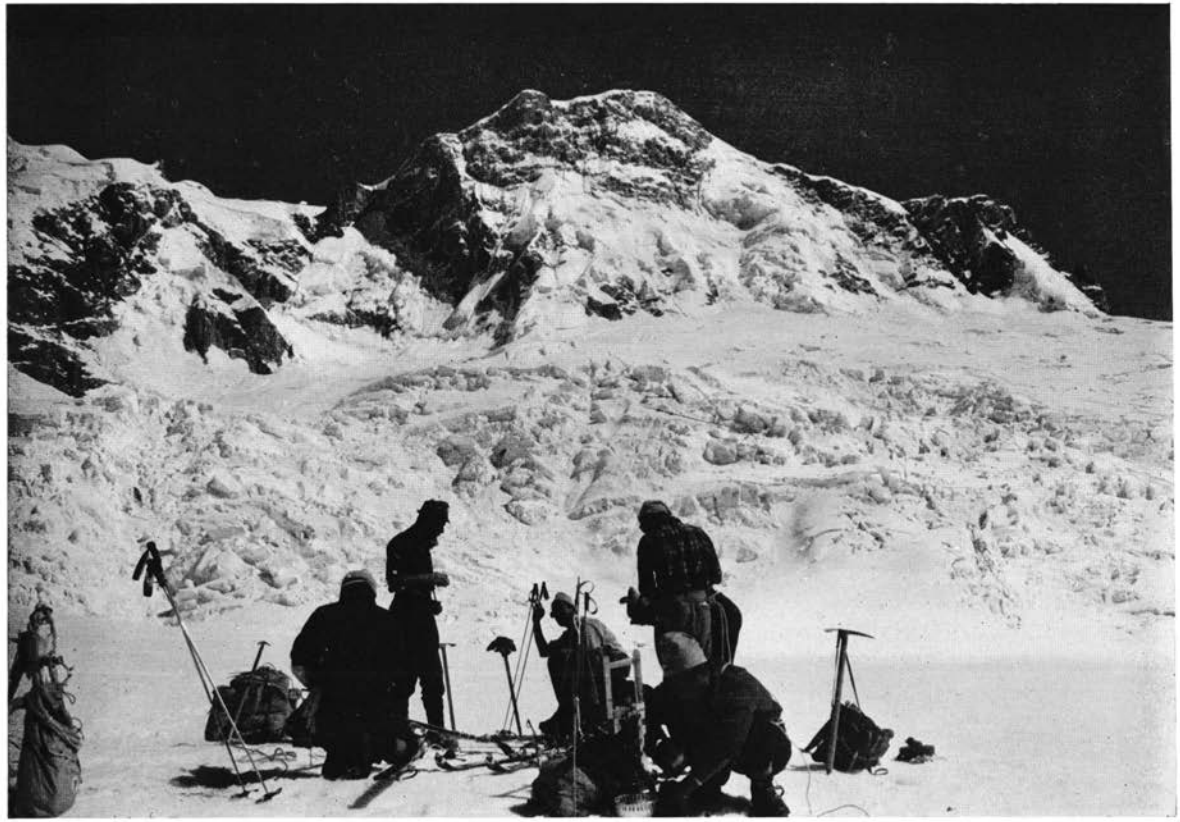
二月十六日、偵察隊、高木、ミルス、ガルシア、円満字は「菱」の先端に達するルートを探しに出かけた。

コロニア氷河とアレナレス氷河は「菱」の先端で合して、一つの氷河となり、次にセロ・コロニアの北尾根に正面から衝突して再び二つに分れ、コロニア湖とアルコ湖にそれぞれ足を伸ばしている。これらの氷河は、ザイテン・モレーンをもたず、中央部を流れているモレーンも合流部から消滅し、クレバスの裂目も一様でなく、非常に複雑な様

相を呈していた。ベースキャンプから見た氷河は、無数のクレバスをもつて拡がつた氷原で、まさに氷の大海の感じだつた。偵察隊一行は先ずベースキャンプ前のモレーンを越え、斜めに氷河の横断を始めた。兎に角コロニア氷河末端を横断しアレナレス氷河の入口へ到着、そこから合流部を観察して、突破口を見附けるつもりだつた。コロニア氷河末端は、大きなウネリがゆるやかに続き、懸念されたクレバスも小さく簡単にセロ・コロニアの北尾根末端に取附くことが出来た。氷河上に点在している大石は前進の格好の目標になつた。アレナレス氷河の入口の左端に下つて来ている岩尾根は、その形状より「象の鼻」と呼ばれた。北尾根末端の大石より「象の鼻」の先端に向つて進み出すにつれて、ウネリは小さく高く、クレバスは深くなつた。十メートル前進するのに百メートルの迂回が必要だつた。

「象の鼻」に到着するまでに、コロニア氷河のモレーンの末端と思われる小さな岩屑の散在する灰色の筋と、アレナレス氷河とコロニア氷河の合流部に出来ていると考えられる二つのモレーンに狭まれた、氷の谷筋を発見した。この谷は明らかに合流部の結合線を示しているように見えた。「象の鼻」先端の岩壁上からの双眼鏡偵察により、この谷を遡行すれば容易に「菱」の先端に到達出来ることが判明した。偵察隊は、その後、この谷の末端を偵察することによつて、運送隊がこの谷へ入る道を発見する目的で、アルコ湖側の氷河を下降したが、これは失敗に終つた。アルコ湖附近の氷河には、ガサガサに腐つた氷の巨大なセラックが乱立し、近づくことが出来なかつた。翌日第二回偵察隊、高木、クラウセン、イトリアーガは、第一回偵察隊と同ルートを取つて谷に入り、これを遡行して比較的容易に「菱」に取り附き、その末端に第一キャンプを設けることに成功した。ベースキャンプからそこまでは距離約十二キロ荷物を持つて六時間を必要とした。運送隊は中間にデポジットを作つた。セロ・アルコ北尾根末端大石から、谷の入口にあるデポジット地点までのルートは相当悪るく、コンティニュアスは勿論、所によつては、ワン・アット・ア・タイムで進まねばならなかつた。荷物の重量は二十キロに制限された。

二月二十二日、偵察隊、高木、ガルシア、円満字はアレナレス氷河に踏み出した。アレナレス氷河は、全体的にセ



CIIからセラック地帯を突破してスキー・デポに出たところ。ここから頂上直下までスキーを利用して登高できる。

The ski-depot reached after passing through a labyrinth of seracs above Camp II. From here to the summit of Arenales can be climbed by skis. by T. Yoda.

アレナレス頂上から見たパタゴニア氷陸地帯と太平洋

Patagonian Ice Continent (Hielo continental Patagonicos) and the Pacific Ocean as seen from the top of Cerro Arenales.

by T. Yoda.

ラックもクレバスも小さく、それを乗越す技術的困難は無かつた。この氷河の突当りは、大きなアイスフォールになつている。アイスフォールの直前のモレーンに第二キャンプが設けられた。この道程約十キロ、所要時間四時間である。第二キャンプまで、高度は殆んど上らず、バロメーターに依る高度は僅か四百八十メートルに過ぎない。続いてアイスフォール上のプラトーに乗るルートが探索された。アイスフォールは高差約六百メートル、傾斜平均五十度くらいで、絶えず巨大な氷塊が崩壊し雪崩を起して、危険の伴わないルートの発見は不可能だつた。偵察隊はこのアイスフォールを迂回し、「菱」の上端からプラトーへ廻り込む方法を考えて、アイスフォール直下の氷河を横断して「菱」に取り附いた。「菱」は黒い岩山で所々に雪谿を持つていた。ガレ場をつめ雪谿をつめるという日本的な登攀で高度を稼ぎ、「菱」の上側に出るのは簡単だつた。そこは正面にアレナレスの東壁を仰ぎ、巨大なコロニア氷河、アレナレス氷河を両足下に見下した素晴らしい景観の地だつた。漸く高度も一千三百メートルを示していた。そこに第三キャンプが設置された。偵察隊が順調に前進したのに反し、運送隊はその主力をベースキャンプとデポジットの間に注いでいる状態だつた。当時、連日雨が続き、強風が吹き、輸送は困難を極めていた。前進キャンプに駐在した隊員達は、雨と風のため、殆んど眠られぬ日が続いた。天候は悪るく、日時の切迫している焦燥感は隊員達を苦しめた。この期間が本探検中の最も苦しかつた期間である。前進キャンプは特に風雨が強かつた。第一キャンプではテントを飛ばされ、第二キャンプではナイロンテントの耐水性に泣いた。これはサンチャゴの山岳協会の情報に基いて、ビニロンテントを数少くもつて来た悲劇だつた。やむを得ずナイロンテントにはキャンバスシートを被せた。

このような悪情況の下で、ようやく日本・チリ両隊員とも習慣、思考方法の差異を意識し始めた。言葉が自由に疎通しないことは大きな障害になつていた。二月二十四日に偵察隊が、第三キャンプの位置を決定してから、三月三日前進を開始するまで、全隊員は運送に努力した。悪天候のため常に雲が下つて、第三キャンプから前が観察された日は一日もなかつた。しかし第三キャンプが丁度雪線に当たり、上部の氷河ではスキーの使用が可能であり、必要であ

ると考えられた。この前進を中止している間に攻撃態制は調えられた。リーダース・グループでは、実状を判断して氷陸の横断計画を放棄し、アレナレス登頂一本槍で進むことに決定した。登頂隊は原則として二隊六名、第三、第四隊は撤収サポートに廻ること等も決められた。隊員の人選は、チリ側隊長ミルスの提案に従つて行われた。

第一隊　高木、円満字、クラウセン
第二隊　ミルス、ピデリット、森田
第三隊　ガルシア、イトリアーガ、前田
第四隊　高谷、ルセロ、ムガ
第五隊　ヤーネツ、森

三月三日から、この編成で攻撃は開始された。

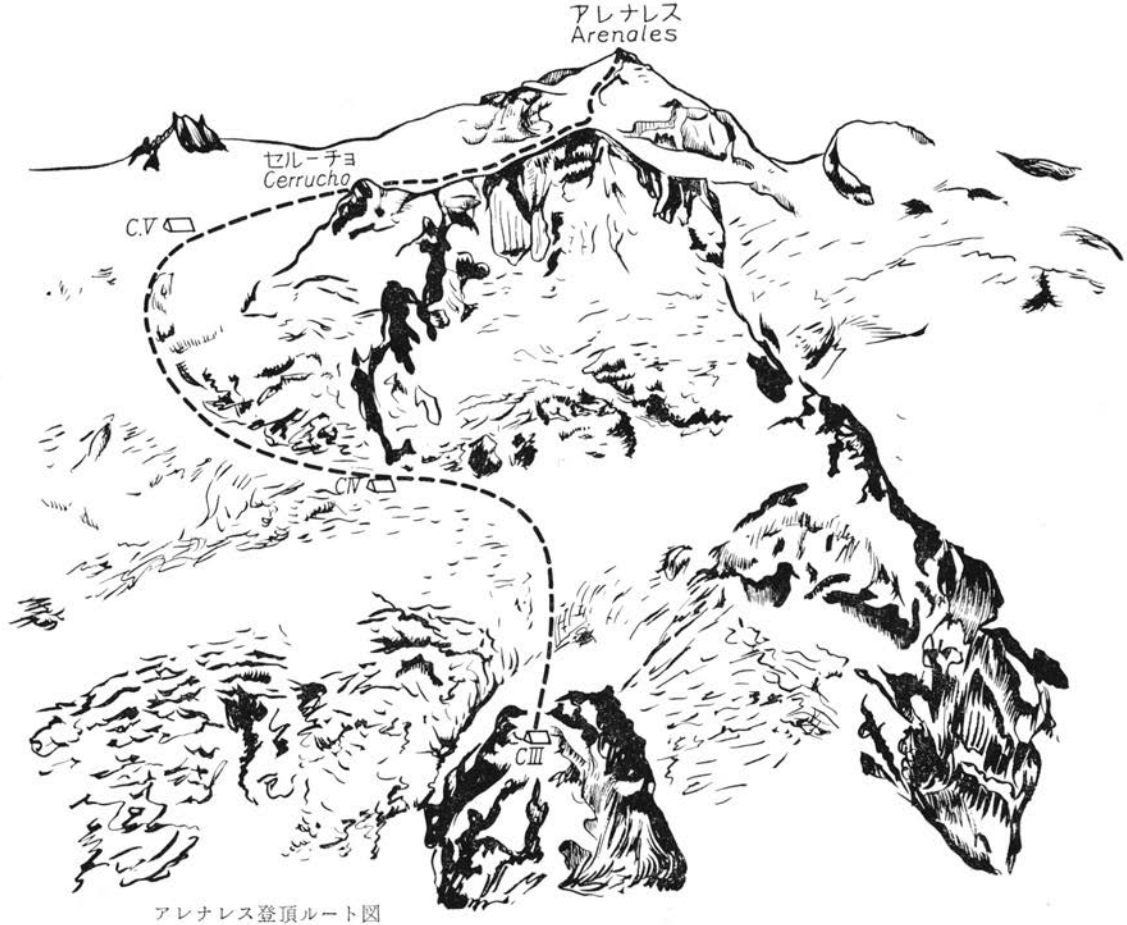
4　攻撃、第三キャンプから登頂まで

われわれは既に航空写真により、アイスフォール上段のプラトーは、アレナレス頂上直下の雪田から派生している氷河に続いていることを知つていた。頂上攻撃のルートは二つ考えられた。第三キャンプから上段のプラトーへ出てコルを迂回、氷河を忠実に詰めるルートと、コルまで巻かずアレナレスの南峰ともいうべき、セロ・セルーチョの南側を上つてアレナレスの肩へ直接出る方法とである。このルートの選択は、スキーをどこまで有効に使用できるかという雪の状態にあると考えていた。

三月三日、第一隊は第三キャンプ前の雪田を横断して、上段プラトーへ抜けるルートを探すための偵察を行つた。それまで降り続いた雨は、前日の午前中に降り終つたばかりだつた。第三キャンプより上は新雪を被つていた。雪田では、一尺ばかり足がもぐつた。この雪田はアレナレスの南壁に懸つている懸垂氷河が、「菱」に衝突して盛り上が

り、アレナレス、コロニア両氷河に分裂して落ちている鞍部に出来たもので、この盛り上がつた中央部はクレバスが縦横に割れ、セラックスが混乱状態になつていた。この鞍部の両側はアイスフォールとなつて急激に落ちている。第一隊はこの混乱地帯の中央部突破を試みた。クレバスは新雪に隠され墜落の危険を増大した。この平坦な鞍部を右から左へ何回となく方向を変えて前進したが、どれも底知れずに拡がつて大きく割れたクレバスに遮断された。唯一カ所、アイス・ハーケンを使用して大きな氷塔に登つた結果、セラック地帯の一番狭い場所を、なんとか氷塔の底を辿りながら渡れそうなルートを発見した。氷塔の底は、クレバスに崩壊した氷塊が詰つて出来たもので、不気味な音を立てていた。時間もたち単独で強引に突破するのは危険に思われたので、第一隊は諦めて引き返した。

翌日第二隊に森田隊員の代りに、アイステクニックの優れているガルシア隊員を入れ第一隊に協力した。第二隊のピデリット隊員スリップ、五メートル程墜落し、また第一隊は通過直後その大きな氷塊が崩落するなど、絶えず危険にさらされながらも四時間を要して、この難場を越すことが出来た。このセラック地帯は、われわれの予想を遙かに上廻つた困難なものだつた。しかし、これを突破した後はスキーの使用で距離を稼ぐことが出来そうだつた。われわれは再び頂上攻撃方法を検討した。天候は三日を周期として変化するように思われた。パタゴニアの悪天候を考えれば、好天気を摑めば一挙に頂上を攻撃しないことには、可能性は無いだろう。第三キャンプから第四・第五と順次前進することは、チャンスを失うことになるかも知れない。第一隊は第二隊のサポートで、第四キャンプを設立後、単独でコルへ廻り込み、そこに二人用テント、羽毛服でビバーク、翌日頂上へラッシュする。この計画で三月五日前進を始めた。スキーを背負つて難場を乗切るのは、面倒な作業を必要とした。上段のプラトーは二十度くらいの傾斜で、アレナレス氷河のアイスフォール上部へ続いている。アレナレス南壁を廻り、セルーチョ尾根のふもとに沿つて登高する。大きなクレバスの左右に走るこの斜面を、スノーブリッジを確かめながら、アンザイレンのスキー行は楽ではなかつた。雪の状態は日本の五月に近く、シールは快適に効いた。クレバスは底なしに深く、百メートル以上の



アレナレス登頂ルート図

氷壁が垂直に落ちている。サポート隊は午後五時頃荷を下して引き返した。第一隊はその儘前進を続け、クレバスがようやく無くなつた辺りに第四キャンプを設けた。サポート隊の残した荷物をとつて来て、午後九時過ぎ翌日天候次第で頂上まで行く決意をして、シュラフザックへもぐり込んだ。夜は流石に冷えた。天気は素晴らしく風もなく満月である。

翌朝すなわち三月六日三時半に眼が覚めた。月が昼間のように輝いている。直ちにラディウスに点火、朝食はオートミールと紅茶、クラウセンがドイツ人らしい段取りの良さで順次作つていく。昨日の作戦通り、二人用テント、羽毛服、ツェルト、アイスハンマー、ハーケン、食糧五日分を持つて、スキーをつけ、アンザイレンのまま出発したのが六時半であつた。クラウセン、高木、円満字のオーダーで前進した。第四キャンプからクレバスは少なくなり、スキーに快適な斜面がコルに続いている。最後の急坂を二つ程喘ぐと、急にセルーチョを廻り切つた所で待望のアレナレスが姿を見せる。砂漠で姿を見せたきり見せていない姿だ。登路は思つたより易しそうだ。前山からセルーチョへの尾根は、完全な氷の尾根で裏側の傾斜はゆるく、そのまま前山の頂につづき、前山と左手の尾根の氷塊のうしろに隠れる頂までは、ゆるやかな稜線でつながつていそうだ。ここからは、これらの尾根にかこまれた大きなカール状の谷で、スキーでかなり登れそうだ。そしていきなりその稜線へつきあげることも可能のように見える。天気は珍らしく快晴で無風、バロメーターはわれわれが高気圧の中心にいることを示している。

第一隊は、この時始めて「これは登れる、また登らなくては」と考えた。コルの手前で荷物をデポー、昼食をとつた。その地点の高度は二千三百メートル前後、すなわち頂上まで高差一千百メートル余り、距離は十キロ以上あるに違いない。しかし夜になつても、あの明るい月光で下ることも可能だろう。われわれは、コルを越して来る雲に充分注意しながら、攻撃することにした。コルには登らず、セルーチョの美しい岩峰を眺めながら、その裾を廻つて出発したのが午後一時だつた。カールの中は、たまらない程暑い。セルーチョを巻いた所でスキーデポー、アイゼンをき

かしてセルーチョつゞきの稜線に直登した。この辺りは、エビの尻尾状の氷が無数に生じている。このスカブラに時折ザイルが引かゝる。どこまでも果てしがないと思われる斜面を登りつめて、ようやく稜線に出たのが午後六時。眼下に第三キャンプが見える。第三キャンプから仰いだ南壁の上へ出た訳だ。風はかなりきつい。尾根筋を黙々と登る。丁度富士山の八合目九合目辺の感じだ。主峰の肩についたのが七時。そこからは、コロニア氷河上部の大氷原、太平洋岸のフィヨールドが一望に見渡される。頂上に立つたのが午後八時丁度だつた。太陽が沈んだ瞬間、頂上の大きな氷の塊が赤く焼け、この世のものとも思われない美しさだ。アレナレスの陰が、大きく円錐形にベースキャンプの方向にうつしだされている。月が微かに地平線の彼方に明りを見せている。下るには余りにも薄明だつた。三十分程月待ちして、その明りの下に降り始めた。月光下の下降は、思つたより難かしい。登りに何気なく通り過ぎたクレバスが意外な所で口を開けている。荷物をデポーした所についたのが、翌日の午前一時。直ちに斜面にそのままテントを張り羽毛服のままもぐり込んだ。

三月七日、今日も快晴である。第二隊は第一隊サポートのために「第五キャンプ」に上つて来た。登頂成功の報を聞いたチリ側隊長ミルスは、涙を流して喜んだ。第二隊は直ちに第二登に向い、午後六時、登頂成功。午後九時、第五キャンプに帰着した。

われわれは幸運だつた。第三キャンプ前の難場を突破した後は、技術的に困難な所はなく、スキーで距離が稼げた。また三月五日は満月だつたので夜間行動が出来た。雪は適当に固くシールが良く効いた。この成功に気を良くしたわれわれは、アルコ攻撃を企図した。アルコは距離が遠いが、高度は四百メートル低い。アレナレスより偵察したアルコへのルートは、一カ所不明な所を除いて大体難かしくなさそうだつた。が兎に角第二隊の出発を見送つた第一隊は、第三隊にスキーを受継ぐべく第三キャンプまで一気に後退した。第五キャンプから第四キャンプまではクレバスも少なく、スキーで下るのに快適だつた。第四キャンプからは斜面が急でクレバスが多く、アンザイレン滑降に多

くの時間を要した。セラック地帯は一日毎に変化し、通過の度にルートを作らねばならなかつた。第三隊は第二隊サポート後第三キャンプで待機していた。三月八日、第三隊は早朝第二隊の撤収サポートに出発した。もし非常に状態が良ければ、アルコ攻撃予定だつた。氷雪技術に優れているガルシアも、スキーが下手なため第三隊リーダーを辞任し、ムガが代りに入つていた。そのため第三隊の実力は相当落ちた。アルコ攻撃か、撤収かの判断は、第四キャンプにおいて、第二隊のチリ側隊長ミルスの判断に任せられた。三月九日、不思議にもまた天気が続いた。午前三時、第三隊は出発した。第三隊のリーダー格イトリアーガは、その隊の実力を考え、アルコ攻撃を難かしいと思つた。それは第四キャンプ出発時方向を誤り、アレナレス側に近寄つたためである。そしてアレナレスに登頂した。

第三隊の予定していない日時が加わつたため、第二隊をも迎えた第三キャンプでは、食糧が枯渇していた。三月十日、第一隊及び第二隊は、第三隊の撤収を助け、第五、第四キャンプを撤収した。学術班がベースキャンプに到着したため、高谷、森、ルセロ各隊員は、その活動を助けるため、ベースキャンプにまで下つた。

5 撤収

第三隊を迎えて、直ちに撤収は開始された。山は既に秋の気配を見せていた。気温は下がり出した。山には霧がかかつた。撤収作業な順調に進んだが食糧が不足したため相当苦しかつた。五日間のボッカで第二ベースキャンプへ、さらに四日間で湖の端へ辿り着いた。消耗品を除いて二屯余りの湖上輸送は、再び大問題となつた。徒らに時日を費せば湖が凍結する恐れがあつた。この時サンチャゴ日本大使館から二十人乗り救命ボートが届けられた。湖上輸送困難のニュースを受けた矢口大使は、八方手を尽し遂にアルゼンチンから空輸されたものだつた。その大ボートのお蔭で、四日余りで湖を縦断、撤収に成功した。われわれが撤収した二日後に、湖の氷河よりの半分は凍結してしまつた。際どい所で逃れた訳だ。往路蚊に苦しめられたベーカー河畔も、秋の訪れとともに蚊は全く姿を消し、のどかな

パムパの風景を呈していた。洪水の引いた後の草原の輸送は快適だつた。何千羽の鴨を驚かせ、珍らしげに寄つて来る牛の群を追いながら、遠ざかり行く氷河を振り返り別れを惜しんだ。

この遠征隊については既に田中薫編『大氷河を行く―南米チリ・パタゴニア探検―』（昭和三十三年十一月毎日新聞社）が刊行されているので、詳細はそれについて見られたい。

また本章に使用した写真・地図等は、毎日新聞社出版局の特別の厚意によるものである。（編者）

スワート・ヒマラヤ探検行（一九五七年）

松下進

京都大学の探検部が一九五六年に試みた第一回の京大・パンジャブ大学合同学生探検を立派にやりとげて、藤田隊長、本多・吉場両隊員が、その年も終りに近くなつて相ついで帰国すると、探検部では早速、第二回探検の準備にとりかかつた。行先は今まで行こうとして行けなかつたスワート（Swat）と東部ヒンズークシ（Hindu Kush）に決つた。第一回にも行つた探検のヴェテラン本多勝一君（農学部農林生物学科学生）がマネージャーを兼ねることになつた。乾燥国パキスタンには珍しく森林が発達する奥スワートで林学調査をするために、荻野和彦・岩坪五郎両君（共に農学部林学科学生）が選ばれた。三年間の地質研究の総仕上げという意味で、思いもかけず私が隊長を仰せつかつた。沖津文雄君（理学部地質鉱物学科学生）が私の助手を勤めてくれる。

こうして二月には隊員は決つたし、京大側の準備は着々と進んだのであるが、パキスタン政府への探検申請が遅かつたために、ビザが中々もらえず、またパンジャブ大学側の準備が進まず、随分やきもきさせられた。それでも六月二十九日には全員カラチに集結できた。本多君は五月二十七日空路でカラチ着、同地とラホールで準備工作に活躍していてくれた。私は六月二十三日に到着。荷物と一しよに五月十六日に神戸から船で来た他の三君は六月二十九日に

安着したのである。

カラチ滞在中、日本人会の歓迎会、大使館のレセプションをして頂いたが、そのカラチにも別れを告げる時が来て、七月三日朝の急行でラホールに向つた。外務省のウルドゥ語留学生今川好則氏と、カラチ大使館書記官蜂谷洋三郎氏の可愛らしい十一才の坊ちやん敏郎君も同行する。一昼夜にわたる焦熱地獄のような汽車旅行から解放されて、四日の朝、ラホール駅におりた時ひとりの見知らぬ日本人に会つた。アボタバットの農科大学に研究に来ておられる東大植物の門司正三教授だつた。われわれが探検に来たことはよくご存じで、初対面にも拘らず多額の寄付をして下さつたのには全く深く感激した。

七月初めのラホールの暑さは格別である。室温四十四度、窓をあければ熱風が吹きこむので、昼日なかは人びとは窓を閉めて昼寝をする。そのラホールに三泊し、パンジャブ大学総長の歓迎会を始めとした盛沢山の歓迎攻めにあつたのだから、みんなへばつてしまつた。

パンジャブ大学側のメンバー三人とそろつて、いよいよラホールを立つたのは七月七日の夜だつた。パ大側の三人とは、隊長ベグさん（イスラミア・カレッジの副主事で物理学教授、五十七才）、隊員ザフールさん（パ大植物学教授、五年間の米国留学から帰つたばかり、三十二才）、ムバシャーさん（パ大地理学講師、二十六才）で、ベグさんは昨年も隊長でおなじみの人。ただ残念なのは第一回と違つて、ひとりも学生のメンバーがいないことだ。昨年は京大側とパ大側と人数が同じだつたので、装備は京大側で持つ代りに、パキスタン国内旅費はパ大側が引き受けてくれたのだが、今年は日本側のメンバーが五で、パ大側が三であるので、探検旅費は人数によつて分担することになつている。

スワート

ラホールを立つた翌朝、鉄道の終点であり、北西辺境州の首都であるペシャワルに着く。高度三〇〇メートルだから、いくらか涼しいかと思つたら、どうして三十八度に上つた。外国人であるわれわれは、二つの役所へ行つてスワート入りの手続をすませた。ドイツ製の三十六人乗りの頑丈なバスを一台借りきつて、荷物を屋根の上にも載せ、人間も乗つて、九日の朝、北東一二〇キロのスワート王国の首都サイド・シャリフに向つた。奥スワートのカラームまで朝日新聞ニュー・デリー特派員丸山静雄氏が同行する。

スワート・ステートはパキスタンに属するが、王様が統治する半独立の山国である。広さは秋田県くらい、人口約五十五万（秋田県は一三〇万）。奥へはいればパキスタンには珍しく、水、森、山が美しく気候も涼しいので、近年、観光の宣伝を始めたようだ。

マラカンドで峠を越えて、スワートの谷にはいる。幅二～三キロもある沖積平野で一面の水田だ。立派なペーヴメントの道路が続く。正午にサイド・シャリフ着。ここにはステート直営の美しいスワートホテルがあるが、貧乏旅行のわが探検隊は泊れない。幸いにカレッジの寄宿舎が夏休で空いているので、そこに泊めてもらつて自炊をすることになつた。自炊といつてもラホールから連れて来たコックがするのだ。サイド・シャリフは王宮とホテルと首相官邸が町はずれにある小さな町だが、北方二・五キロの所にミンガオラという賑やかな町がある。カレッジの寄宿舎はミンガオラに通ずる街道の途中にある。立派な鋪道を高級車が走り、バスが通る。ミンガオラの町は道幅が五～一〇メートル、両側には二、三階建ての店がならんで、立派な商店街を作つている。スワートにこんな町があろうとは知らなかつた。

七月十一日、一同そろつて王様に謁見。王宮はさすがに立派だ。応接室に通され、お土産を贈呈、別室で茶菓を出される。王様はわれわれの旅行の予定をきかれてから、昨年七十日間世界一週旅行の途次日本を訪問した話、東京では自動車が猛烈に速く飛ばす話、茶の湯の席に出た話、富士山は残念ながら見えなかつた話など愉快そうに英語でし

やべる。われわれが泊めてもらっている寄宿舎（名前はスター・ホステル）は自分が設計したこと、カレッジは一九五二年に設立、学生は三〇〇人、ステートの子弟は無料、よそから来た学生は有料、数は半々にしてあることも話される。王様は一九〇八年生れというが、それよりも老けて見える。然し赤い丸顔の、ふとつた愉快な人物、頭ははげ、パキスタンの人にしては珍しく、ひげがない。王宮の前庭で記念撮影をして辞去した。

翌十二日の朝九時に北方一二〇キロの奥スワートのカラームに向つて、二台の自動車に分乗してサイド・シャリフをあとにした。ミンガオラの町を過ぎて間もなくペーヴメントはなくなるが、それでも道路は日本のよりよい。いよいよスワートの峡谷にはいる。だんだん谷は狭くなり山には木が見えて来る。途中バハレーンの村で小さなバス二台に乗換えた。この村にパキスタン地理調査所（Survey of Pakistan）から、水力発電計画の測量のために測量隊がはいつていた。測量技師のひとりは独墺のカラコラム・バツラ氷河探検、イタリヤのK2遠征に参加した人だつた。バハレーンから先は道が狭く急で、特に急な坂にさしかかるとおりて車のあと押しをする。カラームに着いた時は四時半になつていた。われわれはラホールで、山好きの若い米国副領事ハーリーさんと知り合つたが、そのハーリーさんが今日自家用車でやつてきて、バハレーンでわれわれに追いつき、一しよにカラームに着いた。きいてみると数日間の休暇をとつて、昨日の午後三時にラホールを立ち、インダス川とカーブル川との合流点付近で夜を明かし、そこを今朝六時に立つて来た由である。

カラームは南北二キロ、東西一・五キロの山間盆地の底にある。スワート川は五〇メートル、二〇メートル、一〇メートルの三段の段丘を刻んで南へ流れる。水はよく澄んでいて、そのままでも飲める。段丘は上段が広い。西から南西の山の麓に部落があり畑があるが、上段段丘の大部分は草地である。本当のカラームという部落は左岸の川岸にあるのだが、カラームの役所（奥スワートの行政をつかさどる郡役所）は上段段丘の上にある。それに接して古いとりでがあり、小学校と診療所が建つている。役所から二〇〇メートル離れて、真新しい木造のレスト・ハウスが二軒

建ててある。われわれはそれに泊つたのだが、一部の人は草地にテントを張つた。カラームでは目下パキスタン地理調査所から測量隊が来て測量中であるが、技師や人夫たちは上段段丘の上にテント村を作つて住んでいる。

バハレーンからカラームまでの間の地質はおもに花崗岩で、カラーム盆地のまわりの山は千枚岩やホルンフェルスからできていることが、歩いてみて判つた。上段段丘の高度は約二一〇〇メートル。まわりの山山は更に三〇〇〇～四〇〇〇メートルも高く、白雪におおわれた峰みねはカラームからも、よく仰がれる。高度三〇〇〇メートル以上になると岩肌が露れているが、それより下の斜面は樹木でおおわれる。カラームのすぐまわりの所はヒマラヤ杉と松と樫の林だ。乾燥国パキスタンにしては全く珍しい景観だ。モンスーンがスワートまでは雨を降らすのである。年雨量七五〇ミリ。カラームはさすがに涼しく、朝は一五度に下る。高度一〇〇〇メートルのサイド・シャリフでは朝六時でも二九度あつた。

カラームへ来た日から荻野・沖津両君は熱が出て元気がなく床についた。翌日は三九度になり、いろいろ手当をしても熱がひかない。土地の医者にみせたところ、マラリヤだというのでキニーネなどを飲ませた。どうなるかと心配したが三ノ四日でなおつた。

カラームに数日滞在して付近の地質や林相などの調査をした。京都で探検計画を立てた時、学生は奥スワートでドリーム・マウンテンという六〇〇〇メートル（正確には五九一八メートル）の峰の初登頂を試みることになつていた。ところがスワートに来てみると、この山にはファラクサールという名まえがあつて、ちようど今、二人のニュージーランド人が登頂をめざして来ていることを知つた。レストハウスからも、この山が北東二五キロのかなたに真白な、K2のような姿を見せていた。それで、これに代る山をさがしたが適当な山がみつからず、また病人もいたりして、スワートでの登山は断念して、ヒンズークシで試みることにした。

昨年の第一回探検ではパキスタン政府のリエゾン・オフィサー（連絡官）はベグ隊長が兼ねてくれたので、今年も

そうだとばかり思いこんでカラームまで来たのだが、あにはからんや、カラーム滞在中に専任の連絡官がやつて来た。ラシール・カーン・タヒルヘリさんといつて、クェッタにあるパキスタン地質調査所の地質家。私とは同じ専門だ。二十八才だというが、ひげがこいので老けてみえる。然しとても元気な人で、よく歩く。

ダダリリ・アン

朝日の丸山さんは十六日にカラームから引返した。われわれは、いよいよ本当に探検を始める日が来て、十八日第一歩を踏み出した。これから一行が入るスワート・コヒスタンというのは、われわれのスワート・ヒマラヤであるがトライバル・テリトリーと呼ばれて、数年前までそこの住民は政府に帰順しなかつた物騒な地方だつたのである。外国人で今までここを通過した人はないようだ。地図も不完全だ。われわれ日本人は何も知らないので呑気にしているが、ベグ隊長はじめパキスタン隊員は危険を心配し、郡長に懇請してダダリリ峠のかなたのギザールまで護衛兵を五人つけてもらつた。カラームからは交通機関はなく、七〇人の人夫に荷物をかつがせ隊員は徒歩で行進する。ウシュ・ゴルは高さ六〇メートルの見事な段丘を作つて流れる。両側の、こういう段丘の上に所どころ村がのつている。木が豊富な所だから家はむろん木造だ。校倉式に木を水平にして積み重ねて壁を作つてある。屋根は平らに木を並べたもの。

カラームで雇つた人夫は峠越えには使えないので、一五キロ行つた所にあるミットリタンの村で二ルピーずつ支払つて帰した。このあたりの地質は花崗岩。これから奥は段丘の発達悪く、支谷から押し出した扇状地をいくつも横ぎつた。もう村はなくなる。ミットリタンから八キロ進んで、パロガという所で第一日のキャンプをする。今日は昼間快晴だつたが、夜一〇時から雷雨があつた。

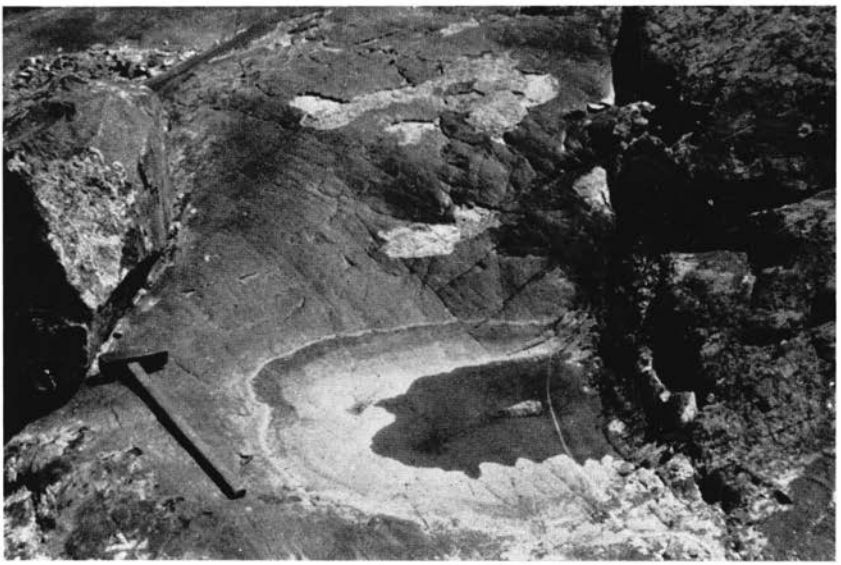
翌朝、今川さんも敏郎君は帰途についた。敏郎君は隊の人気者で誰にも可愛がられた。ここまで元気に歩いて来

スワート・コヒスタンのU字谷

U-shaped valley in Swāt Kohistan as seen from the entrance of the Diwangar branch valley.

スワート・コヒスタンの山とカールと段丘の扇状地

Mountains in Swāt Kohistan with cirques, terrace and an alluvial fan as seen from the Diwangar camp.



ギザール‥キャンプ付近の氷蝕を受けた岩盤

Glaciated bed-rock near the Ghizar camp.

ギザール付近のギザール川

River Ghizar near Ghizar.

た。第二日も扇状地を沢山横ぎつたが、両側の谷壁は急で崖錐がよくできている。高さ八〇メートルもある懸谷がいくつもあり、滝がかかつている。谷の横断形はU字形で、谷底は広く、明らかに氷蝕谷の形をしている。ごくまばらに夏小屋が見られる。この日、ファラクサール峰初登頂に成功して帰途にある二人のニュージーランド人に会つた。一人は若い植物学者で、植物を採集していた。途中まで人夫は一人使つただけで、あとはたつた二人きりで登つたのだそうだ。

この日、正午前後に雨が降つたが、その夜も少し降つた。さすが奥スワートだけあつてよく降る。十九日はパラクセール（高度二七〇〇メートル）でキャンプ。二十日は滞在。

二十一日、デシャイ（高度三〇〇〇メートル）まで歩く。明瞭なU字谷だが谷底の勾配に変化があつて、四つの段がついているのに気がつく。一番下手の段の上は長さ一キロのマホダン（ペルシャ語で魚の湖ということ）湖になつているが、それより上手の段の上は草地になつていて牛や山羊が放牧されている。所どころに夏小屋があり牧人の往来がある。マホダン湖は堆石堤による堰止湖といいたいところだが、どうもそうではなく、両側から押出して来た扇状地や崖錐によつて堰き止められたものらしい。マホダンからは道が急に悪くなつた。

二十二日、カンバが多くなつた。両岸の懸谷が顕著だ。やはり夏小屋があり、移牧民が住み、牛、山羊、馬が放たれ、一見したところのどかな牧歌的情景が展開されている。然し人夫たちはわれわれ日本人には直接にはわからないが、賃上げや砂糖や茶を要求してパキスタン隊員を困らしている様子だ。人夫も兵隊も全部ミットリタンで入れ替えた。兵隊は五人だが、そのほかに人夫の中に銃を持つた者が五人いる。彼等は精悍で名高いパターン族だから何をされるかわからない、早くダダリリ峠を越えてギルギット行政区にはいりたいと、ベグさんらは考えている。この日、左岸から大きな扇状地を作つて合流している大きな支流の谷にはいり、高度三三五〇メートルのディワンガーでキャンプした。夕方七時の気温九度。

二十三日、快晴、最低気温四・五度。東北東に谷をさかのぼる。地質は片麻岩。カンバ帯を過ぎて灌木帯になつた。岩肌がよく見える。左右両岸に、谷底から五〇〇メートル高い所に堆石堤が見られる。その上は氷河は消えてカール地形が顕著だ。谷底には午前中の所はまだ夏小屋が少しあつたが、それもなくなり、夕方いくつか雪渓を渡つて、八時近くになつてキャンプ場に着いた。もう灌木もほとんどないので、人夫達は薪をさがすのに大童。寒い。八時で三・五度。高度は約四五〇〇メートル。道はなくなつている。ここは谷が急に北へ曲る所の右岸にある堆石堤の上である。明日の峠越えに備えて早くシュラーフザックに入つたが、傾斜した堆石堤の上にテントが張つてあるので、体がすべつて眠れない。

明くれば七月二十四日。五時に起される。寒い。気温一・五度。一点の雲もない快晴。コックはどうしたわけか例のチャパティを作らない。紅茶を飲んだだけで六時半には出発した。私は昨日までキャラバンシューズで歩いて来たのだが、今日は雪渓を登り降りするので革靴をはいた。これがいけなかつた。新品をはじめてはいたのだから足首にあたつて、痛くてよく歩けない。雨で溶けたのか、凹凸のひどい雪の上は特に歩きにくかつた。私は見取図を作りながら行くので尚更歩みが捗らない。人夫たちはどんどん先へ行つてしまい、私は殿りになつた。本多、沖津両君がついてくれる。

あとを振り返ると白雪におおわれた五〇〇〇メートル級の峰みねが並んでいる。東側の支谷には二段の堆石堤があり、上段の上には氷河が存在するのがよく見える。われわれが登つて行くのは、ダダリリ峠から下つて来るすでに消えてしまつた谷氷河の側堆石の上と考えられる。雪でおおわれている。更に登つて行くと雪渓になるが、これは消えた氷河の底であつて勾配に緩急がある。谷を横ぎる端堆石堤が二つばかりあるらしい。最後の勾配は相当急で四〇度ばかりあろうか。そこをどうにか登りきつて、ようやく五〇六〇メートルのダダリリ・アン（峠）の上に立つた。北側にも長大な雪渓が見おろせた。私は頭が痛いとか気分が悪くなるとかいうことは全然なかつたが、靴が足首にあた

るということだけでなく、元気がない。地理学のムバシャーさんは頭痛がするといつて人夫たちに抱えられるようにして登つて来たが、今まで二〇〇〇フィートより高い山に登つたことがないという植物学者ザフールさんは至極元気で、とつくに峠に着いていた。私より三つ年長のベグさんは私より元気だ。峠の所には雪がなく大きな長石の斑晶を持つた花崗岩がよく露出している。

峠からは一キロ半の雪渓を一気に下つた。学生諸君はグリセードで、私は毛布のソリで。この雪渓の右側には側堆石が見える。雪渓の終つた所には高さ一〇〇メートルの端堆石堤の急斜面があつて、その下に雪が少しあるだけで、それから下流には雪はない。そこに左側からはいつて来る谷は氷河になつていて、まつ黒いスナウトがすぐそこに見える。

ここから下流には両側から押し出した崖錐で谷川が堰き止められて、長さ二、三百メートルの小さな湖がいくつもできている。水が乾上つたと思われる平地に紫色の美しい桜草の大群落があつた。道はなく崖錐の石ころを踏んで進むのだから、とても歩きにくい。すつかり遅れてしまつた。崖錐を歩く時、本多、沖津両君が腕をとつてくれる。日はトップリ暮れた。ところが有難いことに兵隊が二人待つているのに追いついた。暗闇の中を二人が交代で私をオンブしてくれた。やつとキャンプの灯が見えたのでキャップランプで合図した。それが通じて荻野、岩坪両君が迎えに来てくれた時は嬉しかつた。九時にようやくキャンプに着いた。今日は朝食、昼食ともになかつたせいもあつてすつかり疲れた。

このキャンプ地は高度すでに三九〇〇メートルに下つているので薪があつたのだ。二十五日も晴。両側に谷底から三〇〇メートルも上に堆石堤が所どころにあつて、その上はカールになつている。午後バラ・ゴルとの合流点アンベズ（三五九四メートル）を通つた。もう道がある。アンベズというのはコワニ語で合流点という意味だそうだ。カンバが密生してるが河原は広い。牛、馬の糞を見る。アンベズの下流一キロ余の所に擦痕のついた羊背岩があつた。岩

石は塩基性岩。キャンプ地まで、この岩石。二キロ半進んだ所でグピスの巡査一人とギザールから来た一人の青年に迎えられ、彼らの案内で先を急いだ。先日カラームでベグ隊長が郡長に、ギルギット行政府にわが隊について連絡してくれるよう依頼したが、その連絡があつて来てくれたのだ。キャンプに着いてみるとギザールから数人の人夫が来ていた。

翌二十六日、スワートの人夫の都合で一行は一日でギザールまで行くのだが、それでは研究ができないので私は本多、沖津両君と共に二日間で行くことにした。その日は美しい湖のほとりでキャンプ。そこまで所どころお花畑があり、野バラが咲いていて気持がよかつた。その湖は西側の大きな扇状地で川が堰きとめられてできたもの。ダダリ峠のこちらは奥スワートと違つて乾燥地帯なので、山には一木一草もなく岩石はむき出しだが、急斜面のため崖錐が多く、谷底にはほとんど岩石の露出がない。山腹は花崗岩で上に塩基性岩がのつている。キャンプ場の付近にも牛、馬糞を見るが人影も牛馬も見えない。スワートからバラ・アンを通つて毎年八月十日間、移牧にやつて来るのだという。

二十七日ギザールまで歩く。道はよくなつた。スワートに帰る人夫たちに会う。一人びとりと握手して別れた。彼等の中には人相がよくないのもいたが別段そう乱暴者とも思えない。カラームやバハレーンから岩塩を買つてダダリ峠を越えて帰つて来た連中が、われわれを追い抜いて行く。夕方この谷川シュンジ・ゴルがギザール川に合する手前の広い河原にあるキャンプ地に安着。これで懸念されていたスワート・コヒスタン横断も無事に終つたのだ。ベグ隊長らもほつとしていた。

ヒンズークシ

ギザールのキャンプ地はシュンジ・ゴルの広い河原にあつて、石造りの平屋根の家が集りポプラの木が茂るハンダ

ラプの村の近くにある。標高は二九〇〇メートルだが、麦畑があり人間が定住しているのである。スワート・コヒスタンと違つて毎日天気がよく、昼間は炎天では暑いくらいだ。キャンプの近くに立派な擦痕のついた岩盤がある。かつてジュンジ・ゴルの谷を埋めた氷河が削つた岩盤だ。

七月二十九日、あらたに七〇人の人夫を雇つて、東方四四マイル下流にあるグピスに向つて出発した。グピスまで四日間の予定である。ギザール渓谷は雄大だ。両側の山は谷底から三〇〇〇メートルもそそり立ち、標高五〇〇〇メートルを越える峰みねが雪におおわれているほかは、全くの裸山で地質は遠望してわかる。こんな乾燥地帯でもギザール川は水量豊富で、川幅五〇メートル内外もある。支流も相当な水量だ。これは水源に氷河や雪渓があるからである。両岸にある段丘や扇状地がところどころ支流の水で灌漑されて畑が耕され、ポプラや桑やアンズの木が茂り、村ができている。山の砂漠の中のオアシスだ。オアシスは涼しいが、外は昼間の炎天は暑い。

シュンジ・ゴルとギザール川との合流点から三キロ下流に、川幅が狭くなつた所にギルギット＝シャンドル峠街道を渡す吊橋がある。それから下流は街道は右岸を通ることになる。ジープが通れるはずだが、所どころに急坂があつたり、橋がこわれたり、なかつたりするので、実際には通れない。ジープどころか、車と名のつくものはヒンズークシには一切存在しないといつてよい。街道にはマイル・ストーンが一マイル毎に立ててある。石を白く塗つてGLT88 SDR 43 GPS 20（ギルギット八八マイル、シャンドル峠四三マイル、グピス二〇マイルの意味）などと黒字で書いてある。

本多君は野生・栽培植物、水棲昆虫や魚を採集しながら、荻野、岩坪両君は野生植物や昆虫を採りながら、私は沖津君と共に歩測見取図を作り、地質を調べながら歩くので行程が捗らない。人夫たちはドンドン先へ行くしパキスタン側の隊員も先を急いで歩くので、日本側の五人はいつも遅れがちになる。私などは朝は一番早く出かけるのだがいつも殿りになつてしまう。

二日目の泊りはピンガルのレスト・ハウスだつた。この日、本多君がギザール川で大きなマスをたくさん釣つたので、久しぶりでご馳走にあずかつた。標高二五〇〇メートルのここピンガルで、はじめてアンズが食べられた。アンズはそれから下流へ来るほど大きくなり、うまくなる。

八月一日の夕方、ギザール川とヤシン川との合流点の四キロ下流、右岸にあるグピスに着いた。高度約二〇〇〇メートル。ここは村ではあるが行政・軍事の一小中心地で、ラジャがおりギルギット行政府出張所があり、ギルギット・スカウトの分遣隊の駐屯地でもある。小学校や中学校がある。立派なレスト・ハウスに泊る。立派といつても、無論電気はない。

翌朝、ラジャを訪問した。洋風の応接室に通される。ラジャは色は白いが日本人のような顔立ち。然し傍にいる四人の青年はヨーロッパ人の顔で、その中には赤い頭髪の人もいる。ラジャは五十才位か、一九〇九年に一家がバルチスタンからここに来たという。第一次世界大戦中に役人としてグピスにいたロングスタッフのことを覚えていた。

グピス滞在中にジープで東方七〇マイルのギルギットに一晩泊りで行つて来た。一昨年来世話になつている行政長官キアニー氏に挨拶するのと、少し物資を買い入れるために。行つたのは連絡官とベグ隊長、ムバシャーさんと私の四人。ギルギットのバザールで、カシュガルから戦前から来ている漢人の親子の雑貨屋で買物をしている時、往来を一人の登山姿のヨーロッパ人が通りかかつた。呼びとめてきいてみると、英伊合同探検隊に参加してナガール方面へ行つて来た老年のイタリヤ人だ。小柄な人で七十四才だそうだが、とても元気で七〇〇〇メートルの所まで登つたそうだ。日本へ行つて槍や穂高に登つたことがあるといつていた。

八月七日、グピスを去つてヤシンの谷にはいり、ジープが通れるよい街道を一五マイル歩いて、夕方ヤシンに着いてレスト・ハウスに泊つた。ギザール川の水は割に澄んでいるのにヤシン川の水は濁つている。上流に氷河が多いせいか。翌朝ヤシンのラジャを訪問。令息が二人いるが、二人共ペシャワルの大学生で英語がうまい。兄の奥さんはフ

ザガール・アンの上に立つ（左から）ザフール、ベグ両教授

Professors Zahoor and Beg (left to right) standing on the top of Zagar An (Pass).

ナズバール・アン(峠)の上で休むポーターたち

Porters resting on the top of Nazbar An (Pass).

ンザのミールのお姫様だそうだ。午後、化石採集に出かけた。中生代白亜紀の貝化石で、昨年ここで藤田和夫君が見付けた。ところが古く一九一四年に時のインド地質調査所長ヘイドゥンがパミールへ行く途中すでに発見していることが、あとで判つた。地層はテチス地向斜に堆積した海成層。

八月九日、五〇人の人夫を雇つてナズ・バル・アンに向つた。ムバシャーさんはここからグピスに引返し、そこに置いて来た荷物の輸送を監督して、シャンドル峠街道を通つてテトラールにはいり、マスツジで本隊と落ち会うはず。われわれは、この日ナズ・バルの谷をさかのぼり、夏小屋だけしかないラティン・クシという高度三二五〇メートルの所でキャンプ。二〇メートルの段丘の上には夏の間だけの畠がある。次の日に歩いた所の両岸の高所には堆石堤が見える。この日は三九五〇メートルの所まで登つてテントを張つた。もう灌木もなくなる高度だ。その三〇〇メートル（高度で）下まで夏小屋があり、山羊、牛、ロバが放牧されている。

八月十一日、四九七七メートルのナズ・バル峠を越えた。ヤシンからついて来た人夫でない男が、悪場や雪渓の上り下りに私の手をひいてくれた。標高三七〇〇メートルのアノ・ゴルの河原までおりてキャンプ。

八月十二日、滞在。ヤシンの人夫を返す。学生諸君が登頂を目指すシャハンドク（六三二〇メートル）が北方に、その真白い姿をわずかにのぞかせている。本多、岩坪両君が人夫二人を連れて偵察に出発した。

八月十三日、小雨、テントで読書。私は感冒らしく熱があり食慾がない。夜、沖津君がアルファ米のお粥を作つてくれた。うまかつた。夕方シャマランから人夫到着。これはムバシャーさんの手配によるものだ。

八月十四日、晴、下流に向つて出発。一足先にラシールさんと岩坪君が人夫を八人連れてシャハン・ドクのベースキャンプに向つた。ラシールさんもシャハン・ドクに登ると張り切つている。私は今日は気分がよい。わずかしか歩かないで泊る。羊肉の夕食。晴れ渡つた空に星が美しい。蠍座もよく見える。

八月十五日、晴、バフシュタロ・ゴルをわずかに六キロほど下つてキャンプ。この日に歩いたあたりにはシャマラ

ンから放牧に来ている人が多い。

八月十六日、晴、ザガール峠の下の標高四一〇〇メートルの所まで登る。途中は粘板岩。左岸の高所に堆石堤が見える。キャンプした場所は消えた氷河の側堆石の上。

八月十七日、晴、ザガール・アン（五〇〇九メートル）を越えてチトラール州にはいる。ザガールというのは険しいという意味らしく、東側は険しかった。西側は緩かで雪がある。一キロ余の長い堆石堤が谷を埋めている。支流には氷河がある。ドク・シャルという村の近くでキャンプ。高度三六〇〇メートルの高所の村とは珍しい。地図には temporary としてあるが permanent village になっている。

八月十八日、晴、対岸の山腹を赤い粘板岩が走っているのがよく見える。シャマランの人夫を返した。チュマルハン峠（四三四四メートル）を通って帰ったはず。今日は荷物はロバに積む。この谷はどういうわけかかなり人通りがあり、よく馬が使われている。私は体の調子がよく調査が面白くできた。夕方になってヤルクン川の大きな渓谷に出た。馬に乗る。家は石造りでなく焼いてない泥の煉瓦を積んで造ったもの。このあたりの回教はイスマイル派とみえて、婦人の服装はフンザやヤシンと同様で、赤い帽子をかぶっている。マスツジのレスト・ハウスに着いてみると、ヤシンで別れたムバシャーさんがすでに四日前に来て待っていた。その夜、物知りの彼からチトラールの歴史や地理の話をいろいろきいた。元朝の時代に、マスツジに中国の最前線のとりでがあったことなど。

あくる朝、起き出してみると西方にあたって、ティリチ・ミール（七七四〇メートル）が群山の上に白銀の姿を輝かせていた。マスツジ（標高二二八〇メートル）は行政の小さな中心地であるが、来てみるとさびしい村にすぎない。もともとチトラールの王家の一族がここの領主だったのだが、今ではその領主は中央政府任命の知事を勤めている。知事邸での昼食会に出席した。三百何十年前に植えられたというスズカケの大樹の下に設けられた席で、おいしい米飯のご馳走をいただいた。夕方、レスト・ハウスの近くのポロ・グラウンドでポロ競技が行われた。

私はマスツジに来てから熱が出て食慾がなくなり、二十一日に付近の地質を調べに出かけたほかは静養した。シャハンドク登山隊は二十二日に着く約束だつたのに、二十三日になつても来ないので心配したが、二十四日の午後四人とも無事に元気に到着したのでほつとした。きいてみると、十八日朝、五五〇〇メートルの第三キャンプをあとにして、頂上めざした学生三人（リーダー本多君）は、午後になつて軟かになつた雪で行進を妨げられ、表層ナダレに悩まされながら頂上間近かに迫つたが、時すでに日没となつたため退却を余儀なくされたという。それでよかつたのだ。無事で帰つて来てくれたのが何よりだ。それに三人とも氷雪の険しい山に登り、六〇〇〇メートルを越えた地点まで達したことは貴重な体験だつたではないか。

マスツジから先は、すでにパキスタン地質調査所で調査ずみだという。これでわれわれの仕事はほとんど終つた。あとはチトラールを通り、ペシャワルに出て帰るだけとなつた。二十六日、チトラールに向つてマスツジをあとにした。折角の露頭の連続に地質をよく見られないのは残念だが、私はパキスタン側の人たちの好意を受けて馬で行く。一日おきに熱が出る症状はだんだんひどくなつて来た。マラリヤらしい。四日目に憧れのチトラールの町に着く。数日滞在。九月二日、一台のトラックに荷物を積み、一行全部が乗つてチトラールの町に別れを告げた。四日の夜半ようやくペシャワル到着、翌五日夜十時にはわれわれ一同カラチ行急行列車の二等コンパートメントに乗り込んでいた。

これで第二回京大・パ大合同探検もどうにか終つたが、この小文の筆をおくにあたつて私はお世話になつた方がたに対して深甚の謝意を表したい。

一九五五年の京大カラコラム・ヒンズークシ学術探検以来、京大の探検を後援して下さつた朝日新聞社は今回も財政、報道にわたつて援助を惜まれなかつた。同社後援があつたればこそ今回の探検が成立し、遂行できたのである。

今回は前回よりも人数が多かつたので、それだけ経費もかさんだ。従つて各方面に御無理をお願いせざるを得なか

つた。われわれの目的を理解して下さつた多数の会社、団体、個人から多額の資金、多量の優秀な製品を寄付して頂き、船会社からは学生の乗船に特別の配慮をして頂いた。

今回はパキスタン政府に対する探検申請が遅かつたために、関係各方面に多大の御迷惑をおかけした。それにも拘らず、パキスタン外務省、文部省の担当官は特別の措置をして下さつたし、駐日パキスタン大使館のマリク大使、ヌール書記官、在カラチ日本大使館の成田大使、蜂谷書記官そのほかの方々、わが外務省の情報文化三課の方がたは、われわれのために格別の配慮、努力をして下さつた。それらの方がたのお骨折りによつて探検は実現できた。

われわれはまた、カラチの日本人会の浅野会長ほか皆様の、従前にも増しての御懇情を忘れることはできない。

今回の検検もパンジャブ大学との合同探検であつて、フセイン総長はじめパ大当局の絶大な支持・援助を得たことは前回同様であつた。

次にわれわれは、われわれ日本人メンバーと労苦を共にし、われわれに協力、探検を遂行したラシール連絡官、ベグ隊長ほかパ大隊員に対して感謝の念をあらたにする。

最後に、われわれはわれわれを指導・激励・支援された京大探検部の芦田部長、今西錦司・藤田和夫両顧問、準備に絶大な援助を惜まれなかつた土倉九三部友、それに貴重な時間をさいて準備に協力してくれた岡沢元君ほか部員諸君に心からお礼を申し上げたい。

本探検については松下進編『スワート・ヒンズークシ紀行』（一九五八年七月、三一書房）及び本多勝一『知られざるヒマラヤ』（一九五八年七月、角川書店）の二書が既に刊行されている。（編者）

南極第一次越冬の犬ぞり（一九五七・二月―一九五八・二月）（1）

北村泰一

1　リュツオウ・ホルムというところ

ことの初めに、日本隊が今回初めて足跡を残し、種々科学的調査を行ったプリンス・ハラルド・コーストの歴史を知っておくのも無駄ではあるまい。

リュツオウ・ホルム湾（Lützow-Holm Bay）をいだくプリンス・ハラルド・コースト（Prince Harald Coast）、オラフ海岸（Crown Prince Olav Coast）は南極大陸の内にあっても、比較的その発見が新らしい。

そもそものその地域の発見の糸口は、オーストラリアの有名な探検家モーソン（Sir Douglas Mauson, 現在のモーソン基地は彼の名に由来する）がディスカヴァリー号（Discovery）を駆って、エンダービー（Enderby Land）の沖合より、現在のオラフ海岸の遙か沖合のパックアイス（Pack Ice Line）の外縁に沿って航行し、また、リーザー・ラルセン（Hjalmar Riiser Larsen）がノルヴェジア号（Norvegia）でリュツオウ・ホルム湾にかなり接近したことがある。いずれも一九三〇年のことであった。ついで翌一九三一年、ノルヴェジア号を駆ったザクセン（Gunnar Isa-

chsen）は、リュ湾の北東部に接近、航空機により深く南に入り込んだ湾を発見した。これがリュツオウ・ホルム湾であつた。

一九三三年、リーザー・ラルセンは再びリュ湾西方クック岬に近づき、大胆にも上陸を試みたが折からの嵐で氷盤が流失、物資も失い、危うく捕鯨船に助けられた。由来この半島を彼の名で呼ぶこともある。

こうして一九三〇年以来、リュ湾附近へ幾つかの探検隊が出されながらも、リュ湾の全貌は全く不明であつた。だが一九三七年遂にラルス・クリステンセン（Lars Christensen）によりこの地域の航空写真がとられ、これに時の彼の故国ノルウェーの王子ハラルドの名を冠し、プリンス・ハラルド・コーストと名づけられ、詳しい二十五万分の一の地図と共に世界に紹介されたのである。このようにして、リュ湾は南極中ではその歴史が比較的新らしいにも拘わらず、ハンセン（H.E.Hansen）の手になる地図等により、かなり資料は豊かで、その点南極の経験の殆んどない日本隊としては非常に心強いことであつた。

事実、一年間リュ湾を縦横に走りまわつた私達としては、細部は論外としても大局に亘つてそれらの資料の正確さに一驚したものであつた。こうした地域に昭和基地が出来たのであるが、昭和基地設置のいきさつについては、さきに渡辺兵力氏が詳しく述べているので（『山岳・五二年』）、ここでは述べない。

2　越冬開始から春季旅行以前のこと

一九五七年二月十五日、「宗谷」は去つて行つた。そしていよいよ第一次越冬が始まる。基地に散乱した大量の物資を眺めていると、ここが十一人だけの絶海の孤島であることをすつかり忘れさえする。

それから四月中旬までの二カ月はたゞ働らいた。黙つて働らいた。嵐が来ても、手が凍えても、黙つて働らくより他に道はなかつたのである。しかし通路ができ、ガレージができ、一つまた一つと遅々たるものの、予定の仕事が終

り、この昭和基地、南の涯の日本南極越冬基地の砦が出来上つてゆくのを見るのは、何としても気持が良かつた。

しかしその間にも幾多の障碍があつた。三月半ば私達は初めて大きな嵐に見舞われた。当時は丁度小屋と小屋とを結ぶ通路を製作中であつたが、三月十二日から吹き出した風は刻々とその激しさを加え、十三日に至り風速三〇メートルを越し、勿論仕事はできず、たゞ苦心して作つた通路が見る間に白魔に埋れてゆくのを、拱手傍観しているよりほかはなかつたのだ。十三日の夜は最も激しく吹いた。小屋は家鳴りがし、床が風で持ち上げられる気配に一同なりを静め、それでも万一の場合のために武装し、いつでも行動がとれるようにして、この狂奔した嵐を見守つていた。

私達の小屋は一坪当り五十余万円というすばらしく高価なものであり、日本の建築学界の総力を集めて作られた立派なものであつた。そして私達が日本を出る前に次のように教えられても来た。それは『この家は、このまま南極の氷なり岩なりにポンと置くと、それは六〇メートルの風が吹いても大丈夫なように作られている。しかし南極の他の地域では七〇メートル～八〇メートルの風の記録もあるので、若し心配ならこれにテントのようなステイを張りなさい。こうすると九〇メートルの風にも耐えますよ』と。

家鳴りのしている嵐の基地にあつて、ふとその言葉を想い出したとき『しまつた!』と思わざるを得なかつた。ステイは越冬基地建設のあまりの忙しさに、そしてステイをはるための立地条件の悪さのままに、つい失念ともなく放置しておいたものだつた。

帰国してよくたずねられる。何が最も苦労であつたかと。しかしそう聞かれる度に私は返答に窮する。強いて言うなれば、こうしたときの未知から来る不安だ、と。未知はある場合には無知に通ずるかも知れないけれど、私はこの南極の一年間、いつもこの未知から来る不安に悩まされ続けて来た。しかしこれはまた言いかえれば、この故にこそ南極の蔭うつな生活が、私にとつてはいかにいきいきとして写つたか、ということにもなる。未知があつてこそ始めて私達の生活が支えられる。とは言つても、こうした嵐の日々私達は何を為すべき方法も知らず、たゞ、ふてくされ

て眠つているのが最上のようであつた。

二日二夜荒れ狂つた嵐も、さすがに十四日の夕方には下火となり、基地もようやく生気をとり戻した。嵐の終つたあとは、折角一ヵ月余りも粒々辛苦してやつと出来かけた通路が、大半は雪に埋つたり倒されたりして、散々な有様であつた。しかし、そんな事よりもつと驚かされたのは、眼前のオングル海峡の氷がものの見事に破壊され、嵐のあとの白波がザブリザブリとオングル島の氷岸を洗つている有様であつた。

私達の胸に先ず心配になつたのは、あのオングル島から二十キロの沖合の、かつて宗谷の仮泊していた氷盤上に置いた荷が一体どうなつているだろうかということであつた。晴天になるのを待ちかねて、二台の雪上車に分乗して偵察に出かけた。しかし、どうか残つていてくれよという願いも空しく、私達は、もと荷物置場となつていた附近に青青とした大海原を見るばかりであつた。

このことで、私達は大自然の力をいやというほど知らされた。私達の考えの甘さが骨身に泌みた。南極では%は存在しないのだ。一%でも事が起る可能性があれば、それはそのまま一〇〇%に通じる。All or Nothing とはこのことであろう。すべてが零か百かである。いな零以下でもそれが百となるかも知れない。そういう甚だ規定し難い世界なのである。これも、しかし結局は私達の無知によるものであつたろう。

それはさておき、物資を流失したことは大きな痛手であつた。しかし隊員達の顔は明るい。『これで運ぶものがなくなつた。ああ、せいせいした』といつた具合である。もう流れ去つたものは致し方がない。どうにもならない時は、本当はそれが辛くても、無理にも割切つた考え方をする方が良い。南極ではそういう考え方の出来る人達でなければ長続きはしないであろう。

四月に入つた。そろそろ建設も見通しをつけなければならない。それに日足も大分短かくなつて来た。計算によると太陽は五月三十一日に沈み、六月一日から約一ヵ月半太陽のない日々が続く。この太陽のない日々、すなわち冬籠

りの前に、何とかして春季の調査旅行のための、予備調査の小旅行をしたい。『旅行！』、それは私達が日本を離れるずつと以前から、すでに色々議論がされていた。ノルウェーの二十五万分の一の地図を拡げ、夢は果てしなくつづいた。ところがどうだ。今はその夢にまでみた土地にいるではないか。やろうと思えばいつでも出来る土地にいるのではないか。

私達が心ひそかに目的としていた地域は三つあつた。それは

(一) リュツオウ・ホルム湾の内陸深くにある一つのヌナターク（Nunatak 弧立峯）、ボツンヌーテン山。

(二) リュツオウ・ホルム湾東岸に拡がる大露岸地帯、ラングホヴデ地区。

(三) リュツオウ・ホルム湾から東北にのびる未知の海岸、オラフ沿岸。

これらの他にも米国ハイジャンプ作戦（一九四六～四七）の時に写した航空写真によると、遙かではあるがボツンヌーテンの奥百キロ余りに一大山脈のあることが知られていたし、またリュ湾、クック岬以西にも魅力がないでもなかつた。とにかく、この豊富さはどうだ。ゆくところ、すべてが新らしいものばかりではないか。

ある満月の晴れた夜、月光ににぶく光る対岸の氷の大陸をみて、もう我慢がならなくなつた。建設作業も大事だ。しかし一〇〇%を期していては、いつ果てるとも切りがない。それに今はもう、冬の生活に対する最低必要のものは出来上つていた。冬籠りまでの短かい日々の内に、何とかして、偵察旅行を試みたかつた。相談の結果、とにかく初めての旅行でもあるし、余り遠出はできないにしても、一週間か十日位で、大陸上のクレバス等の様子、氷上のキャンプ法、傾斜地に於ける雪上車の運行法、それに無線のテストを兼ねての小旅行をする必要がある。こうした目的でもつて選ばれたのがラングホヴデ地区、裏側大陸へのコースであつた。

四月十八日、折からの快晴を利用して西堀・立見・藤井・菊池・佐伯・そして私よりなる雪上車偵察隊は、二匹の犬と共に二台の雪上車に分乗して出かける。幸いにして好調、心配していたクレバスも大したこともなく、四月二十

一日長頭山（Langhovde）裏についた。行動中は余りに快晴に恵まれ、いつ、もう、ブリザードが襲つて来るかも知れない頃になつていた。ブリザードは一旦やつてくれば一週間位は平気で続くことを知つている。それをねばるには余りにも日がたちすぎている。ここのところは一つ自重して、という意見を採用して残念ながら長頭山そのものには登らずに帰途についた。時には戻ることも必要であろう、強い意志が要るものである。

しかし、この旅行では幾多の収穫があつた。氷上の幕営法、クレバス探知法、傾斜地に於ける雪上車運行法等、この旅行のあらかたの目的を得ることができた。

更にまた五月四日、中野・立見・佐伯の三人は、人曳ぞりに約七十キロの荷をのせ、ようやく低くなりゆく太陽に長い影を氷原に残して出ていつた。それに引続いて一カ月余、今までないがしろにしていた犬ぞりの訓練を、毎日のように斜陽に輝くオングル海峡で行つた。

冬ごもりとなる。暗黒の日々……そして外は荒れ狂う嵐。しかし私達の想いは遙か大陸の彼方にとぶ。航空写真によるルート偵察、行動計画、雪上車の修理整備、犬ぞりの整備等が忙しい。愉しい日々が始まつたのだ。

太陽の復帰、約一カ月半ぶりで戸外に光明がかえる。水平の彼方から金色のまばゆい光線が氷原をさつと走り来るようにして、新らしい光がやつて来た。冬は終つたのだ。

犬ぞりも基礎訓練を終え、応用訓練への歩みを着々と進めつつあつた。すなわち八月二日オングル島一周を皮切りに、八月八日オングル島周辺の未知の小島を、八月九日さらにオングル島南二十キロのルンパ島まで足がのびる。南へ南へと歩を延ばす。やがてその道をいつの日にかボツンヌーテン目指して進む日を想いながら。

日帰えりの旅行はこれが最後であつた。もうこれ以上はどうしても一泊せねばならない。冬期の犬ぞりによる氷原上の幕営。今なら一見なんでもないことが、当時はいかに重大であつたろうか。そしてそれまで本でしか読んでいな

かつた未知の世界に、最初の一歩を入れるという、強烈な魅力になんと富んでいたことか。

こうした冬期幕営法と冬期産卵する皇帝ペンギンの巣の発見という二つの目的をもつて、八月十二日中野・菊池・佐伯及び私の四人は、十五頭の犬と共に四・五日行程の予定で基地の南方約四十キロに存在するユートレ島への旅に出た。

この旅の結果、ペンギンは発見できなかつたけれども、いくつかの豊かな収穫があつた。すなわちユートレ島までの氷状、またユートレ島から更に奥のリュツオウ・ホルム湾の遠望から、このリュ湾は冬期は殆んど完全に氷がはりつめ、従つてペンギンが生棲し得る開氷面が出来ないことがわかつた。しかしそれにも増して大きな収穫は、ブリザード中の幕営であつた。長期旅行ではどうしてもブリザードをまぬがれ得ない。私達が携行したテントで、果してあの猛烈なブリザードに耐え得るかどうかは非常に興味ある問題であり、またどうしても試みて見ねばならぬことでもあつた。南極のブリザードは突如として襲いかゝることが多い。私達が遭遇した八月十二日のブリザードは、その典型であつた。そのときの様子を述べよう。

十二日の午後二時頃ユートレ島に着く。曇でなまあたたかい。風のない静かな午後である。径数ミリの大きな雪の結晶がフワリフワリと静かに落ちてくる。氷原の上をクルブシあたりまでうずめる。少し早いが予定地まで来たのでこの辺にキャンプをしようと思い適当な地を探しに中野と私は出かけていつた。ものの三分もたたなかつたろう。島の稜線にモウモウと雪煙りがたつのが見える。一同何だろうと首をかしげる。雪煙の場所までわずか千メートル程だ。こちらはこのように静かなのに。だが雪煙の前線はぐんぐんこちらへ移動してくる。ハッと気がつく。ブリザードだ。気がついた時はもう遅かつた。同時にさつと横切る一陣の風に、あつと言う間もなく私達はブリザードに捲き込まれてしまつた。一吹きまた一吹き、ガンガンと撲りつけるような突風に、もう風上に向つては息もつけない。ぬぎ捨てた手袋が瞬時にしてどこかへとんでしまつた。大事なものをとばしてはならない。中野はまだ帰つて来ない。

勿論影さえ見えぬ。そりからほんの二～三メートル先の犬さえおぼろになつて見えない。やつと中野の影が帰つて来る。何も聞えない。『何？　もう一寸前進するつて？』だが犬はもう一歩も進まない。いち早くその場に丸くなつて雪の中にくるまつてしまう。眼もあけておられない。『無理ですよ、進むのは』と、その場にやむなくテントを張ることにする。シュラーフザックと言わず何でもとばしてしまえばおしまいだ。注意してやつとテントにもぐり込む、やれやれ。しかしテントの下は氷なので充分なステイはとれない。人間の重みでテントがとばぬようにしているだけだ。布地がパタパタいう。今にも破れそうだ。それでも石油コンロのゴーゴーという音に、やつと落ちつくことができた。そしてテントのはためきに何度か眼をさましつゝも、いつしか眠つてしまつた。こうして私達は三夜をブリザードに暮らし、そして生きぬいて来た。何ものにも代え難い貴重な経験を積んで。

いよいよ本格的な偵察行の時期になつた。ボツンヌーテンへのコースは二通り考えられる。

㈠　長頭山地区（ランゲホウデ）より上陸して内陸に入りボツンヌーテンに至るルート。

㈡　リュツオウ・ホルム湾最奥の蛙島（バツダ）対岸から内陸に至るルート。

この内㈠のルートは途中どうしてもリュ湾最奥の大氷河を横切るため、相当な困難が予想された。その点㈡のルートは航空写真その他により先ず安全であることが確かめられたので、ボツンヌーテンへの道は当然㈡に定められた。いよいよボツンヌーテンへの進軍だ。先ずこの皮切りに蛙島（バツダ）奥の大陸へとりつく上陸地点を探る蛙島偵察旅行が立案された。大陸と海氷の境は概して氷崖をなしていて、どこからでも簡単にとりつくことが出来るものではないからだ。

八月二十八日、西堀・立見・菊池・そして私の四人が犬ぞりを使つてルート偵察に出かけた。この旅行の模様は後のボツンヌーテン紀行と重複するので省略するのが、その時期は一年を通じて最も寒かつた。気温はマイナス三十度をこし、雪はきしみ、犬ぞりは遅々として進まなかつた。

この偵察旅行で三つの新らしいことを知つた。一つは目的の上陸地点の発見、二は円丘氷山群、これは今までに全く知られなかつたもので、普通の卓上氷山が卓状形に切り立つているのに、この氷山は径一～二キロ、高さ五十～百メートル位の円丘状で、大波が打ちよせるように越しても越しても続く氷山地帯をなしていた。蛙島まで至るにはどうしてもこれを越さねばならない。三つは卓越風の方向についてゞあつた。南極の風は地形の単純な故もあつて、普通一年を通じて一定の方向から吹くと言つてもよい。場所によつては東南風もあろうし、東北風も吹こう。オングル島附近はこの卓越風の方向が東北であつた。しかるに上陸地点すなわちリュ湾奥はみな南風になつている。つまりオングル島の東北風と上陸地点附近の南風のぶち当るところ、それが円丘氷山附近なのである。つまりこの辺は方向の異る二風が吹いて、丁度この辺で一種の無風地帯を作つているのである。そのためにこの附近の積雪は他に比較して可成り多い。

それはさておき、上陸地点は発見されルートはきまつた。次は食糧・燃料のデポ作りである。九月二十七日、中野・立見・藤井・菊池・佐伯よりなるデポ建設雪上車隊が出発、上陸地点その他の要所に、燃料その他の物資をデポし、十月二日無事基地に帰つて来た。さあこれでよし、いよいよ本番のボツンヌーテンへ出発と張り切つた時、困つたことが起つた。

これより先、エンジンが低温のために調子が悪くなつているので、熱風送風機を使つて、先ずエンジンを温め、しかる後エンジンの始動をして始めてうまくゆくのであつた。従つてこの熱風送風機がなくてはさすがの雪上車も盲人が杖を無くしたのと同様で、低温中では全く二進も三進もゆかなくなるのだつた。それなのに何と言うことだ。この命の綱とたのむ熱風送風機が、一寸したことで壊れてしまつたではないか。機械係の大塚をはじめ一同の必死の修理にも拘わらず、遂にこの熱風送風機はもとに戻らなかつた。

こうしてボツンヌーテンを前衛とし、その南方百キロに拡がる大山脈への夢は消えた。だがここでヘバつてはなら

ない。急拠相談の結果、計画を縮少してボツンヌーテン迄とし、今回も犬ぞりでゆくことになつた。十月十六日、その日一日をサポートする立見・大塚・佐伯の雪上車隊に先導され、トウ！（犬のかけごえ。「進め！」の意）の声もいさましく、ボツンヌーテンへと旅立つていつた。往復四百数十キロ、約一カ月の旅である。

3　ボツンヌーテンへの犬ぞり行

トウトウトウ、ホラァー。トウトットウ、ホラァー……

私はふと幻想に陥つた。何か現実から魂が脱け出し、夢の国をゆくような気がして来た。

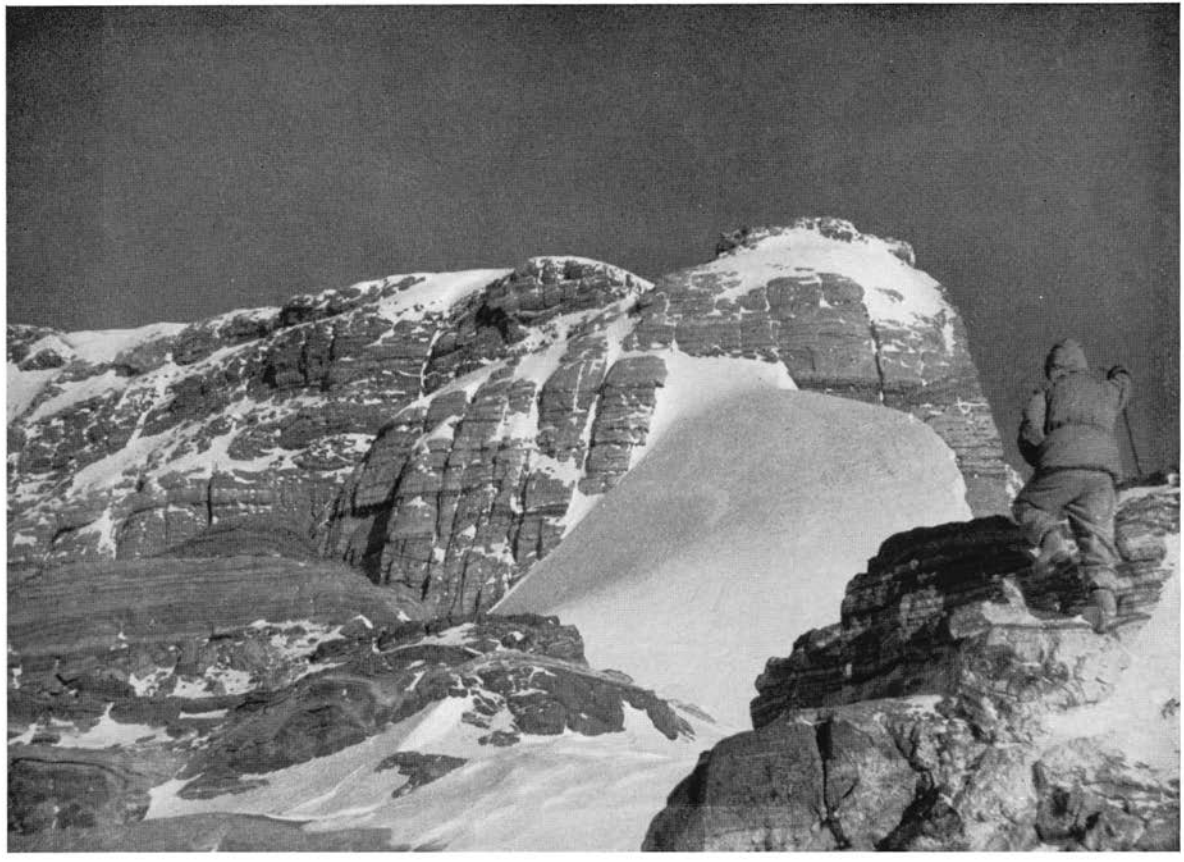
トウトウトウ、ホラァー。トウトットウ、ホラァー……

遙か後から中野リーダーの犬を追う声が吹く風に途絶えながらも、かすかに続く。足下を走るドリフト。紺碧の空。限り無く続く雪原に、股までもぐる深雪を一歩一歩深いラッセルをしながらふと幻想に陥つた。

トウトットウ、ホラァー。トウトットウ、ホラァー……

そもそもこのボツンヌーテン行の秘かな計画は、三年前未だ南極の話が海のものとも山のものとも定まらぬ前に、既に私達の心に芽ぶいた。一九五五年七月のこと、M先生がブラッセル会議から帰国されて間もなく、私達若い学生に向つて南極の話をされたことに始まる。その時はそんな決定的なものでは勿論なく、或いは冗談的な、或いは一つの話題として私達に話されたのかも知れない。私達の胸の奥に何かポツンと灯がついたような気がしたのは、この時以来であつた。

それから数カ月、私達の脳裏にはもう見果てぬ雪原を、私達自身そりを駆つてゆく夢を見ていた。『ボツンヌーテン』とは、こうして私達の『南極誕生』と共に心の片隅に育つて来た目標であり、また南極一年生としても全く手頃



ボツンヌーテンの西側と西稜の小さい岩こぶを登る中野氏（Oct. 26, 1957）　by T. Kikuchi

The western face of "Botnnuten" and Dr. Nakano climbing the west ridge.

リュツオウホルム湾の海氷上にて，前方偵察中歩を休める犬ぞり　中央遠景はラングホヴデ（Sep. 3, 1957）

On the sea-ice of the Lutzow-Holm Bay. Langhovde in the background. by T. Kikuchi

な目標でもあつた。

やがて越冬が始まつた。私達の心は大陸へと傾むきつゝも生活のための準備に忙殺され、やつと一息ついた頃は秋も終りに近づき、その短い日を稼いでやつたのが一週間の大陸長頭山(ランクホッヂ)系への雪上車旅行であつた。これを皮切りに、以後の踏査旅行へのステップ・バイ・ステップ法による着々たる準備発展の模様は、既に概述した通りである。

十月十一日、命の綱としていた熱風送風機『ハーマンネルソン』が破損し、雪上車はやむなく犬ぞりに変更され、計画もボツンヌーテン南方百キロ余の処にある大山脈地帯を諦らめ、ボツンヌーテンまでと縮少された。中野隊員をリーダーに、菊池と私がこれに加わることになつた。出発は五日後の十月十六日。準備は多忙を極めた。中野リーダーは種々ルート上の研究を、菊池は装備を、そして私は食糧を受もつた。犬ぞり旅行を成功させるか否かは、一に重量の如何にかかつていると言つても過言ではなかろう。菊池は旅行の度毎に、とかく重くなりがちな荷を、どうして一グラムでも軽くするかに悩まされていた。

準備努力の大半は、この重量軽減に費された。しかし私達の旅行は、ただ単に旅行するだけが目的ではなく、地質・地形調査・位置測定・気象観測その他の科学的調査にも大きい目的があるので、そのために必要な器具類は第一優先として積み込まれた。しかしその他のもの、例えばカメラは一人一箇とし、肌着、手袋、靴下等々チリ紙一枚に至るまで制限された。食糧にも種々考慮が払われた。例えば紙箱に入つているものは、その紙箱を捨て中味だけを抜いた。甚だしきは缶詰さえその外缶を破り、中味だけをポリエチレンのシーツに包んだ。うまいことには内地と違つて、南極では缶詰の中味はカチカチに凍つていた。わずかな重量でも無駄なものは気になつた。一日一缶の缶詰としても、一カ月の旅では三十缶、およそ三キロの重量が浮く。これは半ポンドのチーズ十三本分に当るといつた具合であつた。おまけに缶詰のまゝだと、一旦湯に入れ溶かさねばならないが、この点でも燃料の節約になつた。あらゆることがこのようにして能率主義、実質主義的に運ばれた。傍でみていた佐伯は、こうひやかした。『どうだ煙草も重

いだろう。煙にして袋につめて行つたらどうだ』と。

こうして十月十六日に出発した犬ぞり隊は、マイナス十二度という暖かさと快晴に恵まれ、先ず幸先の良い一日を基地から四十七キロの地点で終つた。過ぐる八月下旬の蛙島(ベッタ)偵察犬ぞり行の時、まるで砂のような雪面を苦しみながら進んだことなどはまるで夢のようだ。暖かさのためにそりのランナーが滑り易くなつたのと、その日一日はサポート・パーティが雪上車で大部分の荷を先に、基地より六十キロの地点まで運んでくれたお蔭であつた。犬達も調子が良かつた。こゝでサポート・パーティの立見・大塚・佐伯と別れの握手を交わす。立見隊員の目が『元気でやつて来いよ』と言う。『立見さん、貴方の分もやつて来ますよ』とこちらも目で応える。

翌十七日も朝の一走りでサポート・パーティの置いて行つてくれた所謂(いわゆる)第一デポに着く。だが犬の苦難はここから始まつた。第一デポで山なす荷の重荷と、進むにつれて深くなつてゆく積雪に、犬は段々と疲れをみせて来た。私達の行手には二つの難関があつた。一つはやがてさしかかろうとする円丘氷山群、高さはせいぜい五～六十メートルではあるが、あの重荷で、越えても越えても尽きぬこの雪と氷の丘陵地帯は、犬達にとつても決して生易しい代物(しろもの)ではなかつた。もう一つは、かねて蛙島偵察行の時に発見した上陸地点から大陸高原への登り道、過去二回の偵察行からその周囲数キロ中では最も穏かな、且つ傾斜もゆるいことは充分推察できてはいたけれど、何処にクレバスが待ち受け、又あの重荷と、ゆるくはあるがあの傾斜を果して犬達が耐えてくれるかどうかは、私の心の内では五分と五分であつた。

ともあれ、その日は円丘氷山群にさしかかつた第一日目であつた。しかし。この日は円丘氷山の中腹をトラバースして再び海氷上に下りるルートをとり、実際に円丘氷山に挑んだのは翌十八日であつた。その日も天気に恵まれていた。前日より漸次増して来た雪は、このあたりではもう膝をも没する程となつていた。その日一日のアルバイトは、先ず眼前の深い雪で覆われた第一の円丘氷山の急傾斜を登ることから始まる。菊池と私が出発準備をしている間に、

中野リーダーはラッセルにかかる。出発！　ハイヨッ！　トウ！　いつもなら所謂『モーニング・サービス』、称して『朝の馬鹿走り』で四キロや五キロは息もつかずに走り去つてしまうのだが、この深雪ではどうしようもない。

三百メートルもゆかぬ中に犬はとまつてしまう。無理もない。無理もない。重荷・ラッセル・傾斜と三つも悪条件がそろつては速く進めという方が無理だ。私達は長期戦を覚悟した。それからはただ黙々とラッセルし、十メートル五メートルと走行距離計（スレッジメーター）の目盛の増すのを唯一の頼りとし、時には犬達を叱り、時には愛撫し、越えても越えても猶延々と連らなるその雪と氷の丘陵地帯を、犬と共に闘つた数日であつた。人と犬とがこの時程一緒になつたことはなかつた。甚だしいところでは十メートル毎に休んだ。『ブルルルラアーイ！』（よーし止れ！　の意味の掛声）の声で、犬達は待兼ねたようにその場に坐り込み、ハッハッハッと機関銃のような息を吐く。二、三分の休憩時間が過ぎ、再び『そーらゆくぞ！』の声をかけると、あれだけダラリとしていた犬達が再び一斉にシャンと立つて曳く身構えをする。そしてやがて掛る『トウ！』（進め！）の掛声で、再び渾身の力をもつて荷を曳き始めるのであつた。

こうした蝸牛（かたつむり）の歩みも、やがて目鼻のつく時がやつて来た。十九日には相当な風と、円丘氷山の中心部を離れたために、雪面もようやく好転し、午後には蛙島手前のクラック地帯（バッグ）（これを『春の小川』と呼んでいた）も難なく通過し、蛙島西北部の強風帯の蒼氷地帯も快走して、やがて大陸との海峡上の海氷に幕営した。犬達の寝顔も、やるべき仕事を一つ為し遂げたことに対する安堵感で平和にみちみち、折からの蛙島の滑らかな稜線に昇る十三夜の月と、果てしない雪原の彼方に沈む夕日によつて、十月十九日の夕空はバラ色に染り、そしてやがて静かに更けていつた。

明けて二十日。先日来の奮闘の疲れを一夜の熟睡ですつかり払い落した犬達は、また例の『モーニング・サービス』を私達にしてくれるようになつた。この辺りの大陸の縁は、基地の対岸の大陸の縁と異り、海岸の間際まで大陸氷がのしかゝり、丁度海氷との境に露出する露岩が、がつちりとこの崩れ落ちようとする大陸氷をうけとめているようであつた。私達の何度かのこの蛙島行によりすつかり馴染になつた、この大陸に露出する四つの特長ある露岩（これを

私達は俗に『四つ目』と称していた）も、朝陽をうけて、その上に覆いかぶさり、今にも崩れ落ちそうな蒼氷を、いやが上にも青く清々しいまでに輝やかせていた。

雪面は幸いにも大陸に近づくに従つて、膝からくるぶしへ、そしてやがて沈まぬ堅雪へと変つていつた。その日の昼食は、のどかな春の日を浴び、久しぶりに一日の行動に目鼻のついたゆつたりとした気持で楽しんだ。

いよいよ大陸は近づく。稜線がのしかゝつてくるように感じたとき、私達は蒼氷帯に入つていた。もう今日の目的地、上陸地点も近い。そりは蒼氷の上を軽く、先導犬シロも私達三人をのせたまゝ得意気に走つてゆく。

上陸地点周辺は、やはりその奥の大氷河の圧力の影響でできた氷塔の乱立である。氷の魔境と言おうか、氷の城砦と言おうか、或いは低く或いは高く、横に重なり斜に倒れ、それらが午後の逆光をうけきらきらと輝やくさまは、まさに筆舌に絶したものであつた。

予定よりもうんと早く着いたこの上陸地点（先に雪上車隊がガソリンと食糧の一部をデポしておいたので、こゝを第二デポとも言つていた）の半日は、全く素晴らしいものであつた。手早やく食糧の積替、燃料の補給を終えた私達は、気温マイナス十二・三度とは言いながら、風さえ無ければ全く暖い中を、夫々散歩をして氷の芸術、自然の工匠（たくみ）の美しさに心をうばわれたりしていた。犬達も豊富な食糧にすつかり満腹し、暖かそうに午後の仮睡を盗んでいた。

十月二十一日、いよいよ第二の難関への日だ。しかし私はあの円丘氷山群と闘つている時から、この第二の難関に関してはある種の安堵に似たものを感じていた。だが、やはり今日一日で数百メートルもの高度を稼ぐことになるので、或る種の自信があつたとは言い条やはり心配ではあつた。ともあれ気温はマイナス十六度、昨日充分に休養を摂つた身には清々しい朝であつた。出発！　ハイヨ！　トウ！　雪面は堅く、思つたより快調、ぐんぐん高度を増す。眼下に拡がる光景は何と例えればよいか。リュツオウ・ホルム湾最奥の、この大氷河の荒々しい力、海氷はその暴威

の前には何なく裂かれ、その押し出す大量の氷はまるで煎餅のように簡単に打ち砕かれ、おそらくは丸ビル程もあろうかと思われる氷塊が互にぶつかり合い、へしあい、その凄絶さは全く人住まぬ際果ての荒地であつた。

この日は無風、ひる近くなると気温もぐんぐん昇りマイナス九度、雪もいつしか再び踝をかくすようになつて来た。心配していたクレバス地帯にも遭遇せず、やがて三時頃一応の台地に出、あとは坦々たる登りが大陸内部へ連なる地点で大陸第一夜の夢を結ぶ。

二十二日の朝は昨夜半来の強風で旗のハタメキに何度か夢を破られ、久しぶりに背中まで冷たかつた。朝の一杯のコーヒーのうまさ。風は相当にあるにも拘わらず雪は柔く深い。風の方向は基地附近では圧倒的に東北方向が多いが南に下るに従い東北成分が減少、南成分が増して来る。はるばる越して来た円丘氷山群はそうした境にあるため、いずれにしてもそう強い風は吹いていそうにもなかつた。蛙島（バッダ）ではもうすつかり南東風となり、そして大陸のこの地点から奥に入るに従つて南方向に近ずいていつた。

出発。時々正面から来る風は雪を巻き上げ足下をかすめて去つて行つた。遙か内陸の地平線方向は雪煙を上げている。見えるはずのボツンヌーテンも今日は見えない。ダダつ広い尾根のところを遮二無二南下する。左手の東方にはあの大氷河の口が見えている。もつと見はるかす遙か彼方まで段々と高度を上げているものかと思つたら、案外に海岸近くでぐつと高度を稼ぎ、あとは「坦々」と言つた感じであつた。遙か後方に長頭山（ラングホヴデ）が見える。いつも見慣れ親しんでいるシエツツゲ山（髭山）も見える。これらが見える間は未だまだ遠くへ来たという感じはしない。

二十三日の朝は地ふぶきと共に明けた。昨夜半よりテントのあふれ、雪粉のテントを叩く音しきり。地を這うドリフトに地平線はかすむ。テントの両脇には吹溜りができて、テントの近くにいた犬達テツ・アカ・ジヤック等はすつかり雪に埋ずもれてしまつていた。この中テツは特に寒がりで有名であつた。冬籠り中他の犬達は皆屋外で頑張つているのに、このテツのみは『小屋に入れろ、小屋に入れろ』となきつゞけ、鎖をといてやると他の犬達ならば一番に

餌のある処か、或いは基地唯一の女性、雌のシロ子の処へとんでゆくのが普通であるのに、このテツはそんな食い気も色気もあつたればこそ、一番にとんでゆくところは暖い犬小屋の中であつた。もつとも、色気の方も決して油断がならず、これについては後日面白い事件が持ち上るのだが、それはまた別の機会にゆずりたい。とにかくテツは寒がり屋で、その日もアカやジヤックは埋もれた雪を払つて起き出て、挨拶をしたのにテツのみはズルけて知らぬ顔の半兵衛、ぬくぬくと雪の中で狸寝入りをよそおつていた。

朝七時頃から日蝕が始まる。七時四十分頃、蝕は最大となり太陽の八割を隠す。外界はうす気味悪い暗さになる。その中をどこへゆくのか、ただ雪粉のみが北へ北へと氷面をかすめて飛んでいつた。基地を出てから一週間目、もつとも疲れたろうというので今日は晴だが休養にすると、中野リーダーが決定。犬達も理解あるリーダーをもつて幸福である。地ふぶきは段々とおさまり、昼にはテント内は温室のように暖かい。この日は天測三昧に暮らす。夕方再び地ふぶき。太陽は既に地平線に低く、ただ地ふぶきのみこの無の世界を漂々として這う。生ける者とてこの三人と、十五匹の犬以外に何もないこの世界は、全く不思議なものである。私達が去つたあと、或いは何年も何十年も、否何百年もただ自然に委せドリフトが走つたり、ブリザードが吹きまくつたり、見る人も見られる人もなく自然の営みを繰り返すのかと思うと、何か一種の不思議な感に打たれた。そしてテントを叩く風の音、地をこするドリフトの音に、スコットを想い、モーソンを想い、その今昔の感と運命に想いを致した。

二十四日の朝は再びテントのハタメキに目をさました。今朝もひどい地ふぶき。地平線はかすみ勿論ボツンヌーテンも見えぬ。昨日の天測結果では今日は八キロ～十キロ進めば南緯七十度線を突破することになつていた。昨日と昨夜半よりの風で雪面はすつかり好転。温度はマイナス十八度位だが風が強いので冷たい。休憩なしにぐんぐん進む。十時三十分頃にはもう十九キロを走つていた。この所でテントを張り早いが昼めし、正午天測の結果案の状七十度線を突破し七十度六分にいることがわかる。午後は風も治まり午前に比して断然暖かい。この辺は内陸へ向つて段々と

高度を増すのではなく、文字通りの「段々」であつて、一つの堤防をこすともう一つ奥に一段高い堤防があると言つた感じで、いはゞ段々畑の様な感じで高度が増してゆく。午後三時、一段と高い段をのぼつた時私達は遂にボツンヌーテンの容姿に間近かに接することができた。ああ、よくぞ来た、御苦労よ犬達よ。

しかし実はこのボツンヌーテンとそのスケールに関して一つの議論があつた。ノルウェーの地図によると、これは一つのヌナターク（氷面より露出する孤立独立峯又は孤立露岩）であるらしいが、蛙島偵察行その他からの考察では或いはもつとスケールが大きいのではないかとも考えられていた。だからこうして余程間近かにその容姿を見た時でさえもまだ見えぬあの下には一体何があるだろうという期待を、どうしても捨てるわけにはゆかなかつた。このボツンヌーテンの他に、私達は全く奇妙な別のものを望見した。それはボツンヌーテンの北西約二十キロにある大氷瀑であつた。蛙島からもそれは屢々望見され、私達はそれを「クシ」と呼んでいた。その夜は久しぶりに静かな夜であつた。

二十五日、夜半よりの風のはためきで再び目覚める。相当な風である。先日来の経験から、日中にはこの風は穏やかになることがわかつたので、今日は出発をやや遅らす。快晴。朝日に照らされた「クシ形」は一種凄絶なまでの圧迫感をもつて迫つて来る。昨日これが望見された地点からの距離を推量したところ、うんと余裕をもつたつもりで十キロと考えていたのが実際は二十キロ余りあつた。これ程南極のスケールは大きく計り難いものであつた。「クシ形」とはまるで大きな氷瀑のようなものであつた。丸ビル程の大きな氷塊がまるで崖を崩れ落ちるように、今にも崩壊しそうな姿でやつと安定を保つているようなものであつた。その丘の南には延々と吹溜りが続き、これが遙か蛙島から望見されたものであつた。このあたりからサスツルギの発達漸次激しく、時折は四～五十センチ程の脈をもち、犬達の行進を妨げた。更に何段かの段を越した時、もうボツンヌーテンは目の前であつた。

ボツンヌーテンに着いたのはその日の四時頃、基地を出て十一日目、漸く日も傾く頃であつた。

あゝ、遙けきものかわ、と思いたかつたけれども、実の気持はそれには程遠かつた。いつも見なれた長頭山（ラングホウデ）も、髭

山もかすんではいたが未だ見えていたので、オングル島はついそばなりという気持はどうしても払拭することが出来なかつた。しかしその岩壁は立派であつた。大陸蒼氷より二～三百メートルも、ところによつてはオーバーハングさえ交え聳え立つ姿はまことに勇壮でさえあつた。赤い夕日に照らされた岩肌と紺碧の空とのコントラストは、私達をして、ここが蔭うつさとこの上ない非情さをもつ南極であるというよりは、もつと明るく男性的で、むしろアルプスのドロミテの山を見ているような気を起さしめた。食事を終えた六時半頃、日はすつかり山襞に蔭り、遙か彼方の雪原のみが美しく夕日を照り返していた。その夜半テントを叩く風の音にふと目覚める。サラサラサラと風に舞う粉雪の音、パタパタというテントの音、いつとはなしにうとうとする。頭がジーンとしびれ何かすべてのものが遠のいてゆくような感じで、再び深い眠りに落ち込んだ。その夜私は夢をみた。

いよいよ登攀の日。だが相当苦労して稜線に達した時、私達は思わず息を呑んだ。ああ何たることか！　一体これはどうしたことなのだろうか？　様々な疑問がさつと心を走り抜ける。稜線の向うには思いもかけぬ近代工場があつて、その男女工員が昼食後散歩を兼ねてボツンヌーテンに登つているという夢だつた。

ああ、私達の今まで張りつめていた気持、希望と感激に満ち充ちていた気持ががつくりとなり、頂上に散乱されていた紙や空缶をみて何とも言えぬ惨めな気持になつた。しかしこの時ふと思い出したように雪の彼方をみる。ああ、あつたあつた。そこには重畳たる雪の大波の彼方に遙かに輝やく氷の峯が。

そうだ、ボツンヌーテンは私達の目標ではなかつたのだ。ボツンヌーテンは私達の目標たり得なかつたのだ。私達の目標こそは、あの雪の彼方の連山である。私達は再び希望をもつた。直ちに食糧・燃料が再計算され今度こそはの意気込みで再び出発した。

夢はそこで途絶えた。私は何とも言えぬ気持になつた。昨日、いよいよボツンヌーテンが一塊のヌナタークにすぎぬとわかつた時から、心秘かに感じていた或る種の失望が潜在意識となつて夢にあらわれたのであろう。私は夢で味わつた気持を、そのまま現実にシュラーフザックの中で味わつた。『ボツンヌーテンは私の目標たり得なかつた。彼方に輝く氷の連山こそ私の目標である。』外を走る風のうなりと共に再び夜は更けてゆくようであつた。

二十六日の朝はラジウスの音で目覚める。中野リーダーは盛んに手を焙つている。写真をとろうとして手を凍傷れたという。幸いにして白くなつたのみで事無きを得た。既にテントは朝日に明るい。起き出て外に出る。あゝ朝日に輝やく岩壁!!

大陸の永久蒼氷よりぐつとそびえる岩壁、紺碧の空、黄色い小さなテント、すべてが夢のように美しい。未踏の奥地というより、何かパラダイス的な、アルプスあたりの楽しいキャンプにでも来て、朝の飯盒に冷たい水を汲んで清清しい空気を胸一杯に吸い、ふと輝やく岩壁を見上げたあの気持に似ている。相変らずの風、犬達はこの風にすつかり寒がり小さく丸くなつてねている。今夜は良い穴を掘つてやるぞ。

午前中は例の『定期便』(毎日強く吹く風のことをこう呼んでいた。)が強く、午後になり先ず犬ぞりにより周囲を一周、大体のルートを偵察した。周囲およそ六キロのボツンヌーテンは、どこも絶壁でとりかこまれ、そう簡単には登れそうにない。帰幕後、直ちに偵察された二つのルートの中、私達のテントから望見出来るルートを先ず試みる。目前の雪渓を登りつめ稜線をゆく。キャンプからの望見では、頂上直下のわずかな垂直壁はいさゝか心配の種であつたが、この二時間の戦いの後そこに着いた時は遂に登頂を断念せねばならなかつた。オーバーハングなのだ。高さはせいぜい数メートルだが、このオーバーハングを登るには時刻も遅くそして道具もなかつた。高度はテントより三百メートル余。高距にしては低いがそのまゝ下の氷まで三百メートルの絶壁となつているので仲々雄大だ。だが実に残念なことには、航空写真にあつた奥の氷の連山は遂に見ることができなかつた。「断」により直ちに下降にかかる。再

びアンザイレンする。氷と岩を得た中野リーダーの顔は、喜びと若さに輝やいていた。

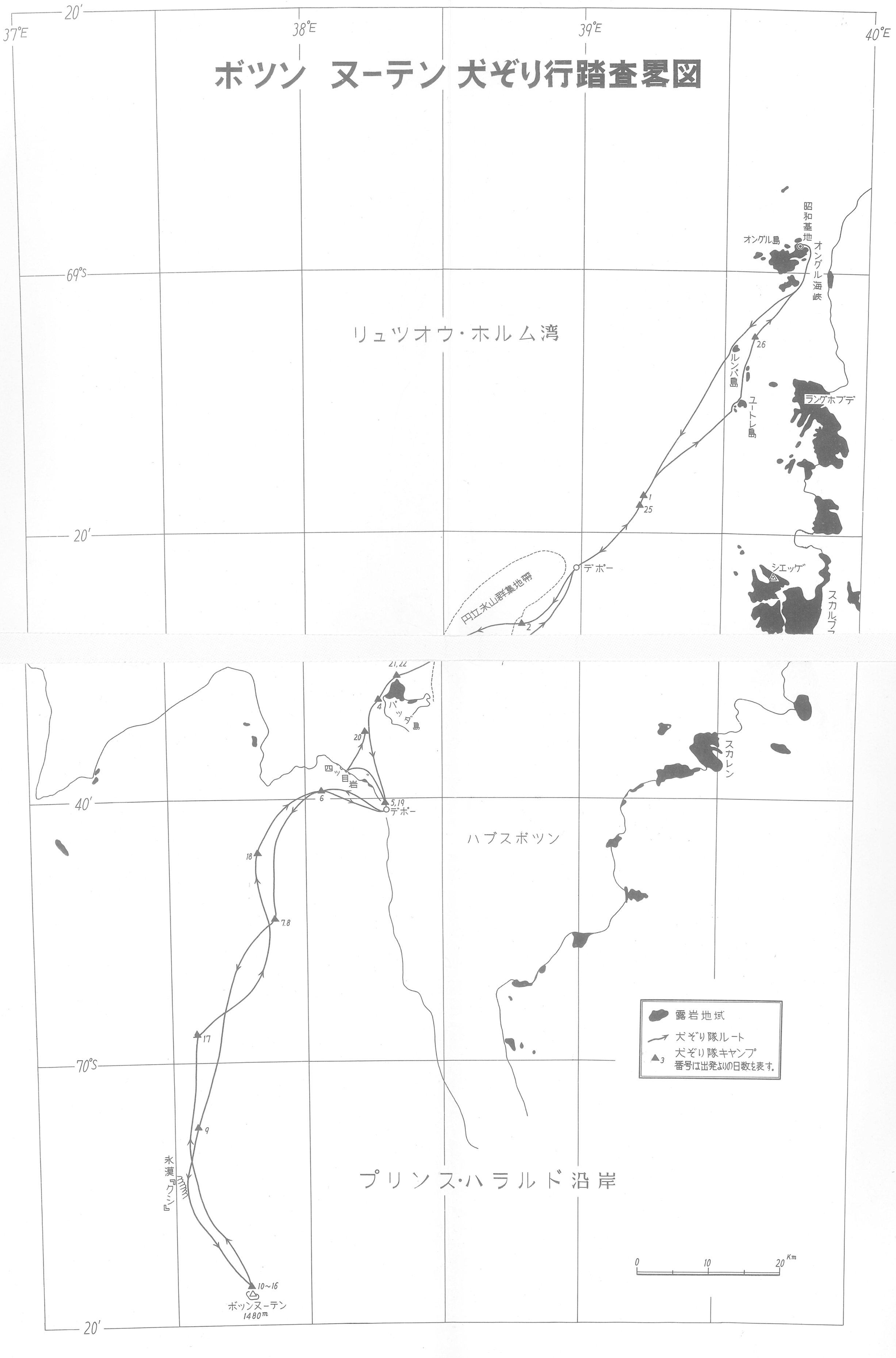
私達が登頂に成功したのは翌十月二十七日であつた。前日に比べその日はガスで視界は非常に悪い。頂上附近は絶えず雲がかかり、時としては雪崩のようなのがチムニー或いはゴルジュから落ちては、下からの上昇気温で再び舞い上る。上は相当な風らしい。その日はもう一つのルート、裏側より相当急傾斜のゴルジュをせめる。雪崩に注意しながらも午後四時五分、遂に頂上に至る。残念にも周囲はガスに充ち、頂上からは若しや見えるのではないかとわずかな希望を託していた南の連山も見えず、時折は雪さえ混じえて来た。直ちに記念撮影を終え、ケルンを積んで中に銅板とベークライト板に刻んだ記録並びに鉛筆の走り書きを収容、下山の途につく。その夜は目的の一つを果した安堵で、皆の顔は満足に充ちていた。

それから四日間を残る仕事。地質調査と天測による位置決定に費した。天候は悪く時として雪も交え天測の良い機会も容易には摑め得なかつた。それでも食糧・燃料のある限り晴間一日を摑もうとしたが、食料・燃料も尽きようとした十一月一日、遂に五日間滞在したボツンヌーテンに別れることにした。

犬達は五日間の休養にすつかり元気を回復し甚だ威勢が良い。雪混りの風の中を出発。『さらば、ボツンヌーテンよ!!』又いつの日にか必らずやつてくるぞ、そしてその時こそ私達の夢であるあの彼方の連山に進むのだ。サスツルギーの方向は、この辺ではほぼ南北に走つている。先導犬シロの方向感覚は素晴らしい。このサスツルギーを適確に或る角度に切つてゆく。犬達も帰途についたことがわかつたのか、足も軽い。

ボツンヌーテンを出発して二日目、十一月二日の午後にはもう深雪地帯に入つた。往路よりかなりこの深雪限界は内陸へ延びていた。再び往路のようなラッセルが始まる。雪は踝から膝へ、膝から股へと深くなる。ボツンヌーテン出発以来一時晴れた天気は再び曇り、翌三日にはすつかり曇天となつて雪面の凹凸さえも不明となつた。それで私達は目標をしつかりとみつめるために、この日はとかく雪眼鏡をはずしがちであつた。この日昼には往路大陸に入つた

ボツソ ヌーテン 犬ぞり行踏査畧図



第一のキャンプ跡を通過、その日の中に第二デポに到着の明るい見通しの中に、再び深い雪をかきわけかきわけ進んだ。幸いにして往路目標にしていた対岸大陸の露岩も見えていたので、進行は楽であつた。

天候は相変らず曇り、こういう日は最も歩き難い。ルートはややゆるい下りにも拘わらず、その傾斜感が出ない。こうした日が一番ルートを誤り易いことは、内地の山でも何度も経験したことであつた。案の状、ルートをやや左にとりすぎ「鬼の舞踏場」の上に出た時は私達の位置に相当な疑いをもつていた。この「鬼の舞踏場」の様子が往路とは相当に違うのだ。私達は集つて私達の位置について討論した。しかし、どうみても平なものが傾斜をもつて見え、そのためにあるべきものが無く、無い筈のものがあるように見えた。しかし幸いなことに私達は丁度このあたりから写した写真をもつていたので、それを比較することによりどうにか自己の位置を確認することができた。第二デポに着いたのはその日の六時近くであつた。私達はこの見慣れた土地に戻つて来て、置いてある豊富な食糧で腹一杯に充たし、帰つて来たという一種の安堵感から、その夜の熟睡をむさぼつたのだ。

そして、その後再び往路と同じように、蛙島の北側を廻り、円丘氷山群を越え、十一月十一日、出発以来二十七日目に昭和基地に帰つて来たのである。（未完）

ジュガール・ヒマールからランタン・ヒマールへ

深田久弥

ヒマラヤへのエクスペディションは多いが、私たちのパーティのようなのは珍らしかろう。まずそのメンバーである。作家、画家、写真家、それに医者、という風変りな組合せで、私たちのテントの肩には ARTIST A.C.（A.C.＝Alpine Club）という文字が縫いつけられた。私たちはエネルギッシュなクライマーではないけれど、山の美しさを感得することにおいては人後に落ちないという自負が、この文字の裏に隠れていたかもしれない。

つぎに私たちの年令である。画家の山川勇一郎が四十八、写真家の風見武秀が四十三、医者の古原和美が三十六、そしてかくいう私は五十五、平均年令は四十五才以上である。四十五才は社会では働き盛りかもしれないが、登山界では老年に近い。こんな年長者のパーティがヒマラヤに入つた例も、私はあまり知らない。

第三に挙げたいのは、比較的安い費用で済ましたことである。私たちがカルカッタを出発してヒマラヤに向い、再びカルカッタに戻つて来るまでの三カ月間に要した金額は、一人当り三十万円に満たなかつた。東京で少し贅沢に暮す人よりも私たちはつつましく過したわけである。

私たちは、一九五八年三月二日、英印汽船会社のサンゴラ丸で神戸を出帆した。船の中では日本人は私たち四人だ

けであつたが、船客や船員から厚意の眼なざしで迎えられた。私たちの行を祝福するための音楽会まで催された。暑熱のカルカッタに到着したのは三月二十四日であつた。

約二トン半弱の装備と食糧が船倉に積まれていた。その荷揚げと、面倒な通関手続を済ますために、私たちは一週間以上もカルカッタに停滞しなければならなかつた。

カルカッタから、インドとネパールの国境にあるラクソールまでは、約一昼夜半の暑苦しい汽車旅行であつた。ラクソールで私たちは、予約してあつたシェルパと落ちあつた。彼等はダージリンから私たちより一日前に到着して待つていてくれた。それはパサン・プータル、ラクパ・テンジン、ダワ・トンジュップの三人で、ことにこの最後のシェルパは、一九三三年以来殆んど毎年エクスペディションに参加しているヒマラヤのヴェテランであつた。

ラクソールで、貨車で来る荷物を待つために、私たちはまたも一週間以上の退窟な滞在を余儀なくされた。失われた日数を取り返すために、私たちは国境の近くのシムラからカトマンズまで飛行機を利用した。わずか二十分間の航空時間であつたが、私たちは猛獣狩で有名なテライ大森林地帯の上を飛んだ。暑熱のインドから来て、海抜千三百メートルのネパールの首府の空気は爽涼であつた。

カトマンズでは先ずネパール政府に出頭して、所定の手続を済ませ、入山料千ルピーを納め、それからポーターの契約をし、これからのキャラバンに必要な物資を買込むなどの仕事に追われた。それから私達の荷物をポーター一人の分担量である三十キロずつに分けることに忙しい一日を費した。

ポーターは総勢八十名を要することになつた。一行は私たち四人、シェルパ三名、ポーター八十名、それにリエゾン・オフィサーのアマチア君を加えて、約九十名の多数となつた。

四月十七日、いよいよ門出の朝である。午前九時半、種別によつて赤、黄、青、緑、白に色分けされた荷を担いだポーター群が、シェルパに指揮されて、長い一列縦隊になつてカトマンズを出発した。それからベース・キャンプに

着くまでの十一日間、一行は一日の休みもなしに、細い山道を辿つて行つた。平らな道は殆んどない、登るか降るかである。しかも日中の暑さは格別で、乾き切つた赤土が埃をあげた。ところどころ道の傍に、大きく枝をひろげた樹があつて、その涼しい蔭に行き着くとポーターも私たちもホッとして憩んだ。

ヒマラヤ登山に欠くことの出来ない前提であるキャラバンは、体のコンディションを整えるよい機会と言われているが、キャラバンのお蔭で私たちのナマの体にも筋金が入つてきた。ヒマラヤから南に延びてきた前山が、見渡す限り重なり続いていて、その山が下からテッペンまで段々畑になつている。まるで人間の根気の見本のように、それは高い処まで耕やされていた。

キャラバン五日目の午前、私たちがある峠に立つた時、初めて北方に目指すジュガール・ヒマールの全容を眺めた。それは氷雪に輝く素晴らしい眺めであつた。私たちはそれから、ジュガール・ヒマールから流れてきているバレピー河に沿うて進んだ。道は左岸の中腹高く巻いている。深い谷を隔てた対岸の高い山脈は、殆ど頂上まで段々畑が延び上つていて、あんな所に住んで不便でないかと思うくらい高い斜面に、ところどころ人家が群つていた。

しかしテンパタンと言う最後の部落まで来ると、もう段々畑もおしまいだつた。いよいよヒマラヤの氷河に近づいてきたことは、河の水が乳色に濁つてきたことによつても察しられた。テンパタンの近くの河原に私たちはテントを立てたが、その夕方、村の子供たちが大勢私たちを見物に来た。子供達は私たちにチベットの踊を見せてくれた。一人が吹くハーモニカの単調のメロディに合わせて、皆な大真面目に輪になつて踊るのは、まことに可愛い眺めであつた。

この最終の部落からベース・キャンプまで、私たちは三日かかつた。その間で、私たちは素晴らしい花盛りのシャクナゲ林の中を通つた。花の色は真紅、白、ピンクなどさまざまであつて、行けども行けども花のトンネルであつた。しかし、高度三千六百メートル辺りでその林は尽き、それから上は小灌木と岩だけの高山地帯となつた。ここで

プルビ・チャチュ　　by T. Kazami.

Phurbi Chyachu (6440m.), Jugal Himal

ドルヂェ・ラクパ　　by T. Kazami.

Dorje Lakpa (6989m.), Jugal Himal

私たちの目を楽しませてくれたのは、あたり一面に咲いているうす紫の手まり桜草であつた。

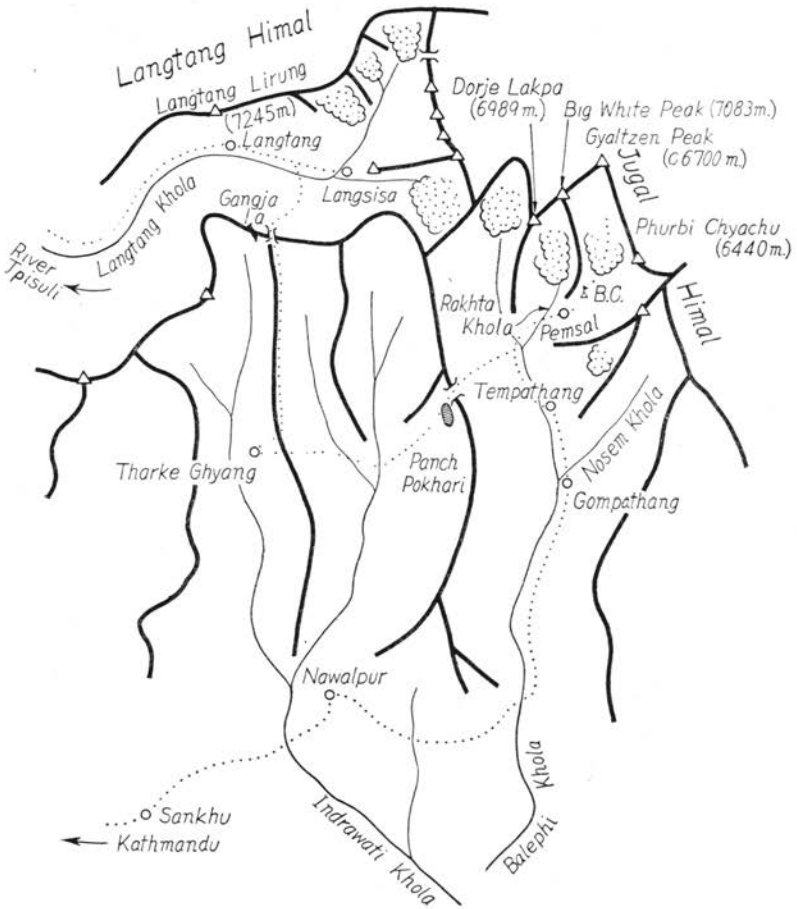
私たちのベース・キャンプの位置は四千百メートル、すぐ近くに、前年の春のイギリス遠征隊のベース・キャンプの跡があつて、未だにその時の食糧の包紙などが散らばつていた。私の心を打つたのは、すぐその横の岩にはめ込んである銅板の文字であつた。隊長のC・T・W・フォックス大佐は二人のシェルパと共に氷河上で雪崩に吹き飛ばされ、クレヴァスに落ちて命を絶つたのであつた。

私たちがベース・キャンプに着いて三日目の四月三十日が、その遭難の日だつた。私たちは全員でそのメモリアルに御詣りした。摘み集めた桜草を大皿に山盛りにして供え、私たちは黙禱を捧げた。シェルパ達は、オン・マニ・パドメ・フムと繰返し口吟んだ。その朝はきれいに晴れて、私たちのすぐ前には、氷雪を鎧つたプルビ・チャチユの神神しい山容が、眉に迫るように聳え立つていた。黙禱が終つてからも、暫くは誰もその場を離れようとしなかつた。ラクパ・テンジンは皿の上の桜草で銅板の縁を飾り、残りをその前に散華した。

ジュガール・ヒマールには二つの氷河が南に向つて流れている。ドルジェ・ラクパ氷河とプルビ・チャチュンブ氷河である。私たちの最初の予定は前者を登るつもりであつたので、まずその偵察に出かけた。ところが後者を偵察に出かけた一隊が、その氷河の方が遙かに容易であるという報告をもたらしたので、私たちはドルジェ・ラクパ氷河を引揚げて、プルビ・チャチュンブ氷河に全力を注ぐことに決めた。

この二つの氷河を仕切つている嶮しい氷と岩から成つた山稜を、私たちは中央山稜と呼んだ。ベース・キャンプはこの中央山稜が南に尽きようとする所の東麓にあつた。私たちは中央山稜の東側をトラバースして第一キャンプを立てた。そこからすぐ眼下に、プルビ・チャチュンブ氷河のアイス・フォールを見下すことが出来た。

私たちは第一キャンプで四晩過した。思うように先へ進めないのは、悪天候のためであつた。晴れるのは午前しばらくの間で、すぐ曇つてしまい、それからきまつて雪になつた。細かな霰状の乾燥した雪で、テントで寝ていると、



Langtang & Jugal Himals

この雪がサラサラと音を立てて布の上を流れ落ちるのが聞えた。

五月八日、漸く第二キャンプまで前進した。第一キャンプから一旦プルビ・チャチュンブ氷河の下まで降り、それから氷河に取り付くのであるが、その氷河の急傾斜は乱雑に裂け、千切れ、倒れて、見るも無惨なアイス・フォールをなしていた。クレヴァスが無数に口を開け、中を覗くと、蒼氷の腹を見せて底知れない。ヒマラヤに経験の深いダワ・トンジュップが先きに立つて、この複雑で危険な地形に道を拓いてくれた。一個所どうしても越えなければならぬクレヴァスに出会つた時には、撮影用の金属製のキャタツが橋の役を務めた。

私たちはやつと氷河の上に出て、そこに第二キャンプを建てた。その日は曇天とそれに続く降雪とで、視界が利かなかつたが、翌朝は見事に晴れて、プルビ・チャチュンブ氷河を見通し出来た。雪に覆われた氷河は、雪原状に緩い傾斜で上に延びている。これなら危険も困難もない登行が出来そうに思われた。ベース・キャンプまで荷を運んだポーターたちは解雇したが、その中から五人だけ選んで、シェルパを補佐させた。彼等はパサン・プータルに指揮されて、連日ベース・キャンプから前進キャンプに物資を運んだ。

第三キャンプに移動したのは五月十日であつた。第二キャンプから、幅の広い緩い登りの氷河上を行つたが、日光の直射と雪の反射とで、すこぶる暑かつた。シャツ一枚になり、その袖をまくりあげたが、それでも暑い。風は全く無かつた。氷河の両側が高い山脈で仕切られていたからである。

左手の中央山稜では頻りに雪崩が起つて、私たちに結構な見物をさせてくれた。前日の午後から降り積つた新雪が、午前の太陽の直射を受けて、ひとたまりもなく急峻な岩肌の上を滑り落ちるのである。棒のように豪壮に落ちるのもあれば、幾筋にも分れて落ちるものもあつた。

右手の高い仕切りは、プルビ・チャチュを最高峯とする山稜で、その向う側はチベットである。稜線には雪煙が立つていたから、あの辺は始終烈しい風が吹いているのであろう。この側からも一度大きい雪崩が出た。氷河の幅が広

いので、その中央を行く私たちには危険はなかつた。雪崩の飛沫が微かな粒になつて顔に触れてくるだけだつた。

第三キャンプでも私たちは悪天候に悩まされた。朝のうち二、三時間晴れるだけで、すぐ曇つて雪になる。シェルパたちも、こんなに雪の降りつづく年は珍しい、と言つたほど毎日降つた。

私たちのキャンプから氷河の上流を仰ぐと、真正面にピラミッド型の山が立つていた。一九五五年、最初にこのジュガール・ヒマールに入つたイギリスの婦人隊は、これをレディス・ピークと名づけた。氷河はその裾を通つて左の方へ曲つている。その氷河のどんづまりにジュガール・ヒマール最高のビッグ・ホワイト・ピーク（七〇八三メートル）とガルツェン・ピーク（約六七一〇メートル）とが位置している。この二峯ともイギリス婦人隊の命名だが、勇敢な彼女等が輝やかしい登頂に成功したのはガルツェン・ピークで、ビッグ・ホワイト・ピークはまだ未登頂のまま残つていた。

私たちの目標はこの最高峯だつた。最初私がヒマラヤ行を計画した時には、そんな野心はなかつた。私は自分の年令と能力を考え、多年憧れのヒマラヤを遍歴して、その眺めを賞讃してくるだけで充分と思つていた。だから私は出発前に一度もこの主峯の初登頂を宣言したことはなかつた。もし登れたら登つてみようくらいの決心であつた。しかし考えてみると、ヒマラヤの七千メートル以上の山は、『登れたら登つてみよう』というような中途半端な覚悟では駄目であつた。もし私たちが是が非でも登頂しなければならぬという堅い決心を持つていたなら、もつと別な作戦があつただろう。たとえば、連日の悪天候をやり過すために、一たんベース・キャンプに引返し、そこで数日静養しながら天候の回復を待つて、再攻撃を試るべきであつただろう。しかし私たちには次の予定があつた。それはランタン・ヒマールへ廻ることであつた。ジュガール・ヒマールばかりに日を費しているわけにはいかなかつた。

私たちは悪天候のもとの第三キャンプで、六日間を過した。その間に午前中の短時間の晴間を捉え、風見武秀はシェルパのラクパを連れて国境山稜の上まで登つた。あとの者は山稜に達するまでに雲に包まれ、途中で引返さざるを

得なくなつた。それが今度の私たちの隊の達した最高点であつた。私たちはビッグ・ホワイト・ピークはあきらめた。登頂するには、ベース・キャンプからさらに一週間分の食糧を上げなければならない。その補給力にも、これからの攻撃人員にも、私たちは力不足であつた。その上いつ天気が好転するかも分らなかつた。此処まで来て断念するのは残念であつたが、しかしジュガール・ヒマールにはもう充分に堪能した。私たちは大した悲壮感もなく後退に決した。

五月十七日、二週間ぶりで氷河の上からベース・キャンプに戻つた。そこはもう春景色になつて、すつかり雪も消え、あたり一面高山植物の花が咲き満ちていた。私たちはのびたヒゲをそり、通信を書き、荷物を整理し、下の部落からポーターの上つて来るのを待つた。そして私たちの旅程の後半であるランタン・ヒマールへと踏み出したのは、一週間後のことであつた。

五月二十三日、私たちはベース・キャンプを引き払つた。一カ月仰ぎ慣れたジュガール・ヒマールにも恐らくこれで一生のお別れかと思うと、名残り惜しく、振り返り振り返り山を下つた。私たちは一たんバレピー河の谷に降り、それから対岸の山稜へ登りはじめた。この登りは約二千メートルで、始めから急坂の連続だつた。私たちは登りに二日かかつて、山稜の向う側の直下にあるパンチ・ポカリに着いた。パンチ・ポカリは「五つの湖」の意で、その名の通り、清澄な水を湛えた池が五つ散らばつていた。私たちは一番大きな池のほとりにテントを張つたが、ここの美しい風景は一生忘れられないだろう。

私たちはこの山稜伝いにランタン・ヒマールへ入る予定であつた。ところがここでポーターの反対に会つた。彼等は靴も雪眼鏡も持つていない。そんな装備で、まだ雪の多い嶮しい山稜ルートを辿ることは出来ないというのである。私たちは長い間討議をした結果、このルートはあきらめることにした。その代りとして、私たちはガンジャ・ラ

を越えてランタン・ヒマールの谷に入ることに決めた。この峠へ行くまでにヘルム地区を通過しなければならない。リエゾン・オフィサーのアマチア君の説によれば、この地方はネパール国中で一番風光明眉で一番美人の豊富な所だということだつた。双方とも遍歴者に取つては大きな魅力であつた。

パンチ・ポカリを発つて深い谷に下り、それからまた嫌になる程登りが続いて、四日目の午後ヘルムの中心地タルケ・ギャンに着いた。百戸程の家が密集し、どの家にも白いノボリの竿が立つていた。そのノボリには細かい文字でお経の文句が刷つてあつた。

私たちは村の少し手前のきれいな芝生にテントを張つたが、忽ち大勢の村人に襲われた。芝地はまるでお祭のような賑いを呈し、お蔭で私たちは心秘かに期待していた美人らしきものを、若干発見することが出来た。

しかし、それは無邪気な少女たちであつて、段々年を取るに従つていけなくなる。ことにその大半は大きなコブをつけている。これはヒマラヤ山地でよく見受ける風土病であるが、容姿を宝とする女たちにとつて、何という惨酷な神様のいたずらであろう。

私たちの予定のガンジャ・ラに行くには、この村から背後の山に登り、山稜に沿つて道がついていた。タルケ・ギャンで隊を二つに分けて、私たちはシェルパ三名と強力なポーター十五名だけを連れて峠（ラ）に向い、残りのポーターに不急不用の荷を持たせて、アマチア君指揮の下に、直接カトマンズに帰した。

私たちはタルケ・ギャンを出てからガンジャ・ラまで四日かかつた。この山旅はまことに快適であつた。第一今までのポーターは多すぎた。全部で二十二名の小部隊のなんと身軽で、なんとトラブルの少なかつたことか。これこそ兼ねてから私が胸に描いていたヒマラヤ遍歴の理想型であつた。約四千メートルの高度の山稜に沿つて一行は進んで行つた。ある時は色とりどりの花の敷きつめた美しいメドーに出た。そこにはヒマラヤ風景にふさわしい放牧の番人用のカルカ（石小屋）があつた。まだ放牧には時期が早く無人だつた。ある時は、よく晴れた夕方テントの前から遠

くのヒマラヤ連峯を眺めた。連峯は果てなく続き、その後ろにさらに高い山が幾重にも重なつていた。ある時は、トテツもなく広い高原状の斜面に出た。日本では見たことのない大きな地面の傾きであつた。先へ行く人が豆粒のように小さかつた。そして遂に峠の手前まで達してテントを張つた。その日は午後から雪が降り出した。新雪を得て、風景は一層美しくなつた。

ガンジャ・ラを越える日は、見事な晴天であつた。午後一時私は一行より遅れて、峠の上に立つた。ランタン・ヒマールの総べての氷雪の峯々が私の前に展けた。それはまるで不意打ちのように私を驚かせた。あまりの壮観にしばらくは我を忘れて唯見とれていた。ランタン・ヒマールにこんなに多くの立派な山が群つていようとは予期しなかつた。数え尽くせぬ程の峯が、それぞれの個性を主張して連り、重なり、視界の涯まで延びていた。

ガンジャ・ラはインド測量局の一インチ対四マイルの地図では一八、四五〇フィート（五六二四メートル）となつている。ランタンの方からここを越えたT・ハーゲンの記録にも五六二四メートルとなつている。ところが私たちの持つて行つた日本製の高度計の針は、五〇五〇メートル以上を指さなかつた。どちらの高度が真実であろうか。私は日本の機械の方を信用したい。

その翌日私たちはランタンの谷に降りた。ハーゲンはこの谷をヒマラヤで最も美しい谷の一つに推奨しているのも、私にはうなずけた。谷の両側に鋭い雪峯が並び立ち、その底には広い河原を持つた河が勢よく流れていた。河原の両側はメドーになつて、高山植物が咲き、牛やヤクが群れていた。

私はこの美しい谷をもつと見たくて、一人のポーターを連れて川上へ登つて見た。途中にゴンパがあつて、数人のラマ僧がお経を誦していた。その近くにきれいな牧場があり、そこに一人のスイス人が住みついて、バターとチーズを造つていた。文明社会から遠く切り離されたこの辺地に、ただ一人踏み留つているその勇敢さに私は打たれた。彼は暖く私を迎えてくれ、ヤクの乳やチベット茶をご馳走してくれた。戸外の粗末な椅子に腰を下して、二人の異国人

は二時間近く旧知のように話し合つた。二つの小屋があり、一つは簡単な工場、一つは製品倉庫になつていた。その近くに小さな白いテントを張つて、そこに彼は暮していた。別れ際に彼は彼の故郷の住所と姓名を書いてくれた。それは次の通りである。Josef Duback; Käserei Werligen, Neuenkirch/Luz., Switzerland.

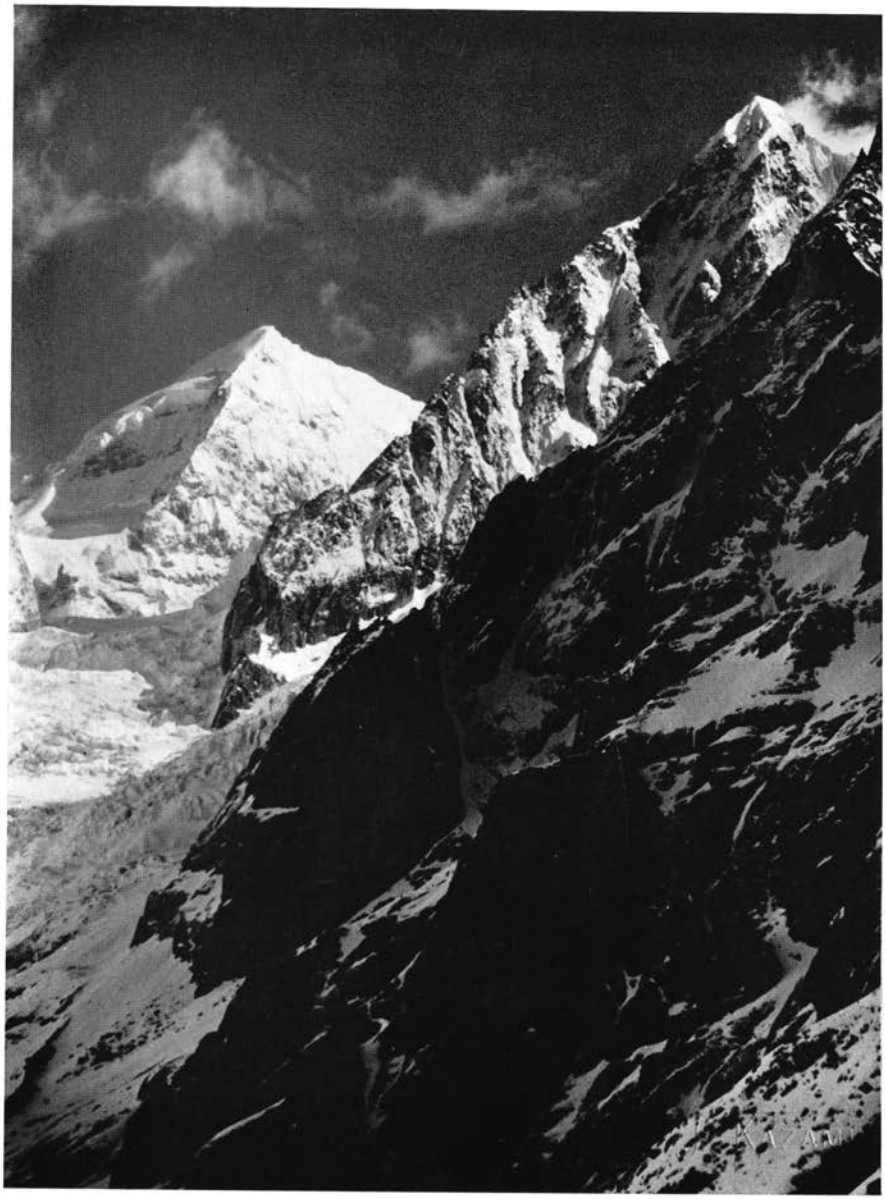
私はそこから八キロほど川上のランシサまで行つてみた。無人のカルカが五つ六つ散在しているだけであつたが、モレーンに覆われた氷河の舌端を見ただけでも、私には大変満足であつた。

翌日ランタンの谷を降つた。ランタンの村から次の村まで二十五キロくらいの間、花の咲き満ちた灌木の間を行き、明るい林を通り抜け、屢々現われるチョルテンの傍を過ぎ、振り仰ぐと両側の高い岩壁にはところどころに滝が懸り、その岩壁の上には、純白の雪の峰が光つていた。

ランタンの谷から長い坂を下つて、本流トリスリ河の川べりに出た。坂の上から、西北にあたつて雲の間に白い峯頭が三つばかり見えたのは、ガネシュ・ヒマールの一部であろう。私たちの帰路は、このトリスリ河に沿つて山腹に続いていた。これはネパールとチベットを繋ぐ重要な街道であるが、上り下りの多い小径であることは、今までの径とあまり変りはなかつた。

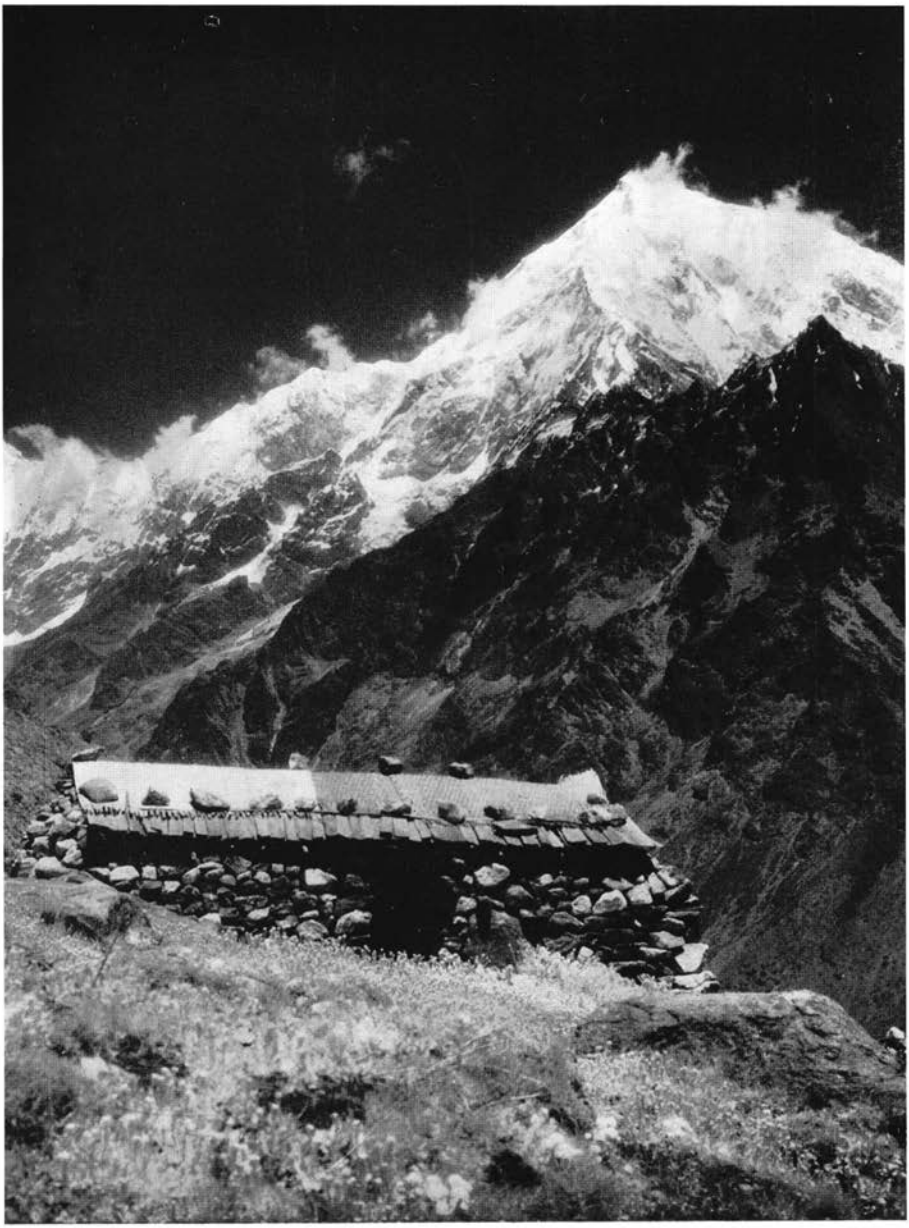
山腹の道を三日歩いて四日目に再びトリスリ河のほとりに下りた。トリスリ・バザールの谷の暑かつたこと！　バナナが実り、サボテンの黄色い花が満開であつた。そこからカトマンズへ帰るには、もう一つ山を越さねばならなかつた。私たちは暑熱に喘ぎながらそれを越え、六月十一日、二カ月振りでカトマンズに帰り着いた。顔は黒く焼け、一度も入浴せず体のむず痒くなつた私たちにとつて、カトマンズは文明の都会であつた。

本探査については深田久弥・風見武秀共著『氷河への旅―ジュガール・ヒマール探査行』（一九五九年三月、朋文堂）が既に刊行されているし、別に単行本刊行の計画もある。（編者）



ビッグ・ホワイト・ピーク　　by T. Kazami.

《Big White Peak》(7083m.), Jugal Himal



ランタン・リルン　　by T. Kazami

Langtang Lirung (7245m.),　Langtang Himal

八千メートル峰登山のタクティックス（一）

――マナスルにおける一例――

松田雄一

一、まえがき

一九五四年に派遣された第二次マナスル登山隊は、山麓サマ部落民の全く予期せざる登山阻止に遭つて敗退の余儀なきに至り、我々はエクスペディションに伝統のある英国のエヴェレスト隊に較べて、二十年の歴史の差のあることに想到したのだつた。

そしてその時、山に入り得ていたら、マナスルは何とか登れたろうとの自惚れももつていたのだつた。併し作らその後冷静に反省し、八〇〇〇m峰登山の困難性を研究するにおよび、私共の計画が科学的裏付けに乏しいことを見出したのである。第三次の登山に当つては、こうした根本問題が検討され、着々実行に移されていつたことは言うまでもない。そこでこれらの諸問題を表記のテーマで静観してみたい。

第三次マナスル登山隊の隊長を承諾された槇隊長の方針は、いかなることがあつても今度こそは登頂を期する信念であつた。勿論どの登山隊の場合でもこれは当然のことではあるが、今回の場合は、経費の点からも、対外的問題からも、このエクスペディションが日本人としてのマナスル登山の最後のチャンスであると思われたからに他ならない。一九五二年以来、あらゆる方面の支持を得て遂行されてきた日本山岳会のマナスル登山も既に五年を経過し、その間に要した経費は一億円に達していることからみても、これが限界であるとも思われたし、八〇〇〇m峰が残り少くなつた今日としては、安閑としてかまえているわけにもいかなくなつた。事実今度もマナスルに対してス

イスを始め各国から申込みがネパール政府に出されており、幸いに同政府の絶大な好意によつて一九五五年秋～一九五六年の一カ年に亘る登山許可は手にすることが出来たけれども、五七年度には遠慮せねばならぬ客観状勢にあつたのである。

そこで登頂失敗の場合のあらゆる要素が検討された。例えばもう少し日数があつたならば……とか、もう少しシェルパのサポートが強力であつたならとか、酸素が豊富にあつたならば登頂は出来たろうなどということのないように万全が期されたのである。勿論限られた予算の範囲内のことではあつたけれども……。そしてこのような観点にたつて、今回は将来の日本の登山界のためにというような問題や、直接登頂に関係ないあらゆる問題は、すべて第二義的に考えられたのである。

こゝで我々の最も大きな関心事はサマの問題であつた。八〇〇〇mに登る問題とは直接関係はないけれども、この問題が解決されない以上、マナスルは問題外であつた。

これより先、一九五四年一二月にはカトマンズのローク・ダルシャン氏や、クリシュナ・バハドゥール氏等から、サマの問題は落着したという報告もあつたし、一九五五年五月には西堀、成瀬両氏をカトマンズに派遣して、サマ問題解決の裏付も得、ネパール政府の意嚮も確認しては来たけれども、更に一九五六年のプレ・モンスーンに派遣される本隊に先立つて、三名よりなる先遣隊を、サマ問題の実地調査のために一九五五年のポスト・モンスーンに送つたのだつた。勿論この隊の目的は、マナスル氷河の偵察、装備のテスト、その他の任務を帯びていたけれども、サマとの友交を深めてくるのが、その主たる目的であつた。もつとも先遣隊派遣のもう一つの理由は、一九五五年七月に入手したネパール政府の公文書が一九五五年秋に失敗したならば一九五六年春も許可するというものであり、(註1)この秋に隊を派遣しないことがわかれば、ガネッシュ・ヒマールへ向つているランベールの隊が、マナスルに転進する心配もあつたからで、(註2)この点からどうしても隊を派遣し、帰路翌年の許可を再確認してくる必要があつたからである。

(註1) ポスト・モンスーンにマナスルを試みるということは、準備の点からも間に合わぬし、又後述(天候の項参照)のようにポスト・モンスーンに巨峰をねらうことは、当初から考えてはいなかつた。

(註2) ランベール隊は一九五四年秋にガウリサンカールから、オースタリー隊の登つているチョー・オユーに転進した記録をもつている。

そしてこの先遣隊はスッパを通じてサマとの交流も果し、予定通りマナスルを黒岩まで登り成果をあげて帰つてきたのだつた。

これによつて一九五六年に派遣の本隊は、サマ問題に対しては全く懸念もなく準備に没頭することが出来た。本隊の準備は先遣隊が出発した翌日、即ち一九五五年の七月二五日から始められた。これより先六月頃から、第二次登山隊の持ち帰つた装

備の点検等の予備的準備は行われていたが、具体的に準備が始められたのは、この日行われた第一回ヒマラヤ登山準備委員会からであつた。この席上集つた十数名の準備委員を前にして、槇隊長は、

①第三次マナスル登山計画の立案、現在までの経過。
②先遣隊派遣の事情。
③準備委員の任務分担。
④今後のスケジュール。

等を述べられた後に、隊の方針と重点について次のような構想を発表した。その後種々検討されて多くの問題は修正されはしたが、登頂を終えるまでこれらの諸点は、隊の基本方針となつたのである。即ち、

①外貨制約の点から隊員はヒマラヤ登山の経験をもつ一二名を限度とし、シェルパは行動表からみて余裕のもてる人数二〇名位を予定する。
②本隊は原則として全員が船便を利用し、キャラバンも出来うれば全員一隊編成をもつてベース・キャンプへ入る。
③三月二〇日までにサマにベース・キャンプを設定する。計画はすべてこの日から逆算せねばならない。
④酸素を豊富に使用する。
⑤アイス・フォール、プラトーのカバードグレイシャー(covered glacier)崩壊による雪崩の対策を考える。
⑥頂上攻撃の場合、現在予定している七、七五〇mのキャンプの上に、更にもう一カ所キャンプを予定に入れておく。
⑦隊の中枢を荷上げの専門家に置き、荷上げのチャートに基いて各員がイニシアティブをとつて動けるようにする。
⑧高所における紫外線の対策を考える。例えば帽子その他……。
⑨夜間の睡眠の重要性にかんがみ、酸素補給と暖房。特に懐炉の使用を研究する。
⑩モンスーンが最も早く来た例は記録によると五月一五日である。従つて登頂態勢はこの日までに整えておく必要がある。
⑪頂上攻撃は原則として三回行うものとする。
⑫荷上げに先立つて充分ベース・キャンプに滞在し、この馴化期間に東京で作つた計画表を再検討する余裕をもつようにする。

大略以上のような点であつたが、登頂を終つて顧みて、これらの基本方針が正しかつたことを痛感させられるのである。

二、八〇〇〇m峰登山の困難性とその対策

なにが八〇〇〇m峰登山を困難なものにしているのだろう

か。何故最近に至るまで八〇〇〇mの巨峰は我々を拒んでいたのだろうか。マナスル登山にあたつても当然これらの根本問題から検討されなければならない。そこで我々は各国の登山隊の方針や行動上の作戦を研究し、又我々のささやかなヒマラヤでの経験を基にこれらの問題をとり上げていつた。

(A) 天候の問題——シーズンの決定

いかに優秀な装備と強力なメンバーをもつて、充分に高度馴化を行いながら山頂に迫つても、最後の段階に至つて悪天候のために敗退した例は余りにも多い。それ程、天候は登頂に当つての決定的な要素をもつている。いかに上手に天候のチャンスを摑むかという問題は登頂の成否を左右する重要な問題であつた。

ヒマラヤ地方の冬季(一一月～三月)には、これらの山頂附近において所謂ジェット・ストリームといわれる七〇～八〇ノットの偏西風が吹いていて、登山どころの話ではない。逆に六月～九月までの夏季には、印度洋に発生する南東季節風、モンスーンの影響で、山頂附近は深い新雪に覆われて、雪崩の危険のために不可能に思われる。八〇〇〇m峰登頂のチャンスはこれらの間隙又は小康期間、即ちプレ・モンスーン、ポスト・モンスーンといわれる七〇日間程の極く短い期間しかないということは、経験的にも確認されており、常識ともなつている。しかし乍ら、プレとポストではどちらがよいかということになると、却々難かしい。事実一九五四年の秋には短かいチャンスをたくみにつかんで、オースタリーの登山隊は八一五三mのチョー・オユーの頂に立つている。たしかに、すつきりと澄み渡つた秋にも大きな魅力はある。しかし、なんといつても訪れてくる冬を前にしての強風は、八〇〇〇mの頂で雪煙を上げていることが多い。日射に恵まれる時間は極度に短かくなり、寒気はことのほか厳しい。あの一九五二年秋のサウス・コルにおけるスイス隊の苦闘をみても、アンナプルナⅣ峰におけるA・A・C・Kの経験にしても、強風と寒気は問題にならぬ程厳しいものであることがわかる。七〇〇〇m級ならこの期間にでもなんとかなろうが、八〇〇〇mを越える高さではチョー・オユーの例外を除いて不可能に近いものと思われる。我々が第一次登山の時から、ポスト・モンスーンを問題にしなかつたように、今回もプレ・モンスーンに出かけることについては異議はなかつた。しかし、このモンスーン前の小康期間は極めて短かいものであるし、このチャンスを上手く摑むように計画をもつていかねばならない。更に重要なことは、この小康期間が必ずあるという、明確な保証がある訳ではない。一九三六年及び一九三八年のエヴェレストでは、何れもこうした状況に直面して敗退しているのである。自然を相手とするだけに大きな問題があると言えよう。

一九五三年の第一次登山隊は明らかに好天の周期を逃がしていると言えよう。あの時は、登頂態勢に早く移り過ぎて新雪に悩まされ、すつかり消耗したあげく、下へ降りて来て休養している時期に好天が続いたという不運に遭遇している。(註1) それにはオール・インディア放送による気象通報を確実に摑んで、モンスーンの動きを観察しておき、これに加えて各キャンプにおけるデータを加味して、この重要な判断を誤まることのないよう心掛ける必要があつた。

(註1) 此の好天候を摑んで英国隊はエヴェレストに登頂している。

今回はたとえモンスーンに中休みがあつたとはいえ、好天の周期は早くも五月の上旬に訪れてきた。快晴で風が殆んどないというこのチャンスを摑みえたことは、何にもまして幸いなことであつた。五月一五日登頂の予定のもとに五月五日までに登頂態勢を整えておき、直ちに登頂に移れるように配慮された槇隊長の方針が成功をもたらしたとも言えるのである。五月一二日から約一〇日間マナスルが密雲に閉ざされたのをみるにつけ、この感を強めた次第である。もつともこの年は五月下旬に再び恢復したけれども……。(註2)

(註2) この恢復した時期にスイス隊はエヴェレスト及びローツェに登頂した。

(B) 高所における衰退の問題

1 高度の影響——高度馴化の問題

人間が永く生活のできる最高々度は一七、五〇〇呎（五三〇〇m）であると言われている。(註1) エヴェレスト隊のG・ピュー博士は、アンデス山脈中のアコンキルチア鉱山（一九、〇〇〇呎、五八〇〇m）の鉱夫が、この高度に泊場があるにもかかわらず、一五〇〇呎下の泊場に泊り、鉱区へ働きに一日に一五〇〇呎登つていく方を好むという例によつて説明しているが、(註2) 明らかにベース・キャンプはこの高度以下にあることが必要である。一九五三年のエヴェレストにおけるB・Cは一八、〇〇〇呎（五五〇〇m）にあつたが、彼等は休養をとるためにより低いロブヂェ（一六、五〇〇呎、五〇〇〇m）へ下つている例ははつきりとこの点を物語つているし、又一九五五年のマルカルー隊の場合には第一キャンプ（一七、三〇〇呎、五三〇〇m）が彼等の休養点（レスト・キャンプ）となつている。

(註1) この点は個人差も大きく、はつきりした線を引くことは難かしい。

(註2) *The Ascent of Everest* の Appendix による。

今回のマナスルにおいては地形の関係もあつて、一三、五〇〇呎（三八五〇m）をベース・キャンプとした。荷上げの点からみると不利な点もあつたが、休養の場所としては申し分なかつた。ナイケ・コルの第二キャンプは計画が進むにつれて第二B・Cとなつた。この高度は一八、四〇〇呎（五六〇〇m）であつた。この地点でも休養がとれるか否かについては、明確な

結論はでていないが、今回は滞在期間が短かかつたせいもあり、充分その機能を果したといえる。[註3]

（註3）この点について辰沼ドクターは、五六〇〇mでは無理で、マナスルの場合には三八五〇mのB・Cまで下りねば休養は難かしいとの説であつた、しかし今回は、充分高度馴化した後の休養点はナイケ・コルとし、全隊員がナイケ・コルへ上ることにした。そして更に休養を要する場合には下のB・Cを使う方針とした。徳永ドクターは休養の為にB・Cへ下り、充分に恢復した後再びナイケ・コルに登つて来た。槇隊長はナイケ・コル滞在の末期に明らかに高度の影響からくると思われる下痢のため衰弱したが、松田は急性肺炎のためにナイケ・コルで休養し一〇日間の静養で完全に恢復した。

従来の経験や、エヴェレスト、マカルー等における最近の記録によると、二三、〇〇〇呎までは動作が進んでいくが、この高さから先になると急激な衰退が現われてくることを知ることができる。即ち倦怠、疲労、筋肉消耗の回復不能、頭痛、食慾不振、下痢等の明らかに高度の影響と思われる現象が現われてくる。従つてこれ以上の高度では酸素の充分な補給によつて衰退を防止させねばならない。しかし、七〇〇〇m級の山なら、充分に高度に馴化された体であれば、七〇〇〇m以下のキャンプから一気にラッシュ・タクティックスを試みても、成功する確率は大きい。勿論この場合でも、七〇〇〇m以上で酸素なしに泊ることは危険である。[註5]これ以上の高度では前日の旺盛なファイトも、一晩ですつかり参つてしまう例が多い。そして、このことは隊員のみではなく、シェルパについても共通して言えることである。ただ、この問題は非常に個人差が多く又その時の調子にもより、一概にはいえない。

（註5）一九五三年には村木、サルキ等はノース・コルに一泊後完全に高山病にかかつた。今回のCV（七二〇〇m、二三、六〇〇呎）における、アイラ、サルキII、チョタレー等はそのよい例であろう。

次に高度馴化の問題について話を進めよう。高度馴化を経ていない人間が急激に高所へ上れば、一八七〇年に軽気球に乗つた人が始めて経験したように、急激に意識を失い生命を落す。低圧実験室での経験によれば二五、〇〇〇呎に該当する気圧下では、一〇分以内に、また二七、〇〇〇呎の気圧下では三分以内に意識を失うといわれる。[註6]しかしながら人間は徐々に高度に馴化をさせ乍ら上つていけば、こういつた衰退は或る程度くい止めることが出来る。

（註6）*The Ascent of Everest* の Appendix VI による。

一九五三年の第一次マナスル登山隊は一気にB・Cに入つたから、一三、五〇〇〇呎の高度で早くも高山病の徴候が表われ頭痛と不眠に悩まされたそうであるが、第二次、第三次においては、この高度に達する前に、多少の滞在期間と荷物を運搬する機会があつたせいか、[註7]それらの症状を呈したものは見当らなかつた。過去の各国の登山隊の記録によれば、普通は一五、〇〇〇～一七、〇〇〇呎であらわれ、数日で解消していることが

報告されている。一九五五年のマカルー隊のような強力なティームでさえも、一五、八〇〇呎（四七〇〇m）のB・Cに到着した後の数日、呼吸困難や食慾の減退、嘔吐、頭痛を経験している。ところが不思議なことに、このような場合（病気のためでも、荷物をとりに下つても、また休養のために下りても）に、一たん低所へ下つて泊つた後に再び以前に高度の影響を感じた高所へ登つていく場合には、身体全体に明らかに馴化が認められることが一般に経験的に知られている。(註8)今回も高所へ泊つた後に低所へ戻つて休養をとる計画が採用されたが、非常に成功であつた。大部分のものが最初にCⅡに泊つて経験した頭痛は、その後B・Cへ下つて休養を充分にとつた後にCⅡに上つた時には全くみられなかつた。

（註7）荷物をかつぐことが馴化を促進させるかどうかは、はつきりしていない。しかしB・Cへ入る前には、B・C以上での荷上げにそなえて、トレーニングとして多少荷物を運搬した方がよいのではないか。

（註8）*The Ascent of Everest* にもこの点は経験的に述べられているし、一九五三年の第一次隊も経験している。

一方、経験に富んだヒマラヤ登攀者のなかには高所における荷上げの開始に当つて、一二、〇〇〇～一四、〇〇〇呎に長く滞在しても馴化は認められないから無意味だという見解をもつているものもあるが、遠征の初期においては全員が、食事も、睡眠も充分にとれる程度の高度にキャンプを設け、この間に隊員の各自が自己の能力に適した範囲の高さへ登つてトレーニングすることは、賢明な策であると思う。いきなり高度の影響ある高さへ登る前にエヴェレスト一九五三年の隊は第一B・C（高度馴化キャンプ）をティアンボチェ（一三、〇〇〇呎）に設けたが、結果的にみてこの方法は明らかに良い結果をもたらしている。この点マナスルのB・Cは高度が低いために、高度馴化のためには恵まれた位置にあつたと言えよう。B・Cの高度が低いということは荷上げの点からみれば損であつたが……。今回もB・C入り後一〇日間程をトレーニング期間として、楽に六〇〇〇m位まで登れて興味のある所へ、例えばギャ・ラ附近、ナムルーの裏山等へでかける位の余裕をもちたかつたが、(註9)サマの問題やら、それに続く、インフルエンザの流行等により、当面の荷上げの仕事に追われて余裕なく、直接マナスルにぶつからざるをえなかつたのだけれど、荷上げの最初の段階において一〇日間に亘つて実施した自由行動によるトレーニングは、その後CⅡへ上つても高度の影響が余りあらわれなかつたことをみても、成功であつたと思う。

（註9）この問題に関しては出発直前、会員望月達夫氏から熱心な助言をいたゞいたことを附記しておきたい。

ところで、このような漸進システムによつて得られる高度馴化は、果たして何千呎まで可能だろうか。出来うることなら医学的にみて、酸素の補給を必要とする高度二三、〇〇〇呎(註10)まで

可能であつて欲しい。しかしながら「否」である。一九五三年の場合は、精神的にも肉体的にも、余裕のもてる高度は二一、七〇〇呎（六六〇〇m）であつたし、英国の高所医学協議会の出した結論も二一、〇〇〇呎（六四〇〇m）までで、頂上攻撃の基地はこの高度に設けるのが適当であることが解つた。酸素なしでもそれ程衰退せずに頑張れる最高々度、こゝに頂上攻撃用物資を集積して、モンスーン前の小康期間を待つことの可能なアドバンス・ベース・キャンプ（A・B・C）をつくるべきだという結論は、酸素の組織的使用と共に、八〇〇〇m峰登頂のための重大な一つのカギでもあつたのである。エヴェレスト一九五三年の英国隊はクーンブ氷河の二一、二〇〇呎（六四六〇m）の第四キャンプ、マカルー一九五五年のフランス隊は二一、〇〇〇呎（六四〇〇m）の第三キャンプ、カンチェンジュンガ一九五五年の英国隊は二一、八〇〇呎（六五五〇m）の第三キャンプ、そして今回の我々の場合は二一、五〇〇呎（六五五〇m）の第四キャンプがA・B・Cであつた。(註11)

このように八〇〇〇m級の巨峰攻撃が、高度馴化に基いて、はつきりした方針で計画実行されたのは、実に一九五三年の英国エヴェレスト隊をもつて初めとするといつても、決して過言ではないと思う。そしてこのことは、たゞ単に地球の最高峰が登られたということ以外に、その後の八〇〇〇m峰攻撃のための一つの結論的方式の決定でもあつたのである。その意味からもハント隊の成果は大いに評価されてもよいと思う。事実その後のカンチェンジュンガ、マカルー、そして今回のマナスルを眺めてもこの点ははつきりと言えると思う。(註12)

(註10) 個人差、その時のコンディションによつて一概には言えないが、ここでは極く一般論としてこの数字を上げた。

(註11) 一九五三年にはノース・コルをA・B・Cとして失敗した。翌年の第二次隊もこの点については修正されてなかつた。当時は地形のみを考慮しただけで、高度馴化やディテリオレーション（衰退）の問題はそれ程重要視されていなかつたともいえる。

(註12) これと対照的なものにナンガ・パルバット一九五三年のドイツ・オースタリー隊、アンナプルナ一九五〇年のフランス隊、チョー・オユー一九五四年のオースタリー隊の例が上げられよう。これは何れも充分に高度馴化を経ている隊員が、七〇〇〇m峰の攻撃と同様な方式で低いキャンプ（アンナプルナは七四〇〇m、チョー・オユーは七〇〇〇m、ナンガ・パルバットは六九〇〇m）から超人的に強力なラッシュを行つたもので、彼等のキャンプは何れも、それ程高所には張られていない。マナスルもこれらと稍々同高度であるから、ベスト・コンディションに恵まれれば、こうした方法でも可能であつたかもしれない。併し乍ら、その場合にはそれ相当の危険が伴つたことだろうし、正攻法とは言い難いと思う。今回もいろいろとこうした問題が検討されはしたが、安全性、確実性の点で問題にならなかつた。ただ第一回、第二回の連続攻撃が失敗した場合には、第三回目の攻撃はこの方法を採用して行う予定であつた。

2 酸素の不足——酸素補給の問題

人間の身体は二二、〇〇〇呎（六六五〇m）～二三、〇〇〇呎（七〇〇〇m）に達すると、もはや高度馴化の能力より、ディテリオレーション（高所衰退現象）が勝つてしまうので、七〇〇〇m以上に長く滞在することは危険であり、酸素の補給が必要となつてくる。即ち酸素は八〇〇〇mの高さでは地上の約1/3に減少する。それ故人間が生活を維持していくためには、どうしても酸素の補給が必要となつてくるのである。ところが九〇〇〇mにまで達すると、たゞ酸素を補給するだけではもはや無理で、それ以上の高さに登るにはどうしても気密室を用いて、気圧を維持していかなくてはならない。(註1) しかし幸いなことに地球上の最高峰エヴェレストは八八六〇mであり、酸素を補給することだけで登り得た。勿論それより低いマナスルにおいても同様である。

（註1）《英国生理学会誌》所収、ブリリアン・マシューズ「高所における限界的要素」による。

酸素の少ない所なら、足りない酸素を何らかの形で補給してやれば、すむではないかという至極簡単な問題が、一九二一年の第一次エヴェレスト遠征以来三〇年の間題であつた。というのは我々の要求を満たしてくれるような軽量の酸素ボンベと優秀な附属装置がなかつたからで、初期のエヴェレスト登攀者の中には、ノートン大佐やサマヴェルのように酸素の力を借りずに八五〇〇mラインを突破した人達の実績や、一九二四年にオーデルの示した持参の酸素補給器から著しい利得を得るのに失敗した経験等から、酸素の援助なしに頂上に達した方がよいという見解をもつものが多かつたからに他ならない。

彼等の上げている反対理由は、酸素補給器の重量が非常に重いこと、酸素補給器が故障した場合のアフター・エフェクトの心配等であつたが、当時の酸素使用量は一九二四年のオーデルの場合は毎分一l に過ぎなかつた。一方化学者であつたG・I・フィンチとブルース大尉は、一九二二年に重量二五ポンドの開放式酸素補給器を用いて、毎分一l の使用により六四〇〇mから八二四〇mまでの登攀に使用し、しかも最後に八三〇〇mに登る前夜にはこれを睡眠用に使用し、ポーターに比して自分等のペースが優れているという、ひかえ目な主観的利得を発表した。その後でフィンチは「完全に高度馴化が可能である最高高度は、六四〇〇～七〇〇〇mの間であるような気がする。その結果頂上に行くには、この高度から酸素を使用すべきである」ということを予言した。彼の予言こそは現在各国の隊が実行している方法そのものであり、まさに驚異的な予言といわねばならない。その後一九三八年にロイドも開放式重量二五ポンド、毎分二・二五l の酸素を補給して八三〇〇mに達したが、同行のティルマンと較べて顕著な差が認められなかつたという理由で、彼の主張も認められず、こうした酸素使用の是非論に結論を得ぬまま、一九五二年に至るまで八六〇〇mラインを突破す

ることができなかつた。

一方第二次大戦を通じて各国とも航空機産業が急速な進歩をとげるに及び、軽量の酸素ボンベが考案され、一九五三年エヴェレストにおいて組織的酸素の使用により、結論が見事に実証されたのである。これより先一九五二年の春、エヴェレストに向つたスイス隊は、極めて軽量の酸素発生器を携行したが、故障を生じたことと、最後の段階において一時的に使用された程度であつたため、大きな効果が発揮できなかつた。秋には開放式補給器を携行したが、強風と寒気のために八一〇〇mを越えることは出来なかつた。エヴェレストにおいて苦闘が続けられている時、隣接する八一五三mのチョー・オユーでは、E・シプトンに率いられた英国隊が翌年のエヴェレストを目指して、高所における生理学上の研究と酸素補給器の試験で貴重な成果を挙げていたのだつた。彼等の得た結論は、馴化の可能な限界は二一、〇〇〇呎までであるから、二一、〇〇〇呎をA・B・Cとすること、そしてそれ以上においては酸素を使用すること、毎分四lの酸素を補給することによつて、極めて有利な利得を見出すと同時に、全員が酸素に対する絶大な信頼をもつて帰つたのである。そしてその翌年J・ハントに率いられた英国のエヴェレスト登山隊は、馴化期間に充分マスクの抵抗に慣れる訓練を行い、高度六四五〇mのA・B・Cから酸素を組織的に使用し、一九五三年五月二九日、ヒラリー、テンジンの二名は最後の決定的瞬間に晴天を摑み、一九二一年以来の懸案にピリオドを打つたのであつた。彼等の酸素の使用法こそ実にフィンチの予言したその通りであつたし、その後の八〇〇〇m峰登攀のための立派なモデル・ケースとなつたのである。

一九五四年ケンプ隊長以下の偵察隊を、一九二九年、三一年にドイツ隊(註2)によつて果敢な挑戦が行われたカンチェンジュンガに送つたアルパイン・クラブは、翌一九五五年エヴァンズ隊長以下九名の精鋭を一九五六年の本隊のための本格的偵察隊として送り出した。この隊にみられる特徴は酸素の更に積極的な使用であろう。一九五三年エヴェレストではローツェ・フェースの開拓に数週間に亘る苦闘を強いられたが、今回は問題のグレート・シェルフを隊長エヴァンズ、副隊長N・ハーディーは酸素を使用して、至極簡単に突破してしまつた。天候は未だ小康状態に入つてはいなかつたけれども、ここで直ちに偵察を登頂態勢に切り換え、一気に第一、第二登頂隊とも登頂してしまつた。彼等は六六四五mのCⅢから酸素を使用し、エヴェレストでサウス・コルまで酸素を使用させずに行動させた結果、それ以上において使用に耐えるシェルパが減つてしまつた点を考えて、この時には七七〇〇mの第五キャンプからシェルパにも酸素を使用させた。そしてこの隊は無人のCⅤを雪崩にやられたとはいえ、エヴェレストの苦闘と較べて全くスムースに、再度に亘つて登頂することが出来た点、更に完全に近いモデル・ケ

ースを形成したともいえよう。

（註2）バウアー隊長以下のババリア隊のカンチ北東稜における実績は驚嘆すべきものであつた。従来の隊には見られなかつたような切りつめた経費で、しかも自ら荷物を背負うという行動で、困難な氷稜を七七〇〇mまで達した。このことは当時、ヒマラヤの巨峰攻撃方法に対して一つの革命的な実績であり、我が国でも、将来日本から出かける登山隊はかくあらねばならないということで、種々研究されたけれども、高度という一番厳しい試練は、彼等の達した高度においては未だ始つていなかつたからで、七〇〇〇m峰の攻撃には適用できても、八〇〇〇m峰を対象とする場合には、最後の段階において恐らく非常に困難なものとなるだらう。

この年には、フランスが大規模の登山隊を八四七〇mの未踏峰マカルーへ送つた。彼等の酸素に対する見解は、酸素を用うるべきか？　という問題ではなく、いかに適用すべきかにあつた。酸素の割合は八八〇〇～八〇〇〇mの間で大差はないから、（註3）八四七〇mのマカルーにおいてもエヴェレストと同様に酸素の使用を真剣に考えていたのだつた。強力なメンバーをもつてすれば、八五〇〇mのこの山も、アンナプルナの場合と同様にラッシュで攻撃しうるかも知れない。即ち充分に馴化された隊員がベスト・コンディションの状態で、無風状態で気温が余り低くないというようなチャンスに恵まれ、しかもルートにさしたる難場がない場合には、比較的低いキャンプから一気に登頂を試みることも全く不可能とは思われない。ただそのようにすべてが満足すべき状態にあるようなことは極めて少い。とすれば、どうしても高所で滞在が長引くということになり、いきおい酸素が必要ということになつてくる。従つて登頂の確率を増大するためには、たとえそのために装備の重量が増し、輸送量が増えて不利な点があつても、酸素は使用すべきである、という結論をもつていた。と同時にアンナプルナ隊付ドクターJ・ウドーは科学的にこの点を追求し、酸素は最後の攻撃のみに使用するのではなく、高度馴化の限界線よりあらかじめ研究されて定められた方式に従つて、組織的に使用すべきであるという見解をもつていた。そこで彼等は七〇〇〇mの第四キャンプから、シェルパ達には七四一〇mの第五キャンプから酸素を組織的に使用する方針をとつた。たゞ強いて彼等の英国隊と異る見解をあげれば、もつと下から酸素を使用すれば、せつかくの馴化を台無しにしてしまうという点であろう。彼等の酸素そして馴化、荷上げに対する見解は英国のエヴェレスト隊によるものか、それとも全く独自な彼等の研究によるものかはともかくとして、全く一致している点は特筆に価しよう。そして彼等は三日間に亘り攻撃を行い、全員登頂という世紀の偉業を成就したのだつた。

（註3）《東大スキー山岳部報告・一九五四》所収、織方郁映「マナスル酸素不要説詮議」にもこの点が説明されている。

ところで我々マナスル隊の場合はいかなるものであつたろう

か。第一次の隊は問題外として、第二次の隊についてみても酸素に対する考え方は全く消極的なものにすぎなかつた。第一次の登頂隊として七七五〇m（事実は七五〇〇mであることが今回の隊により確認された）のプラトーに達した隊の見解は、エヴェレストよりも高度が低い点を強調し、あれから上の三七五m（事実は六二五m）は、天候にさえ恵まれ、またキャンプを更に一カ所一九五三年の引返し地点に張れば、何とかなるという極めて楽観的なもので、高所衰退の問題の科学的裏付はなかつた。酸素があつたに越したことはないが、補給器の重量が折角のどんな利益をも帳消しにしてしまうという程度の一九三〇年代の考え方でしかなかつた。ここで彼等の強調した点は、ヨーロッパ人との体力の差（主として負荷能力の問題）と一kg当りの酸素の重量の彼我の差についてゞあつた。

事実一九五四年の第二次の隊は隊長以下隊員殆んどすべてのものは酸素に対する認識が少く「頂上攻撃の際使用してみる。しかし必ずしもそれを必要としない」という程度のものであつた。但し辰沼ドクターの意見によつて七五〇〇mのプラトー以上においては、睡眠用に各自一晩三〇〇l使用するという点が特記すべきものであつた。(註4)

（註4）　JHE　1954　酸素計算量
C7（7,500 m）　睡眠用1本×4名×3日＝12本
C8（7,750 m）　睡眠用1本×2名×3日＝6本
行動用3本×2名＝6本

以上一回の攻撃に24本。従つて三回の攻撃を予定して72本を準備した。但しシェルパの分は考慮されてない。

今回の計画に当つて酸素を充分に使用するということは、当初からの方針であつた。しかし乍ら準備委員の中にも未だに酸素使用一辺倒でなく、一九五四年のような方針で臨んだ方がよいというものも多く、酸素使用の意義不徹底の感があつた。即ち酸素補給器の重量と我々の負荷能力からみて、使用可能の酸素にはおのずから限界があり、多量に携行しすぎるとかえつてマイナスになるのではないか、そしてそこにはおのずから最適本数というのがあるだろうということであつた。これによると登頂時のみに使用可能の程度ということになる。そこで先ず各国の隊の行動を分析し、酸素の使い方を研究してこの点の認識を深め、三鷹の低温低圧室で実験、富士山のテスト(註5)によつて酸素マスクに慣れ、信頼感をもつべく心掛けたのであつた。こうして種々と紆余曲折はあつたけれども、槇隊長の熱心な推挙によつて出発時には各自の酸素に対する認識は高まり、組織的に酸素を使用するということがすべての計画の根本になつていた。

ところで、我々の酸素補給器自体は各国のものに較べて、どの程度に優秀なものであつたろうかというと、必ずしも優秀とは言い得ない。戦後の航空産業一〇年のブランクは、それを説明するのに充分であろう。事実我々の携行した酸素ボンベは、

戦争末期に製作されたもので、ジュラルミン製、内容積二ℓ、重量三・四kgの第一次、第二次の時と全く同じものであつた。[註6] たゞ今年は従来迄の 150 kg/cm² の充填圧力を 170 kg/cm² にして携行したに過ぎない。

（註5） 富士山の高度では、まだ酸素の補給を必要とせず、むしろマスクの抵抗の方が大きく苦しいものであつた。しかしこうした条件下でもマスクをつけて、マスクに慣れるということは重要なことである。その後、暑い船の中でも、キャラバンの途中でも、マスクをつけてマスクに慣れるトレーニングを怠らなかつた。

（註6） 第二次の時も輸送中に安全弁が飛んで、空になつたものが大分あつた。今年は充填圧力を強くしたので、当然この点について慎重な考慮が払われたけれども、それでも約一割が空になつていることがベース・キャンプで確認された。

しかし乍ら、携行装置、附属品の減圧弁等は大いに研究改良され、日本古来の背負子のアイデアをとり入れたジュラルミン製の携行装置は実にすばらしいものであつたし、三鷹の低圧試験で問題になつた減圧弁も、ダイフロンⅡの使用により満足すべきものとなつた。

今回携行された開放式酸素補給器[註7]は一五セット、ボンベは一三〇本であり[註8]、原則として睡眠用（2ℓ/min）行動用（3ℓ/min）とも隊員は七〇〇〇mのノース・コル、シェルパは七五〇〇mのプラトー上から使用する方針として、頂上攻撃隊のみ六六〇〇mのA・B・Cから使用することにした[註9]。

最後に今回の酸素補給器の性能を一九五三年のエヴェレスト隊のものと比較してみると、

マナスル(1956)……単位重量（1 kg）当りの酸素容量　100ℓ
ヒマラヤスマ隊(1953)……　〃　160ℓ

の如く大きな差が認められる。このハンディキャップはエヴェレストとマナスルの高度の相違、最終キャンプを出来うる限り高所へ上げること、毎分の消費量を 3ℓ/min にして節約すること[註10]によつてカバーしたが、今後より高い山へ向う場合には何はさておいても、もう少し優秀なボンベが欲しいものである[註11]。

このような訳で今回の酸素は携行装置の改善、附属品の改良等も見逃すことは出来ないが、酸素補給器、ボンベそのものについては一九五三、一九五四年に比して重量の点で根本的な改良は見られない。それにもかゝわらず、酸素を上手に使用してスムーズに登頂が出来たのは、実に酸素に対しての認識と、各自の酸素に対する信頼度によるものといつても過言ではない。科学的データに基いての合理的な高度馴化と、組織的な酸素の使用こそ、今回の成功の最大の要因とみなすことが出来よう。一九五三年疲労困憊して最高到達点に達した登頂隊は、誰もが周囲の山を観察してくる余裕すらなかつた。出発時、アンナプルナ方面を是非とも眺めたいと思つて出かけた隊員が、帰つてきて初めてこの点に気付いて驚いた程であつた。これに反し、今回は酸素の使用によつて成功の確率を高め、障害を軽減し、安

全度を高めて充分な余裕を残して登頂した上に、頂上において一時間半もの長きに亘り映画を撮影し、四囲の山々を観察し、しかも自ら楽しむことすら出来たのであった。今となつては高所へ登つた隊員は勿論のこと、シェルパでさえも酸素の不要論を唱えるものはないと思う。(註12)

このようなマナスルの登頂によって、我々も始めて酸素使用による登頂法の結論を、自信をもって経験することが出来たと同時に、私自身にとっては急性肺炎によるピンチを、この偉大な酸素の力によりきりぬけることが出来たのであった。今後はたとえ七〇〇〇m峰を目指す登山隊であっても、救急用として酸素を携行することが常識となろう。

最後に今回最も熱心に酸素の使用を強調され、協力いたゞいた篠田教授、徳永ドクター、阪大OB・会員大島輝夫氏らの卓見に対し、感謝をあらたにしてこの項を終ることとする。大島輝夫氏こそは日本におけるフィンチにたとえることが出来よう。

(註7) エヴェレストで問題となつた閉鎖式補給器については、検討すべき点が多々残されているが、製作上間に合はなかつた。

(註8) 酸素本数の内訳は、練習用、睡眠用(註8-1)のものを含めると一八〇本程度が必要となるが、経費の点から必要最低数の一三〇本にとゞめノース・コルに於ける睡眠用には酸素発生剤(註8-2)を使用する予定であつた。即ち、計画では

C4(6600 m) ラッセル用—8 登頂隊用—11
C5(7000 m) 行動用—43 睡眠用—0
C6(7500 m) 行動用—28 睡眠用—19
C7(7750 m) 行動用—12 睡眠用—4
計 130 本

予備用(非常用)—5

第一次、第二次に失敗し第三次に登頂を期する場合には、その分の酸素は節約によって捻出する。

(註8-1) 睡眠用には一九五四年と同じく大きなウエイトをおいた。現在においては仮りに一本しか酸素ボンベがなかつた場合、これを行動に使用するよりも、前夜における睡眠に使用した方が有利であるとまで言われている程、睡眠用酸素は重要である。このことは一九五三年のエヴェレスト隊でもはつきりと認められているし、今回も第六キャンプでは酸素 1 l/min で補給されている間は熟睡しえたが、酸素が空になるとすぐ眠がさめたという経験をしたことによつても判ると思う。

(註8-2) 今回睡眠用として使用された酸素発生剤は *Oxygen Candle* と言われ、日本独得の研究になるもので、化学反応によつて酸素を発生するものである。毎分四 l の酸素を発生することが出来るが、着火後、出量の調整、停止ということが不能であるし、発生時、発熱反応であるために発生装置も複雑であり、行動用としての使用が困難であるし、必要な時、何時でも何処でも使用出来ないという大きな欠点をもつていた。この点酸素ボンベと比較して必ずしも有利であるとは思えなかつた。しかし乍ら後にはメーカーの熱心な研究によつて、この発熱反応を利用して水を作る装置、行動用として使用する際のアスベスト断熱の特殊携行装置まで考案され、実用の域に達したのである。こうした蔭の協力は忘れることが出来ない。

それから本器の最大の欠点は、酸素発生中これを操作するボイラーマン的人間が必要であり、誰が高処においてこ

の任に当るかは最後まで結論を持っていなかったが、この問題は第五キャンプ（七二〇〇m）において登頂隊出発の前夜辰沼ドクターが徹夜でその任にあたり、始めてその機能を完全に果たすことが出来たことを附記しておきたい。

（註9）この使用法は、一九五三年エヴェレスト、一九五五年のカンチ、一九五五年のマカルー等と大略同じものである。この点に関し辰沼ドクターは最後まで疑問をもっていた。即ち、彼の見解によれば、ヨーロッパ人にはヨーロッパ人の使用法があり、日本人には日本人に適した使用方法があろう。必要以上に彼等の計画にとらわれすぎる必要はない、というのであった。但し実際にはノース・コル経由のルートから≪スノー・エプロン≫経由のルートになったために、隊員、シェルパとも七二〇〇mの第五キャンプから睡眠、行動用ともに使用した。

（註10）この量は、酸素補給必要量の最低量と思われる。一九五二年のチョー・オユーでの経験によって、G・ピューは4l/minが最低必要量という結論を出している。今回は2l/minで使用したが、この量によって特に不足を感じなかったことは幸いであった。

（註11）その後川崎航空機株式会社において、二〇〇気圧まで充填可能の優秀なボンベが完成された由である。更に優れたものの生産を切望して止まない。

（註12）チョー・オユー登頂の経歴をもつパサン・ダワ・ラマは、エヴェレストにおいても酸素は必ずしも必要としないという酸素不要論を唱え、一九五六年スイス隊と共に山頂を目指したが実現していないし、ガルツェンは二六、〇〇〇呎以上の登攀には絶対に酸素は必要であるという彼の見解を実証している。面白いことに彼は酸素の力によってマナスルへ登り、パサン・ダワ・ラマはエヴェレストの高所にも登り得なかった。

アルパイン・クラブの百年晩餐会とその前後

松方三郎

写真の説明から

まず写真の説明からしましょう。

握手をしている右の人物は槇さんです。そして左側が、サー・ジョン・ハント、あの一九五三年のエヴェレスト隊の隊長であることは申すまでもありません。槇さんはディナー・ジャケットで黒タイですが、サー・ジョンの方はドレスに白タイ、つまり晩餐のための正式の礼装です。くびには勲章がついています。胸にもドレスのための小型の勲章がいくつかぶらさがっているのですが、横からでは見えません。槇さんと、サー・ジョンとの向う側に立っているのはアルパイン・クラブの名誉書記であるエムリーン・ジョーンズです。英国のことですから改つた儀式の時などには、必ずその人の勲位をつけて呼びます。この場合は、サー・ジョン・ハントの次ぎにC・B・E（コマンダー・オヴ・ザ・オーダー・オヴ・ザ・ブリティッシ・エムパイヤー）D・S・O（コムパニオン・オヴ・ザ・ディスティングイッシト・サーヴィス・オーダー）と二つ続けて呼ぶのです。そして、あらたまつた手紙の場合にもそれを名前の後に続けて書くのです。ジョーンズの方はM・B・E（メムバー・オヴ・ザ・オーダー・オヴ・ザ・ブリティッシ・エムパイヤー）というわけです。D・S・Oはさしずめ日本で前に金鵄勲章といつたあれにあたるものです。日本では戦争に負けて以来、息の根のある限りは勲章をぶらさげることはなくなりましたが、英国ではアルパイン・クラブでも、地学協会でも、正式の晩餐会となれば、いつも白タイで勲章つきときまつているので、なにも創立百年の記念晩餐会だからというわけではなく、毎年の年次晩餐会でも同じことなのです。

わが、山岳会などは創立以来、そんな晩餐会をやつたことはありませんが、スウェン・ヘディンが来た時の歓迎晩餐会などの写真をみると、やはり白タイの正式のものだつたようです。服装が服装ですから、晩餐会のやり方も真赤な燕尾服をきた切口上の進行係がついた四角張つたもので、それでありながら、集る者が山の仲間ばかりなので、いかにも山の人間の集りらしい雰囲気にみち〳〵ているのが、何ともいえなく面白い点なのです。

アルパイン・クラブ百年祭晩餐会にて　ジョン・ハント(会長)，エムリン・ジョーンズ（名誉書記)，槇 有恒の各氏（1957年11月6日)。

The Alpine Club Centenary Dinner: Sir J. Hunt, J. H. Emlyn Jones, Yuko Maki.

槇　有恒，ロングスタッフ，テンジン，松方三郎の各氏（1957年11月 6日）

Yuko Maki, Dr. T. G. Longstaff, Tenzing Norkay, S. Matsukata.

写真のもう一つは、登場人物が少々違います。真中に印度式の礼装をしたテンジンがいます。テンジンの胸にはエヴェレスト初登頂を表彰して贈られた勲章がぶら下っていますが、彼のいかにも好人物らしい風容は、われ〳〵に縁の深いあのギャルツェンを連想させるものがあります。テンジンの右に豊かなひげを蓄えた小さな老人がいます。トム・ロングスタフその人です。八十二才だというのに、大した元気です。鋼鉄のようにがっちりした体のつくりを見て下さい。大分前からこの老人はスコットランドの北の端に引退しているのですが、山岳会の晩餐会などというと、こうしてロンドンに現れるのです。私達には身内のおじさんのように親切にしてくれるのですが、アルパイン・クラブの中ではなか〳〵こわい親爺だということになっているのです。ロングスタフの右が槇さん、そしてテンジンの左が私です。私達は旅行者なので略式の黒タイで威張っているのですが、戦争前にロンドンにいた時代には、二人とも一応白タイで乗込んだものです。

ところで、今さら説明するまでもなく、この二枚の写真はいずれもアルパイン・クラブの創立百年を祝ってロンドンで催された晩餐会の時のもので、槇さんとハントとの握手をしている写真は、これとほとんど同じようなものが『アルパイン・ジャーナル』の方にも載っています。『アルパイン・ジャーナル』には槇さんとテンジンの写真だけが出ているところを見ると、編集者が、この二人の遠来の客に対して、特別に歓迎の意を表したのだと解釈していゝと思います。またそれはあの晩餐会に集った人々に共通した気持でもあったと思うのです。

日本山岳会代表の到着

槇さんがロンドンに着いたのは十一月三日でした。文化の日などというものゝ出来る前に育ったわれ〳〵にとっては、これは忘れ難い日です。二月十一日の紀元節が大体天気が悪いのに、この十一月三日は、毎年間違いなくよい天気だったような気がします。その意味で、古い山の人々にはこの日の記憶を特別に大切に胸におさめている人がいるに相違ないと思います。ところで一九五七年の十一月三日は日曜日でした。私は日本からはるばる飛んで来られる槇さんを出迎えに、同僚のW君と飛行場に行きました。

アルパイン・クラブの百年の晩餐会に槇さんに日本山岳会代表として出てもらおうという話は大分前からありました。招待状はわが会長である別宮さんあてのものでしたが、この場合日本山岳会を代表するのには槇さんが最もはまり役であるということは別宮さんはじめ皆の意見だったのですが、肝心の槇さんが、なか〳〵難しくて、これにはみんながほと〳〵手を焼いたというのが本当の話でした。あとできくと、みんなが心配して

羽田まで見送つたということですが、ほんとうに槇さんが、飛行機に乗るところを見とゞけないと安心ならぬということだつたろうと思います。私にしても、この間の情勢判断に基いて、槇さんがロンドンの飛行場で降りたつたところを、間髪をいれずにW君の車に送りこんで、ロンドンに担ぎこもうという計画だつたのです。しかし、幸い、三十年振りのロンドンはいたく槇さんの気に入つたようで、私もほつとしました。そうして三人連れで車を飛ばして、夜のロンドンはウェスト・エンドに乗込んだのですが、日曜では大概のレストランは閉つています。そこでボンド・ストリートの表のヴァンドームで晩の食事をすませ、槇さんのために部屋のとつてあるプリンス・オヴ・ウェールスなる宿に行きました。

ロンドンの宿というと、すぐクラリッジスだのサヴォイだのグローヴナー・ハウスなどというのですが、わがプリンス・オヴ・ウェールスはそうした国際的大ホテルではありません。サウス・ケンジントンの公園のわきの、ロンドンによくある、何軒もの家を次から次へと買い取つてつないでいつた中流ホテルで、土地つ子以外にはあまり泊らないような旅籠なのです。しかし英国の流儀を多少とも知る者からすると、メーゾンの小説に出て来るようなこうした町の旅籠のよさは何ものにも代え難いものなのですが、これがアルパイン・クラブが海外からのお客様のためにリザーヴしておいてくれた宿なのです。外国の山岳会の代表として正式に招待したお客様に対しては、晩餐会の当日とその前日との宿はクラブの方で用意致しておくということだつたので、槇さんも十一月の五日、六日の両日はクラブの賓客としてこのホテルに泊ることになつていたのです。

四十に余る山岳会の代表がこのころロンドンに集つてきました。その中で約半数が海外から馳せ参じた人達だつたのです。その人達の中には、自分で好きなところにいつた人もありますから、みんなこのホテルに泊つたのではありません。それでも朝食堂におりて行つてみると、アメリカン・アルパイン・ジャーナルの編集をしている、シエラ・クラブのファークァーがいたり、アメリカのK2隊の隊長だつたお医者のチャールス・ハウストンの一家がいたり、なか〳〵賑やかなのです。賑やかといつても、日本じやありませんから、傍若無人に大声たてて山の話なんかはやりません。お互いに眼と眼で挨拶する程度です。それでも、そんな顔がちらほら見えると、何か賑やかな感じがするのです。

ところで槇さんはクラブの公式のお客様で、私は平の会員として来ているのです。待遇におのずから差等のあるのは致し方ありません。槇さんの部屋は二階で浴室つき、私の部屋は三階、三階というと、いゝけれ共、一番上だから、見方によれば屋根裏というわけです。廊下に赤い絨毯の敷いてあるのも二階と三階に登る階段までゝ、三階に上つてしまうとがらりと代つ

て石炭袋のような麻の敷物です。もちろん私の方は風呂も部屋にはついていません。そして、もちろん槇代表はお客待遇の二日間はロハです。待遇の違いはそれだけではありません。十一月五日から開かれた「百年記念展覧会」の目録なども、会員どもは鼠色のラシャ紙表紙の並製をもらつたのですが、御客様の方は、紙もぐつと上等で造りも違い、一つ〳〵名前が書込んであるのです。お金で買えるものなら多少無理をしてでも欲しいようなものですが、名前が書いてあるので残念ながらこれは誤魔化すことが出来ません。

ともあれ、そのプリンス・オヴ・ウェールスに槇さんの宿がとつてあるので、私の方も今までの宿を引払つてそつちに合流、居を三階の一角に構えて、アルパイン・クラブの世紀の晩餐に備えたというのは、新聞記者的表現で、実は、三十年ばかり前のこと、私が学をロンドンにとゞめていた当時、槇さんがパリからこゝに現れ、爾来何か月か共々にこの古き都をそこはかとなく歩き廻つたその当時の生活を、僅に数日の間のことではありましたが、多少形を変えて再現したといつたようなわけでした。

その昔の話ですが、スウィス・コテージの槇さんの部屋は、空気とパイプの煙とが半分々々で、その中に入つて行く者は、いつも主人に挨拶をする前に、取りあえず窓を開ける必要がありました。もちろんこうした行動は、はなはだ無礼でもあり、主人の好むところでもなかつたのですが、槇さんが六十二才にして、マナスルの前進基地で、あの困難にして不自由なる数週間の生活に耐え得たのは、平素から普通人の半分の酸素で棲息する修行を重ねていたからだという学説もあるやに聞きますから、この煙と酸素とを等分に呼吸するという長年の修練は、三十年後に大いに効果を発揮したと見るべきでしょう。高度五五〇〇メートルにして、気圧は平地の半分以下になることは知られているのですが、隊長の陣屋になつたナイケ・コルのC・2は五六〇〇メートルなのです。

百年記念展覧会

アルパイン・クラブの創立百年の記念行事は、実は一九五七年の春、五月のウェールスでの山の集りから始つているので、この岩登りの会の次ぎが、八月のツェルマットでの集り、いうまでもなくこの方は四千メートル級の山を並べたてたヴァリスでのことですから、山登りの型も大きくなつています。集つた会員たちが、ことに親しい仲間同志さそい合つて好きな山に行くので、自分の家族をつれたりしている人もあり、山こそは大ものばかりですが、至極楽しく和やかなものらしかつたのです。そして五月と八月との二つの山での集りがすんだあとが十一月の晩餐会になり、最後が十二月九日の女王をお招きしたリ

セプションになるわけです。ところで、その最後の二つのロンドンでの集りをかけて、クラブのホールで「百年記念展覧会」が開かれました。

十一月五日の開会式はグロスター公妃が出席されて開会の言葉をのべられていますが、大体は女人禁制で、メムバーの家族でも年一回のアット・ホームの時以外はクラブの中には入れてくれないようなアルパイン・クラブが、皇族ではありますが、グロスター公妃をこうした機会にお迎えしたのなどは、ちよつと異例のことだといつてよいのでしょう。もつともこの妃殿下はなか〳〵の登山家で、結婚される前にアフリカのマウント・ケニヤなどにも登山を試みられているのです。

槇さんも私も、他の用事で、この開会式には出られませんでしたが、ホテルの食堂で顔を合すハウストン君の娘さんが、この開会式で妃殿下に花束をあげたということです。お父さんのハウストン君はこの百年目の年に、特に外国人の会員の中から選ばれた三人の副会長の一人なのです。普通の年には、英国人以外から副会長を選ぶということはないのです。

展覧会はなか〳〵のものでした。

何にもない時でも、一歩クラブの中に足を踏み入れると、まるで山岳博物館に入つたような気がするほど、たくさんのものが所狭しと並べられたり、かけられたりしているアルパイン・クラブが、百年記念だといつて催した展覧会ですから見ごたえのあることはいうまでもないのです。つまり私達としての立場からすれば、あれだけのお宝の中から、この会のために何を選び出しているだろうかということが、興味の中心になるのですが、一つ〳〵眺めてみると見憶えのある絵やピッケルなどもあると同時に今まで見たことのないものや、思いがけないものもあつて、さすが世界山岳会の総本山だとの感を深くしました。

陳列品については目録が出来ていることは前にも書いた通りです。この目録は二シル半という定価をつけた独立の印刷物ですから、これだけ買うこともできたわけです。日本山岳会も昔はよくこうした展覧会をやつたのですから、時々こんな試みをやつてもよいと思うのです。近頃は展覧会というと、デパートの独占事業みたいになつてしまつたもので、会自体が自分の発案でこうした試みをやろうという気を起さなくなつたのは残念なことです。もちろん今日の日本の登山界は、五十年前の啓蒙時代とは事情がまるで違うのですから、われ〳〵の先輩達が溜池の三会堂でやつたような展覧会は必要はないでしょう。しかし、そのころとは違つて、今日の日本の登山界は、世界の各大陸にわたつて足をのばしているといつてもよいくらいいろ〳〵の方面に活動の領域を広めているのですから、その意味ではやはり、時々展覧会をやつてもよいほどの材料が蓄積されていつているので、また会が、そうした催しをやれば、それ相当に意味もあり、喜んでくれる人も多いかと思うのです。

百年の歴史を持つ大先輩のアルパイン・クラブが、こうした催しを企てたのは、もちろん創立百年なればこそなのですが、その展示を通して、たゞ百年の過去を回顧するだけではなく、やはり伝統を持つ本筋の登山を一層育てゝ行こうという意欲の反映であるとも見られるのです。

陳列の一つ〳〵については目録を見てもらうことにして詳しく説明はしませんが、興味を引いた一つの点は、この展覧会をアルパイン・クラブ中心に計画している点でした。つまり、世界登山史の百年間という意味ではなく、最近百年の登山の発展の中で、アルパイン・クラブとその会員が何をして来たかという点に重点をおいているという点でした。ですから資料はもとより、絵や写真の類も、会員の手になるものか、会員に関係のあるもので、こうした考え方をして計画した展覧会が内容的にみると、やはり世界の登山百年史展と大して食い違つていないのがアルパイン・クラブのアルパイン・クラブたるところでしょう。

記念晩餐会開幕

さて、この辺で話の本筋に入つて百年記念晩餐会の話に入りましょう。

その前に一つ、その晩餐会の前の晩、つまり十一月五日の晩に、外国から来たお客さんのために小さな集りがあつたことを書いておきます。この方はもちろん私は出ていません。槇さんが出られたのですが、主人役は会員のエイチソンで、場所はオクスフォード・ケンブリッジ・クラブでありました。会長や名誉書記のジョーンズ、その助手のブレイクニーなどの面々は翌日の晩餐会準備などで多忙を極めていて、御客様のお相手など出来ないのでしょう。しかし、遠来の客がロンドンに到着しているのですから、たゞ宿屋にほうり出しておくのも相すまなく、会員の一人が接待役を引受けたものと考えます。こんなところも、なかなか細い気のくばり様で、その席には槇さんの他にはツェルマットのモンテ・ローザのザイラーや、同じスイスのアームシトゥッツやフォイツなどという面々もいたようです。この辺り、槇さんの記憶が怪しいのですが、出たお酒はなかなかいい酒であつたと、この点だけは槇さんから翌朝はつきりきゝました。何でも相当な酒豪のより合いだつたようです。この点でもJ・A・Cはその代表の選択に先見の明があつたと思います。もっとも、槇さんの方は記憶は朦朧としていても、相手の方は槇さんを見そこなうような手合いではありませんから、何でも大変な歓迎振りだつたようです。

六日はいよいよ晩餐会です。会場はハイドパークのドーチェスター・ホテルです。アルパイン・クラブの晩餐会に出たのは私は一九三三年が最後ですから、二十四年ぶりです。槇さんは

多分一九二六年のが最後だと思いますから三十一年目ということになるのです。それに戦争もあり、いろいろの変化変転を重ねての二十年三十年のことなのですから、自然それ相応の感慨もあつて然るべきところです。

外套を預けて待合室に入ろうとすると、その入つたところに会長のハントが立つてお客を迎えています。槇さんも私ももちろん初対面です。しかし、ハントの顔はエヴェレスト以来年来の知己のように親しんだ顔、それに今日は山の集りですから初対面の挨拶など一切抜きです。「ミスター・ユーコー・マキ」と例の赤陣羽織の東西屋が場内のすみずみまで鳴り響けとばかりに大きな声でアナウンスすると、ハントはいきなり槇さんの手をとつて、よく来てくれたと心をこめての歓迎です。ハントのうしろにはジョーンズが介添についているのですが、総勢四百人というお客様や会員の一人々々に、会長のハントはこうやつて、いちいち手を握つてそれぞれに適切な挨拶をしているのですから容易なことではありません。

私はこうした英国の宴会についていつも不思議に思うことがあるのですが（もつともこれは英国に限つたことではないかも知れません）、それはこのアナウンス係りがいつも人の名を必ず正確に発音するということです。自分の国の人ならとにかく、日本人みたいによほどよく聞いてもすぐ憶えられないような名を、一度きいたゞけで、ちやんとアナウンスするのはどうした修練によるのでしょうか。さしずめ槇さんの名などはやさしい方だとしても、マツカタなどはそうやさしい名前ではありません。前の晩から来客の名簿をみて一通り練習していたとしても、もしそうだとすれば、「ミスター・ユーコー・メイカイ」と呼ぶおそれは英国人のことですから多分にあるのです。会場に入るところで一人々々に「ヨア・ネイム・サー」ときいて、その名を教えてもらうと、途端におうむ返しに、大声をはり上げて御客の名を披露するのですから、間違つたらもう取返えしがつかないのです。

ともあれこの場合は後からどんどんつめかけているのですから、時間をとるわけに行きません、簡単に挨拶をして、待合室に入るのですが、こゝで会員とお客様とは右と左に分れるのです。右と左に分れるだけではなく、右の会員一党はアペリティーフのシェリーにしても、注文すると同時に「四シリング・サー」とやられて見事に巻上げられるのです。お客様はもちろんお客様ですから、そんな心配はいりません。私は槇さんと一応ここで袂を分つというわけですが、会員溜りに来てみると、こつちはこつちで自弁の四シリング也のシェリーで景気をつけたせいもあり、大した賑やかさです。久し振りに顔を合す人もあり、何百人がそこに渦を巻いていても、話題はいずれ山に関係があることばかりですから一人ぼつちで黙つているのなどはいません。騒がしいことは相当なものです。こうなると白タイも

黒タイも勲章もありません。国籍の相違も吹飛んでしまいます。

みんなの顔がそろつたころになると、お客溜りの連中も広間の方に合流します。こうなると一層騒然たるものです。テンジンの顔やレビュファの顔がちらちら見えます。槇さんやロングスタフなどのライト・ウェイト派は波間に隠れて見えません。ようやく探し出して一緒に写したのがこゝに出した写真ですが、時が時、集つた顔ぶれが顔ぶれなので、今日に限つて新聞社の写真班などが、その中でパッパッとやつているのです。

まあこんな一幕があつて一同は、例の赤陣羽織の命令に従つて大食堂に入るのですが、宴会場は正面がメイン・テーブル、この主稜の真中から一本バトレスのように長テーブルが出ています。つまりT字形になつているのですが、このTの右と左との、懐になる空間に左右合計三十三の丸テーブルが置いてあります。そして皆んなは指定されたテーブルにつくのですが、四百人の全部についてABC順のリストが印刷されていて、それを会場に入る時にもらつているのですから、それを見ると、自分の席の位置と、自分と同じテーブルに坐る人とがわかる仕組になつているのです。もちろんこんな大宴会はおそらくアルパイン・クラブ始つて以来はじめてのことですから、私達も、こんなリストをもらつたことは今までにはなかつたのですが、このリストを眺めていると、一年半近くも経つた今でも、その晩の光景が目に浮ぶようです。

馳せ参じた人々

ことの順序として、こゝで、この晩の宴会に集つた人々の顔触れの説明をしましょう。例のテーブル・プランに出ているリストをもとにしてチェックすればよいのですが、当夜の参会者は四百十人であつたということです。その中で五十五人がクラブとしての正式の御客様で、その中で内外の山岳団体を代表しているお客様が四十一人となつています。槇さんはJ・A・C代表ですからこの中に入るのでメイン・テーブル組ですが、外国の山岳会の代表はこの四十一人の約半分の二十一人、遠い方ではニュージーランド山岳会とわが日本山岳会がまず双璧といつたところです。この他に会長のお客として個人として招待されている人も十数人いました。つまりクラブのメムバーでもなし、また山岳会の代表として招待することもできない、しかし是非この際招待したいという人がこの中に入るのですが、その中にはエヴェレストの第一回の踏査隊長ハワード・ビュリー中佐、K2のデジオ教授、スイス山岳研究財団のフォイツ、『チベットの七年』のハラー、スイスのエヴェレスト隊のルクジンガー、フランスのレビュファ、テンジンなどといつた人達です。ほかにソ連のムスタグ・アタのベレツキーやギッペンライ

ターの名も出ていましたが、この二人は飛行機の具合とかのために来ていませんでした。そしてこの公式招待組の第二のグループの半分がメイン・テーブル、あとの半分がメイン・テーブルから出た横尾根組になるのですが、丸テーブル平土間のその他大勢組は会員と会員の友人で、これがそれぞれ二百三十人に百十余人という数になつています。もちろん会員でも前会長だの元会長だのという巨人連はメイン・テーブルで、真中に坐つた会長サー・ジョン・ハントの左右に居並ぶお客様の間にはさまつて坐つているのです。ウィンスロープ・ヤングだのロングスタフだのというところです。

これだけ書けば、大体どんな宴会であるかはわかると思いますが、丸テーブルのその他大勢組にしても、よくよくみると一筋縄ではいかない連中ばかりです。例えば私の坐つた丸テーブルは合計十人の組でしたが、私の右はお医者のレイモンド・グリーン、左はわがJ・A・C会員のお坊さんマレー・ウォルトン、そして私の向い側はやはりお医者のソマヴェルといつた具合です。

グリーンがスマイスの学校仲間で一九三三年のエヴェレスターであることは説明の必要はないでしよう。私は彼がエヴェレストから帰つたその年の十一月に、彼をオックスフォードに訪ねたことがあるのですが、彼が今だにその時のことをよく憶えていたのには、ちよつと驚きました。その時教えてもらつたグレンフェルのウィンドヤッケや包式のポーラー・テントは、帰つてすぐ京大の白頭山に役に立ち、それから大いにわが国の冬の登山に利用されるにいたつたのですが、ことの起りはこのグリーンに会つたところにあるのです。

ソマヴェルについても説明の必要はないでしよう。ソマヴェルはエヴェレストに行く往復に印度を通つて、その国の貧困と不衛生に心を打たれ、生涯をついに印度の伝道治療に投じた人です。スケッチの名人で、一九二四年の『エヴェレスト』には彼のスケッチが色刷で入つていますが、年をとつたので今では故郷に帰つて来ているのだといつていました。絵の方はどうかときいたら、今でも時々描いているよといつていましたが、オックスフォード時代は馳け出しの医者だつたグリーンは、現在ではロンドンに出て来ていて、御医者横丁として名のあるハーレイ・ストリートにオフィスを開いているのですから、まず一流どころになつているのでしよう。

ウォルトンさんはよく日本の山や台湾、朝鮮の山を歩いた人で、著書もあるからわがJ・A・C会員には説明の必要はありませんが、今では代が替つて息子が南極に行つているよ、といつていました。日本を離れてから二十数年になるのに日本語も忘れず、相かわらずロンドン郊外のブロムリーに教会をもつていて、今度も「君や槇さんが来るというから出て来たよ」といつていました。

こんな顔触れにアメリカから来ているポーターなどが加つてテーブルはすこぶる賑やかです。実はこのポーターには二三日前、古本屋のギャストンの店で会つているのです。案外ギャストンのカタログを見て、太平洋のこつちと向うでせり合つていた当の相手方かも知れないと思うとおかしくなりましたが、ロンドンに来ると、アルパイン・クラブに顔を出すと同じようにギャストンの店にも現れて、一通り荒していくというのは、何も私達ばかりでもないようです。

百年に一回のディナー

英国ときまつたわけではありませんが、国々それぞれに宴会の運び方には一つの方式があります。山の集りでもディナーとなれば礼装に勲章をつけるのですから、ディナーとしての方式もちやんとふんで、まず食前のお祈りをしてから食事に入るわけです。

食事は後から想い出すような素晴しいものでもない代りに、貧相なものでもありません。つまり英国のこうした宴会としては過不足なしといつたところなのでしよう。しかし、こうした宴会でいつも楽しみなのは食事のあとのスピーチなのです。どこの国にも同じような仕来りはあるのでしようが、一方馬鹿に格式張つたことをやりながら、腹を抱えて笑いころげるようなユーモアを飛ばして、結構その一晩を楽しく過ごさせるというのが、いわば英国流のディナーなので、中でもアルパイン・クラブのディナーはいつもその点では完璧なものです。日本の宴会などにも、こんな気の利いたやり方を持込めないものかと、私は時々考えてみるのですが、英語という言葉の問題もあり、国民の持つ長い生活の上の伝統も関係していて、こればかりはそう簡単に移植がきかないものでしよう。

ディナーについてまず第一に述べなければならないのは、テーブルの各人の席においてあるメニューのことです。メニューですから本来の菜単の目的を果すための印刷物には相違ないのですが、英国、ことにアルパイン・クラブのメニューはいつも心を入れたもので、長く後世に残るような立派なものです。この晩のメニューは二五センチに二〇センチという大形のもので、表紙にはビーデルマンの版画から複製したグリンデルワルドから見たヴェッターホルンの風景が刷つてあるという豪華版です。そしてそのメニューを開いて見ると、最初にエディンバラ公のメッセージが出ており、次の二、三頁の見開きは、左側に一八五七年の創立当時のクラブの役員の名簿、その反対側には現在の役員の名が掲げてあります。これだけが序の口で、それからようやく料理のメニューになり、次に今夜の会の次第が出ているという順序で、これを見ていると、その晩の会の進め方、スピーチをやる人々の名前などがわかるのです。そしてそ

の区切り区切りで、大きな声で朗々と「閣下ならびに皆様、これより女王陛下への乾杯にうつります」といつたような具合に進行係をつとめるのが、例の赤陣羽織、この人物はいつも座長のうしろに立つているのですが、如何にプロとはいゝながらこんな役者は一朝一夕には出来ないでしよう。いわゆるトースト・マスターなのです。

食後のトーストは英国のことですから先ず女王に対するトーストから始るのですが、会長はこゝで会がこの機会にエリザベス女王に差上げたメッセージを披露し、あわせて女王からのお返事を発表し、この上であらためて女王のために一同立つて乾杯をするのです。さらに続いて皇太后以外の皇族に対して乾杯があります。それがすむと会長はもう一度立つて、この晩の集りに代表されている国々の元首に対して乾杯をプロポーズするというわけです。私達のテーブルには米国人と日本人がいるのですから、特に日本の天皇とアメリカの大統領のため一同乾杯ということになります。こうして一通りトーストがすんだあとで、方々からの祝電、祝詞の披露がありますが、名誉会員であるベルギーのレオポルト三世やオーストリアのチータ前皇后からのメッセージなども読上げられました。ベルギーの国王は二代にわたつてアルパイン・クラブとはことに深い関係にあるのですが、チータ皇后からメッセージが来ているのは、第一次大戦の終末の時にストラット大佐がチータ皇后等を革命の混乱の中のウィーンから救い出したという因縁から来ているので、当時のストラットの手記が展覧会場の方にも出ていました。ストラットは初期のエヴェレスターの一人であり、アルパイン・ジャーナルの編集をやつた人で、後には会長にもなつた人です。

これで儀式の第一段階が終つて、これからがスピーチに入るのですが、最初に立つたのは地学協会（R・G・S）の会長のサー・ジェイムズ・マーシャル＝コーンウォール将軍です。このトーストはアルパイン・クラブに対するトーストなのですが、長い間の二つの会の深い関係を回顧したまことに含蓄の深いスピーチでありました。これに対して応えたのはいうまでもなく会長のハントですが、ハントの答辞は全文がアルパイン・ジャーナルに載つていますからこゝには略します。たゞ特に印象に残つた点二、三だけ記しておきましよう。

ハントはそのスピーチの中で今晩の宴会に出ているメムバーの中で、五十年前の一九〇七年の創立五十年の記念晩餐会に出た人が五人いるといつているのです。ウィーンスロープ・ヤング、R・L・G・アーヴィング、オボーン・ウォーカー、それにネトルトンとプリチャードの五人です。その中でネトルトンなどは六十四年間、年次晩餐会は一度も欠かしたことがないというのですから全く開いた口がふさがりません。一九〇七年以前に会員になつている人で当日顔を現した人はこの他にロングスタフとロイドの二長老がいます。ロイドは九十になつていたので

すから最長老です。ロイドが初期のアルプス風景画の蒐集家であることは有名ですが、その晩のメニューの表紙に使ったビーデルマンの版画もロイド・コレクションの中の一つなのです。

ハントが海外からこの晩餐会のために馳せ参じた面々に――この場合は会員だけのことをいつているのですが――ついて語つた一下りもなかなか行きとゞいたものでしたが、ヒラリーやロウのように南極に行つていて来れなかつた会員について一言述べているのもなかなか感動的なものでした。

ことに彼がテンジンに対して歓迎のことばを述べた一節は最も印象に深くのこるものでした。ハントはその一節だけは、その場でテンジンによく判るように、多分ヒンディーに直して繰返したのです。何語に直したのかは、実は私には見当がつかないのですが、テンジンはその言葉を受けてすぐ立上つて手を合せて感謝の意を表しました。見ていてもまことに美しいやりとりでした。こんなことは時と場合、またその人によつてはきざになつたりして難しいものですが、他ならぬハントとテンジンとの間であるだけに、まことに自然でなみいる皆んなも、すつかり引込まれてしまいました。

次は会員であるサー・アーノルド・ランが立つて世界各国の山岳会のためにトーストをする番ですが、これに応えたのはフランス山岳会のルシアン・ドゥフィース会長でした。フランス語ですから聞く方には苦が手なのもいるわけです。

その次ぎはその晩の御客様に対するトーストです。お客様の中には会を代表して来ている人もあり、会員の友人として招かれて参会した人もいるのですが、このトーストをしたのはヘールシャム卿でありました。ロード・ヘールシャムは何年か前にはグラブの役員などもした人ですが、英国の保守党の中で、第二のチャーチルといわれている人物だそうで、風貌も大分似たところがあります。ともあれ、ランとヘールシャムの二人のスピーチはこうした場合に打つてつけの見事なものでしたが、何れもアルパイン・ジャーナルに全文が載つていますから引用はしません。（本当のところはその面白さを日本語にすることがちよつと私の力に余るのです）。まつたくのところこの二つのスピーチをうまく日本語にうつすことが出来たら、一度に英文学と国文学と両方の博士になれることは疑いなしです。

ヘールシャムに対してはアメリカ山岳会の会長のオーベリンが答辞をのべましたが、これは二回目のアルバータ登頂をやつたあのオーベリンです。そして最後に立つたのがロングスタフ老です。この大先輩は会長たるサー・ジョン・ハントにトーストする役目なのですが、エヴェレストの輝かしい隊長も八十二才の元会長に乾杯されるとなると大いに弱つているようでした。

こうして、ロングスタフのトーストに対してハントが答辞を述べると食後のスピーチのプログラムは終るのですが、会が閉

じても、みんな一向に帰りません。食事の間に目星をつけておいた相手のところに行つて話込んだり、メニューを持つて歩いて誰彼にサインをさせたり、これで別れゝばまた暫くは会えぬという連中もいるのですから、そう簡単に引揚げないのです。御承知のように、ヤングもロイドもそれから後に亡くなりました。ですから、私はその時の食事のあとでヤングと話したのが最後となりました。

こうして槇さんと私とが宿に引揚げたのは十一時を大分廻つた頃でした。宿に帰つてから暫く話込んでいるうちに十二時を過ぎてしまつたのですから、全く大した大宴会だつたわけですが、総てがすんだあとでの感想を一言でいえば、はるばる日本からやつて来ただけの甲斐が正にあつたということでした。

槇さんの場合は日本山岳会の代表でありますから、個人たる私の場合とは違うのですが、日本山岳会がお御輿の重い槇さんを無理にといつて動かした値打は幾重にもあつたということを私はその会に出てつくづくと感じました。如何に飛行機時代とはいつてもロンドンからすれば日本は遠い国です。そしてその遠い国でありながら、山の世界では、アルプスでもヒマラヤでも、その他のあちらこちらで、何としても無視出来なく堂々たる足跡を残している国なのです。ですからあの会に、日本が一枚加つたということはその意味で、槇さん個人の独特のメリットは別としても、心から歓迎される筋合のものでしたが、実際に現れた代表が他ならぬ槇さんだつたのですから、アルパイン・クラブとしてもその歓びは一層大きかつたわけで、日本山岳会としては一層おくり甲斐もあつたことになるのです。

マナスル映画の会

アルパイン・クラブの宴会の翌々日ロンドンの日本大使館で『マナスルに立つ』の英語版の映写会がありました。このフィルムは英語を入れると同時に若干編集しなおして短くしたものですが、槇さんの訪英を機会に試写会をやろうというので、日本から送つたものでした。

何にしろ準備期間は短し、クラブの連中は忙しいし、どれだけの人が来てくれるだろうかと心配していたのですが、これは大成功でした。西大使夫妻の名前で各方面に招待状を出したのですが、ジャパン・ソサエティー関係の人々以外は全部アルパイン・クラブ関係の山仲間を招待したのです。会長のハントは先約のために来られぬといつて来ましたがジョーンズが、いわば会長代理で来てくれました。アルパイン・クラブのディナーが終つたらすぐスコットランドに帰るから、残念だが欠席するといつていたロングスタフ老人も、奥さん同伴で現れました。大変な好意だと思います。それにこのディナーのためにアメリカから来ていた人達、ハウストン夫妻や娘さんなども何人か

来てくれました。それにかつてのダージリンの「ぬし」ヘンダーソン夫妻、まずまず勘どころは一応顔をそろえて来てくれたわけです。

映画に対する批評もなかなかのものでした。

ロングスタフは映画の始まる前のコクテールの時も、今日は「サケだよ」といつて、もつぱら日本酒ばかりあほつているのでしたが、八十二と聞いて西大使の奥さんが心配して私にわきにいてくれといわれるのです。それで私は映画の上映中はずつと老人のわきにいたのですが、フィルムの進行につれて展開して行く音楽などにもひどく関心を示すのです。ことに現地録音を使つた部分が出てくると、まるで自分がヒマラヤの山の中を歩いていた当時を想い出しているように聴耳をそばだてるのです。

説明の中にどこか「遠征というものでは隊員の中の誰が頂上に立つかということは問題ではないのだ」といつたような台詞が出てくるところがありますが、そんなところでは、この老人、まつくらな中で私の人を握つて「ヒヤ・ヒヤ」と大声で怒鳴るのです。我が意を得たりということなのでしよう。そして映画が終つたあとで槇さんをつかまえて『完璧な組織と、非の打ちどころのないリーダーシップだ』といつていました。他ならぬロングスタフがマナスル遠征に対して下した判決の言葉としてこれを聴くとき、この四つの言葉が千金の重味をもつことを感じるのです。

この映画はそれから後にスイスの大使館でも映写する機会がありました。この時はスイスのエヴェレスト隊の隊長のエクラー氏夫妻や隊員のルクジンガー、ヴィースなどという人々も見て大変喜んでくれましたが、さらにチューリヒでスイス山岳研究財団のために一回映写しました。この時は私はもうローマに来てしまつていて槇さんだけが出席されたのですが、皆んなとても熱心に見てノートをとつたりしていたということでした。

わがJ・A・Cのマナスル遠征も長い間の仕事でしたが、この槇さんの各地訪問あたりで本当のピリオッドを打つたような気を、私はつくづく持つたのでした。日本の山登りもこれまで随分いろいろな国、いろいろな人の世話になつて来たわけですから、槇さんには御苦労さまでしたが、やはり一廻りしておいてもらつてよかつたと思つたことでした。

三十年ぶりのスイス

槇　有恒

私はこのたびスイス山岳研究財団（Schweizerische Stiftung für Alpine Forschungen）の招待によつて、スイスに遊ぶことになつた。この財団は大きな基礎の上に立つて、世界の山岳について研究を進めるとともに、各国の山岳人間の友好の促進を図つているものである。山岳についての自然科学、人文科学の各分野を含んでの研究と同時に、一九五六年のエヴェレスト・ローツェ登山隊のような遠征隊の派遣もするし、またこれらの成果を出版を通して発表している。スイス山岳会がアルプスの登山者に主点をおいているのと並行して、基礎的な研究を目的としている。

この財団の招待の陰には、私の年来の友であるサミュエル・ブラバンド君の力があつたことは申すまでもない。実をいうと、この好意に満ちた招待も、年令のせいであろうか、私にとつては遠慮とおつくうが先に立つて、受けかねていたのであつたが、ついに友人たちに尻をたたかれて、追い出されるようにして出発したのであつた。

十一月一日、私はスイス航空機上の客となつてヨーロッパに向かつたが、乗機が美しいアドリア海上を過ぎ、北部イタリアの平野を北上して、いよいよアルプスの上空にかかつた。雲が濃くて展望もむずかしいかと思われたときに、突如として雲表に高々と午後の太陽を受けて輝く、ベルナー・オーバーランドの巨大な一群を認めた。刃のように鋭い姿と光とは、一瞬にしていままでの私の安易な気持を打ち砕いてしまつた。チューリッヒの空港では、財団のフォイツ、グルトナー両理事はじめベルンからわざわざきたブラバンド君夫妻らの出迎えを受け、機を乗り換えて私はロンドンに向かつた。これは十一月六日、ロンドンで催される英国山岳会百年祭に、日本山岳会代表として参列するためであつて、それをすましてから再びスイスにもどる予定であつた。

百年祭はドーチェスター・ホテルで催されたが、二十数カ国の代表と会員とが四〇〇人も集まつて盛大なものであつた。私にとつても旧知の友人たちや、互に名のみ知つていた未知の人たちに会えて、まことに楽しいものであつた。この百年祭を中心に、昨年シェルパのことで厄介になつたヘンダーソン氏夫妻の招きで、同家を訪ねたりして週日余りのロンドン滞在を終え、十一日再びチューリッヒにもどつた。空港で税関の手続をしていると、スチュワーデスが大声で名を呼びながら私を捜し

ていた。渡されたのは美しいチョコレートの包で、添え手紙が付いている。インターラーケンのホテル・ベルナーホフの主人アンデレック君からのものであつて、いまは主人も亡くなり、ホテルもやめた未亡人が子息に命じて届けた贈物であつた。

このホテルには一九二〇年ごろから二一年にかけて、新潟医大の川北教授がおられた。私のおつた村から電車で一時間程の距離なので、よく訪ねあつていた。私よりもずつと年配者で、いつもなごやかで無口で、中世紀のキリストの絵に見るような立派な顔立ちの人であつた。世界に知られたこの避暑地は、夏になると華やかさにわき立つのであつたが、そんなものとは没交渉に、ちんまりしたベルナーホフの温かいもてなしにおさまつて、土地つ子相手の明け暮れで人々の敬愛を集めておられた。帰国後、数年にして病歿されたが、川北さんの余徳がこの贈物となつたのであつた。

空港からは、財団の人たちの案内で、財団の事務所を訪ねた。事務所は湖畔の公園を前にした建物の五階にある。グルトナー氏に、あらためてこのたびの好意を謝し、持参したマナスル頂上の石を財団に呈した。大変に喜んで、私の帰るときには、その石を銀の台に立てるようすでに注文したので、その下に漢字で入れたいからとて、私の署名を望まれたのであつた。また同財団は毎年「山岳の世界」(Berge der Welt-The Mountain World) という、その年間の主要な登山の記録などを主とした出版を行なつているが、来年度版にはマナスル登山の記録を大きく扱いたいと言われた。そのための写真なども、すでに日本から届いておつて、ことに頂上のものは二頁大の写真にしたいので苦心しているとも語つた。※

また出発に際して、毎日新聞社と映配社から「マナスルに立つ」の十六ミリの英語版天然色フィルムを贈られたのであつたが、持参の旨を伝えると、当地でも滞在中にぜひ公開して欲しいとのことで、その日取りをきめたり、今後の私の日程などを打ち合わせたうえ財団関係者の観迎会に臨んだ。この映画はロンドンでも日本大使館の主催で一夕、山岳会関係者や外交関係の人々を多数招待されて披露したが、大変に好評であつて、すでに当地の人もそのことを知つていたのであつた。

宿にはグブラー老教授が待つておられた。同博士は北海道大学に在職された人で、山崎教授はじめ当時のお弟子さんたちの話しなど、静かな語調で懐しさにたえないといつたふうに語りつづけられた。チューリッヒの人は機敏で、ベルンの人は悠長だとスイスの人はたとえるが、スイス第一の大都会であるチューリッヒの街を歩いても、人の数も少なく街全体に落着きがあつて、東京の街を人の流れに押されて歩くようなことはない。

翌日ベルンへの列車の人となつたが、清流に沿うて走りながら見る窓外の風景は、よい道路と、それをはさむ美しい牧場と、ととのつた農家の平和な姿であつた。ベルンではブラバン

ド君と大使館の須山氏に迎えられて、ブラバンド家の客となつた。以下ブラバンド君を昔ながらの愛称ザミと呼ぶことにするが、老夫人も満面に喜びをたたえて、抱かんばかりに迎えてくれた。もし旅行者が都会から都会へ、ホテルからホテルへと歩くばかりであるならば、それは人間の荒野を歩くにもひとしく疲れるであろう。ザミの家庭は私にとつて、すでに十日余もホテルばかり泊り歩いた後のオアシスであつた。

早速大使館で三人相談して、来る十六日の夕刻「マナスルに立つ」を大使館で紹介することになつた。大使は病気で引きこもつておられたが、電話でなにかと指図をしてくださつた。ザミの家に二、三日滞在させてもらつて、ゆつくりしたい気持でいつぱいであつたが、私は二十二日の東京への飛行機の座席を、チューリッヒのグルトナー氏に頼んでしまつたもので、どこにでも、いつまでおつてもよいとの財団の好意にもかかわらず、自分で日程を切りつめてしまつていた。そのため翌日グリンデルワルトへ行くことにしたが、ザミは早速エミール・ストイリと連絡し、エミールが迎えにくることになつた。翌日エミールがザミの家まできた。のつしのつしと大きな体を運びながら、三十年前そのままに、ほほ笑みながら、ちょつとウインクして「今日は」と互に挨拶した。これで昔なじみの三人が揃つたのであつた。ザミがぶどう酒をとつて乾杯しようとすると、この酒はいかん、別のを持つてこいと、新しいカメの酒をなみなみとついで再会を喜びあつた。エミールは昔から、酒についてはザミは素人だと、先輩顔をする。

細君を交えて、つもる話ににぎやかに語りあつていたが、暗くならないうちにグリンデルワルトへ行こうということになり、私はエミールの車に、ザミは細君と自分の車に乗つて家を出た。暮れることの早い山国の秋は、野には霧さえ深くたちこめて、牧場の間をぬつた立派な道路を東へ走りつづけた。エミールは、この道路はザミのお陰だよ、という。ザミはいまスイス国の道路公団の長も兼ねているのである。車がツーン湖畔を過ぎるころ、幸いにも霧が薄れて、アイガーの氷雪におおわれた北壁の切り立つた姿が、黒い二つの前山の間から現われた。鋭い頂上には残照がかすかにためらつて、虚空の中に宝石のように輝いていた。インターラーケンの町はずれでは、ザミの娘さん一家の小じんまりしたおとぎ話の中のような、かわいい美しい家を訪ねた。若夫婦と孫娘は車の音を聞きつけ、家から飛び出して来て迎えたが、娘さんは「あなたのことは以前から両親より聞いていました」と言つて、挨拶した。インターラーケンの季節はずれで、閉じたホテルの家並をぬけて、道は谷間沿いに入つた。

ツワイルッチネンを左折して登ること二、三十分すると、峡谷はがぜん広々としたゆるやかな牧場の谷となる。この谷の南側は、わずかの牧場と森におおわれた山裾から、壁のように急

にアイガー、メッテンベルグ、ヴェッターホルンの三山が、断崖の岩肌に雪をとどめて聳え立つている。アルプスでも村からすぐに四、〇〇〇メートル近い山が立つているところは、他にはないほど珍らしくも迫つた風景である。宵闇の中を村の本通りを登りつめてエミールの家に着いた。昔ながらのシャレー造りの家の前では、一家の人々や村人たちの出迎えを受けた。ザミ夫妻はここまで私を見送つて、エミールの家に入ることもなく急いで明日の勤めのためにベルンへ引返していつた。

エミールの家の一階は居酒屋になつていて、村の人たちの団らんの場所である。私の室は三階である。この室は天井は低いが、かなりの広さのものであつて、壁に金ぶちの古色蒼然たる石版画が二つ掛つている。まん中のベッドの両側に、これも昔風なソファーとテーブル、椅子がおいてある。ありがたいことには、ベッドの上の掛ぶとんが都会のホテルのものの三倍もあろうかと思われるほどの厚い柔かい羽布団であることである。私の寒がりであることを知つての準備と察した。

ザミがこの春、日本に来たとき一緒に国内旅行をしたのであつたが、旅の終りに、どこのホテルが印象に残つたかをたずねた。そのとき同君のあげた名前は、京都でも奈良でも二見でも、みな日本旅館であつた。日本旅館には衛生とか、室への騒音防止とか、いろいろと難点は多々あるとしても、どうして推奨したのであつたろうか。日本の宿は、主人はじめ使用人まで総出で、親切であることがその理由の一つであつた。この親切さが、外国人にとつて不自由さを越えて、よい印象を与えたものと思う。

話はわき道へそれたが、エミールの宿がスイスの山村らしい特色を維持している雰囲気に心打たれた。よくツィターをひいてくれた細君もいまは亡く、子供たちはそれぞれ成人して独立しているものの、エミールの日常は寂しいであろう。大きなからだのエミールが面に現わさないで私をいたわる様子が、気の毒なほどであつた。村長を何年間か勤めた間、一つも争いがなかつたと言われるほど、悠容たる風格は、夕方に集まる老若の村人たちの間に入つて、相手の話を楽しげに聞いてやつている。初めの晩などは、酒場の一隅で食事をとつていると、むこうの机でビールを飲む村人たちの間から、盛んにアイガーとかミッテレギという言葉がもれてくる。どの道、話題は私の身の上のことであろうが、若い人たちが私を盗み見している。仲間に入つているエミールの息子が説明役らしいのであるが、三十年の歳月というものは、実際以上に物事を伝説化することを知る私は、面はゆい思いであつた。

エミールもザミも一緒になると、よく話は昔の登山に落ちていつた。私たちと登つたときや、秩父宮様と登つたときが黄金時代だつたというのである。浦松佐美太郎さん、松方三郎さん、松本重治さんやグロスファター（渡辺八郎さん）などの強

かつたことも必ず話題となつた。黄金時代というのは、あるいは老人たちの生涯にとつての追憶に過ぎないかもしないが、時勢はまつたく変つて、昔のような登山をする者は稀れになつたという意味もいつているようだ。スイスも若い年代の傾向は、やはりスピード時代で、技術もなく訓練も経ない人たちが、簡単に山に向かうことの軽卒さを嘆じていた。そして年間四〇〇以上の登山事故を起しているそうで、これはわが国も同様だと、いろいろと話したことであつた。

翌日はエミールとつれだつて旧友たちの墓にもうでた。知る人たちの墓のなんと多いことか。田口一郎さんのもある。二人はアイガーなどを眺めながら村の北側の山腹を散歩して行つた。コンツェット・ブルンネル一家が私を見つけて、声をあげて飛んで来たり、老ガイドのゴットフリード・ボーレンに出会つたりした。ボーレンと互いに頭の毛が薄くなつたねというと、エミールは、いやみんなのはアイスバーン（スケート場）だと言つた。エミールのは、はげてはいないがすつかり銀髪であつた。頭髪といえば、そのころ村に一軒の理髪屋さんがあつて、私の髪を刈るときは、必ずお前の毛は中がうつろになつていて、刈りつばなしにするとそこからごみが入つてよくない、火で先を焼いて穴をふさがなければいかんという。お説に従つて焼いてくれというと、新聞紙を細くよつたものにマッチで火をつけて、毛先を焼くのであつた。

この理髪屋の店も立派になつて、大きなショーウィンドーに金文字で、コワフュウルとかなんとか書いてあつた。二代目の息子さんが訪ねて来て、おやじも元気ですが、よろしくとの伝言であつた。エミールとのぶらぶら歩きは、それから馬具やリュックサックを作るキスリングの店に向かつた。八十六歳になるキスリングは、にこにこ顔の好々爺となつて、それでも毎日仕事を続けているという。見るからに健康そうで、君の名は日本で有名だというと、けげんな顔をしていた。わが国でキスリング型のリュックサックというのは、こういう訳なのである。キスリングはリュックサック作りの名人で、山案内人たち専用のものを作つていた。丈夫で背中によくつついて、まことにかつぎよいのであつた。私もそれを持つていたが、日本で友人がその形を取つて作らせた店か友人かは知らないが、キスリング型と名付けてついにその名称が一般化したのである。つまりキスリングは、自分の創案を日本で記念されている訳である。この訳を聞かせると、老人は喜んで笑つていた。

十一月十五日にはエミールに連れられて家を出て、フィルスト・バーンに乗つて村の北側のファールホルンへの途中まで登つた。フィルスト・バーンというのは、二人一組に腰かけるリフトで、四、五年前に設置されたとのことであるが、最高点までは四キロの長さがあつて、スキー季節には一日に二、〇〇〇人も運んで繁盛するという。二人は標高一、五〇〇メートルく

らいの山腹を四時間ほど歩いた。この辺がいわゆるアルプで、点在する牛小屋には高所から下ろした牛が入つていた。その一つの前を通ると、飛んで出て来たのがカウフマンであつた。私たちのシュレックホルン登山の仲間であつた。エミールと私は残雪の小道をたどつた。あたりは風もなく、森閑として鈍い太陽が照つていた。するとエミールは、あの声を聞いたか、あれは黒鶴だと言う。よくティロール帽の飾りにする巻毛の羽毛を持つ鳥であつて、猟の名人であつたエミールの耳や目は、いまでも鋭いのである。またリュックサックから望遠鏡を出して、レーティホルンの崖下にかもしかがいるといつたが、私には捜し出せなかつた。

夜はホテル・バーンホフでメルクリ夫妻からの招宴があつた。席上、ザミからペントのピッケルを贈られた。ペントは当代スイスピッケル作りの第一人者で、芸術品ともいうべき出来栄えのものである。八十一歳というが、かくしやくとしてピッケルを打つている。それによい仕事をするせがれを持つていることは、名シェンクの後の気の毒なのに比べて幸せなことである。一九五六年のエヴェレスト隊のピッケルも同人の作であつたそうで、食後別室で、スイス山岳会グリンデルワルト支部の歓迎会が催された。支部長ライセル氏の辞の後に、私は名誉会員に推され、金ぶちの会章の贈呈を受けた。その後、酒をかわしながらアイガー東山稜登攀の映画と、昔のこの村を写したスライドとを見せられた。

十六日には夕刻からベルン大使館で「マナスルに立つ」の披露があるので、招待を受けたザミ夫妻、エミールをはじめ村の人たちは、それぞれの車に分乗して村を出た。この夜の客は、グリンデルワルトの人々、エヴェレスト隊々長と隊員、山岳会長、山岳博物館長などのほかに、一九二五年私たちがカナダのマウント・アルバータに登つたときにつれたフーレルは、遠いグスタートから泊りがけで出て来たし、またそのときのコーレルもマイリンゲンからくるし、ウェーバーは住所がわからず困つていると、エミールの家へ新聞で知つたとて電話をかけてきたので、来るように誘つたが、喜んで来たのであつた。客の総員四十人を越したために、大使館の室はいつぱいになつて、はちきれそうなにぎやかさであつた。松方三郎君がパリからかけつけたので、座は一層にぎやかになり、夕刻六時から始まつて終つたのは十一時近くであつた。フーレルは八十二歳といつていたが、少し年をとつたと思われるくらいで、昔のとおり元気であつた。コーレルもウェーバーもみな立派な紳士になつていた。十八日には松方君はローマへと向かい、二十日私はベルン放送局とスイス短波放送局の依頼によつて、日本の登山とか感想を放送した。

二十一日にチューリッヒの山岳研究財団で再び「マナスルに立つ」を披露したのであるが、この夜の来客は学者を主とした

ものであつた。グブラー博士をはじめ、ハイム教授、イムホフ教授、シュワルツェンバッハ博士、ミュラー博士などで、エヴェレスト隊のディール君は、ベルンでも見たのであつたが、またここまで来て見ていた。四十人ほどの人数で、斡旋役のグルトナー氏は会場の都合から、招待を限定したとのことであつた。私の興味を覚えたのは、来年（一九五八年）ダウラギリ登山に行く若い三人が、映画を見ながらしきりにノートをとつていたことである。わが国の若い人たちも、エヴェレストの映画を何回となく見て参考にしたことを思い出して、どこも同じであると思つた。

その仲間の一人から、私たちの使用した酸素補給器製作者を紹介してほしいとのことであつた。映画会は大変に評判よく、終つてからみなの人々から祝いの言葉を受けた。また会後グルトナー氏とミュラー博士たちと会食した。ミュラー博士はエヴェレスト隊の一員で氷河学者であるが、クーンブ氷河に九カ月間留まつて研究してきたとのことである。と同時に五千二、三百メートルの地点で気象観測も続けてきたので、同時期にマナスルで観測した資料と互いに交換したいとのことであつた。これはまことに面白い結果が出るのではないかと考えられる。話は尽きず夜半におよんで別れた。

かくして私のスイス訪問の期間は終つて、二十二日再びスイス航空機上の人となつて、ジュネーブから暮れゆくアルプスを眺めながら、スイスに別れを告げた。（一九五七年十二月三～五日毎日新聞から転載）

※『マウンテン・ワールド、一九五八～五九年』は既に刊行されている。日本のマナスル登山には十五頁があてられ、写真は三頁大の頂上、第一キャンプからのマナスル、第五キャンプの夕景の三葉が収められている。（編）

富士山での雪崩遭難について

金坂一郎

昭和二十九年十一月二十八日午前十時四十分頃、富士山に巨大な雪崩が発生した。以下はその概要を報告しようとするものである。

この日夏道を登高し、七合目のちょっと下方から小屋の方へ大沢をトラヴァース中にこの雪崩をまともに受けたのが、東大スキー山岳部の一一名、原健彦、仲田豊一郎、召田晋一郎、牧田寛、松井隆、福島啓祐、高見尚清、郷茂昭、梶川久昭、小川透、金井竜二の諸君であつた。この雪崩は一旦停止したが、そこへ雪崩の第二波が襲い、デブリは崩されて学生は再びおし流された。この雪崩が止まつた直後、六合荘の上手で郷君の遺体が発見され、召田、牧田、高見、梶川の四君が行方不明となつた。

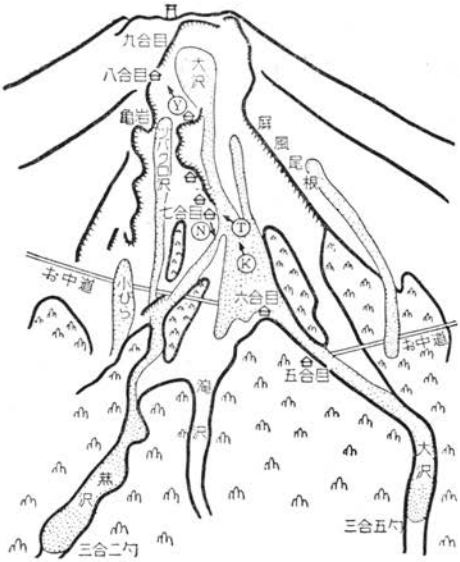
一方慶応医学部山岳部の星田昌博、小島烈、堀田超夫の三君は六合三勺小屋の谷側に幕営中であつたが、十時出発、電線ぞいに夏道を登つているときにこの雪崩に遭遇した。その中、星田君のみお中道の下、五合目佐藤小屋から三〇メートルほどの位置まで流されて生還したが、他の二名は行方不明になつた。

その頃日大山岳部の梅松延頼、大高正芳、上田浩史、池谷有爾、森泉寿夫、石井宏正、小松利郎、高野隆次、近沢俊明、塚本道一、細川義一、青木重雄、安藤茂夫、牛奥昌明、榎並洋三、高橋喜一郎、都築隆、中川平八、中村義則、深瀬一男、三井英夫、宮原巍、村石幸彦、石井達男の二四名は、鎌岩尾根から夏道を下降中であつた。彼等は七合目の下から二番目の小屋の西端から、五分も下降したあたりの凸斜面でこの雪崩にあつた。雪崩は大沢からあふれてこの凸斜面を襲い、全員が八〇メートルほど流されて停止した直後、再び第二波が訪れ、やはり八〇メートルほど流された。この隊の行方不明者は梅松、上田、石井、小松、高野、近沢、塚本、細川の八君であつたが、これはほかの者よりも僅か余分に流されたために、大沢から燕沢へ向かつて分流するA沢に落ちこみ、激しい流れに乗せられてしまつたからである。しかしA沢に落ちて、一〇〇～二三〇メートルも流されながら無事生還した三名がある。

行方不明者の中、東大の牧田、梶川、召田の三君は、翌々日の三十日に鉄棒によるゾンディーレンにより発見されたが、残る十二名は四月十九日～六月三日の間に自然露出乃至発掘によつて発見された。

この日の雪崩の範囲は概観図のようになつているが、遭難を

生じた雪崩の発生地点の上限は、航空写真から推定して大沢の九合目強、左岸（西）側の崩落限界は沢の中央部附近で、右岸側は夏道九合目小屋のすぐ近くから始まる。雪層切断面の厚さは、沢底部よりもむしろ八～九合目の夏道稜線に近い所の方がずつと厚く見える。つまり、これは大沢では沢底よりもむしろ右岸側の方が深い新雪を持つていたことを示すもので、東風による吹溜りであつたと推定される。この雪崩と同時刻頃燕沢にも大きな雪崩があつたことが報告されているが、これはA沢を伝わつてお中道で燕沢と合流した大沢雪崩とともに、燕沢下流に大量のデブリを堆積させた。



富士の雪崩概観図

〔昭和29.11.28〕○：雪崩遭遇地点

(K)：慶応，(T)：東大，(N)：日大，(Y)：横浜市大

大沢発生地点の上限は標高約三六〇〇メートル、燕沢デブリ末端は約一九〇〇メートル、三合二～三勺という所で、落差一七〇〇メートル、経路の長さ約四キロ。七合目の雪崩遭遇点は標高約二六〇〇メートル、ここから燕沢デブリの末端まで二・二キロ、遭難日大生は落差約九〇〇メートル、距離にして二キロほど流されている。大沢本流のデブリ末端は約三合五勺であつた。こちらにも大量のデブリがあつたが、燕沢と比較すれば問題にならないほどすくない。燕沢下流のデブリはブロックのすさまじさもさることながら、巨竜がうねつたような氷の土手は氷河を思わせるようで、また鬼気せまるものがあつた。末端附近のデブリの深さは一〇メートルを越し、また雪崩に折られた樹木の年輪を調べて見たら、六〇本以上を数えることができた。富士の春の底雪崩はすさまじいものであると聞いているが、その春雪崩でさえも六〇年以上この樹木を傷つけずにいたことから考えて、今回の燕沢の雪崩は冬季の雪崩としては数百年ぶりの大規模なものであつたことを思わしめる。

以上は大沢及び燕沢の雪崩の概観であるが、当日の雪崩はこれだけではない。図にも示すように、燕沢の東隣の小びらにはかなり大きいデブリが見られるし、その東側の斜面にも相当のものがあつた。西の方では屏風尾根の西側に、七～八合目から四合目に達するものが見られ、その外にもいくつか見られる

が、北面より西の方にかけては積雪はすくないようで、航空写真では、岩膚が所々見えるほどであつた。

遭難直後の退避中に、日大生の中で大砲の音のようなおかしな音を聞いて、気味悪くゾッとしたと報告した者がある。また日大生は雪崩停止直後に東側へ退避しようとしたら新雪の斜面に亀裂が現れたので引きかえし、デブリを踏んで下降したのであるが、その後捜索のとき、その斜面の表面の雪を除いて見たら、内部は無数の小さなブロックであつた。これも日大生が退避した後で発生した雪崩のようである。

今回の雪崩はアーノルド・ランの分類によれば Dry powder avalanche（筆者はこれを乾燥雪崩と訳している。「山日記」一九五八・九年版拙稿参照）である。しかし乾燥雪崩とはいつても、これは風もなく積もつたふわふわの雪ではなく、吹溜り状態から考えてもかなり風の影響を受けているであろう。だから、やかましくいえば風成雪に近い状態の乾燥雪による雪崩というべきであろうか。この日の雪質については、湿気の多い雪と称した人もあるが、登山者の報告によると、当日午前八時の気温は五合目で零下二度、七合目で零下七度前後（但し頂上は比較的高温で零下六・二度）であるから、湿潤雪とは考えにくい。スキーヤーは雪を握りしめて固まるかどうかによつて雪質を判断するが、乾燥雪でも復氷現象によつて固まることが考えられるので、こうしたやり方では水分の有無は判定できないはずだ。また下流のブロックが大きく氷化したのは、この雪崩の落差が特に大きかつたので、大きな位置のエネルギーが熱に変り、それによつて部分的融雪を生じたためで、必ずしも雪自体が含んでいた水分による氷化ではあるまい。

形態上の分類によれば、これは表層雪崩である。しかし下方の積雪の浅い所まで押し出したのであるから、下流では当然全層雪崩の形をとつている。筆者は雪崩を捜索技術上から集中型と発散型に分類している。集中型とは雪崩が横に拡がることなく、比較的細い通路を細長く流れるもので、末端のデブリも集中して堆積しやすく、発散型はその反対に、広い斜面にデブリが拡がつたものである。今回の雪崩は、大沢方面、ことに七合目から五合目にかけては極端な発散型を示し、六～七合目間のむしろ、尾根ともいえるような広い斜面を流れた例がある一方、燕沢では燕本沢とA沢の流れを合せ収容した典型的集中型である。つまり一回の雪崩で極端な四形態、表層型、全層型、発散型、集中型が見られたわけで、場所によつて捜索方針を全く変えなければならず、作業は困難を極めたが、これとまともに取り組んで調査すれば、あらゆる資料が得られるはずで、今後の捜索に益する所すくなくないであろう。

冬富士の風は大体西から吹く。だから大沢では西（左岸）側に吹溜りが出やすく、大沢から屏風尾根に取りつく急斜面には小さな表層雪崩が出やすい。また春になつてからの旧雪雪崩の場

表1　富士山頂に於ける日平均風速及び気温（1954年11月）

日	平均風速m/s	平年との差	平均気温℃	平年との差	天気
19	20.3	+ 3.3	− 4.7	+ 5.9	終日降雪
20	19.5	+ 3.5	− 5.3	+ 5.3	朝曇・午後降雪
21	8.9	− 8.3	− 4.8	+ 3.2	朝霧・午後降雪
22	6.2	− 9.9	−10.5	− 3.0	朝霧・午後快晴
23	3.8	−12.5	−10.7	− 1.3	終日快晴
24	4.5	−13.2	−10.0	+ 0.1	終日快晴
25	12.8	− 6.8	− 7.3	+ 3.4	終日降雪
26	10.6	− 7.0	− 7.1	+ 4.2	曇・夜晴
27	13.1	− 6.0	− 6.7	+ 5.5	曇・午後ミゾレあり
28	31.5	+ 9.8	− 8.9	+ 3.4	日中降雪

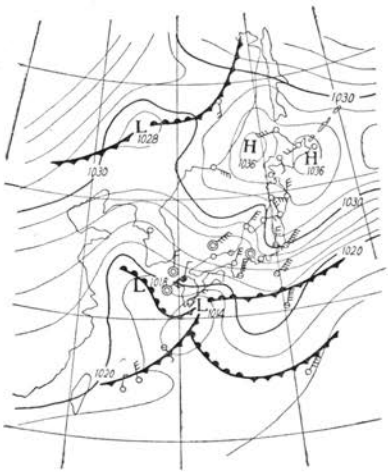
合にも、大体左岸に近い所に発生しやすいと考えられているが、今回の雪崩ははつきりと右岸よりの地域で発生している。これは冬富士としては珍しく東よりの風に伴つた積雪が、大沢の東岸よりに吹溜りを生じたからであろう。そのため雪崩そのものも大沢の右岸よりに流下し、七合目の下から浅い溝（A沢）を伝わつて、かなり大量の雪が燕沢に流れこんだもののようである。雪崩が夏道のある凸斜面を洗い、六合三勺の小屋をさらつていつたのは、雪量そのものが大きかつたためもあろうが、雪崩のコースが東よりであつたことにも起因しよう。

雪崩発生までの気象の推移は表I及び天気図に示す通りである。この間の積雪は、登山者の報告によると大体東よりの風に伴つて降つたものである。しかも二十一～二十七日の間の風速は、平年にくらべて著しく小さい。つまり東よりの風によつて各沢の東側に吹溜つた積雪は、風によつて大してしめつけられることなしに二十八日を迎えたわけだ。

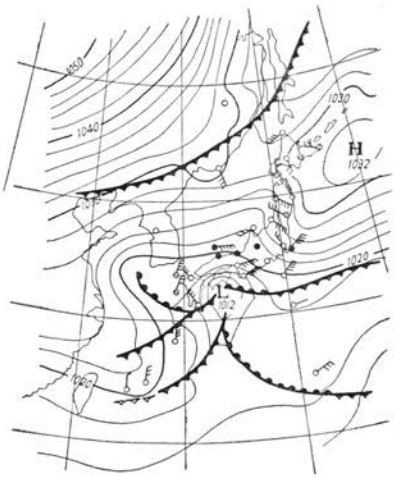
二十七日夜から二十八日朝へかけての降雪は、頂上の気象記録たる表I乃至IIからはうかがわれないが、登山者の報告によれば、朝五合目の積雪一五～三〇センチ、六合目は握つても固まらない程度の粉雪が三〇センチほどである。降雪は早朝より始まり、六時出発で二十四名が踏んだラッセルは、二時間後には跡かたもなかつたそうだ。雪崩直前の六～七合目の夏道ではラッセル三〇センチほど、部分的にクラスト、大沢によつたと

表 II　富士山頂気象記録（1954年11月）

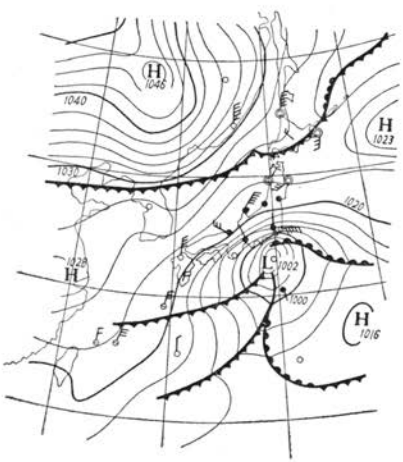
日　時	気圧 mb	気温 °C	露点 °C	風　向	風速 m/s	天　気	平地換算気圧
27.12	620.4	− 5.2	− 5.9	西南西	17.7	曇	999
13	619.4	− 4.6		西	15.2	雪	997
14	620.4	− 4.9		西南西	10.6	〃	999
15	620.3	− 4.3	− 4.9	〃	9.8	みぞれ弱	999
16	620.2	− 4.4		南　西	9.5	〃	998
17	619.8	− 4.3		南　東	9.4	霧　氷	998
18	619.3	− 5.9	− 6.6	西南西	11.5	〃	997
19	619.1	− 6.6		南　東	13.4	〃	996
20	618.7	− 7.1		東南東	16.5	〃	996
21	617.6	− 7.2	− 8.9	〃	20.1	曇	995
22	616.8	− 7.6		南　東	22.4	〃	994
23	615.7	− 9.8		〃	23.3	〃	993
24	614.7	−10.0	−15.9	〃	25.5	〃	992
28. 1	614.2	− 9.4		〃	31.6	〃	991
2	612.2	− 7.8		〃	29.6	〃	989
3	611.9	− 7.8	− 8.8	〃	25.2	地吹雪	989
4	611.0	− 7.6		〃	29.3	〃	988
5	610.5	− 6.6		〃	26.7	〃	988
6	611.0	− 6.3	− 7.1	東南東	29.0	〃	988
7	612.0	− 6.3		東	19.0	〃	989
8	611.3	− 6.2		〃	14.2	雪	988
9	609.8	− 6.6	− 7.4	〃	11.4	〃	987
10	608.0	− 7.0		東北東	39.0	〃	985
11	605.0	− 8.2		北　東	33.9	〃	982
12	604.0	−10.8	−12.1	〃	25.4	〃	981



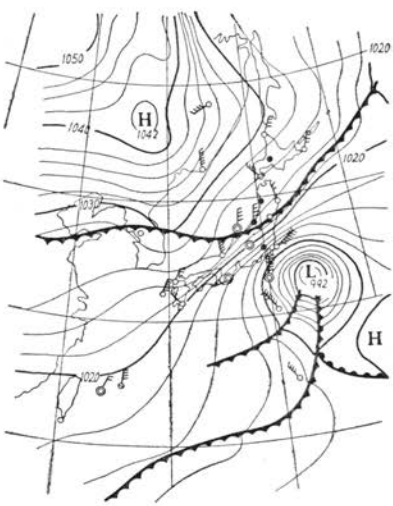
1954 年 11 月 27 日 9 時



1954 年 11 月 27 日 21 時



1954 年 11 月 28 日 9 時



1954 年 11 月 28 日 21 時

ころでは膝までのラッセル。夏道と燕沢との間のブッシュ地帯では腰までのラッセル。これだけの積雪データだけでも雪崩の危険を感じさせるのに十分であるが、なおそのほかに、当日の雪層がいかに不安定で滑りやすかったかという例が数多く報告されている。

雪崩の発生原因については、われわれは遭難直後その対策に追われ、発生地点附近の調査さえ行つておらず、また現在のわれわれの有する雪崩の知識程度では、もとより明確な解答を与えることはできないのであるが、最もオーソドックスな登山者の見解としては、低気圧の影響により一時に大量の降雪があり、しかもその積雪層が不安定であつたこと、これだけで十分とはいえずとも、常識的な解答にはなるであろう。雪崩発生時よりしばらく前に風が急に強くなり、大沢、燕沢上部に刺激を与えた点も二次的に雪崩の誘因となつたかも知れない。あるいはそのほかの機械的刺激が崩落のきつかけとなつたとも想像される。しかし、物理学的な雪崩発生論ならばいざ知らず、登山遭難に関する雪崩発生原因に限るならば、不安定な積雪が大量にあつたということだけでも、一応の解答になるはずである。

では、こういう危険な状況下で、何故若い有能な登山者がまともから雪崩にやられてしまつたか。実は当日の遭難者以外にも、この雪崩を幸運にも危機一髪の間に避け得た隊が何隊もあつたのである。この問題については、登山者の学ぶべき雪崩学に関連して詳論（河出書房「登山全書」随想篇5）したことがあるので、それを参照して頂くとして、ここでは簡にして要を得た遭難批判として、木下是雄氏の意見（東大スキー山岳部「富士遭難追悼号部報」）を紹介したい。

「富士の遭難は、一言にしていえば《常識》の虚をつかれたものである。他の山であれば初冬期の、数日来の多量の新雪は、必然的に雪崩を連想させたにちがいない。十一月の富士には異例の風の弱さと高温とは普通なら吹き飛ばされてしまう積雪を定着させる。それが或る限度を越せば崩落の危険をはらむのは当然である。事実当日行動中のパーティーは多かれ少なかれ雪層の不安定に気付いている。八丈島付近にあつた低気圧による強風も、副次的に雪崩誘発の一因となつたかと思われる。

これらの悪条件に気付かず、あるいは深く考えずに、多くのパーティーが既定の行動を起したのは、《十一月の富士》という先入観念が、起りうる危険に対する触覚をにぶらせていたからにちがいない。おそるべきは《常識》の鉄枠である。計画はその山、その季節についての経験の集積——常識——の根拠の上に立てるほかないが、刻々の判断はより一般的・客観的な、別のことばでいえば固定した《常識》の枠にしばられないものでなければならない。

もつとも、私自身にしても、あの場合に居合せたとして果して先入観念を切りすてて、よくパーティーの出発を制しえたか

と自問すると、あまり自信はないのだが、とにかくこれはこの遭難についてわれ人共に反省すべき第一の点であろう。あの雪崩は百年に一回というほどの異例のものであつたと思われるが、それではその危険性を予知することは不可能だつたかと、あらたまつて問われれば、答はやはり《否》とすべきだと思う。」

今回の雪崩は極めてまれに見るものであること、少くとも日本の積雪期登山史上極めて珍しい雪崩事故たることは明らかである。富士山でこうした大規模な冬雪崩を見ることは、今後も統計的に考えて発生頻度は小さいと想像される。しかし、山岳遭難に限らず、乾燥雪崩による遭難全般について見ると、思いがけない場所に思いがけなく大規模な雪崩が発生した例は決してすくなくはない。だから富士山以外でも、こうした異常な雪崩事故が現れることは当然予想されなければならない。また富士山についても、今回と同様の気象条件が出そろえば、今回と同様の雪崩が発生するのは当然で、実は今回に似た気圧配置を見ることもまれではないのである。いずれにしても自然の歴史にくらべて、われわれの登山史は余りにも短い。登山において経験の大切なことはいうまでもないが、僅かな経験を過大評価して自然に対する謙虚を失つてはならない。これが今回の遭難の教訓ではあるまいか。

雪崩遭難の救援にあたつて最初の仕事は埋没者の発見である。埋没者の位置は鉄棒（今回は長さ二メートルのものを主とした）によるゾンディーレンによつて確認されるわけであるが、広大なデブリが対象となる場合には予め大体の位置を推定する必要がある。今回の経験の解析については日大山岳部の報告書「追悼――富士に眠る仲間へ」にて詳論し、また雑誌「岳人」九四号にもその要点を紹介しておいたので、ここでは実際上の注意とともにその結論だけを羅列するに止めたい。

一、雪崩の捜索にあたり第一に問題とすべきは、行方不明者をさがすことではなく、次に来る雪崩に対する警戒である。合図によつて危地から退避しうることを確認してから、リーダー監視の下に捜索を開始する。

二、捜索の第一は雪面を組織的に、注意深く、しかも敏速に見て廻ることである。これをわれわれはパトロールとよんだが、パトロールは捜索初期に限らず、雪崩捜索の最高の手段である。埋没者の確認はゾンディーレンによつて行うが、これは安全が確認されてから、組織的に行うべきものだ。

三、集中型、ことにデブリが末端に高く堆積したような場合は、行方不明者はこの末端附近に集中して埋没していることが多く、骨折や内臓損傷により即死しやすい。発散型の場合行方不明者はかなり広範囲に分散して発見されることが多く、外傷を受けやすい。いずれにしてもデブリの末端

を確認しておかないと、後の捜索に多大の困難が生じる。

四、 行方不明者は沢底の最も深い点を結ぶ線、夏ならば水流のコースに発見されることが多い。だからデブリの下の地形を推測することは重要な作業で、必要とあらば孔を掘つてでも調べて見ること。

五、 生還者が、雪崩が次第に弱まつて流れが細くなり、岸の方から停止を始めて助かつた場合には、行方不明者はそれよりも下流に埋没していることが多い。雪崩そのものが浅く、全体が一時に停止して、流れの中央部で生還した者があるときは、行方不明者はバラバラに分散して埋没される可能性が多い。横隊で雪崩にやられた場合、集中型の雪崩では停止位置は始めの順序と関係が見られないが、典型的な発散型の雪崩では、大体において始めの隊伍の順序を残している。

六、 集中型の雪崩にやられた場合、遺品は行方不明者の近くから発見され、発散型の場合には遺品もバラバラになりやすい。統計的に見るとピッケルのような密度の大きいものは人体の上流に、ルックサックのような密度の小さいものは人体よりも下流に発見されやすい。

七、 雪中に発見された毛髪（雪面上のものは余り問題にしない方がいい）は行方不明者の流されたコースを指示する。但し少量の毛髪の場合には、その近くに行方不明者が埋没されているとは限らない。

八、 捜索のとき雪面に物をみだりに捨てると遺品と誤るおそれがある。しかし撤収時には、むしろとか樹枝のようなものをデブリの上に残し、その後積雪があつても、遭難当時の雪面を再確認できるようにしたい。

九、 写真記録は重要である。なるべくカラーで立体写真にしておきたい。固定した樹木や岩をいつしよに写しこんで融雪、沈降の目安にするとともに、人物をいれて画面のスケールがわかるようにしておく。

十、 捜索に関する雪崩の調査は、雪崩がどんな状態に流れたかを知るのが眼目である。デブリは平面ではなく、厚さのある三次元の存在であるが、これも一瞬に生じたものではなく、時々刻々流れて堆積したものであるから、時間的変化も考えに入れて四次元的に考察しなければ誤りを生じる。融雪、沈降についても同様で、雪は表面から融け去ると同時に沈降によつて深さを減じるから、埋没者も時とともに少しづつ沈降して地表面に近づく。だから時期と場所がちがう場合、雪面からの深さを比較しても無意味である。

十一、 岩場の雪は雪面から融解するとともに、地表面からも或る程度融解して空洞を生じる。これは水流のある場合に特に著しいようであるが、こうした場合には遺体流失のお

それがある。ことに雪の少い地帯までデブリが流下した場合には、遺体の位置が地表面に近いはずであるから、注意すべきであろう。但し砂地の積雪は地表面の方からはほとんど融けないようである。

十二、行方不明者が二名以上の場合には、服装、携行品等によつて、判別のきめ手を予め調べておくこと。容貌からは判別できないことがある。水流を流されたような場合には、装具がほとんど失われ、裸で発見された例もある。また所持品リストが不完全だと、折角発見した遺品も役に立つ手掛りとして使えない。

十三、遺体を収容するときには、一度凍結させると便利である。塩約三貫をその三倍の雪とよく混合し、これで遺体をおおつて一晩雪上に安置するのである。

十四、自然力によつて埋没された遺体は、決して発掘の努力を惜しめというのではないが、自然力によつて融雪するのを待つのが最も賢明な方法である。多少の人間がスコップを振りまわしたところで、大自然に対していかほどの成果がえられるものではない。

十五、雪崩捜索は目に見えない雪中の埋没者を求めるのであるから、とかく迷信的なアドヴァイスが入りこみがちである。このようなものは健全な常識と科学的な計算によつて、きつぱりとその性能を見きわめ、はつきりと謝絶する決意が必要である。

あれ以来われわれは幾多の雪崩事故を見聞し、その捜索にあたつてはわれわれの見解が利用され、そして感謝された。しかし私の望みはそんなところにはない。私が最も強く希望することは、富士における教訓を利用して、雪崩事故の予防に万全を期して頂きたいことなのである。残念ながら現在の登山界の傾向は私の望むような方向に動いているとは思えない。この点について識者は声を最も大にして啓発して頂きたく、将来雪崩事故の絶滅を期待して本報告を終る。

(附記) 本稿執筆を編集委員会から依頼された直後、ヒマラヤ登山準備委員会からヒマルチュリ偵察行の下命があつた。命を受けてから五週間で出発するほどのあわただしい準備の間に筆をとつた本稿に、杜撰のそしりはまぬかれないと思うが、細部にわたつては日大山岳部の報告『追悼——富士に眠る仲間へ』(昭和三十年十一月刊)を御参照頂きたい。

そもそも本報告はもつと早く発表されるべきものであつたが、各種の事情から報告が遅れて申訳ない。その反面、時間という最良の智慧が、われわれに与えてくれた確信も見逃がし難く、遭難直後の報告よりはいくらかでも客観性をもつているものとして、遅延のお許しを乞いたい。(昭和三十三年七月十八日)

積雪期の劍岳付近

同志社大学山岳部

はじめに

われわれの行動のすべては、多くの先輩が苦難をもつて築きあげた基礎の上にたつて初めて実を結ぶものである。また、それは次の代の人々の糧となり、実となつてより大きな花を咲かせるのである。今度の劍岳における行動もその例外ではない。

積雪期の劍岳は、戦後の同志社にとつては一つの大きな夢だつた。一九三三年三月、われわれの先輩である児島勘次、入江保太両氏による積雪期早月尾根の初登攀がなされ、また小窓尾根はすでに一九三〇年六月に同じく児島勘次、田中昌雄両氏により初登攀されている。それから二十数年のあいだ、同志社による記録的登高はなされておらず、劍岳を忘れたかのようにみえたけれども、実際は日本における第一級の山である穂高とともに劍の名前を忘れていたわけではない。

特に戦後はその意欲は強く、永年親しんだ後立山と劍を結ぶ黒部横断の計画は、一九五〇年十二月に鹿島槍大冷沢で雪崩のため逝かれた松本敏夫氏等を中心に熱心に研究され、何度にもわたる偵察行動がなされ、氏の最後の山行となつた鹿島槍行もその一環の動きだつたのである。積雪期の劍あるいは穂高への復帰という目標を胸に抱きつゝ、それから数年のあいだ地味な合宿訓練がつづけられた。輝かしい成果が記録され続けていた当時の学生山岳界の中において、自己の姿をより冷静に、苛酷に見つづけて、その基礎を地道な合宿によつて築いていつた幾多の先輩の、血の滲むような試錬を忘れることはできない。この、われわれのさゝやかな記録も、そのような先輩の肩車の上に立つて、初めてなされたものである。

一九五七年度、ついに劍岳が目標となつた。しかしその計画にはいろいろと論議がなされた。たとえば立山（別山尾根）、早月尾根、小窓尾根、赤谷尾根等よりの分散パーティによる集中的な方法をとるか、あるいは極地法を採用するか等々種々の提案がなされたのである。しかし、結局、われわれの目標が劍岳頂上付近の行動にあり、それに必要な約百人分の食糧、装備を劍頂上及び三ノ窓に如何にしてあげるかを考えれば、その問題もおのずと結論を見いだすのである。それはわれわれに最も適応した早月尾根をルートとした極地法による登高である。極地法については一九五五年度の『烏帽子より穂高』（D・A・C報告・十六号）以来、われわれの間において種々の論議もなされ

ているが、今度はその方法を荷上げの手段として活用したというに止めておこう。

二年間にわたり、夏山合宿を劍で行なつていたが、今年度にこの計画が具体的に採用されてから五月・夏山・十月に各々劍全般に対する偵察が行われ、十一月には馬場島への約七十貫の荷上げと、最後の偵察が完了した。以上のように、われわれの計画は早月尾根をルートに、極地法によつて劍頂上、三ノ窓へ延約百人分の食糧、装備を荷上げして劍頂上付近の登攀を行おうというものである。

これに似た試みは、古くは一九三九年十二月、慶応大学山岳部山本雄一郎氏ほか十二名によつてなされている。早月尾根を極地法で登高し、長次郎の頭付近のCVより八ッ峰の第一峰までの下降、早月尾根森林限界に設けられたCⅢより源治郎尾根第一峰の往復をなした。共に厳冬期初登攀である。これに勢をつけてCVよりチンネ下降を試みたが失敗している。その記録が発表されている『登高行』（十三号）は一九四〇年に発行されているが、われわれの今度の計画では、特に文献から教えられるところが多かつたことを付記せねばならない。

この他に一九五二年三月、明治大学山岳部によつて、これに類似した計画がなされている。「早月尾根を極地法により登行し、劍岳頂上付近に一つ、小窓の頭付近に一つ、計二箇の高所キャンプを設け、一週間の高所幕営中各所の登攀を成す」（明大山岳部・年報Ⅱ・一九五二年）という目標で行動されているが、飯田氏遭難のため劍頂上のCⅢ（早月尾根に中継C＝一三〇〇m、B・C＝二〇〇〇m、CⅠ、CⅡ＝二六〇〇m、劍頂上にCⅢを設ける）より八ッ峰上半の下降、チンネ試登（左方ルンゼ）のみで計画を中止している。

また、次の年の一九五三年三月には、伝統をもつ立教大学山岳部が登場した。この時の詳細な報告はまだなされておらず、この中の劍尾根（上半）の記録が日本山岳会々報一九一号に発表されているのみで、次に記す概要も当時の部員である相沢裕文、杉山桂吉両氏からうかゞつたものである。

期間は三月上旬より四月上旬まで約一カ月にわたり、B・Hを馬場島、CⅠを一九〇〇m付近、CⅡを劍頂上（多分二四〇〇m付近にデポを置いたと思うが）に設け、これより劍尾根（上半）、八ッ峰（上半を五・六のコルよりトレース）、源治郎尾根（平蔵谷より一・二峰間のコルに立ち頂上へトレース）の登攀を行つている。メンバーは十四、五名とのことである。立教はこの時が戦後初めての劍入りではなく、一九四九、五〇年の三月、それぞれ東面や西面で活動していることを忘れてはならない。

一九五六年三月の日本大学山岳部の記録も注目すべきものである。「極地法による劍西面から八ッ峰、源治郎尾根の登攀」という目的で、メンバー十人が三月十六日にB・Hである馬場

島に集結し、CⅠ（雪洞）を一五五〇m、CⅡを二二〇〇m付近、CⅢを劍頂上にそれぞれ設置し、更にCⅣ（雪洞）を池ノ谷乗越にのばしている。これより八ッ峰（上半）の登攀を三月三十一日に行い、劍頂上のCⅢから源治郎尾根を、頂上より第一峰までの往復というかたちで四月二日に登攀している。

日大も一九五〇年四月、八ッ峰、源治郎尾根をトレースしており、古くは一九三四年四月九日の馬場島より池ノ谷左股より劍頂上の往復という、その当時にしてみれば輝しい足跡を残しているのである。

以上数々の登攀記録は、今度のわれわれの計画・行動とよく類似したもののみを、積雪期劍岳登攀記録から抜萃したのであつて、劍御前方面からの八ッ峰、源治郎尾根の登攀記録や、小窓・早月尾根から劍岳登攀のようなものは、この範囲の中には含まれていないことをおことわりしておく。またわれわれの不勉強のため、当然掲げるべき記録で洩れているものがあるかも知れない。

計画概要

劍主稜線へ安全かつ確実に荷を上げるため、早月尾根をルートにしたことは先にも述べた。次に問題となるのがテントの配置である。

計画はベース・ハウス（B・H）に馬場島荘、CⅠを一六〇〇m付近とし、このCⅠは部員をできるだけ上部にあげるという理由から、計画後半に撤収することにした。次いでCⅡを二二〇〇m、CⅢを二七〇〇m、CⅣは劍頂上三〇〇〇m、最終キャンプCⅤを三ノ窓と決定した。又全期間を四十日と予定し、CⅢより上部の行動は二日間に一日を停滞と予定した。これは戦後、劍岳において長期間行動した各大学山岳部の記録にもとづいたデータから算出したものである。さらにこの四十日を五期に分けて、第一期をB・H集結までとして、上市—B・H間の伊折を中継宿泊所とし荷上げを行うことにする。第二期はB・HよりCⅢ建設までとした。CⅢは前進ベース・キャンプともいうべきもので、こゝでCⅣ・CⅤの建設体制をとゝのえることにする。第三期の最終キャンプ、CⅤ建設まではできるだけ、フィックスを張り、ルートを容易にする。第四期は最も重要な期間であり、CⅤ、CⅣ、できればCⅢよりの各登攀を行う。その対象はCⅤにおいては最大の目標、チンネ正面岩壁を初めとし、八ッ峰、小窓尾根、そして池ノ谷の偵察が予定され、CⅣでは別山尾根より立山往復をはじめ、源治郎尾根等が目標とされた。その期間は停滞日数を加えて一週間とした。第五期は撤収であり、B・Hまで三日間とみなした。

これらの行動に関連して注目すべきことは、いわゆる「行動表」のことである。われわれの過去の経験からすれば、行動表

は単にその概要を知るだけにとどまり、本来の目的である日々の行動についてはほとんど役に立たず、事実その通り行動するが不可能な場合がほとんどなのである。この行動表にあまりにも忠実に食糧計画がなされた、五五年度の「烏帽子より穂高」の時の苦い経験から、今年度は「概要を知るための行動表」を各部員に徹底させた。

構成メンバー

四　年　江上　康

三　年　寺阪元雄(C.L)　吉田民雄　山口　宏　岸下勝亮
　　加藤勇二　持田徳成　土屋国男　片平岩夫

二　年　福田勝一　山下輝彦　大幸　勲　中西隆一
　　前原　勉　伊東　茂　前芝茂人

一　年　上田彰二　植西武司　山本慎一郎　坂下心一
　　鈴木康司　長谷川暁一　佐藤和男

O・B　岸田権二　津田康祐

これらメンバーの中心が二、三年部員であることはいうまでもない。この二十三名（OBを含まず）のうち、全期間を通して参加したものは十四名であり、他は部の事務やその他で途中下山したものや、後半に参加した者である。

食糧及び梱包

食糧計画が極地法においてその成功、不成功を決定する大きな要素であることは、極地法を経験した者にはよく理解できることである。われわれもこの点に関しては特に力を注いだ。長期間になればなるほど、またテント数が増せばますほど、食糧計画及び梱包（パッキング）は複雑化するのである。

食糧の内容を簡単に記せば行動日は朝は餅、ラーメン、昼はパン、夜は飯を各々主食とし、停滞日は朝にも飯を使用した。そして単調になりやすい極地法長期間の食事を、その種類を多くすることで解決した。

食糧の内容と共に忘れることのできないものは、梱包（パッキング）の問題である。極地法においてはこの梱包の優劣がそのまゝ行動に関連するのである。即ちそれを少単位にすればする程よい結果がえられるが、それに要する労力、経費などを考えれば、われわれにはおのずから限界があり、それをどの程度におさえるかに苦心した。これに加えて荷上げ食糧のこと、行動食と停滞食との関係、あるいは高所キャンプ食糧との組合せ等々と問題は複雑である。

われわれは特別にパッキング・ケースを注文して、その一箱に二十人分の食糧を入れ、完全なレーション・システムを採用し、それを行動食と停滞食とに各々パッキングした。またCⅤとCⅣの一部食糧は固定してCⅤ用、CⅣ用とした。しかし荷上げしていた食糧との関係から、最終のパッキングはB・Hに

おいてなされねばならず、現地での負担は重くならざるをえなかつた。

器具については特記すべきことはないので省略する。

合宿報告

第一期（一九五八年二月二十八日～三月七日）

京都出発よりB・H（馬場島荘）集結まで。

二月二十八日、先発の三名が京都を出発する。上市より蓬沢までトラックに便乗できたので、三月一日にはB・H（馬場島荘）に入つた。この先発隊の仕事は、後から来る本隊のB・H入りをできるだけスムーズに運ぶための、あらゆる渉外を行うことと、B・Hの荷上げ食糧（ボッカ分）の整理である。

本隊十四名は三月一日京都を発つた。上市で手配をしておいた餅、米などを受取り、トラックで伊折の少し手前まで入り、その日は伊折に泊る。本隊の荷は二百貫を越え、無論一度でB・Hへ運ぶことはできず、半分以上を伊折に残して二日にB・Hに入る。B・H迄雪は少ないとはいえ、スキーは深く雪にもぐつた。B・Hで先発隊と合流する。雪の状態や天候の予報では、B・Hから伊折往復のボッカは時間的にも無理なので、部員の一部を再び伊折にかえし、伊折とB・Hとの中間にある避難小屋を中継所として、両方から中継所往復という形式で荷上げが続けられた。しかし天候は非常に悪く、七日にB・Hへ全荷を集結させるまで、劔を望めたのはわずか六日の一日のみであつた。毎日往路につけたラッセルが、帰りには吹雪のため全然かき消されてしまい、連日ラッセルに苦しめられ、また夜は夜で食糧のパッキングにおわれ、その負担は実に大きかつた。しかし七日には全荷が集結し、いよいよCI建設の時がきた。

第二期（三月八日～三月十二日）

B・HよりCⅢ建設まで。

すでにCIの建設位置偵察も完了し、八日いよいよCI建設を行う。大体夏道どおりのトレースをワカンでつける。一六〇〇m付近に八人用カマボコ型テントと四人用ウインパーを張り、倉庫用雪洞も建設する。このCIは中継キャンプであり、後半各キャンプが建設された後、三月十六日、いろいろな用事のため早く帰る部員によつて撤収された。

われわれのキャンプ建設の基本的計画は、まず第一日目にテント地の偵察、あるいはフィックス工作を行い、二日目にボッカ隊とともにテント建設を行い、そのキャンプに三、四名が残るわけである。この隊が次の偵察を行うのである。厳密な意味での積雪期劔岳の経験者が一人もいないため、ルート工作は十分の注意を払つたのである。

一方、三月六日に京都を出発した後発隊五名も、八日にB・H入りをした。後発隊は、CⅣ、CVの建設、そして登攀にあ

たるメンバーを主としている。これで全員のB・H集結がなされたわけである。

われわれの計画では、この第二期間中はよほどの悪天候でないかぎり、行動を続けることを原則としていたが、今までとはまるで違つた連日の好天のため、キャンプ建設は順調に進んだ。十日に二四〇〇m付近にCⅡが、十二日には二七〇〇m付近にCⅢがそれぞれ建設された。この間CⅢの手前に三〇mザイル一本をフィックスしたにとどまつた。このCⅢは鳥帽子岩のすぐ下である。一方荷上げ状況は快調に進み、計画で予定していたCⅢにおいてのCⅣ、CⅤ建設体制のための調整は、その必要がなくなつた。好天候のみではなく、各部員間にいきとどいた計画内容の具体的なあらわれであろう。

第三期（三月十三日～三月十七日）

最終キャンプ、CⅤ建設まで。

十三日、工作隊はCⅢのすぐ上の鳥帽子岩、及びカニノハサミにそれぞれ三〇mザイルをフィックスし、この日初めて剱岳頂上に立つた。剱岳主稜線への早月尾根の最後のルートに六〇mのフィックスもとりつけた。これまで最前線でキャンプの建設に当つてきた部員を交代させ、CⅣ、CⅤの建設には登攀隊員がこれにあたることにする。

十四日は天候が悪く、CⅢで初めての停滞を迎える。しかし下のキャンプ間のボッカは休みなく続けられ、この日をもつてB・Hの荷は、撤収用を残しすべてCⅠへあがつた。

十五日CⅣ建設。この日初めて一往復半のボッカを行つた。CⅣの位置は剱頂上の北肩であり、三〇〇〇m級のキャンプはさすがすばらしく、大いに登攀意欲が燃えあがる。

いよいよ最後のキャンプを残すのみとなつた。十六日、長次郎のコルへの降りに六〇mのフィックスをなし、池ノ谷乗越の降りに三〇mのフィックスを完了する。一方、CⅠの撤収もこの日に行われた。

しかし長く続いた好天気もそろそろくずれそうである。ラジオもそれを告げている。こゝで再び第二次R・C・Cの芳野氏と会い、チンネ正面岩壁（中央チムニーよりGチムニー、Cクラック、Dクラック）の登攀をされたと聞く。チンネ正面岩壁積雪期初登攀の栄誉はわれわれの知人である芳野氏が獲得したのである。そのチンネは十六日、三ノ窓へ行つた時はほとんど雪をつけていず、表面はまるで夏姿であつた。（実際はそんなものではなかつたが。）若しそれが再び雪をかぶり、氷で表面をおゝわれたらその登攀は困難きわまりないものとなるだろう。そう考えるとこの絶好の機会をのがす理由はなく、予定を変更して十七日、CⅣよりチンネ登攀を行うことにした。

チンネ試登　寺阪元雄　山下輝彦

小窓尾根Mピークより三の窓周辺（左から小窓王，チンネ，池の谷尾根）　（江上　康）

池の平山西面の岩壁　　（江上　康）

三月十七日（薄曇り後吹雪）

天候はあまりよくないが、それでもCⅣを五時半に出発する。三ノ窓へは簡単に到着し、いよいよ七時半登攀を開始する。目ざすルートは日嶺ルートである。第一ピッチは中央チムニー入口付近まで約三〇m。ほとんど雪の斜面で簡単に登る。第二ピッチで日嶺ルートに入り、アイスバイルでカッティングを続けながら登る。第三ピッチにかかると、がぜん登攀は困難となり、氷に覆われた氷壁は、頑固に抵抗する。われわれも慎重にハーケンを打ち突破する。クラックはアイスバイルの刃もはねかえす氷に軟雪が積もり、その状態は良いものではない。第四ピッチの登攀は益々困難となり登攀速度も遅くなる。夏であれば容易なルートだが、今はホールドもスタンスも氷の下である。

登攀を開始して以来、アイスバイルを振り続けた腕はしだいに疲れ、その回転も遅い。やつとアイスハーケンを打ち込み、それをホールドにあるいはスタンスにして乗り切る。後中央バンドまで一ピッチ、約三十五mほどではあるが、オーバーハングと逆層のスラブがわれわれを待つている。今まで登攀に気をひかれ、気がつかなかつたが、天候はしだいに悪化し、すでに粉雪さえ舞いはじめた。時刻はすでに一時を過ぎている。それに加えて予想以上にわれわれの疲労ははげしい。下を見ると豆つぶのような人が動いている。恐らくCV建設の連中だろう。無念ながら下降を決意する。アップザイレンで下降を続ける。そしてわれわれが壁から離れるのを待つていたかのように遂に吹雪が襲来する。すでに仲間によつて建設を終えたCVへ転り込んだ。

チンネ第一回の登攀は失敗に終つたが、この日遂に三ノ窓にCVが建設され、それには再び一往復半のボッカがなされたのである。

第四期（三月十八日～三月二十六日）

われわれの主目標たる各登攀の期間。

最終キャンプであるCVの建設も終り、あと一日あれば完全な登攀体制になるであろう。しかし予期した様に十七日から始まつた吹雪は、実に七十時間余り吹き荒れ、CⅢ、CⅣ、CVにおいてはテントが雪の下に埋もれるほどの降雪にみまわれ、たえ間ない降雪がわれわれを苦しめた。二十日午後になりやつと晴間も見えだし、明けて二十一日は晴。この貴重な一日を有効に使うべく、登攀隊はそれぞれ各ルートの登攀に向い、他の部員は最後の体制をとゝのえるべくボッカを行う。まずCⅣより別山尾根をへて立山への登攀、CVより再度のチンネ登攀及び八ッ峰へそれぞれ向つた。

立山（別山尾根）　持田徳成　土屋国男

三月二十一日（晴後曇）

CⅣ（七・〇〇）―平蔵コル（八・〇〇）―前劔（九・一五）―武蔵コル（九・四五）―劔御前小屋（一三・一五）―雄山（一五・一〇～一五・三〇）―劔御前小屋（一七・〇〇）

三月二十二日（曇）

劔沢を下り劔山荘から平蔵コルをへて夏道どおりCⅣへ帰る。

八ツ峰　山口　宏　中西隆一

三月二十一日

CV（四・四〇）―池ノ谷乗越（五・二五）―取付（六・五〇）―稜線（七・五〇）―三峯（八・三〇）―二峯（九・〇〇）―一・二峰のコル（九・一五）―三・四峰のコル（九・四〇～一〇・四五）―五峯（一一・二五）―五・六峰のコル（一三・〇〇）―池ノ谷乗越（一六・〇〇）―CV（一六・一五）

CVをまだ暗いうちに出発し、ライトの光を頼りに池ノ谷乗越に達す。しかし猛烈なラッセルに悩まされ、乗越までに案外手間どる。しかも長次郎谷は今までに増してラッセルは深く、一歩一歩踏みだして下つて行くのが精一杯である。予定では一・二峰間のルンゼを登るはずだつたが、このラッセルを考え、比較的容易にみえる三・四峰間を登ることにする。思つた通り、このルンゼはアイゼンもきゝ稜線へたいした困難もなく到着する。しかし稜線は相変らずの雪である。逆に一峰へトレースすることにして三峰の登りにかゝる。こゝはスタカットで登る。斜面は約七〇度、雪は良くしまりステップを切るのに一苦労だ。

二・三峰間はほとんど困難を感じないが、それでも三ノ窓側に張りだした雪庇上の歩行を余儀なくされた。こゝまでくるのに思つたより時間がかゝつており、一峰往復は断念せねばならなかつた。そしてきれいに出来あがつたシュプールを四峰へ急ぐ。四峰の登りは完全に胸までもぐり雪ダルマになつて登攀を続ける。

四峰からは三ノ窓側をからみ五峰に達する。しかし猛烈なアルバイトの連続のため疲労ははなはだしい。問題の五峰の下りは、頂上より長次郎側の斜面を下つて行くのだが、クラストしていて状態は極めて悪いようだ。まず四〇mほどジグザグに下り、コル側の雪稜にでる。更にこれを乗越し、ハーケン、ハイマツを支点に二度アップザイレンをくり返して五・六峰のコルに立つた。予定ではビヴァークの覚悟で上半部の登攀も続けるはずだつたが、状態は悪く、それにあまりに疲れ果てたので、長次郎谷を登りCVに帰る。

一方、再度のチンネ登攀が前回同様のメンバーでCVより行われたが、降り続いた雪のため、壁は全然その状態を変え、わ

ずかにも見えていたホールド、スタンスは今はその姿をかくしている。日嶺ルート入口でその登攀をあきらめねばならなかった。

明けて三月二十二日、登攀体制はまつたくとゝのい、CⅣより源治郎尾根、CⅤより八ッ峰、そして再三のチンネ登攀が行われた。

源治郎尾根　吉田民雄　福田勝一

三月二十二日

CⅣ（五・三〇）―長次郎コル（五・四〇）―源治郎取付（六・五〇）―第一峯（一二・〇〇～一二・四五）―二峯（一四・二〇）―懸垂点（一四・四〇～一六・〇〇）―懸垂点下（一六・一〇～一六・四〇）―劍岳（一七・三〇）―CⅣ（一七・四〇）

長次郎谷の下りはブレーカブル・クラストになつており膝までもぐる。源治郎尾根への取付点は最も末端に近いと思われるルンゼにする。このルンゼは腰までのラッセルに苦しめられた。しかし上半では反対にまつたくクラストしたスノー・フェイスとなつており約一〇〇mほどカッティングを続けて稜線に立つた。稜線に出たところは一峯の下で、反対側にルンゼが出ているところである。稜線は再びラッセルで腰までもぐりながら、スタカットあるいはコンティニアスで登攀を続けて一峯の頂に立つ。二峯まではあいかわらず雪の状態は悪く、特に二峯から懸垂点までは稜線も細く困難を感じた。問題の二峯の下降は、ハーケンを支点にアップザイレンをやつてもよいのであるが、われわれはエンピを持つていたし、時間もあるので例のクサリを掘りだすことにする。二mほどほり、やつとクサリを見つけたが、このためすつかり疲れてしまつた。これを使つて下降してからは劍の本峯まで問題になるところもなく、疲れた足をひきずるようにしてCⅣに帰つた。積雪期、源治郎尾根の末端からの登攀はこれが最初ではあるまいか。

八ツ峰　山口　宏　大幸　勲

三月二十二日

CⅤ（四・四五）―池ノ谷乗越（五・一五）―五・六のコル（一〇・一〇）―七峰（一一・〇〇）―七・八峰のコル（一一・三〇）―八峯（一二・一〇）―八ツ峰の頭（一二・四〇）―CⅤ（一三・〇〇）

長次郎谷には昨日のトレースが残つており、今日はらくに五・六峰のコルへ達することが出来た。六峯の登りは傾斜六〇～七〇度、ガリー（夏）より三ノ窓側をトラバース気味に登る。昨日ほどのラッセルの必要もなく、あるいはところどころカッティングもあり、更に高度感も加わつて充分登攀を楽しめそうだ。六峯の下りは完全に氷化しており、ハーケンを二本岩に打ちこんでアップザイレンで下降する。七峯の登攀は美しいナイ

フエッジを描いた雪で快適そのものだつた。七峯の下りはリッジから離れて三ノ窓側の急な雪の斜面を下る。八峯の登りは六峯のそれ以上に傾斜が強いのだが、雪質がよくアイゼンがよくくいこむ。雪庇は大体長次郎側に発達しており、止むをえずその上を通過するのだが、昨日と今日の八ッ峰の登攀で雪庇上の歩行も大分なれてしまつた。八峯より頭までは完全なスノーリッジをなしている。慎重にスタカットで通過し、後は池ノ谷乗越に下り、少し荒れだした天候のなかをCⅤへ帰る。

この日、三度目のテンネ攻略が江上、寺阪により行われたが、壁の状態は昨日と何ら変らず、それに加えて天候の条件も悪いので、三たび壁から離れた。

またこの日、CⅡより長塀三ノ窓まで新入部員をつれて前原がやつてくる。これで全員剱本峯に立ち、さらに三ノ窓までその足をのばしたわけで思わぬ収穫となつた。またCⅢのあるじである岸下は、連日剱本峯をへて三ノ窓CⅤまで日参し、そのサポートの役割を十二分にはたしてくれたのである。また彼は三ノ窓へだけではなく、下のCⅡへもでかけてその連絡を確実に把握してくれた。われわれも彼の姿を三ノ窓にみるたびに、登攀隊としての決意を堅くしたものである。

いかなる悪天候といえども全キャンプ間に連絡が行きとどき、チーフリーダーが三ノ窓で指揮をとるのになんの困難も感じられなかつたのは、五五年度の烏帽子より奥穂へのポーラーシステムの展開の時と比べて数段のひらきがあつた。これもすべてCⅡ、CⅢの各部員が計画の細部までも知りつくし、その与えられた仕事を喜びをもつてなしとげたからに他ならない。それでこそ極地法の運営が円滑になされるのだ。

岸田、津田両先輩はこの日、馬場島より途中CⅠ付近に一泊しCⅡへ登つてこられた。

小窓尾根　江上　康　大幸　勲

三月二十三日

CⅤ（六・三〇）—池ノ谷二股（六・五〇～七・〇〇）—ドーム・Mピークコル（八・一五～八・四五）—Mピーク（一〇・一〇～一〇・四〇）—小窓の頭（一一・〇〇～一二・一〇）—三ノ窓CⅤ（一三・〇〇）

池ノ谷を走る様にくだる。二股付近で小窓尾根から大きなルンゼがデブリをはいている。丁度、白馬三合雪渓を急峻にしたようなものである。デブリとブレーカブル・クラストのルンゼを、ピックをさしこみながらの急登である。ルンゼ底をたえず音をたてゝ雪氷片が落ちている。稜線への最後の部分はさすがに急である。このルンゼで約一時間かかつた。それも氷雪のゆるみをきらつてすごいピッチであつた。まず池ノ平山西面のすばらしい岩壁が目をうばう。かつて、ナンダコット以前の『立

教大学山岳部報』で小窓尾根から写したこゝの小さな写真をみて、日本ばなれしたその景観に血を燃やしたことがあつた。思つたより相当な幅と高さをもつて、その岩壁は展開している。われわれが知る限りでは、いまだに人手にふれていないはずである。

Mピークが大きく目前に立ちはだかる。それまでに二つばかりのコブを作つている。最初のコブは小窓側を岩場より雪の急斜面にそつてルートをつける。次のコブは同じく小窓側の氷のルンゼをカッティングでホールド、スタンスを作りながら乗越す。これより池ノ谷側の雪の斜面にそつてトラバース気味に登りマッチ箱ピークに達する。こゝから小窓の頭までは簡単に達し、こゝで池ノ谷の詳細な偵察に時間をすごす。小窓までは三ノ窓キャンプから二度ほど遊びに来ていたので、そのトレースを使いながら小窓王基部から三ノ窓へまわり込む。雪がくさつていたので時間をかけて通過する。その部分は小窓尾根自体としても少々悪いところである。

三ノ窓尾根　寺阪元雄　山下輝彦

三月二十三日

CV（六・〇〇）—引返点（九・〇〇）—CV（一一・〇〇）

今日一日を八ッ峰三ノ窓側壁、あるいは三ノ窓尾根で過ごす予定でCVを後にする。まず三ノ窓谷をゴルジュの下まで降り八ッ峰の偵察をする。しかし陽の当るのも早く、八ッ峰に取付くのには雪崩の危険を感じ、それをあきらめて、三ノ窓尾根の最低鞍部にでる。三ノ窓からみるこの尾根は実にすばらしく、岩一つ見せない雪のナイフエッジを描きだしている。実際に取付くと、思つたほどの困難も感ぜず、出来るだけ下部まで往復することにし、少しもぐる雪の中を下降する。この尾根は小窓側に案外多くの支尾根をだし、われわれはそれらの頭をそれぞれA・B・C・Dと名ずける。ピークを三つばかり越え、それもほとんど稜線通しに下ると、遂にブッシュ帯となり、そこからは急激に二股付近におちこんでいる。雪庇はすべて三ノ窓谷に張り出していて、稜線ではその注意がかなり必要である。

われわれはこゝから引返す。すでに雪はくさり始め、アイゼンがダンゴになりザイルは重たくなる。最後の頭の登りにはシュプールもなく重たい雪に悩まされる。この頭は掠奪点になつており、後は陽光を背に目前に見えるCVへ帰る。

この日もCⅢ、CⅣよりCVへ連絡が来て、このところCVは連日にぎやかである。CⅡより岸田、津田両OBが三ノ窓まで来て、薄暗くなつて劔頂上のCⅣへ帰つた。明日の登攀最終日をひかえて、今日一日チンネの登攀を忘れ、各自思い思いの登攀を楽しんだわけである。

三月二十四日、登攀最後のこの日は、CⅢより劔本峯南壁A2の登攀、CⅤよりチンネ正面岩壁、池ノ谷尾根の登攀にそれぞれ成功し、最後を飾つた。またCⅣの部員は先輩を送りかたがた別山乗越まで往復した。

劔本峰南壁A2稜　持田徳成　岸下勝亮

三月二十四日

CⅢ（六・三〇）—CⅣ（七・〇〇〜八・〇〇）—平蔵コル（八・一五）—A2取付（九・二〇）—CⅣ（一二・〇〇〜一三・〇〇）—CⅢ（一三・三〇）

今日はアイゼンも快適にCⅣへ達する。こゝで小憩の後登攀に向う。平蔵のコルへはカニの横バイは通らず、その上から左に落ちこむルンゼを下降する。平蔵コルより左にトラバース気味に降り、A1とA2の間を通りA2取付に達する。第一ピッチは雪のほとんどついていない約七〇度の急なスラブである。その登攀は快適で、第二ピッチも同様な登攀を続ける。第三ピッチになると傾斜も大分ゆるみ、リッジ通しにコル状の所に立つ。こゝで中食をし、更にコンティニアスでトラバース気味に登攀を続ける。最後のピッチは雪のつまつたクラックであつた。こゝを出ると夏にはガラ場となつているところにでる。ここは今は快適な雪の斜面で、こゝから五分でCⅣに帰つた。

池ノ谷尾根　江上　康　山下輝彦

三月二十四日

CⅤ（六・〇〇）—取付（六・一〇）—主稜線（一〇・〇〇）—CⅤ（一〇・三〇）

池ノ谷を左股、右股に分けている尾根（劔尾根）を以前は池ノ谷尾根と呼んでいたらしい。（現在でも山崎安治氏などは使つておられる。）戦後、名称がなくて不便を感じていた劔の各細部に、それらの開拓につれて新しい名がつけられた。われわれのいう池ノ谷尾根もその一つであり、池ノ谷乗越の上部付近の主稜線から池ノ谷右股におち込んでいる急峻な尾根がそれである。付近にはすばらしい岩壁や尾根を多くもつためか、人々からあまり関心をもたれず、夏期に一度試登のみされたと聞いているが、われわれはこの尾根を前日小窓尾根から偵察して、十分登攀意欲をそゝられたのである。偵察によれば、この尾根は上部で右尾根と左尾根に二分されており、右尾根の方は相当の困難が予想される。われわれは左尾根を選ぶ。

CⅤよりコンティニアスで左股を下り、すぐP1、P2間のルンゼの下につく。このルンゼを登りP2を直登するが、この登りは少し緊張させられた。P3へは稜線どおし快適にアイゼンをきかせて登る。更に見事なナイフエッジやバランスのいるトラバースをつづけながら、数多く現われるコブを乗越す。カッティングでホールド、スタンスをつくつて登る。ジャンクシ

ョンはやはり明瞭ではない。それより急峻なルンゼをカッティングを続けながら登り、リッジに出てバンドのトラバースを終えたら、遂に主稜線に達した。尾根自体短かいものであるが、その登攀は多くの変化に富み、われわれを充分満足させるものであつた。帰途チンネ登攀の様子を見ながら、チンネとジャンダルムの間のルンゼを下る。

チンネ正面岩壁　寺阪元雄　山口　宏

（日嶺ルートよりAバンド、Bクラック）

三月二十四日

CV（六・四五）―取付（七・〇〇）―日嶺ルート（八・〇〇）―E点（九・一五～一〇・一五）―中央バンド（一二・四五～一四・三〇）―Aバンド（一五・〇〇）―Bクラック（一六・〇〇）―チンネ頂上（一八・〇〇）―CV（一九・〇〇）

全部員の期待とわれわれの情熱を胸にCVをあとにする。これが最後の機会なのだ。壁の状態は第一回試登の時より確かに悪い。しかしフィックス・ザイルのおかげで早くもE点に達する。こゝでアンザイレンをして、いよいよ中央バンド迄約三五mの登攀開始。このピッチのみドッペルザイルを採用する。最初は吊上げ、そして左の壁に廻り込む。更にハーケンをスタンスにアブミの助けをかりて上の壁へ。増々困難となりそうだ。こゝからは全然といつてよいほどスタンスはなく、連続吊上げで突破しなくてはならない。左の凹角に入るのに最大の労力を要す。

しかしこのクラックも両側の壁は氷にみがかれ、底は軟雪でアイゼンはむなしく雪をかきまわすのみだ。ハーケンを打ち込み、じりじりとよじ登る。急に視野が開けた。中央バンドだ。実に三時間の苦闘のピッチであった。中央バンドをコンティニアスでチムニーの入口に達する。こゝからAバンド。アイスバイルにものを言わせて簡単に通過。しかしBクラックは思つたより悪く、われわれの最後の力までも要求する。しかしこの頃より、チンネ頂上から、山下、大幸のサポート隊がわれわれをはげまし、勇気づけてくれる。やつとBクラックも終り、しだいに傾斜のゆるくなつた壁を登攀終了点へ。遂にチンネ正面岩壁の完登に成功したのだ。帰りはサポート隊にみちびかれて、電灯の光をたよりにCVへ帰る。

かくしてチンネ登攀を最後に登攀の期間は終了した。

第五期（三月二十六日～三月二十八日）

CV撤収より馬場島（B・H）まで。

二十六日、CV、CIVをそれぞれ撤収し、CV隊員はリーダーのCIIIまでを除き全員CIIへ、CIV隊員はCIIIへ下る。そして二十七日、CIIIよりの撤収隊員を待ち全員馬場島のB・Hへ着く。三月末ともなれば雪の状態も悪く、特に二十六日は悪天

候の中ゆえ、その撤収は慎重を極めた。二十八日、B・Hを後に伊折へ、それから手配しておいたトラックに乗り一カ月にならんとする山行を終え、一路富山へ向つた。

後記

われわれの目的である劔主稜線付近の行動という点においては、この合宿は完全に成功したものと言つてよいであろう。その原因としては、まずチーム・ワークが非常に良かつたことであり、また想像もしていなかつた好天が大きな要素となつていることは見逃せない。キャンプの配置については、空荷ではあるが、CⅡ、CⅤの往復が行われたことからみて、もう一つは減少出来たかもしれない。また最初にのべた行動表の問題に関しては、リーダーに非常な負担が課せられたけれども、その行動がスムーズに進んだことからみて成功であつた。またそれには各キャンプにキャンプ日誌をそなえつけ、それにその日の荷上量、種類、そして在庫量、更にその日以後の荷上予定などを記したことも成功の一因であつた。

食糧についてはほとんど言うことはない。というのは、十日以上の予定を残して合宿が終了したため、現われるべき欠点もかくされてしまつたからである。

またわれわれは何時の山行においても、アクシデントに対しては非常に気を使つているが、この合宿においてはその片鱗さえみられなかつたことは実に喜ばしいことであつた。（寺阪元雄・江上康記）

積雪期の黒部下廊下横断

大阪大学山岳部

戦後、私たちの山岳部の先輩が初めには後立山東面から、次ぎには後立山と穂高の稜線上に計画を推し進めてきた経過については『山岳』第四九年（戦後における学生登山）に記した通りである。次ぎの段階として後立山を越えて黒部に降ることを考えた。私たちはこれを「上向きの登山」、「横向きの登山」、「下向きの登山」と区別した。まさに後立山を越えて黒部にむかうことは「下向きの登山」だつた。部の中心は後立東面の世代から数え三代目と変つたが、新しいメンバーも後立における部の伝統をよく理解していた。後立稜線から眺めた黒部への憧れは理屈抜きにして部員の心に芽生えたものだつた。

積雪期の黒部の記録をみると、立教の東谷から鹿島槍往復、戦前の関大、大阪商大の仙人ダム附近を渡河点とした黒部横断がある。このルートは戦後再び関学、東大によつてトレースされた。ところが御山谷から仙人谷に至る下廊下については、積雪期は完全に空白で記録は報告されていない。わずかに冠氏らが六月に内蔵之助谷を降り御山谷に遡行した記録の他は、浪高の中村氏らにより横断を目的として三月に後立側と立山側から偵察を試み、十字峡附近にスノー・ブリッジがかかるのを確認した記録があるだけである。それで私たちは下廊下を、それもなるべく十字峡の近くで横断することを目標とし、少なくとも十字峡から上流で横断することに意義があると考えた。私たちは唯一の参考書である『黒部』（冠松次郎氏著）を手がかりに、直ちに系統的な活動を開始した。第一の急務はルートの偵察であり、その要点は渡河点の選定、後立からの下降路、それに伴う黒部の雪の状態であつた。立山側は内蔵之助谷が最も登りやすい沢なのだから、後から内蔵之助谷に結びつけるルートを捜しだすことが必要だつた。

偵察行

第一回の偵察隊(註1)は冬の穂高ですべての力を出しつくしたその年の春、満足な準備も整わないままに出発して行つた。

（註1）昭和二十九年三月十六日―四月五日。前期、後期の二隊に分け、大沢から後立を越えて、A隊は岩小屋沢岳支脈をB隊は中尾根を経て新越沢を下廊下目指して降つた。メンバー　A隊　リーダー川島、山本、土屋、久保（OB）、田島（OB）、B隊　リーダー尾藤、宍戸、広橋、山本（進）、西川、三枝、岩永。

久し振りに味う後立での生活は文字どおりアット・ホームで

あり、後立山は私たち長年のホームグラウンドであつた。大沢小屋から私たちは後立山逆縦走のとき、初めて中継に利用した新越尾根から稜線に登つた。稜線からは長大な岩小屋沢支脈を降り、冠氏が無雪期に使用した尾根を通り黒部本流に出るプランを考えた。これは下廊下右岸を形成する一五〇〇から一八〇〇メートルの壁をさけて、黒部本流に行きつけるという目算からであつた。本流横断の上は左岸の榛の木平を通り、大ダテガビンの下をまいて内蔵之助谷を遡行、立山側につきぬけるという大まかな計画のもとに偵察を開始することにした。A隊が黒部の降り口ルートの偵察に成功すれば、B隊から三名のアタック隊(註2)を出し、残りのメンバーはサポート隊に切換える予定だつた。もしアタック隊が内蔵之助谷を登りえないとしても、黒部左岸沿いに御山谷に抜けられるであろう。しかし、この計画はすこぶるあまかつた。第一の難点は黒部本流の横断であり、第二の点は黒部左岸の遡行の可能性の有無がそれである。

（註2）　アタック予定メンバー・リーダー尾藤、住吉、宍戸。

こうして私たちの第一回偵察はA隊は岩小屋沢岳支脈の二一〇〇メートル附近までA・Cを出したが、準備不足も手伝つて充分降れず、降り口ルート発見は失敗に終つた。B隊はアタック・メンバーの一人が病気で不参加になつたのも手伝い、アタックをすつかりあきらめ、A隊の偵察の結果にもとずいて新越沢中尾根を降つた。新越沢中尾根とは、岩小屋沢岳南肩のピークから新越沢に出ている尾根で、この沢を上半で右と左の二股に分けている尾根である。この尾根は初めは容易に降れるが、標高一八五〇メートル附近からは急激に落ち込み、尾根通しは非常に悪いので、上から見て右手の雪渓を一気に二股に降るルートをとつた。それで私たちは、この雪渓のはじまるところにA・Cを設けることを余儀なくされた。この雪渓は平均四十度あまりの傾斜が連続している上に、途中埋り切らない小滝がある。おまけに見透しも効かない。その上雪崩の危険性も多分にあり、私たちの前進を妨げる隘路となつた。

しかし、雪崩の危険をぬきにしても、帰途二時間のこの雪渓の登行は大きなアルバイトだつた。ここで私たちは「下向きの登山」の味をいやという程知らされた。「下向きの登山」においては「上向きの登山」ほどA・Cからの行程を気分的に延せない、ということも一つの誤算であつた。しかしこの急峻な雪渓を降りきると、広く明るい新越沢に出る。雪が大きな波を画き、その間に大きな岳樺が数本立つていた。雪崩の危険を考えないでよいのなら、願つてもないキャンプ地である。しかし、沢の広々としているのはほんの僅かで、少し降ると河幅は狭くなり、両岸とも雪崩のデブリの上をトラバースしなければならなくなつた。見上げる両岸の斜面の雪は、うつすらとしてほとんど落ちつくしているようだが、なおところどころに大きな塊りが残つていて、今にも滑り落ちそうに春陽に輝いていた。そ

こから雪どけ水は次第に量を増して、トラバースするデブリの雪と斜面の間のシュルンドに容赦なく流れこんでいる。このトラバースは傾斜が急な上に、高度が低いためか雪が腐り全くいやな所だつた。左岸を右岸をとルートをとつて三番目の屈曲点まで降ると、予想どおり遂に大きな滝にはばまれて降れなくなつた。沢が曲つているので黒部の落口は見えないが、大ダテガビンがすぐ目の前に大きく現れ、黒部もかなり近い地点だということはわかつた。岩小屋沢支脈に登る真直な二本の雪渓が主稜線からも望まれるが、止むなくこの右手の雪渓を登り、直登一時間で尾根に登つた。標高一六〇〇メートル足らず。槍の木平附近の極く一部に限られてはいたが、ここで初めて木の間から黒部を望むことができた。

冠氏が初めて野営地として使用したこの槍の木平は、大ダテガビンに続いている。この大ダテガビンは下流に行くにつれて、傾斜を増し、岩肌を見せ、その間に雪のブロックが点々と見られた。その下、黒部の岸は大きなデブリが横たわつていて、大ダテガビン・ピークから黒部へ真直に落ちている沢が、最も悪いように見られた。このあたりからの雪崩は、雪崩というよりは雪のブロックの崩壊であつて、何時とはなしにどんどん落ちているのだからたまらない。夜中、A・Cのテントの中で崩壊の音を聞いたこともあつた。この夜半の雪崩を考えると、黒部左岸のトラバースは慎重ならざるをえないという結論に達した。これを唯一の収穫として、第一回偵察行は黒部への下降ルートを発見することなく終つた。

岩小屋沢支脈末端の木立を通してみた黒部の白い波頭は、私たちの脳裏に鮮かに焼きこまれた。私たちはあのように美しい剱岳を見たこともなく、あれ程までに剱が遠く見えたこともなかつた。下廊下横断を一つのピークとする計画は、ますます私たちの心をかきたてた。

*　　*　　*

昭和二十九年は私たちの部にとつて、一つの飛躍の年であつた。多数の新人をむかえ部員は一躍倍加し賑かになつた。これら新人のトレーニングもなおざりに出来ない問題であつた。そこで不帰東面を対象とした南股合宿(註3)後、上級部員による第二回偵察行(註4)が行われた。

(註3)　昭和二十九年七月二十日～七月二十八日　八方尾根―唐松岳を経てⅠⅡ峯間ルンゼを降り、唐松沢と不帰沢出合にB・Cを設けた。その後三峯C、二峯東南稜、唐松直接尾根のトレースをした。メンバー　リーダー宍戸、木村広橋、三枝、杢中、鷲沢、山本(進)、石沢、辻川、高木、岡田、村瀬、四方、寺田、佐谷、細見(OB)、大村(OB)。

(註4)　昭和二十九年七月三十日～八月二日　メンバー　リーダー尾藤、坪井、東、小沢、杢中。

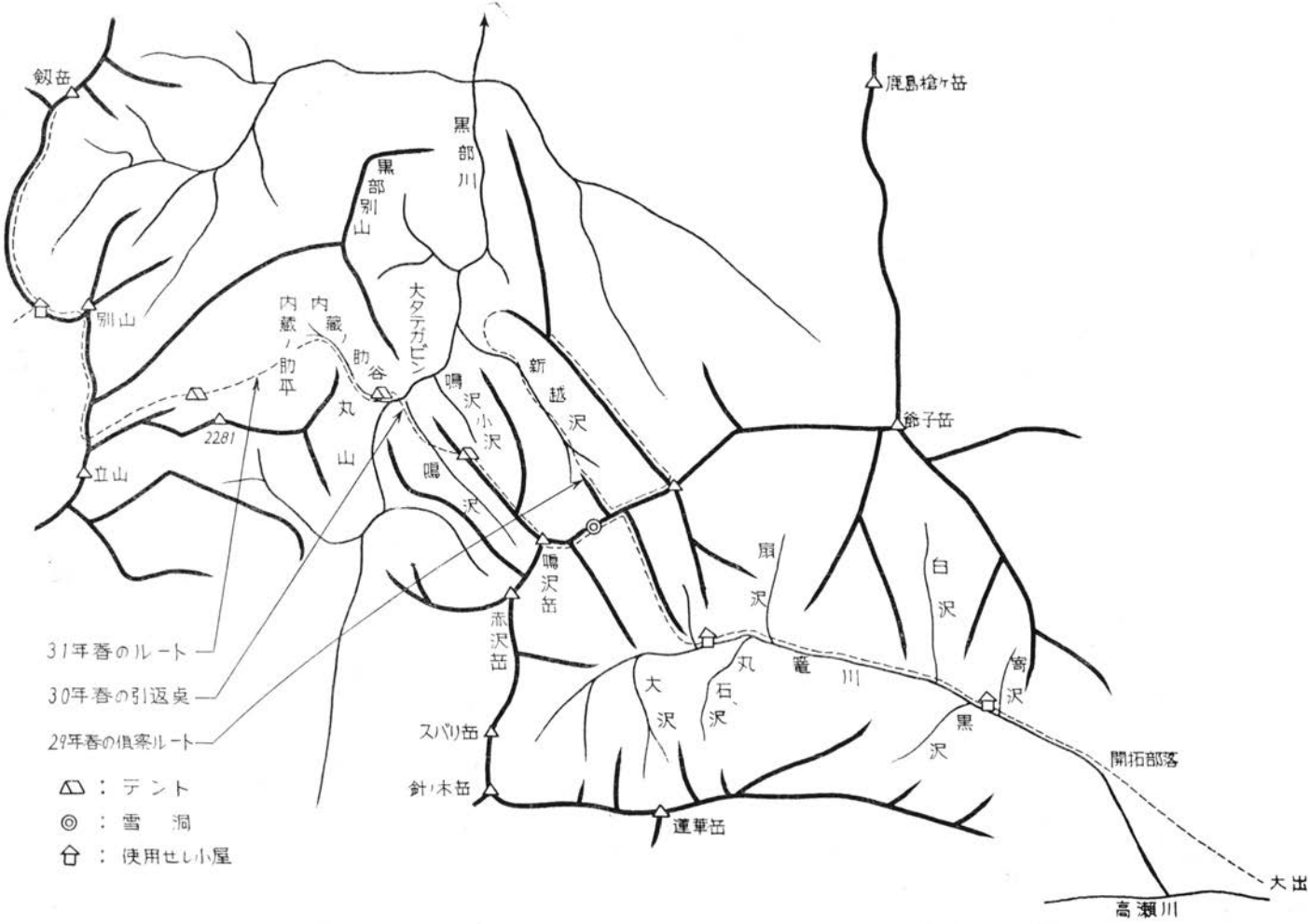
このころから関西電力の黒部第四発電所建設計画が軌道にのり、測量用の夏道が右岸にも、ところどころついているという情報がはいつてきた。この夏道が私たちの山登りに役立てば…

…という気持が、早くやらないことには黒部は開発されてしまうというあせりに織り重なつた。第一回の下の見えない所を降るという不安感を一掃するために、どうしても夏に下から右岸の下降ルートを捜す必要が感じられた。そのためには十字峡以南でなるべく落口に滝の少ない沢を捜すこと。その沢から尾根にとりつけること。しかもその沢から本流渡河の可能性があることが必要だつた。実際に黒部にはいると棒小屋沢の下流に立派な関電の小屋があるなど、その測量工事がかなり進捗していることに驚異の眼を開かされた。十字峡の下手、新越沢出合と鳴沢小沢出合との中間、それと鳴沢小沢出合、鳴沢出合に両岸を結ぶ四つの工事用吊越があつた。これがある以上その年によつてあるかないかわからないスノー・ブリッジに頼るよりも吊越を利用して渡河する方がはるかに得策だと考えられた。吊越までの下降ルートは鳴沢岳から派生している鳴沢小沢右岸と、鳴沢右岸をなす二つの尾根がもつとも条件がよいように思われた。しかし立山側のルートとしては内蔵之助谷が最適であるので、危険な黒部左岸のトラバースをなるべく短かくすることと、もし吊越が使えないときでも、赤沢岳から出ている鳴沢左岸をなす尾根をこえて、赤沢に出ることも可能だろうと思えたから、後者を下降ルートに選んだ。私たちはこの鳴沢右岸をなす尾根を鳴沢岳西尾根と呼ぶことにした。かくて下降ルートと渡河点を見つけた偵察パーティーは井戸の底のような、陰気な下廊下から引揚げた。帰りに見る弥陀ヵ原は明るく広々としていた。

しかし、すつかり偵察が完了したわけではなかつた。積雪期の吊越の状態、内蔵之助谷の滝の問題、それに鳴沢西尾根末端の下降ルートに疑問があつた。というのは、その末端は針葉樹が密生していて夏の偵察のときでさえ、登りに通つたルートを、降りにともすれば迷つてしまう程だつた。それに尾根末端から鳴沢に降れるルートは、ただ一カ所しかないことも、このルートを秋に再確認しておく必要を痛感させた。こうして十月から十一月にかけて、立山側と後立側に一つずつのパーティーをだすことになつた。(註5)

(註5) 立山側　昭和二十八年十月十二日～二十二日　メンバー　リーダー宍戸、佐谷、住吉（OB）。
後立側　昭和二十八年十月二十五日～十一月三日　メンバー　リーダー坪井、西川、戸井、田島（OB）。

立山側パーティーは内蔵之助源頭のカールの通過の可能性と、通れない場合を考えて、真砂岳から梯子谷乗越にのびる尾根偵察が目的で、駄目なときは梯子谷乗越をこえることにしたが、この偵察は必要でなかつた。それと鳴沢西尾根を遠くから地形の観察をすることが眼目だつた。夏の偵察は実際に尾根に取りついたために細部はよくわかつても、それが全体的に見てどういう位置を占めているかがはつきりしないので、どうしてもこの偵察が必要だつた（図参照）。


剱岳
別山
立山
2281
内蔵ノ助平
内蔵ノ助谷
丸山
大タテガビン
黒部別山
黒部川
鳴沢小沢
鳴沢
鳴沢岳
赤沢岳
スバリ岳
針ノ木岳
鹿島槍ヶ岳
爺子岳
新越沢
扇沢
白沢
寄沢
丸竜川
大石沢
黒沢
運華岳
開拓部落
大出
高瀬川
31年春のルート
30年春の引返点
29年春の偵察ルート
△ : テント
◎ : 雪洞
合 : 使用せい小屋

その結果内蔵之助源頭のカールは下部にゴルジがあるが、雪崩の危険のないときなら充分通過の自信ができた。しかし内蔵之助平入口の滝が、果たして通れるものかどうか一沫の不安があつた。一方後立側の偵察隊は二名の部員[註6]によつて鳴沢西尾根の完全下降を行い、吊越の補強とともにその任務を遂行した。

（註6）メンバー　坪井、西川。

＊　＊　＊

一九五三年はエヴェレストの初登頂、日本山岳会のマナスル遠征などに刺激され、ようやく戦後立直りを見せてきた日本の山岳界も、海外遠征熱が高まつてきた。その中にあつて常に新しいものを求めて精進していく喜びを、私たちは内地のしかも北アルプスの黒部という場において充たすことができた。私たちは部員、特に中堅部員が増加したことを考えにいれて、下廊下横断という初めの計画を捨てて、鳴沢出合を通過する大沢小屋から劔岳に至る極地法に計画を拡大した。これは鳴沢出合を頂点と考える「下向きの登山」に一大修正を加えた計画であつた。いつの間にか鳴沢の出合は計画の最終目標でなく、ただ劔に行くルートの一つの隘路に過ぎなくなつてしまつた。これが三十年春の下廊下横断計画で、私たちの犯した一番大きな誤ちだつた。

ともかく、この大きな計画を前にしてその年の冬には東尾根から鹿島槍に登つた[註7]。東尾根は部として開拓してきた後立東面の中で、まだトレースされていなかつた。

（註7）昭和二十九年十二月二十五日～昭和三十年一月五日　東尾根末端より取付き、CⅠ、CⅡを設け鹿島頂上にCⅢを設け全員登頂した。計画としてのCⅢより五竜へのアタックは失敗に帰した。メンバー　リーダー坪井、広橋、三枝、木村、杢中、鷲沢、関本、山本（追）、川島（OB）。

第一回　下廊下横断

昭和三十年三月、大沢小屋を基点とした劔へのポーラーに踏み出した[註8]。

（註8）昭和三十年三月十六日～四月六日、大沢小屋をB・Hとし、新越尾根を登り新越乗越にBC、鳴沢西尾根にCⅠ、CⅡを設け、黒部にCⅢを設けたが、小さなスリップ事故のため燃料、食糧の紛失、また吊越の使用不能のため渡河出来ず、再び往路を引返したのみだつた。計画では黒部から先は五名のアタック隊だけで内蔵之助平にCⅣを出し、梯子谷乗越、長次郎谷を経て劔をアタックする予定でサポート隊は黒部までで下山することになつていた。メンバー　リーダー宍戸、尾藤、坪井、木村、西川、三枝、東、山本（進）、四方、岡田、寺田、村瀬、和田、（内アタック隊宍戸、尾藤、坪井、木村、西川）。

三月二十六日。鳴沢西尾根一八〇〇メートルあたりにCⅡを建設。真近かに見る黒部別山、その下に白くひかつて、岩と岩との間を噛んで流れる黒部に眼を奪われた。劔は樹で邪魔されて見えないが、黒部別山の黒い岩壁の中心には、別山沢が雪崩の跡もすさまじく姿を見せ、その下に鳴沢小沢出合から別山沢

出合にかけての下廊下の中心部が見える。恐らくここほど下廊下を一望のもとに見ることのできる場所はあるまい。下廊下には別山沢の落口など数ヵ所にスノー・ブリッジがかかっている。次ぎの年は一面に雪で埋つていたから、下廊下は程度の差はあつても、毎年スノー・ブリッジが出来るものと考えられる。また反対側に見える猫の耳も、西洋の城郭を思わせる、強く印象に残る岩峯であつた。このCⅡから少し降ると一本の白骨樹に出合う。それを過ぎると馬の背の形をした岩があつて、ここから鳴沢右岸に向つて、急斜面の森林帯を降らなければならない。

私たちはこの「馬の背」を末端の岩と呼んでメルクマールにした。ここから鳴沢までが夏、秋にかけて開拓した下降ルートである。このルートは傾斜が急な上に苔のむした湿つた岩、腐蝕土、腐つた雪が混つていて実に悪い。それに地形が複雑で秋に釘目はつけたものの、ちょつと油断するとすぐ唯一の下降ルートからはずれてしまう。この斜面は降るに従つてルンゼをなし（棒沢と呼称）、二つの滝を経て鳴沢大滝の上に真直に落ちて行く。はじめの滝を右手にさけると、下はスリ鉢状になつていた。この球場のスタンドのような岩壁（われわれはこれを甲子園球場と呼んだ）の上をトラバースして、私たちが末端尾根と呼んだ尾根にたどりついた。ここからは別に問題になるようなところはなかつた。「末端尾根」を降り鳴沢におりたつた。

あとはデブリをこえ雪崩の危険におびやかされながらも、簡単に黒部の落口に着くことができた。

しかし、ここで私たちは大きな誤算のあつたことに気がついた。それは秋の偵察行で吊越の滑車をたぐるザイルを補強しておいたから、滑車がどちら側にあつても、補強したザイルを操作して、たぐり綱がもし切れていても渡れるつもりでいた。しかし現実は滑車は立山側で雪の中に堅く埋れて、六十メートルも離れた後立側にあつては何もするすべはなかつた。天まで続く雪の壁をはりめぐらし、下廊下は文字通り井戸の底であつた。私たちがどうすることも出来ない六十メートルは、周囲のスケールにくらべて余りにも小さく、一飛びに飛んで渡れそうだつた。だが六十メートルはやはり六十メートルで、橋をかけたり、渡渉したり何もすることもできない六十メートルだつた。眼前の黒部は私たちの気持とは無関係に、雪の中を澄んだ清らかな水を流していた。重い足をひきずつて再び鳴沢西尾根を新越乗越に登りつくと、劔は雪煙を舞い上げて、それは滑稽な眺めであつた。

*　　*　　*

しかし、私たちはいつまでも下廊下にばかり眼をとめていたわけではなかつた。新しくはいつてくる部員にとつて、どちらかというと偏則的な山登りばかりということは一考させられる点があつた。前に後立山東面から穂高をやつてきたように、

一人一人の部員もこういうオーソドックスな経過をたどつていく必要があつた。そこで私たちは次の冬山計画として南アルプスの北岳を選び、三十年の夏はその準備として北岳合宿を行つた。(註9)

(註9) 昭和三十年七月十八日～七月二十八日　大樺沢二股にBCを設け、第一、第二、第三、第四、第五尾根、中央稜、東北稜と北岳バットレスのバリエーション・ルートのほとんどすべてのトレースに成功した。メンバー　リーダー木村、宍戸、山本(進)、西川、辻川、村瀬、岡田、四方、寺田、高木、山田、樋下、飯田、大井、河合、松木、大村(OB)。

しかし、黒部を中心とした山登りは、依然として部の中心問題であることに変りはなかつた。秋には再び二名の部員(註10)を出し、滑車を後立側に固定するなど補強し、下廊下のすべてを翌三十一年の春に託した。

(註10) 昭和三十年十一月三日～十一月六日　メンバー　関本、三枝。

その冬は当然次ぎに考えられる上廊下のことを考え、蒲田川右俣から双六小屋にはいつた。(註11) しかし、これは稀れな悪天候に祟いされ、わずかに笠岳、鷲羽岳の往復を行つたに止つた。

(註11) 昭和三十年十二月二十五日～昭和三十一年一月十五日　双六小屋をBHとし、初めの計画では二隊のアタック隊を出し、一隊は雲の平を経て薬師を、一隊は赤牛岳を往復する予定だつた。なほ、赤牛は三十二年十二月より三十三年一月にかけ、再び双六小屋をBHとし、往復に成功した。

第二回　下廊下横断

三十一年春、私たちのささやかな足どりに輝かしい一頁を加える幸運に恵まれた。今回は前もつて秋のうちに吊越の滑車を後立側に固定しておいた。これが第一の鍵であつた。それに高度の低い関係から、常に窩つた雪の上を歩かなければならないが、過去の経験から私たちはこれに対するテクニックがかなり上手になつてきていた。これは目には見えないが、計画を進めていく上にどれだけ役にたつたかわからない。

私たちはここで黒部の雪の特殊性について述べる必要がある。その第一は積雪量である。三千メートルの山々に囲れた下廊下は、同じ位の高度にある籠川谷の扇沢の出合とか、弥陀ガ原の称名滝附近に比較して、実に数倍する積雪がある。三十年春の横断の失敗は、これを計算に入れていなかつたために、吊越の滑車を立山側の雪の中に埋めてしまう失敗を犯した。第二の点は多量の雪にもかかわらず、高度が低いためか気温が高く常に雪が窩つていることである。私たちはこの湿つた重いズクズクの雪に常に不愉快な思いをした。またこの雪は樹林帯、陽のあたる場所、北斜面、ラビーネン・ツーグと、その性質は千変万化で、一様に歩いていくわけにはいかない。三十年春、小さなスリップでザックを一つ亡くしてしまつたこともあつた。加

黒部下廊下，別山沢落口付近を望む　　（宍戸　元）
（鳴沢尾根Ｃ２より）

黒部下廊下，内蔵助谷出合と赤沢の壁　　（宍戸　元）

（鳴沢尾根末端付近より）

えて雪崩、シュルンドの間から顔を出す怒濤など、積雪期の谷歩きは、もつともデリケートな神経と同時に、最もズ太い神経が要求された。その点では穂高や北岳などよりもはるかに困難な技倆が必要だつた。第三はクラストの時間であつた。ここでは夜の十二時過ぎから、午前九時頃までがクラストしている。日没とともにクラストするという常識は通用しなかつた。したがつて初めて新越中尾根のA・Cで、何日もの晴天続きにもかかわらず、日没後に雪崩の音を聞いたのも別に不思議ではなかつた。

ともかく三月三十日、再び鳴沢の出合にやつて来た。[註12] 以下はアタック隊[註13]の記録である。

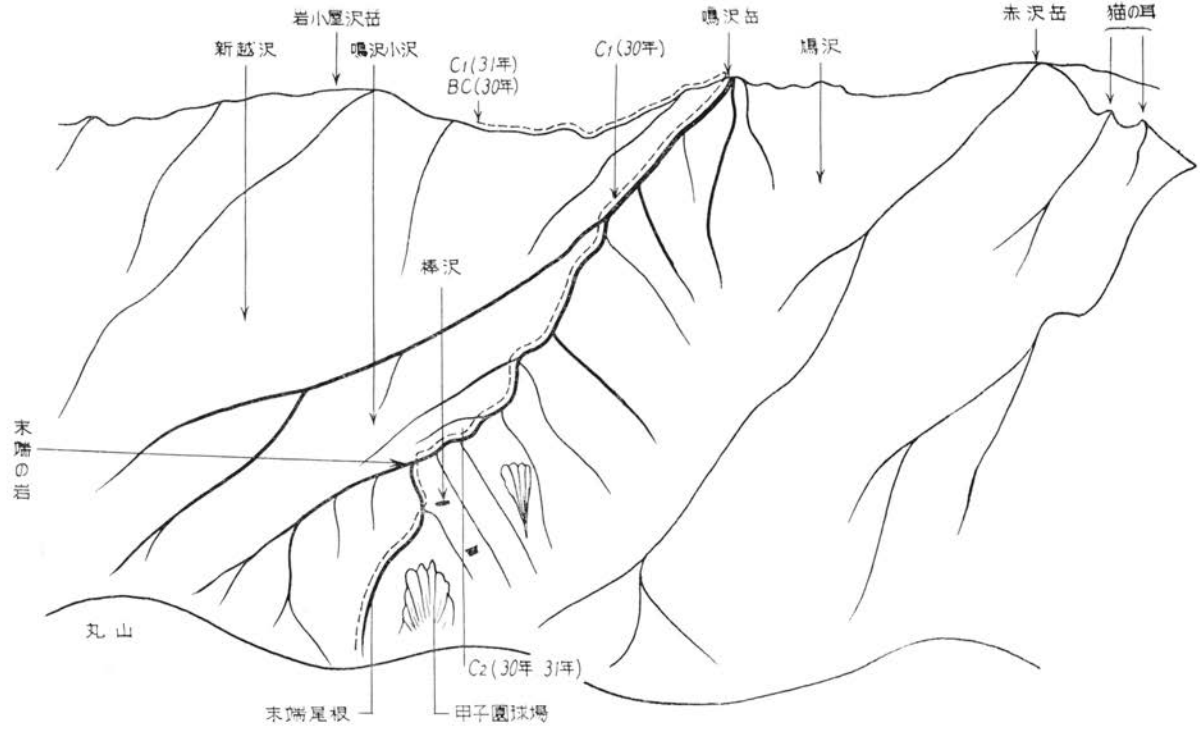
（註12）昭和三十一年三月二十日～四月五日　大沢関電小屋BH、新越乗越CⅠ、鳴沢尾根末端にCⅡを設け、サポート隊はここからアタック隊の下廊下渡河を助けて撤収した。更にアタック隊は内蔵之助谷出合、内蔵之助源頭のカールより立山稜線に出て越中に越えた。

メンバー　リーダー宍戸、坪井、西川、岡田、山田、大井、一山、田島（OB）、広橋（OB）。

（註13）アタック隊　リーダー、宍戸、西川、岡田。

鳴沢西尾根から見る景色は前年と少しも変りはなかつたが、鳴沢出合の状態はすつかり異つていた。対岸はと眺めれば水面から氷雪の壁がオーバーハング状に切りたつている。その高さは三十メートルもあるだろうか。その壁の上から二、三メートルのところに私たちの頼りとする吊越のワイヤーが顔をのぞかせている。しかし私たちが秋に補強したたぐり綱は、見るも無慚に後立側でスパッと切断されて、その端は奔流の真只中に垂れさがつているではないか。だが滑車がチャンと手のとどくところに健在であるのが何よりだ。早速予備に携行して来た補助ザイル六十メートルを出し、坪井がこれをつけて渡りはじめる。落ちついてもう一度対岸を見ると、氷壁の下には川幅いつぱいになつて、雪融けの濁流が渦を巻いて流れている。昨年は印象的だつた雪帽子をかぶつた流れの中央の岩も、ザイル・フィックスをして水汲みにさえ降りられた河原も、すつかり濁流にかくされている。更には氷壁に黒くベットリと印されている土砂の具合から、一時の物凄い増水が想像され、荒々しい自然の威力に今更ながら驚くばかりである。一時半トップが十の瞳に守られて滑車をたぐつていく。立山側がやや低くなつているので思つたより楽に進んでいく。六十米の補助ザイルが延び切つたときに、両岸から万歳がおこる。

吊越は小さな滑車と、それに吊り下げられた粗末な止り木から出来ている。これで急流を渡るのだから決して良い心持ちではない。でも一人ずつ、それからリュックを一個一個と渡し、三時私たちは濁流をはさんで東と西にサポート隊と別れた。ついに降り出した雨にズクズクに濡れたアタック三名は吊越点を後にした。濁流から灰色の空に吸い込まれている鳴沢の壁が、鳴沢の左岸から下流へとつづき、本流の谷が転ずるに沿つて折



鳴沢西尾根略図　真砂岳より

------- トレース

れ込んで視界から去つていく。鳴沢の右手は黒々とした赤沢の壁が根元に雪を蓄え、それが堤となつて立山側と同じように濁流につゞく。そしてこの壁は鳴沢左岸へと移つていく。ここは赤沢尾根に鳴沢から登る僅かな、しかも唯一の可能性のあるところのように思われるが、実際に取りついたら例の不安定な雪にさぞ悩まされることだろう。

私たちは本流左岸の雪の急斜面を、内蔵之助谷出合を目指してトラバースを開始した。雨のためか、気温の高いためか、恐らくその両方のためだろう、雪は水をタップリふくんで重い。ピッケルを根元まで突きさし、脚を前に出すと足くびと膝の中間位までもぐつて、どうにか安心できる足場になる。それを待つて反対側の脚をだす。下が切りたつた氷壁で、その下は折りからの雨で水かさの増した黒部であれば、いやでも慎重にならざるをえない。もしスリップすれば遙か下流の仙人ダムで、水死体として発見されるのがオチなのだから。私たちはもつとも条件の悪いときに通過しているのだ。ただ、すぐ上が針葉樹の森林帯であるのが、せめてもの慰めであつた。鳴沢の出合から一転したところに平坦な場所を見付け少憩。ここにリュックを置き空身でルートの偵察。その結果部分的に出ている夏道を発見、アンザイレンして雪面から草付きを倒木沿いに取りつく(半ピッチ)。更に一ピッチ同様な斜面を降り、今度はシュルンドの中を進んだ(ノン・ザイル)。この頃から日が暮れ、一層行動に困難の度が増して来た。

しかし、どうしても出合に行かねばならない。雨で融けたり、くずれたりする雪の斜面は、一時間でも遅ければ遅いだけ通りにくくなる。一刻も早く通り抜けるのが賢明だつた。最後に濁流に突き出た岩壁を、西川の電灯に導かれてトラバース(一ピッチ)、ようやくにして七時内蔵之助谷出合についた。

夏ならば桟道と河原を通つて、たつた三十分ばかりの行程を正味三時間も費してしまつた。雨は止んだがビショヌレの私たちは、ふるえながらドーナツを食べた。内蔵之助谷の左岸を少し登り、森林帯の最下端の一抱えもあるような針葉樹の根元をならしてテントをはつた。急斜面だが雪崩には絶対安全であるという自信はあつたが、やはり気分的に快適なテント場ではなかつた。それでもラジュースが快調な音をたてて、湯がわく頃にはすつかり元気も回復し、胃袋が満足する頃にはすでに夜中の一時になつていた。

三月三十一日(曇)

かねての計画通り明朝行動開始することにして、日中はテントでゴロゴロする。昨年も、今年も鳴沢尾根を行動中に毎日幾度となく雪崩れていた丸山の大岩壁が、一日中ずつと静まりかえつている。すでに今年は雪崩の大きなのは出つくしたようだ。しかし丸山から出ているデブリは扇状に拡がつて右岸を埋めつくし、行動中に見舞れたら絶対に避けられそうにない。夏

道は右岸のデブリの下にあるのだが、ここはかなりはつきりした台地を形作つている。夏歩いたときにはブッシュに邪魔されてわからなかつた地形も、今眼前にしつかと焼きつけられる。デブリは扇の要に近い方で直角に横切つた方が安全だし、それにだいいち沢通しよりも楽そうなので、結局ほぼ夏道通りつまり台地の上を通ることに決めた。岡田が朝食用にコーヒーをテルモスにつめるのを待つて午後四時就寝。

四月一日（曇のち雪）

午前四時出発。歩いている間に、東の方新越乗越の方から空が白み出して来た。今や所をかえて後立の稜線を眺めているのだ。山肌は樹木が一面に出ていて、雪山のすばらしさが少しもない。籠川谷から見るとまとまつた美しさを見せる鳴沢岳も、平面的でいささかがつかりする。ただ赤沢岳が猫の耳を中心に、ところどころに雪のついた岩肌を見せて周囲を圧している。しかし内蔵之助谷というところは案に相違して実に明るい。もしこれで雪崩がないとしたら、私たちを文句なく有頂天にさせてしまつていたに違いない。問題だつた内蔵之助平入口の滝も九分通り埋つていて簡単に通過できた。もし積雪が少くて埋つてなくても、右岸にルートをとれば容易に通過できると信ずる。夏道が本流から梯子谷乗越へ別れるあたりで小休止。出合からたつた一時間四十分。あまりあつけないのでびつくりする。平の中央部のこのあたりは針葉樹、岳樺がある。どこを向いても雪崩の危険は全然考えられないが、特に丸山よりがテント設営には快適に思われた。晴れていれば朝日がさし染め、雪面がギラギラと輝いて絶好の景色を展開させるだろうに、どんより曇つた空には望むべくもない。それどころか立山の稜線から空模様があやしくなつてきて、七時遂に風とともに雪が降りだしてきた。稜線は時々すごい風の音をさせ吹雪いているようだ。幕営することに決めた。丸山の西二二八一メートルの三角点から出ている尾根をまわつた所、三田平を小高くしたような台地の上である。

四月二日（快晴）

吹雪のわりに気温が高く、テントの中はすつかり水びたしになつてしまつた。こんなときにはナイロンテントほどみじめなものはない。つめたいシュラーフの中で朝を待つた。しかしお蔭で待望の朝日に輝く内蔵之助平と、後立を見ることができた。直接内蔵之助源頭のカールをつめ二時半稜線に立つ。弥陀ガ原には天狗から室堂、一の越と一筋のシュプールが出て、スキーヤーが春スキーを楽しんでいるらしい。別山乗越には川島先輩が待ちうけていた。堅い握手を交す。

あとがき

こうして、私たちは下廊下に一応の終止符を打つことができた。未知の下廊下にあつて、かなり系統だつた偵察を繰り返

し、初めの目的をたつした。三十年までの二回にわたる失敗もよく考えてみると、それはみな三十一年の教訓として役立つた。人のやつたことのないことをやるという喜びは、私たちにとつて当然ではあるが、しかしこれは決して私たちだけの力ではない。日本山岳界の伝統を基礎とした大きな流れの一里塚に過ぎない。三十三年五月、私たちは今度は猫の耳登攀のために再び下廊下にはいつた。しかし最早三十年春のような私たちだけの下廊下ではなくなつていた。ダム工事の発破の音、それを知らせるサイレンが谷から谷へ一日中響きわたつていた。新聞紙上などで知つてはいたものの、変りつつある黒部に驚異の眼をみはつた。感傷的な言葉をもつてするならば、私たちの記録も過去の黒部を象徴するものとなつてしまつたのである。

追悼

高頭君の想い出

明治三八年（西暦一九〇五）七月中旬頃であつたろうか、梅沢親光君からの連絡で高野鷹蔵君、市河三喜君と一緒に、本郷西片町の高頭君の寓居を訪うこととなつた。暑い晴れた日の午後、近所の家からねむそうな琴の音が響いていた。

用向きは山岳会設立の件で、その数日前、七日の朝一〇時に高野、梅沢、河田の三君が、小島烏水君の紹介状を持つて訪問したその相談の続きという訳であつた。七日は丁度私が尾瀬探検旅行の最中で、これに参加出来なかつたからである。

それ以来同じ用件でこれ等の人々と高頭君との間で会合が行われ、又手紙の往復も度々あつたことは申す迄もない。最後の会合はその年の一〇月一四日の午後、飯田河岸にあつた富士見楼（今はない）の楼上で、高頭、小島、城数馬、高野、梅沢、河田の諸君と私とが集つて行い、山岳会設立が確定したのであつた。

山岳会の最初の事務所は、西片町一〇番地にの三九の高頭君の寓居に少時置いたが、直に日本橋区室町三丁目の城数馬氏の事務所に移つた。但しここは城氏の事務所であつて氏の住宅は本所にあつたのだから、郵便物等の整理は書生君があたり、それを折々吾々が監督に行くことになつていたが、中々実行出来ないので、とかく物議の種となつていた。ある日の早朝、高頭君が城氏がてつきりここに起居しているものと思い込み、突然訪問した処が未だお休みですといわれたので、時間を潰すために近所の絵草紙屋に行つてから再び訪問した処が、唯今お出掛けになりましたといわれて遂に目的を果すことが出来なかつたこともある。

高頭君は東京の寓居と郷里の新潟県三島郡深才村深沢の本宅とを、年数回往復して居られたので始終面会する機会はなかつたが、東京に滞在中はいつも接触を保つように努められた。私の宅でも屢々幹部の会合が行われたので、在京中なら必ず出席された。だが大抵の場合、進んで意見を吐露されることは少く、他の者達の議論に耳を傾け、それが不合理なことでない限り異議は滅多に申立てられなかつた。

山岳会が明治三八年の秋一〇月に結成されたことに間違はないが、登山趣味の低調であつた当時の事とて、第一どの位の会員が集まるだろうかという大きな疑問があつた。花々しい発会式を挙げたところで反応があるかどうかも疑わしい。そんな訳で、七人の発起人は、夫々の知己関係を訪ねて入会勧誘に全力を尽した。高頭君は郷里の親戚、配下の人達を、それこそ片端

から入会させて会員獲得に奔走されたのは申す迄もなく、その点では、私達など遠く及ぶところでなかつた。そんな訳で、この年は会の準備行動で暮れてしまつた。殊に雑誌の発刊は、翌春からの方が宜しいと決したので、原稿の依頼も怠らなかつたこと論を俟たない。この点でも、『日本山嶽志』編纂のことから、多数の名士や学者を知己に持つて居た高頭君の努力は中々有効であつた。その頃は各発起人が毎号一定の責任枚数を、自分で書くか又は他に依頼して集めるという内規があつた。

それでも原稿は相当精選したもので、編集会議にかけて協議の末、纏めてから印刷所に廻した。ところが第二号の編集会議が済んだ後、城氏が独断で富士紀行という余り香ばしからぬ一文を加えたので、とかく規則を楯に吾々若輩を叱り飛していた城氏の行動として、面白くないと非難の声が高まつたので、穏便主義の高頭君は大分心を苦しめられたようである。私など『山岳』に載せる筈であつた「富士山を越ゆるの記」を、「博物之友」の方に廻してしまつたのも、そんな訳からであつた。高頭君は生来虚弱な質で、若い頃は余り山に登られなかつた。それであの『日本山嶽志』の大著が成つた訳である。暇さえあれば、イヤ無い暇を無理にこしらえて山へ行つて許り居たのでは、坐つて万巻の書を渉猟することは到底不可能だから、登山紀行を筆にすることすら出来るものではない。

それでも山岳会が出来、その反響も意外に多かつたのに気をよくしたのも手伝つてか、又一方仲間が盛に諸方の山に出掛けるやら、小島君あたりが二た言目には日本アルプスを吹きまくるのにたまりかねてか、明治三九年八月には志村寛氏を帯同して大蓮華山、針ノ木峠、立山を筆頭に、有明山、燕岳、大天井、槍ガ岳から木曾の御岳と駒ガ岳を跋渉し、更に日本アルプスの諸峯とその登路を研究して、之を『山岳』誌上に発表されたりした。

越えて四一年の七月には、小島君達と鰍沢から七ツ峠を越えて西山温泉に泊り、そこから白萩山に登り駿州東俣を溯つて農鳥岳を登つて三角点下に露営、翌日間ノ岳、北岳を極めて能呂川の上流に下り、更に地蔵、鳳凰を攀じて青木鉱泉に泊り、最後に時又から天龍川を下つて浜松に出られた。これで南アルプスの一部に足を入れられた訳だが、翌四二年七月下旬には、小島烏水、高野鷹蔵、中村清太郎、三枝威之助の諸氏と共に、茨木猪之吉氏と下僕の渡辺権一氏を伴い、西山温泉から下湯島に出で新沢峠をこえて田代川の上流に入り、小西俣を溯つて悪沢岳、魚無河内岳、西河内岳を経て赤石岳に登り、小渋川を下つて大河原に出る一〇日間の大旅行を敢行された。そして、この時の観察を基とし測量部で引写して来た網図を参照して、「白峯山脈臆測図」を製し、『山岳』第五年第二号に付録として添付された。そして、その後発表された「白峯三山に就いての異議を読む」（第九年）「（第七年）と

は、引用該博、高頭君の面白躍如たるものがあり、感情論を携げて立つた鳥水君もたぢたぢの態である。

高頭君の登山熱は熾烈を加え、一万尺の山を一〇座登つて以来、戯に「十万尺」と号するなど気焔は当るべからずで、その後足を北アルプスに向け、小島君や高野君と嘉門治を案内として上河内から槍に登り、西鎌尾根を通つて双六、鷲羽、黒岳、巣師を経て有峯に下つて船津に出る旅行をされたりした。

山岳会設立後一〇年を経た大正四年の七月中旬、十数年来登攀のための資料を調えて居られた平ガ岳（土名は本来平岳であつたのを、紀行発表の折に高頭君が「平ガ岳」とされたのだと同君から聞いた）登山のため、小出町（本来は小出島と呼ばれ、その方が地勢上適切である）から大湯を経て橡尾又に一泊、その翌日枝折峠を越えて足を銀山平に入れ、三日目には只見川に沿うて上り不動滝の上で露営、翌日は白沢を溯りやがて平岳沢との出合に達してから、この両渓流の間の尾根を、筆紙に尽し難い困難に打ち克つて登り、夕刻迄に平が岳頂上の一端に達して露営、翌朝七時五分遂に絶頂の三角点に達することが出来た。七月一八日の事に属する。

これは同君が独力で、登山家が未だ足跡を印することのなかつた山に登つた記念すべき出来事で、同君としては空前でありそして恐らくは絶後であろうと、その紀行（『山岳』第十年第三号）の末尾に書いて居られる。同君三九才の時である。

越後の旦那様といえば、大抵は花鳥風月を共とすることはあつても、斯様な困難に耐えて人跡稀な山岳の探検に従事することなど、普通には考えられぬことである。

その熱意と頑張りとには全く敬服せざるを得ない。私は昭和一七年の夏八月、当時女学生であつた娘達を連れて苗場山に出掛けたことがある。夜行列車を利用し、湯沢から徒歩で芝原峠を越えて八木沢に下り、鉢巻峠を経て水電小屋あたりまで行つた頃から雨に降られ、遂にズブ濡れになつて和田小屋に着いたが、それから三日三晩降り続く豪雨にひしがれて、一歩も外に出られなかつた。その三日目に、頂上から単衣一枚で濡れ鼠よりも更にひどい有様で、小屋に駈け込んで来た人があつた。驚いて入口に出て見れば、なんとそれは高頭君ではないか。当然小屋に上つて衣服をかえ、ストーブに暖をとるのかと思いきや、一と休みしたかと見る間もなく、その雨の中を蓙をさして走り下つて行つた同君を見て、一同唖然としたことであつた。この勇気があつたればこそ、平ガ岳の初登山の成功もあつたものと感じ入つた次第である。

一九〇七年以後一〇年間東京を離れていた私は、会の方とも御疎遠ということになり、高頭君との接触もなくなつたが、大正六年頃から再び密接な関係が生じた。殊に高頭君が『太陽暦年表』の編纂を始められてからは、資料や参考書の提出、最後には校正の御手伝をしたので、その頃同君の仮寓であつた牛込

へは、三日に上げずという程の往復があつた。一方、大正八年の秋には山岳会の事務所が私の家に移り、翌年の秋まで会務の整理と雑誌の発行に全力を傾倒した関係で、高頭君とは頻繁な往来があつた。

高頭君と会つた最後は、去る昭和二九年五月、魚沼駒ガ岳の麓の大湯で、小出山の会の催しのあつた時である。令閨に付添われての同君は、存外元気で昔話に興じ、記念写真の撮影の時など、大して危げもなく歩行が出来たように見受けられた。

旧友と久し振りに会し、山談に打ち興じることの出来たのは、同君にとつては思いも掛けぬ喜びであつたに相違ない。五月四日付で私の所に次の文面の御手紙が来た。これが私が受取つた最後の書簡となつた。

謹啓

今度は小出山の会の御催しにて久々にて御拝顔を得誠に御珍らしく十年以上の長寿を受けたる事は実際と存じ有り難く御礼を申上まする。御別れ申上たる翌日槇君と村井女史御同伴にて御訪問下され午後三時頃に御別れ申上候　末筆乍ら愚妻よりも大湯にて失礼を申上候事を呉々御詫び申上候呉れとの事に御座いまする

先は御身体御大事に下さる事を御祈り申上まする　匆々不備

昭和二十九年五月四日

北越長岡市深沢町一丁目

高頭仁兵衛　拝

武田岳兄　尊下

（武田久吉）

追悼

高頭仁兵衛翁と越後支部

名誉会員高頭仁兵衛翁は昭和三十三年四月六日午後六時示寂、大音院釈長光位。新潟県長岡市深沢町一丁目の自宅から、同町大滝山正林寺のお墓所へうつられた。

『日本山嶽志』の発行以来、日本山岳会が高頭翁と表裏一体という親密な関係で発展してきたことや、探検的先駆登山の数数など、翁の最も華々しい時代については、翁ならびに翁と苦楽を共にされた発起人達の発表によつてのみ知り、その高きを仰ぐだけで面識すらなかつたわれわれ越後の会員は、翁が新潟へ御帰郷以前のことを記す資格は全くないので、ここでは郷里における晩年のことどものみをもつて追悼としたい。

翁の御帰郷は昭和十八年十月二日で、其年の一月十八日に名誉会員大平晟先生が長逝されている。終戦の年も暮れて翌二十一年三月五日に塚本繁松主事が、本県の岩船郡保内村の疎開先から会報の復刊第一号である一三三号を『山』のタイトルで出

版したいと、藁でもつかむ気持ちで新潟市を訪れてきた。市は戦災を蒙らなかつたが、物の無いのは何処とも同じであつたが、一三三・一三四・一三五号と出る間、前後約四十泊を私の家で過した。この間の事情は「塚本繁松氏の追悼」にまとめて前に「山岳」編集委員へ届けたが未発表になつている。

古い歴史の関西支部は別として、戦後各県単位に組織された日本山岳会支部の最初に、越後支部が創立したのは、この機縁で結ばれた塚本主事と高頭翁を二大支柱として誕生したのであつて、塚本主事から高頭翁の御帰郷されているのも初めて知つたのである。もつとも一〇三三番で比較的古い会員である私は、昭和十年の大平晟先生の寿像除幕式の時苗場山でお目にかかつている。先生の御誕生日にあたる七月二十七日の前夜、慈恵ヒュッテに浴衣がけで登られた翁は、先生々々とお側を離れず接待され、師弟の情愛の深さに皆も頭が下る思いであつた。小肥りの短軀、血色のよい童顔、明るく軽ろやかな早口だが低い声の印象などで、その夜の話の内容など今は覚えていない。というのは、寿像建設の発起人の一人として無理して出席したので、夜も遅く着いて挨拶だけ済して、翌早朝に挙式を失礼して富山の会員石黒清蔵氏と初めての谷川岳に心躍らせて一足先に出発し、苗場山頂より赤湯コースへ向つたからである。

県下の山岳界の機も熟したので、昭和二十一年十二月五日、高頭翁の邸に新潟・長岡・村松などの代表者七名が集り、県下の山岳会の統合組織を日本山岳会の名において再建しようと協議して、翁を顧問にいただき日本山岳会越後支部の結成となり、直ちに新潟県体育協会に加盟し、県下市町村単位の山岳会の再組織、学生登山の指導と着々強力な運動を展開した。

日本山岳会越後支部創立総会は二十二年六月二十八、九日苗場山に開催され、本部講師に冠松次郎翁、支部講師に高頭翁を迎え、残雪深い苗場山は大いに賑つた。続いて秋の臨時総会は長岡市郊外鋸山の津上ヒュッテに再び翁の御出席を得た。

高頭翁の年齢とわれわれとの間には三十余年の開きがある。その中間層に居て翁の東京生活を知り、われわれの年代と経歴を理解して両者間の空白を継いでくれる会員がいなかつたことは、極めて遺憾のことであつた。強いて求めれば長岡市の会員松木喜之七氏であつたが、それも戦死して帰らぬ人であつた。供人として翁の起居をよく知つている渡辺権一さん・谷内田寅吉さんもおつたが、御本人のおられる前にと思う中に権一さんは亡くなられ、昔の四方山話を聴く機会は無くなつた。お邸の構いに威圧されたわれわれは、翁が端座をいささかも崩されず、僅かに上体を小さく動しつつハイハイと御返事なされるのが、寡黙謹厳型のように感じられ、御同席の奥様はさらに静かにおくゆかしく、それがお二人のもつとも自然に身についた態度であると解れば解るほど、こちらが独り相撲か猿芝居みたいに思われ、初めの意気込みは何処へやら、ふわーとぼやーと温

いものに包れたまま不得要領の気持ちになつて、あの松並木を辿りながらやつと開放された心になるのが常であつた。

翁は晩年は終戦前後の混乱、農地開放などが重り、お子供さんのなかつたこと、中風症などの御病気と、あれほどの名家も世間並みの不幸不運の波はまぬがれず、旧家であるだけにわれわれの知らない御苦労も多かつたと思われる。時にはこれはお気の毒にと思うようなことも見聞しているが、翁が山の中でどんな困苦も物ともせず愚痴一つ言つたのを聞いたことがないと、志村烏嶺翁が云われた如く、御夫婦から恨みがましい事は一言でももらされることはなかつた。

越後支部の機関誌『越後山岳』に「大平晟先生と不肖義明」を御執筆いただいたのが最初であり最後であつた。講演も苗場山の創立総会一度だけお願いした。二十四年四月、川崎隆章氏、原全教主事のインタビュウは「山と渓谷」越後の山特集号に詳しい。翁は七十の手習いといつて、よく書の稽古をされ、望めば快よく書いて下されたが、色紙も持たない迂闊の訪問に恐縮して、またの機会にと遠慮ばかりしたので、案外翁の筆跡は越後に少いのではなかろうか。

翁の行動に最初にびつくりしたのは、他人に飽くまで寛容であるが、自分は凄く性急のことであつた。苗場山の集りに湯沢駅に下車して改めて挨拶申上げたら、翁は文字通り着のみ着のままで、荷物の食糧衣類から、笠、杖、水筒まですつかり無くなつたと仰言る。汽車はあの頃の超満員、窓から出入する混雑であつたが、まさか老人の身ぐるみむきとる奴はいない。翁は発車前に下りようと人を押分け漕ぎ分けしている間に、みんなやりつぱなしてしまつたらしい。これは付き添つて護衛しなかつたわれわれの大失敗であつたが、それが又次々と続いた。下山の途中、外ノ小屋に立寄つている間に翁の姿が見えない。一足お先に下られたというので皆が追馳けたが、そんなに遠く行かれる筈がないのにお姿が見えない。慌てて戻つてみたら、小屋の横から出てこられた。違つた道を一巡りされたのである。

鋸山の臨時総会では大変な事件となつてしまつた。われわれが灌木藪を伐つて鋸山頂上へ出て、初冬の国境の山々の大観にふけつている間に翁は行方不明となつてしまわれた。小屋に戻つても居られない。道を間違つて半蔵金部落か成願寺温泉へ下られたかと、人を両方へ走らせたがおられない。遂に翌日になつて山麓を独り歩いておられるのを発見した。どこかで野宿して食わず飲まずの一夜を明されたのであつた。

高頭翁の御誕生日に弥彦山頂に寿像を建設する運動をおこしたのは、翁が大平先生の寿像を苗場山頂に建てられたのにならつたもので、製作者も同じ羽下修三先生に依頼した。二十四年の予定が羽下先生の原型製作の都合や、弥彦山頂の位置の選定や石組などで二十五年の七月に完成した。翁は足を負傷されて、除幕式には残念ながら出席ができない旨御通知をよこされ

た。その間に東蒲原郡鹿瀬町地内の麒麟山温泉の松仙閣に御招待して、羽下工房へモデルに立寄られたりした。また、東京の会員伊藤隼氏と突然新潟へみえられたこともあつた。

三十年五月一日、越後三山の駒ガ岳の山開きに大湯温泉へ御出席頂いたのが、翁の最後の御旅行であつた。武田久吉先生・槇有恒会長はじめ成瀬岩雄・神谷恭・牧野衛・川崎精雄・村井米子氏らの御来会を賜り、高頭翁は礼子夫人（同名の女中がいて、他人の名を改めるのはよくないと翁がいき子と改名させられた由）令孫茄子嬢が付添い、会員金山淳二氏の案内で臨席された。歩行に御不自由で脊負れたり、リヤカーに乗られたりして記念撮影場に各位と御機嫌よくならばれた。翌日は特発バスで技折峠から「もつてゆきたし」の越後三山を展望されて喜ばれた。三日には槇会長・村井さんが邸に見舞れて懐旧談をやられたことは会報に詳しい。

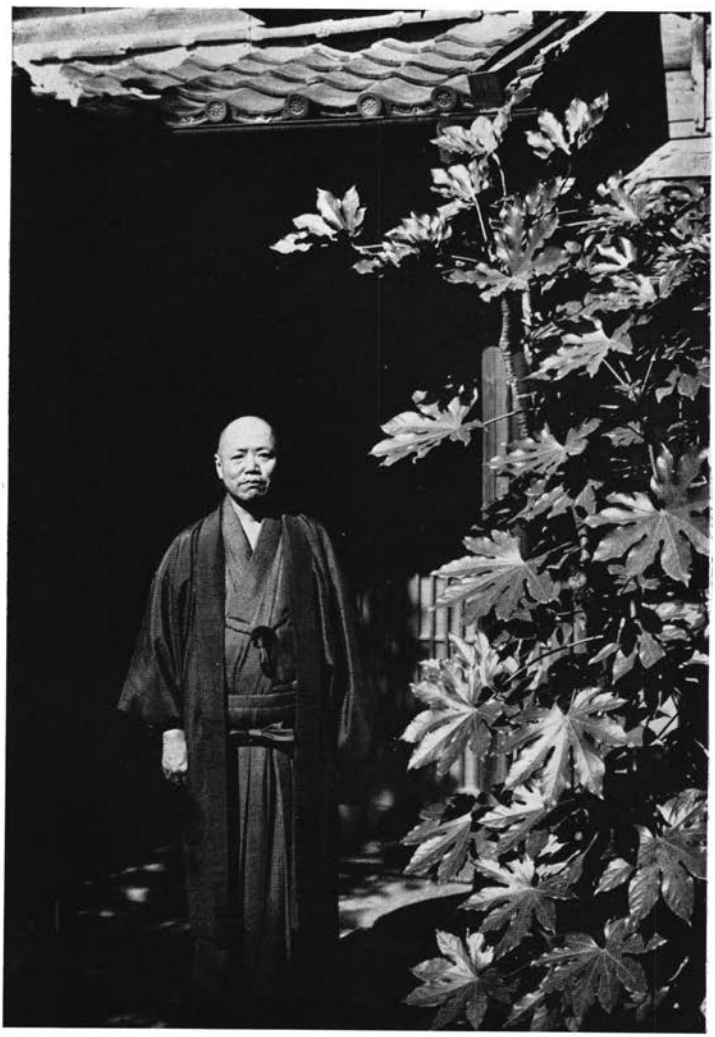
その前二十九年に翁の邸の前の苗字塚に「頌徳心翁高頭仁兵衛之碑　石黒忠篤謹書」十一尺に六尺、厚さ八寸の仙台石が建碑された。明治・大正期における先覚者として、而も自ら表面に立たず功を人に譲り、自己は根となつて郷土に花を咲かせた偉人として、郷土の人達が翁の在世中に建碑して、その徳望を永遠に伝え老後をお慰めしたい念願でできたものである。

越後支部会員が大勢でお見舞に上つたのは三十年の八月であつた。一日の夜は弥彦山頂の高頭翁の寿像前から、松明をともして二百人が行列して下山し、弥彦神社の灯籠神事に奉賛する新潟県登山祭であつた。翌二日高頭邸に参上したが、翁は横臥されたままで独りで起きられず、発音も明瞭を欠かれたが耳はよく聴えるので、もどかしそうに寝ておられた。以来われわれがお見舞に上つてお騒せするのも心苦しく、時々の挨拶は金山淳二氏にお頼みして連絡をとることにして過ぎたのであつた。

ここにわれわれは誠に至らぬ事ばかりで慚愧に堪えず、地下の翁に深くお詫びするとともに、翁の徳の今さらに広大なのに敬意を表するものである。「仁兵衛さん」という心のよりどころを失つて、父親を亡くしたと同じ悲しみを味いながら、越後支部の会員は高頭翁の風格を決して忘れないであろう。

高頭仁兵衛翁晩年の文献は左の通りである。

山と渓谷	一二五号	高頭仁兵衛インタビュウ	川崎　隆章
山と渓谷	一五〇号	先人の面影　大平晟篇	藤島　玄
越後山岳	創刊号	大平晟先生と不肖義明	高頭仁兵衛
		高野鷹蔵、小島烏水、志村烏嶺各氏執筆	
越後山岳	第二号	大平晟先生と不肖義明	高頭仁兵衛
越後山岳	第三号	平ガ嶽登攀記	高頭仁兵衛
		植有恒、羽下修三各氏執筆	
越後山岳	第四号	祖父の病状	高頭　茄子
		冠　松次郎　鳥山悌成各氏執筆	

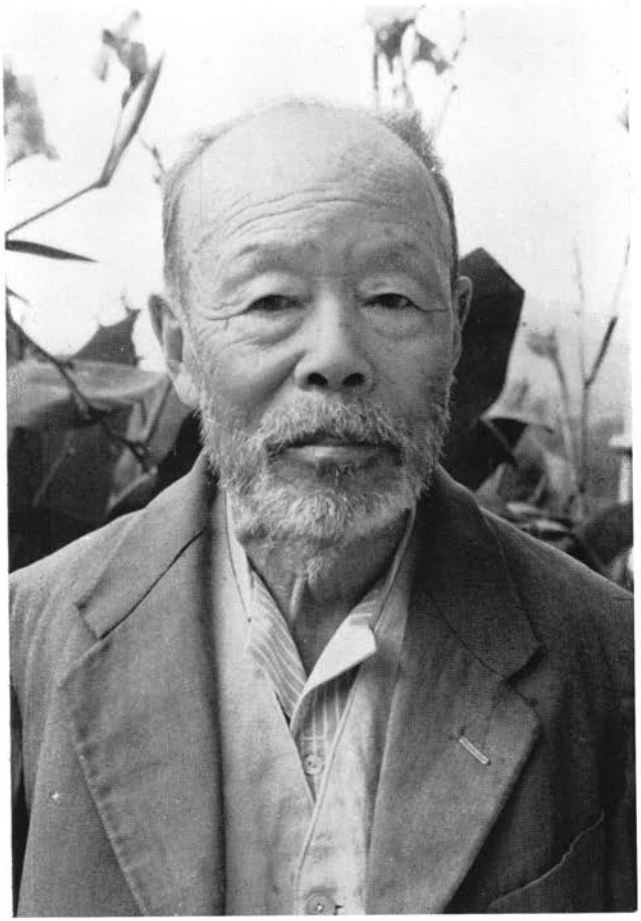


名誉会員　高頭仁兵衛氏

Jinbei　Takato

（1877～1958）

本郷西片町の山岳会最初の事務所にて



創期会員　岡野金次郎氏

Kinjiro Okano

（1874～1958）

山と高原　二六一号　高頭仁兵衛　山崎　安治
岳　人　一二一号　岳界ポートレート　三富　康嵩
岩と雪　創刊号　高頭氏との交友五十余年　志村　寛
会　報　一九九、一九八、一七八、一七三号

高頭仁兵衛翁寿像銘文

高頭翁名は式字は義明仁兵衛と称し海峰と号す　明治十年五月北越三島郡深才村深沢に生る　家は累代の豪農にして世々学を好み郷党に望あり　翁生れて虚弱一日嬬保己一の伝を読みて悟り　以来努めて山川に親み健康を自得す　十三歳初て弥彦山に登る山岳登躋の趣味を解するの始なり　十九歳家業を承継す之より家事を見るの傍或は山野を跋渉し　或は古今の史乗地誌を博捜し本邦登山発達の跡を探る　明治三十九年公刊せし日本山嶽志は実に翁積年研鑽の成果にして　叙述精緻引用該博当年における我国山岳知識の集大成たるに止らず斯道文献の大宗にして古典たり　明治三十八年翁等発起して日本山岳会を創立す時に年二十九　爾来年を閲すること四十有五　此の間日本山岳界の先覚として後進を誘掖し登山道の発展に資すること甚大なり　昭和八年挙げられて日本山岳会長となり　同十年名誉会員に推さる　翁性恬淡些も名利を求めず悠々酒間に自適し　齢古稀を超えて弥健なり　茲に寿像を献じその長寿を祝す

昭和巳丑初夏　　日本山岳会会長　武田久吉撰

（藤島　玄）

追悼

岡野金次郎氏を憶う

一生涯、歩いて歩いて歩き捲くり、八十四才の高齢でも歩き続けている最中に永久の眠りに就いた人は、恐らく古今東西を通じて絶無であろうと思われるが、茲にたつた一人いる。乃ち岳人の先覚者岡野金次郎さんである。氏は明治七年四月、横浜の郊外程ヶ谷で生れ、小学校を終えてから血の出るような苦学をして英語を堪能し、医者になろうとして果さなかつたが、骨を削るような猛勉強をした。明治三十年、日本最初の一万噸商船土佐丸に要員として乗組んで、世界を一周し見聞を広めた。翌年横浜のスタンダード石油会社に入社してから、小島烏水と共に日本アルプス入りを始めたのであつた。

日露役のころ、私が富士登山を終え大裾野を御殿場に向つて歩いている時、岡野氏と一緒になつたが、「君、大砲は英語で何というか」迄はよかつたが、速射砲は、加農砲は、機関砲はと立て続けに試問され閉口した。今思うと彼は苦学の人であり、正規の中学生の私に試問して、比較検討したのだなと推量して好感を持つている。氏の偉業は何といつても、小島烏水と協力して明治三十五年槍ガ岳に登つてから、例のウェストンの著者の

入手を機縁としてウェストン家を訪問、やがて日本山岳会の創立に至る土台石を作つた、陰の功労者であつたことだ。これは周知の事実なので今更詳述の要はない。小島烏水は、余りに華かに著書に講演に座談会に文芸界社交界に活躍したが、岡野氏は余りに狷介孤独、自ら門戸を鎖して交際せず、書かず言わず消極的だつたので、岳人仲間でも同氏を知らぬ人が多かつたわけだ。氏の登山歴を書くと、外は鮮満樺太、内は北海道東北四国九州山陰北陸壱岐対馬迄の山々を巡つているから、到底羅列は出来ないが、特に余人の企て及べなかつた事は、富士登山実に百十二回を数え、箱根の山々伊豆の山々は、吾家の庭の如く数限りなく登り尽していることどもである。又明治四十五年に、前人未踏の鋸岳第一高峰の初登攀に成功したのも注目される。

氏の奇行変人ぶりを紹介する。辺幅を飾らないどころでなく、常に薄汚ない洋服に泥靴なら未だいいが、時には下駄ばき草鞋ばきで横浜市中を悠々堂々濶歩した。飄々乎と風の如く来り忽ちカモシカの如く消え去る。「オイ兄貴は居るかい」と拙宅へ声をかけ、こちらの返事も待たずスーッと通り過ぎてしまうことがよくあつた。

私が明治四十二年に青梅から多摩川を溯り大岳御岳に登つた頃は、登山服など無かつた時代だから、兄のボロボロの古洋服に破れた鳥打帽を被り色あせた脚絆草鞋で行つたが、思わず岡野サンのような恰好だナと独り微苦笑した思い出がある。

併しながら、氏は他面見かけによらず趣味は広汎で、演劇、浄瑠璃、浮世絵に親しんでいた。交友極めて少ない中に、小島烏水、山崎紫紅、磯洋水などと歌舞伎芝居の立見をしたり、席亭に名女義竹本綾之助がかかると聞きに行つたりした。又毎夜の如く野毛山不動坂の見晴亭（汁粉屋）に上り込み、烏水と山を談じ芸術を語り、帰りには伊勢佐木町を回り、山王山へ戻る低徊趣味を欠かさなかつた。そして其間に飛騨街道縦断や、乗鞍、槍ガ岳行を計画していたのであつた。又世俗を超越していた氏は、俳人芭蕉に相似した一生を送りたい気持があつたらしい。「旅人と我名呼ばれん初時雨」の風格を備えていた。俳人河東碧梧桐は、日本国中を三年半かかつて俳句行脚を果したが、岡野翁は会社引退後は長年の間、六十日間づつを句切つて内外の長途旅行を続けていた。

氏は素より日本山岳会創立当時の創期会員であり、明治四十五年三月神田一ッ橋の帝国教育会で、ウェストン翁のアルプス講演会の時、日本アルプスの部は小島烏水が、欧州アルプスの部は氏が通訳したこと、及び当日ウェストン夫妻のお世話を一切引受け接待した氏の苦心は多とすべきである。

氏は日本人勤労者の一大恩人でもある。当時外国商社は邦人を廐使して慰労休暇など一顧もせぬ時に、氏の山行が外人間に著名になり、ス社で岡野氏だけに登山休暇を出すことになつた。之がきつかけになり、他の外国商社でも日本人雇員全体に

夏期休暇制を容認することになつたと聞いている。氏はス社の恩給で引退後は悠々自適が出来た。又三男二女五人の子福者で長男昇君は第一銀行の支店長、次男敬次郎君も第一銀行勤務、三男満君は群馬大学の助教授である。親戚にも流れを汲んで山岳人が多く、望月達夫、浅見義雄、小川量裕、同正の諸君の面々である。翁は八十歳を過ぎる晩年も、常に平塚市中を歩いて貧困児を見るとキャラメルを喜捨したり、乞食などには十円玉を振舞つたりして、町の慈善家と言われたのも決して売名でなく、往時親しくなめた苦学修業中の自分を想い出し、人一倍の同情心から然らしめたのであろう。

昭和三十三年二月十四日、平塚市東海道の路上で自動車事故で惜しくも永い生涯を閉じた。年正に八十四。法号は岳祖金翁居士、横浜市程ケ谷区遍照寺岡野家累代の墓地に安眠している。遺言も山の事ばかりである。『富士の御中道が年々荒廃しているのは残念だ。補修のため若干の寄附をしたい』と、死ぬ迄霊山のために配慮していたそうな。

終りに翁の令夫人は七十八歳で今尚御健在である。幸に亡夫の憶い出の手記を手に入れたので茲に発表する。翁の面目躍如として余すところがない。私は敢て若い岳人に物申す、日本山岳会の生みの親は、現存の武田久吉、高野鷹蔵両氏とウェストン、小島烏水の外に、岡野金次郎あるを忘れてはならないことを。

（小島　栄）

想い出

夫、金次郎と結婚したのは明治三十三年夏で、其の年の十月に小島烏水さんと一緒に乗鞍岳に初めて登つたのです。その時分はスタンダード会社には長期の休暇がなかつたので、新婚旅行の名儀で休暇を貰い乗鞍岳に出掛けたのです。

乗鞍は五合以上は這松が一杯繁茂して登る道がなかつたので、這松の上を這つて登つたそうで、ズボン等はわかめの様にずたずたにさけて帰つて来ました。

その翌年から、会社でも山好きの総支配人ハッパーさんの理解ある計いにより、休暇制度が出来て社員一同大喜びだつたそうです。それから水を得た魚のように毎年毎年何処へ登りましたか、夏二週間づつの休暇は休みいつぱい出掛け、時には勤める朝戻つてきてすぐ勤めに出た事もありました。十日間位野宿の続いたこともあつたようです。

明治四十五年の夏は、山から降りて来て初めて明治天皇の崩御を知つたようです。それまではよく烏水さんと出掛けましたが、この後は一人で案内者をつれて北アルプス、南アルプスの山々を歩き廻つたようです。日記は死ぬ日まで書き続けていま

したが、大正十二年の震災の時その以前のものはすつかり焼いてしまいましたので、本人も大変残念がつていました。

富士、箱根は我が庭といつて別に前から計画しないでも、土曜日（いつも半日）に帰宅すると「今日は月がいいから一寸富士に行つてくる」といつて、ルックを背負つて出かけて行きますので、多い年には四度も、少い年でも二回は富士登山を毎年続けていました。

又毎年冬は大晦日より五日まで伊豆の湯ケ島の湯本館に泊り、天城山上で初日の出を雪の中から見るのを楽しみにしていました。毎年案内者として山好きの雑貨商仙蔵さん（現存）をつれて、どつちが案内者だか分らない毎日毎日の天城山登りをしていたようです。こうして仙蔵さんは天城山の案内人として第一人者となり、後に今の陛下が皇太子殿下の時、西園寺公をつれて登られた時に、案内者として選ばれた事を生涯恩にきていました。昭和二十八年七十九才の時、老夫婦と甥で湯ケ島にいつた時会つたのが最後でした。

岡野は必ずしも高い山々ばかり好んだのではありません。秩父の山々、丹後の山々、神戸の六甲の山々、山陰の小さい峯々も、吉野山の嶮しい峯々も、九州の阿蘇・由布・霧島の峯々、四国の石鎚山の峯々も、足の向くまま時間と金の許す限り歩き廻つたものです。停年で会社を止めた後は、旅行に行くと一カ月位その地方（北海道・朝鮮・満洲・九州・四国）をぐるぐる廻つていましたので、電報為替で旅費なども送金していました。

極く近い所では杉田富岡の丘陵を湘南アルプスと呼び、逗子の神武寺や三浦の大楠山、鎌倉アルプスといつて建長寺から半僧坊大臣山など、いづれも一日コースとしてよく日曜毎に出かけていました。一泊では箱根の山々、駒ガ岳、神山、金時山など好きで、紅葉の季節などには土曜から日曜にかけて毎週出かけていました。

丹沢山には一年に一回位菜の花の盛りの時登つていました。箱根のような隅から隅まで知つている所でも、必ず宿の番頭さんをつれて行くというように、絶対に一人では登らなかつたようです。それはウェストン師の勧告をよく守つていたからで、人間はいつ腹が痛くなつたり、足をすべらして怪我をするか分らない、人が一緒に居れば助かる命をむざむざ無くしてはいけない、という用心からでした。

昭和二十九年乗鞍岳の上までバスが開通したときき、八月十七日老夫婦で平塚を夜行で出発、乗鞍のお花畑を眺め頂上まで登り、平湯に下山一泊した時は大喜びでした。

最後に富士登山したのは昭和三十一年七月二十九日満八十一才でした。老夫婦で参り二合目の主人に会いたくて参つたのですが、既に代が替つていましたが、今の主人もよく知つていて親切にしてくれました。

（岡野　とよ）

追悼

岡野翁のこと

岡野金次郎翁のことというと、私はもう四十年近くも昔の、ある寒い冬の日のことを思い出します。私の父方の叔母が翁の末弟に嫁いだ関係で、岡野家と私の家とは親戚づき合いをしていたのですが、と言つて岡野翁と父との間に頻繁な往き来があつたという程ではなかつたようです。その日は岡野のおじが珍らしく私の家を訪ねて来たのですから、多分正月のことと思うのですが、丁度話がはずんでいた所へ、まだ小学生だつた私も呼び出されて、おじの天城登山の話を聞かされたのでした。なんでもひどい深雪に出合つて、すんでのことに凍死しそうになつたという冒険談だつたのです。おじはごくおだやかで控え目の性質の人でしたから、この話も所謂自慢話というたちのものではなかつたのですが、子供心に余程印象が深かつたとみえて、今でもよくその話を覚えています。

しかし、そのおじが小島烏水氏と二人で明治三十五年に槍ガ岳に登り、また当時横浜に住んでいたウェストン師を訪ねて、日本山岳会創立の一契機をもたらした、言わば山岳会の生みの親の一人であり、したがつて日本の登山界にとつても忘れることのできない人であることを知るまでには、私自身それからまだ十数年の歳月を経過しなければならなかつたのです。しかも、そうと知つて、おじから詳しい昔話をあれこれ聞きたいと思つた頃は、私も戦争にかり出されて東京を遠く離れねばならなくなつたのです。

戦争が終つて内地に帰つたのは昭和二十二年の暮でしたが、二十三年十二月に小島さんが亡くなられたので、「山岳・四四年一号」をその追悼号として出すことになり、偶々編集にたずさわつていた私からたのんで、岡野翁にも追悼の一文を草してもらいました。ようやく、その頃から私の身辺にも戦後ながらやや落着きが出来てきたので、岡野翁から話をききたいという希望が再び私の胸におこつたわけです。しかし、山岳会のいろいろな仕事やわけてもマナスル登山に関連した仕事に忙殺され、なかなか果すことができないでいました。ところが、偶然のことから、そうした機会が訪れたのです。

それは昭和二十八年十一月二十八日のことでしたが、私の勤め先へ家から電話がかかり、岡野のおじが、丁度その夜開催されるマナスルの講演会をききたくて、遠路態々やつて来たというのでした。おそらく新聞の広告か何かでそれを知り、矢もたてもたまらなくなつて、とも角私を訪ねれば委細判るだろうと、家を出て来たような様子でした。

ところが、これも全く偶然のことでしたが、その翌二十九日（日曜）には山岳会のルームで、名誉会員各位をお招きし三田さんの話とマナスルのスライドをお見せしようという催しが企てられていました。それで、まことによい機会だから今夜の講演会はやめて家でゆつくり休み、翌日の集いに是非とも出席願いたい旨をつげると、翁も快諾したので、その晩はさし向いで古い話をいろいろ聞くことが出来たのでした。

翁に会つたとき私がいちばん聞きたかつたことは、明治三十年代の古い時代に、どういう動機から乗鞍岳や槍ガ岳へ登つてみる気になつたかという点でした。つまり、日本では純粋な意味の登山が全く知られていなかつた時代に、翁や小島さんを駆つて高山へ登らしめたものは一体なになのかということであつたのです。しかしいかに頭がしつかりしていたとはいえ当時既に八十歳に垂々としていた翁には、私の質問の真意が的確に判り難かつたとみえて、この点は私なりの想像をする以外になく、目をつぶつて遙か昔を思い出しながら語られたことは、槍ガ岳登山の折のたのしかつたこと、苦しかつたこと、美しい景色に驚嘆したことなどが大部分でした。それからさらにウェストン師や小島さんなどのことも話に出ましたが、それも大体は小島さんや武田さんなどによつて伝えられていたことが多く、初耳というような話は余りなかつたようです。翌日催されたこの名誉会員を囲む集いの模様は、山岳会報第一七一号にも略記されていますが、長老会員方が非常に喜んで下さつた思い出多い集りでした。ことに長いこと会と交渉の絶えていた岡野翁が会のルームに現われ、名誉会員はじめ古い会員と回顧談に一時を過したことは、偶然の機会からとはいえ、まことによかつたと今でも私は思つているのです。

小島さんや岡野翁自身によつて伝えられているように、翁こそまさにウェストン師の発見者、紹介者であり、したがつて山岳会にとつてどうしても忘れることのできない人である以上、たとえ翁が中途で会から遠ざかつたことがあるにしても、当然名誉会員に列せられて然るべきだと、私はかねがね考えていました。偶々翁が久し振りに会を訪れ、古い会員との旧交もあたためたこの機会に、名誉会員に推挙したらどうだろうと、当時私は二、三の役員に熱心に意見を述べたのでした。しかし、その翌年私は神戸転勤となり一時会務から離れてしまつたし、また翁とは親戚の間柄でもあつて、却つて私一人でこのことを強く主張することもはばかられたためもあつて、遂にこれは実現されずに終りました。私は岡野翁に関する限り、これを一番遺憾に思うし、会も残念なことをしたと思うのですが、全く公平な立場から考えても、翁こそ当然それに価する人だつたと考えるのです。

（望月達夫）

追悼

松尾清秀君

（一九〇七―一九五八）

松尾清秀君は日本山岳会の会員としては決して古い会員ではなかつた。しかし彼ほどに日本山岳会員たることを喜びとし、それを誇りとした会員は少い。

会員の中では、あるいはぼくが一番親しい友人だつたかと思うが、彼が山登りをした話は聞いたことがない。しかし早くから眼を中央アジアに向け、熱情をヒマラヤとチベットにかけていた点で、われわれ同時代者の中では、彼の右に出る者は少い。それだけではなく、彼は二十五年前に身を挺してその中央アジアの踏査に飛込んで行こうとした男なのである。この計画は残念ながら途中で挫折した。満洲事変のあとに続いた日中両国間の険しい空気を想起するならば、そんな時勢にれつきとした日本の男が西安―蘭洲―粛州と、西北ルートをたどつて入ろうとしたことの方がどだい無茶だつた。中国の官憲は蘭州でこの若者を抑留し北京に送還してしまつた。政治的理由からではなくても、この場合は、人命の保護という意味ででも、こうした措置をとつた方が当然だつたかも知れない。彼は当時二十七だつたのである。

西安はおろか、今日では蘭州、粛州から巴密、ウルムチまでも、行こうとすれば、そして許可されれば、旅客機で居睡りしながら行くことができる。しかしながら、トラックの荷物の上に蠅がとまるようにつかまりながら、西蘭公路五日の旅をした彼の記録は、今日の人々の百の西北紀行よりも値打がある。

西安を出発するトラックは普通天候にさえ恵まれれば、大体五日間で蘭州につき、蘭州から西安へは四日間で充分である。それは西安が海抜一千数百呎なのに対し、蘭州は五千呎以上の高原にあるためと、蘭州行きの際は主として綿絲布、雑貨類を満載しているのに対し、西安行きの際は、主として有名な蘭州煙草（水煙）を積載するか、蘭州行きの場合に比して、一般に積載量が少ないためである。従つて西安から蘭州行の場合は一人当り四十数元を要するが、蘭州からの帰途は三十元足らずである。

貨物を満載したトラックに二十数人近くの乗客が手廻りの荷物を打ちこんで乗るのであるから窮屈なことはもちろん、身動きも容易にできず、しかも場所によつては道路が極めて悪いので、よほど注意していないと振り落される危険がある。中央部に乗つていると場所が高いため、城門などを通る際頭をうちつけることがあり、端の方に坐ると、脚をぶらさげているため、門を潜る時、又は崖の下などを通る時、道路

が凸凹で車がゆれるときなど、車体と門、あるいは、車体と崖との間に足を挟まれる。

これは彼の当時の旅行記録の一節だが、こんな文章をよんでいると、タイクマンやティルマンの西北紀行を読んでいるような錯覚を起す。つまりそれは、蒙古から西北を経て、遠くアフガニスタンにまで拡つている内陸アジアのどこにも共通した旅行であり、困難であつた。引用をもつと続けたいのは山々だが、際限がないからここにはもう一つ六盤山越えのところを引いておこう。

二十六日（五月）早朝平涼を出発したわれわれはいよいよ待望の六盤山を突破することになつた。……西蘭公路は六盤山脈を隆徳県の瓦亭において横断するのであるが、同地は海抜七千八百呎、美しい高山植物が咲き乱れ、高原のさわやかな空気を満喫することができた。ただし、断崖千仞、墜落すれば百年目であるから、ところどころ徒歩で行かねばならぬ。……

静寧から華家嶺にかけては文字通り山の海という感じがする。嶺の山からみると四方八方ことごとく山の波である。…どこをみても山の波が無限に続き、地平線はあたかも太洋における水平線の如く、山の波が一本の線となるまで続いている。際だつて高い山がなく、しかもどこまでも山が続いているために、かかる珍好な現象を呈するのである。

この辺では猛烈な烈風が北方から吹きよせ、六盤山突破の時よりも寒気厳しく、合着の支那服の下にジャケツを着て、その上頭から毛布をかぶつても寒かつた。

大陸の空が、そしてその空の下につらなる際てしのない山波が眼に見えるようだ。

昭和九年に二十七だつた松尾君は、数年後に北京で「中央亜細亜協会」を主宰していた。スタインやヘディンの著述をはじめ、ロイアル・アシアティック・ソサエティーの雑誌や、ヒマラヤン・ジャーナルがずらりと列んでいたその図書室は、今想い出してみても、天下の偉観であつた。

これだけ書けば彼がどんな人物であつたかは、おのずからはつきりすると思う。

戦後大陸から引揚げてきた彼は富士重工株式会社に職を得、亡くなつた時には宣伝課長という地位にあつた。

そしてこの宣伝課長が大いに振つていた。工大の学生一行をスクーターに乗せてヨーロッパ旅行をさせてみたり、マナスル登頂一週年記念の放送番組のスポンサーになつたり、大いにわきの者には会社員離れのした宣伝課長で、首になりはしないかと時にはらはらさせもしたが、結局においては、大いに会社のスクーターの大宣伝をやつてのけた。「欧州スクーター旅行」の著者桶谷さんは、彼のことを「サラリーマンらしからぬ夢多き変り者」と書いているが、正にその通りだつた。

彼が駒沢大学の出身であることを、ぼくが知つたのは亡くなつてからあとのことだが、長い間のつきあいではあつたが、年をきいたこともなければ、出身校をきいたこともなかつた。つまり人間同志のつきあいにそうしたものはどうでもよかつたということなのだろうが、駒沢大学ときいて、やはり彼は或る時代には河口慧海師などの影響をうけたのではないかと、ぼくは考えたのである。晩年大谷光瑞師が北京に来られたころ、彼は大いにこの大先輩に師事したことをぼくは知つている。

彼は明治四十年の生れであるから、亡くなつた時五十一であつた。本人も周囲の人も全く想像もしていなかつたような難病が、いつの間にか身体の中に巣をくつていて、そのために床についてから一日余りで亡くなつたのだから、家の方々の悲しみ打撃は大きかつたと思うが、彼を識り、また彼の夢を知るもので、この思いがけぬ急逝の報を手にして慟哭しないものはなかつた。

（松方三郎）

略　　歴

一九〇七年七月二十一日誕生
一九四九年一月　日本山岳会入会（会員番号四五二六番）
一九五八年六月五日逝去

登山界のあゆみ

この一年、どういう人達がどういう山をどういう方法で登つたかということは、とりもなおさず日本の山岳界の移り変りの一頁であり、この一頁一頁の積み重なつたものが即ち山登りの歴史にほかならない。幾多の変遷を経て来た歴史に、どのような一頁が書き加えられたであろうかということを、編集部に寄せられたこの一年間の各方面の記録に見てみたいと思う。

〔昭和三二年度秋山〕

昔からそうであつたように、やがて試みる冬山の大きな計画に対する準備——偵察・荷上げ・工作等が多くを占めている中で、冬山・春山とは全然無関係に、厳しい積雪期の山に対する技術を練り経験を積み上げるために、冬の訪れの早い富士山に組織的トレーニングを行う所の多いのが目立つ。特に目新しいものではないが、最近積雪期の山での遭難が増加し、その原因が技術の不足、経験の不足から来る情況判断の悪さが多いと指摘されている今日、こういう計画は大いに意義があろう。

△明治大学

富士合宿
昭和三二年一一月二一日～二六日
東真人他二二名

△中央大学

富士合宿
昭和三二年一一月一八日～二四日
成瀬栄作他二七名

△東京農業大学

富士合宿
昭和三二年一一月六日～一〇日
柴田寿史他一五名

〔昭和三三年度冬山〕

冬山は各山岳会共日頃結集した実力をフルに発揮して、何かやろうという傾向が強い。従つて記録面でも可成り種々なものが残されている。主な記録を次に掲げる。

△慶応義塾大学

昭和三二年一二月六日～三〇日
一力英夫他二五名
笠ガ岳より槍ガ岳を経て奥穂高を極地法により往復。

△一橋大学

昭和三二年一二月六日～二七日

岡垣治雄他一〇名
槍ガ岳山荘にBHを置き、極地法による奥穂高往復と滝谷第三尾根登攀。

△関西登高会
昭和三二年一二月二三日～同三三年一月一二日
梶本徳次郎他六名、北海道登高会七名と合同。
札内川よりコイカクシュサツナイ岳・ヤオロマップ岳・ルベツネ岳を経てペテガリ岳を極地法により往復。
社会人山岳会としては異例の長距離遠征を試み、見事な成果を収めた。同会の充実ぶりもさることながら、種々な面で制約をうける社会人山岳会にしてこれだけの記録が残せるようになったということは、日本の山岳界の水準の向上を示すものとみてよかろう。

△京都大学
昭和三二年一二月二五日～同三三年一月五日
村上他四名
泊よりイブリ岳・朝日岳・雪倉岳を経て白馬迄縦走。
白馬以北日本海に至る山脈の縦走は、先年同志社大学パーティーにより始めて成されたが、逆に日本海側よりの縦走はこれが始めてではないかと思う。

△大阪大学
昭和三二年一二月二五日～同三三年一月八日
岡田博司他七名
蒲田より大ノマ乗越を登り、双六岳を経て赤牛岳及び祖父岳の往復。

△早稲田大学
昭和三二年一二月一七日～三〇日
川村浩之他三名
馬場島より小窓尾根を経て剱岳往復
小人数の数パーティーによる分散登攀の中の一つだが、こういう形式で悪場も含む可成りの距離をもった所を、要領よく動くこともマスターすべき課題の一つ。

△東京農業大学
昭和三二年一二月一日～二四日
石川寛成他五名
烏帽子より裏銀座経由槍ガ岳
三方面より槍ガ岳へ集結し合宿を行う計画で、その一つが本パーティーである。この計画も面白いものだが、北鎌尾根を集結ルートにとったパーティーから一名遭難者を出したため挫折したのは惜しい。

〔昭和三三年度春季〕
気のついた点としては放射状登山の多いことだが、この放射線の長さなり内容なりが以前とは随分違つて来た。以前では充

分一つの計画の対象となつていた所が、今日では放射線の一つになつてしまつた。山登りの進歩の一面を示しているといえよう。

△**中央大学**
昭和三三年二月二一日～同三月三一日
竹下・成瀬・小林他一二名
北海道利尻島遠征、利尻山を三方より三パーティーで集中登山

△**学習院大学**
昭和三三年三月一日～二〇日
石川清夫他一五名
剱岳周辺ヴァリエーション・ルート登攀
赤谷山より剱岳・猫又・毛勝等

△**同志社大学**
昭和三三年二月二八日～同三月二九日
寺阪元雄他二二名
馬場島より早月尾根を経て剱頂上に登り、周辺のヴァリエーションルートの登攀（本文参照）。

昭和三三年三月五日～三一日
山本俊雄他一七名
後立山白馬乗鞍岳より鉢子岳間の交換縦走

△**慶応義塾大学**
昭和三三年三月一一日～二四日
山瀬則夫他五名
三伏峠より熊の平・三峯岳・両俣を経て北沢峠、この間白峯三山往復

△**神戸商科大学**
昭和三三年三月一九日～同四月一三日
寺本他三名及びサポート一〇名
槍ガ岳から剱迄縦走

△**関西学院大学**
昭和三三年三月一二日～同四月一五日
蒲田より中崎尾根・西鎌尾根・槍ガ岳を経て西穂高迄極地法により往復
最近山へ入るルートとして飛騨側が可成りクローズアップされて来たが、主稜線への登路として中崎尾根を選んだのは珍しい。

△**東京大学**
昭和三三年三月九日～同四月一日
三上良治他三三名
穂高岳集中登山、明神東稜より奥穂高・西穂高より奥穂高への縦走など。

△**明治大学**
昭和三三年三月八日～二七日

東真人他一八名
穂高岳に於ける基礎技術訓練、ハイ・キャンプ（明神最南峯）及びロウ・キャンプ（明神沢出合）より前穂・西穂等の往復

△関西登高会
昭和三三年三月
小泉他一名
屏風岩第一ルンゼの登攀。

戦後四月末より五月初めにかけてのいわゆるゴールデンウィークが暦の上に出来てから、春山の後期としてこの時期に可成り注目すべき山行が行われるようになつた。その例に洩れず今年もいろいろの山行が試みられたが、中でも休日続きでようやく活動の期を得た社会人によつて、ヴァリエーション・ルートに於ける注目すべき山行が記録されている。

△関西山岳会
昭和三三年四月二六日～同五月六日
赤山他九名
鹿島槍北壁右リッジ登攀、キレット小屋をベースとして五月二日、三日の二回登攀。
右リッジは鹿島槍北壁中最も右（向つて）にあるもので、積雪期・無雪期を通じて初登攀である。無雪期は厳が凄く、登攀対象としては余り興味はあるまい。

△紫岳会
昭和三三年四月二二日～同五月三日
阿部和行他三名
遠見よりカクネ里に入りB・Cを設け、八峯東面の尾根SGⅠ・SGⅡ（仮称）を登攀。
後立東面で残されたのはもうこの部分に限られているようだ。社会人が限られた時間を利用して狙うのに絶好の目標だろう。

△大阪大学
昭和三三年四月二六日～同五月四日
宍戸元他五名
黒部にB・Cを設け赤沢岳西尾根上の岩峯（通称猫の耳）等を登攀、その附近を探索。
黒部川第四発電所建設工事の進捗に伴い、黒部川の底もアプローチが容易になり、恐らく幾多のヴァリエーション・ルートが開拓されるであろう。今迄余り知られなかつた黒部川のヴァリエーション・ルート探索の〝はしり〟として面白い試みである。

△東京女子大学
昭和三三年四月三〇日～同五月六日
石田祥子他九名
白馬岳強化合宿

女性だけの山行きがこうして計画実行されるようになつた。既に多くの女性が男性と行動を共にして山行を試みているが、男性と種々な条件の異る女性としては、女性自身の山のいき方があるであろうし、そういう意味で女性だけの山行が健全な発達を示していくことを期待したい。

〔あとがき〕

今年の山岳界は以上の如き一頁を書き加えて来た。更に来年はどういう一頁が展開されていくであろうか。これを辿つて登山史の移り変りを、この「山岳」の紙面に於てまとめていきたいと思う。幸い諸氏の御協力により、今年はこの程度迄まとめることが出来たが、或いは我々の知らない処で知られざる一頁が書き加えられたかもしれない。また報告を寄せられなかつた団体で、立派な足跡が残されたものも少なくないことと想像される。将来は是非このようなものも含めて登山の歴史の一頁をまとめていきたいと考えているので、諸氏が残された記録の数々を出来得る限り編集委員会宛報告されるようお願いしたい。

（担当＝田島汎）

会務報告

一九五八年四月～一九五九年三月

◇四月役員総会　四月九日（水）図書室

出席者　日高副会長（理事）小原、折井、辰沼、山崎、太田金坂、村木、松丸、野田、石坂（評議員）早川、三田、成瀬、渡辺、交野（監事）諸岡槇名誉会員

▽議事、報告

一、一九五八年年度、通常会員総会付議事項

二、定款変更の件

三、ヒマルチュリ登山の件

◇通常会員総会　四月十九日（土）体協会議室

▽議事、報告

一、一九五七年度事業報告

二、一九五七年度決算報告

三、一九五八年度予算付議、可決。

四、定款変更の件　文部省に登記の必要上、原案に根本的の修正なき限り、多少の訂正は新年度理事に一任する事にて承認可決。

五、山梨、越後、宮城、東京各支部報告

六、一九五八年度理事として、別宮貞俊、日高信六郎、松方三郎、浜野正男、折井健一、太田敬、辰沼広吉、山崎安治、村木潤次郎、松丸秀夫、大塚博美、徳久球雄、越智英夫、石坂昭二郎、羽島肇、田島汎、野田三郎、松田雄一、松沢幸雄、田村扇一の二十名を選任、尚会長別宮、副会長日高、松方は任期昭和三十五年三月迄従来通りとする。

七、監事（一九五八年～一九五九年）として野口末延、諸岡一次を選任。

八、ヒマルチュリ登山計画発表。

◇四月理事会　四月二十五日（金）図書室

出席者、日高副会長（理事）折井、太田、辰沼、山崎、村木松丸、越智、田島、徳久、田村、大塚、石坂（評議員）成瀬（監事）野口（前役員）金坂、石原

▽議事、報告

一、理事事務分担を決定。総務渉外（折井、越智）経理（太田）会報（山崎）山岳（田島）山日記（徳久）国体（浜野、折井）研究（辰沼、田村）遭難対策（浜野、羽島）図書集会（松丸松田）学生部（村木、石坂、松沢）支部関係（日高、太田）

東京支部兼務（野田、大塚）

二、常務理事を選任、浜野、折井、山崎、太田、辰沼、村木、以上六名

三、山岳五十三年編集の件

四、会報発行の件

五、南極観測隊員帰国歓迎会の件

六、第十二回ウェストン祭の件（六月中旬）

七、国体登山部委員の件　浜野、金坂、村木、折井、若林（富山支部）五名に委嘱。

◇五月役員総会　五月十二日（月）図書室

出席者、日高副会長（理事）折井、浜野、太田、辰沼、山崎村木、松丸、徳久、石坂、松田、松沢（評議員）成瀬、望月、交野（監事）野口

▽議事、報告

一、評議員追加推薦の件　岩永信雄、小原勝郎を推す（現評議員の任期と合せて昭和三十四年度迄）

二、『マナスル（一九五四～六年）』五月二十日頃、毎日新聞社より出版の予定。

三、竹沢長衛翁（南アルプス開拓者）記念碑建立に協賛依頼の件

四、ヒマルチュリ登山の件並に同委員会設置につき左記委員を委嘱する。

委員長、日高信六郎、副委員長、小原勝郎　委員、成瀬岩雄、竹節作太、折井健一、辰沼広吉、村木潤次郎、金坂一郎、大塚博美、石坂昭二郎、松田雄一、日下田実。

五、富士を愛する会協賛依頼の件

六、アジア大会にネパール選手団来日の件

七、海外登山審議会委員は前年度に変更なく次の諸氏を委嘱する。別宮、日高、松方、槇、三田、今西（錦）、入沢、成瀬、渡辺、堀田、小原、望月。

八、新旧役員交歓会　五月二十三日に決定。

◇五月緊急理事会　五月二十一日（水）図書室

出席者（理事）折井、太田、山崎、越智、田村、松田

▽議事

一、アジア大会参加ネパール選手団歓迎の件

◇六月理事会　六月十七日（火）図書室

出席者　別宮会長、松方副会長（理事）浜野、折井、辰沼、山崎、村木、越智、大塚、松沢、田村、田島、石坂、（評議員）入沢、小原、望月（オブザーバー）石原、金坂

△議事、報告

一、ヒマルチュリ登山の準備委員会の名称を「ヒマラヤ登山準備委員会」とする。

二、ヒマルチュリ登山先遣隊の件、準備委員会の推挙に依り、金坂一郎、石坂昭二郎両名に決定

三、山岳五十二年、五十三年発行の件
四、竹沢長衛翁記念碑々文の件
五、第十四回国体登山の件（第一案富士山、第二案雲取山）
六、ルーム改築の件
七、遭難対策の件
八、台湾山岳会員来日希望の件
九、中共と合同登山計画の件
十、ウェストン祭報告の件
十一、夏山懇談会（国鉄主催）の件
十二、セルバンシューズ検定の件
十三、チリー山岳会会長より記念品（銅製飾皿）寄贈の件　神戸大学パタゴニヤ遠征隊田中薫隊長に依托さる。

◇七月役員総会　七月十七日（木）図書室
出席者　別宮会長、日高、松方副会長（理事）折井、太田、浜野、辰沼、山崎、越智、松丸、大塚、田村、徳久、石坂、松田（評議員）藤木、渡辺、（監事）野口、

▽議事、報告
一、文部省へ登記関係書類提出の件
二、山日記発行予定の件
三、ヒマルチュリ登山先遣隊の件
四、厚生省主催「山の医学講演会」の件
五、山岳五十二年、八月初旬発行の件
六、会報の件
七、東北地区岳連協議会、藤木評議員派遣
八、宮城県山岳連盟主催、登山講習会、太田理事派遣
九、秩父宮記念館募金の件
十、ダージリンの登山学校より登山装具、バッチ、ペナント寄贈依頼の件
十一、第十三回国体登山C・Lの件（沼倉、伊藤（久）、山本、浅野（義）に依頼）

◇九月役員総会　九月二十五日（木）図書室
出席者　日高、松方副会長、（理事）折井、山崎、太田、村木、松丸、大塚、越智、徳久、松田、田村、田島、野田（評議員）藤木、岩永、篠田、中田、入沢、渡辺、成瀬、交野望月（監事）野口、諸岡（支部長）津田、藤島（静岡）山本、石原前監事

▽議事、報告
一、別宮会長急逝（九月十九日午前一時半）
謹んで哀悼の意を表す
二、日高副会長に会長代理を委嘱の件
三、第十三回国体登山報告の件
四、支部長会議開催の件（十月二十五日）
五、ヒマルチュリ登山の件
六、タイガーシューズ検定依頼の件

七、会報、山岳の件
八、ルーム改築案の件

◇十月理事会　十月八日（水）図書室
出席者　日高、松方副会長（理事）浜野、太田、折井、山崎、辰沼、村木、松丸、徳久（評議員）渡辺、望月（静岡）山本
▽議事
一、会長後任、副会長補充の件
二、臨時会員総会開催の件
三、南極観測隊歓送会の件

◇十月臨時役員総会　十月十一日（土）図書室
出席者　日高、松方副会長（理事）折井、浜野、辰沼、太田、山崎、村木、松丸、田村、羽鳥、（評議員）藤木、岩永、成瀬（監事）野口
▽議事、報告
一、臨時会員総会、十月二十五日に決定
二、右総会議案に関する件
三、ヒマラヤ登山準備委員追加委嘱の件
田辺寿、竹田寛次、山野井茂夫
同資金委員長として、早川評議員を委嘱

◇臨時会員総会　十月二十五日（土）体協
▽議事
一、別宮会長逝去に伴い後任会長として、現副会長日高信六郎を推挙選任する（任期は前会長の残任期間昭和三十五年三月迄）
▽報告
一、日高新会長より会長就任挨拶
二、新会長よりヒマルチュリ登山について経過報告、尚ヒマラヤ登山準備委員会事務所を十月二十七日より左記に開設する。
千代田区神田須田町二ノ二芝崎ビル二階

◇十一月役員総会　十一月十二日（水）図書室
出席者　日高会長、松方副会長（理事）辰沼、折井、山崎、太田、田村、徳久、松田、田島、松丸、大塚、羽鳥（評議員）岩永、成瀬、交野、望月、小原（監事）諸岡（関西支部）三宅、神保
▽議事、報告
一、年次晩餐会開催の件
二、京大チョゴリザ登山隊歓迎会開催の件
三、故別宮会長追悼会開催の件
四、第十四回国体登山の件
五、秩父宮記念館に記念品を出品の件
六、故炭木猪之吉氏遺作頒布の件
七、登山技術書発行の件

八、ヒマラヤ登山準備委員に左記を追加委嘱する。
篠田軍治、初見一雄、徳永篤司、高橋進、住吉仙也、尾藤昭二

◇十二月臨時役員総会（海外登山審議委員、ヒマラヤ登山準備委員を含む）十二月十二日、図書室
出席者　日高会長、中田、初見、藤木、入沢、望月、小原、浜野、太田、山崎、村木、石坂、松田、徳久、田村、諸岡
▽ヒマルチュリ登山隊員を左記決定承認。
（隊長）村木潤次郎（隊員）石坂昭二郎、松田雄一、田辺寿、竹田寛次、山野井武夫、住吉仙也、木村勝久、以上八名

◇十二月理事会　十二月二十三日（火）図書室
出席者　日高会長、松方副会長（理事）浜野、折井、太田、徳久、松田、田村（評議員）成瀬、渡辺、交野（監事）諸岡、岡田北九州支部長
▽議事、報告
一、昭和三十四年度役員の件
二、山日記発行の件
三、冬山遭難の件
四、経理報告

会務報告

◇一月役員総会　一月二十日（火）図書室
出席者　日高会長、松方副会長（理事）折井、太田、浜野、山崎、辰沼、村木、松丸、徳久、松田、田村、羽鳥（評議員）成瀬、岩永、望月、交野（監事）野口、諸岡
▽議事、報告
一、遭難反省会開催の件
二、ヒマルチュリ登山隊歓送会開催の件
三、会報（一五一号～二〇〇号）目録の件
四、山岳五十四年発行の件
五、学生部強化の件
六、松竹映画会社より遭難基金寄附の件

◇二月理事会　二月二十六日（木）図書室
出席者　松方副会長（理事）浜野、折井、辰沼、山崎、松丸、徳久、田村（評議員）渡辺、望月、交野（監事）諸岡
▽議事、報告
一、体協名誉会長平沼亮三氏追悼会の件
二、第十四回国体登山「雲取山」に決定の件
三、登山医学に関する図書出版の件
四、飯田山岳会ランタン・リルン登山計画の件
五、山日記の件
六、図書整備の件

◇三月役員総会　三月十六日（月）図書室
出席者　松方副会長（理事）辰沼、折井、山崎、野田、田村徳久、越智（評議員）藤木、岩永、交野、高山信濃支部長

津田関西支部長

▽議事、報告

一、第十四回国体登山「雲取山」実施要項検討の件

二、スイス山岳財団より槙名誉会員を通じて図書基金寄附の件

三、全岳連の件

四、通常会員総会開催の件（四月二十五日）

五、昭和三十四年度（一九五九年）理事推薦。日高、松方、浜野、山崎、太田、松丸、越智、徳久、田島、田村（以上重任）三田、渡辺、古沢、藤平、千谷、金坂、川上、高橋、日下田（以上新任）十九名を次年度理事に推す。

× × ×

◇第十二回ウエストン祭　六月十四日上高地碑前祭、夕食後に温泉ホテルにて会員の懇談会を開催、十五日は恒例に依り記念山行（西穂高）を行った。参加者二三二名。

◇第十三回国体登山（富山県）九月十四日～十七日にかけて立山、剱岳を舞台として、別宮会長、日高副会長、槙名誉会員等の長老の方々をはじめ全国から三五八名の参加者に依り実施された。

◇支部長会議　十月二十五日、図書室にて開催。出席者、北川（宮城）藤島（越後）三井、百瀬（山梨）木津（富山）津田（関西）池田（石川）本部並東京―日高、松方、中田、岩永、成瀬、交野、石原、折井、山崎、辰沼、太田、越智、村木、松田、沼倉、野田、折井

◇小集会

▽第一八二回　六月十八日、体協会議室
アメリカの山登り　篠田軍治氏
カラースライド映写

▽第一八三回　六月二十六日、体協会議室
印度、ネパール、スイスの旅、別宮貞俊氏
カラースライド映写

▽第一八四回　八月二十日、体協会議室
飛行機から見たヒマラヤ　吉沢清次郎氏
南米の旅　日高信六郎氏
カラースライド映写

▽第一八五回　九月十二日、体協会議室
ニュージーランドの山登り　松方三郎氏

▽第一八六回　十月七日、体協会議室
ヒマラヤの気象についてのシンポジウム
大井正一、久米庸孝、村上多喜雄、辰沼広吉、山田二郎、藤平正夫の諸氏による。

▽第一八七回　十月二十四日、体協会議室
黒部谷の今昔、冠松次郎氏、沼倉寛二郎氏

▽第一八八回　十一月十九日、体協会議室
高山病、凍傷、凍死について　杉本良一氏、辰沼広吉氏

▽第一八九回　十二月八日、体協会議室
登山用防寒装備について
(1) 南極観測隊の装備　鳥居鉄也氏
(2) チョゴリザ登山隊の装備　加藤泰安氏
(3) ヒマルチュリ登山隊の装備　初見一雄氏
▽第一九〇回　一月十四日、図書室
シエラネバタの山旅　佐々保雄氏
カラースライド映写
▽第一九一回　二月二日、体協会議室
(1) ヒマルチュリ登山先遣隊報告　金坂一郎氏
(2) ヒマルチュリ登山隊準備　村木潤次郎氏
▽第一九二回　三月一日～二日　八方山荘
スキーの今昔、初企画としてスキー懇親会を兼ねて会員多数出席して盛会であつた。今後引続き恒例とする予定。
▽第一九三回　三月十四日、体協会議室
ブータンの旅　中尾佐助氏
◇マナスル登頂二週年記念懇親会　五月九日　図書室
槙隊長、隊員を囲んで当時を偲ぶ
◇アフリカ探検隊帰国歓迎会　五月十九日　図書室
関根吉郎、吉阪隆正、後藤董子、鈴木耿子の四氏を囲みアフリカ大陸の珍らしい話題を中心に懇談、スライドを上映した
◇南極観測隊員歓迎会　五月二十九日、体協会議室
西堀越冬隊長、中野、立見、鳥居、平山、中村、清水、原、菊池、岩、佐伯、原田、渡辺氏等の南極組会員も多数出席して、映画、スライド映写、貴重な体験談を聞く。
◇ネパール選手団歓迎会　五月三十一日、国際文化会館にて開催、アジア競技大会に初参加の選手団五名を迎えて、その敢闘を讃えた。
◇ヒマルチュリ登山先遣隊歓送会　七月十四日、協和会館にて開催、金坂、石坂両隊員は七月十八日東京駅を出発、神戸より海路現地に向つた。
◇ジュガール・ヒマール探査隊歓迎会　八月十一日、協和会館にて開催。深田、古原、山川、風見氏を迎えて、カラースライドを観賞す。
◇第三次南極観測隊員歓送会　十月十六日、協和会館にて。村山、武藤、原田、中村、芳野、平山、西田、北村、沢の諸氏の健闘を祈る。佐伯富男氏の一六ミリ映画を映写す。尚宗谷丸は十一月十二日東京港を出港。
◇京大チョゴリザ登山隊歓迎会　十一月二十六日、国際文化会館に桑原隊長、加藤、藤平、平井、羽賀隊員を迎えて開催。桑原隊長の説明でカラースライドを映写。
◇故別宮会長、高頭仁兵衛、北田正三氏追悼会　十二月五日、国際文化会館に遺族の方々を迎えて開催。佐伯富男氏の好意に依り別宮会長最後の山行であつた第十三回国体登山の映画

を映写。

◇年次晩餐会　十二月十二日、ポールスターにて開催、出席者一〇八名、ヒマルチュリ登山先遣隊金坂、石坂氏の報告とカラースライドを映写す。

◇ヒマルチュリ登山隊歓送会　二月三日、永楽クラブにて開催村木、石坂、松田、田辺、竹田、山野井、住吉、木村氏を送る。二月十二日、東京駅を立ち神戸より海路カルカッタに向う。

×　×　×

一九五八年度役員

会　長　別宮貞俊

副会長　日高信六郎、松方三郎

理　事　浜野正男、折井健一、太田敬、辰沼広吉、山崎安治、村木潤次郎、松丸秀夫、大塚博美、徳久珠朗、石坂昭二郎、羽鳥肇、田島汎、越智英夫、松田雄一、田村扇一松沢幸雄、野田三郎

監　事　野口末延、諸岡一次

評議員　入沢文明、成瀬岩雄、渡辺公平、望月達夫、三田幸夫早川種三、藤木九三、西堀栄三郎、今西錦司、辻荘一中田勇吉、島田巽、伊藤秀五郎、堀田弥一、篠田軍治竹節作太、交野武一、藤井運平、小原勝郎、岩永信雄

支部長　（関西）津田周二（越後）藤島玄（福島）伊藤弥十郎（山形）後藤幹次（信濃）高山忠四朗（山梨）三井松男（富山）木津誠一（石川）池田知幸（山陰）織田収（静岡）大室貞一郎（東京）松方三郎（宮城）北川正次（北九州）岡田喜一（熊本）北田正三

社団法人 日本山岳会定款

第一章　総　　則

第一条　本会は、社団法人日本山岳会（The Japanese Alpine Club 略称 J.A.C.）という。

第二条　本会は、事務所を東京都千代田区神田駿河台四丁目六番地におく。

第二章　目的および事業

第三条　本会は、山岳に関する研究、知識の普及および健全な登山の指導、奨励をなし、あわせて会員相互の連絡懇親をはかるとともに、登山を通じてあまねく体育、文化ならびに自然愛護の精神の高揚をはかることを目的とする。

第四条　本会は、前条の目的を達成するために、次の事業を行う。

一、登山の指導奨励に必要な集会、研究会、講習会および展覧会等の開催

二、登山施設の改善の促進、その他登山のための適切な事業

三、海外登山の企画および実施

四、機関誌「山岳」、「会報」および「山日記」その他の図書の刊行

五、目的を同じくする国内および国外団体との連絡、情報の交換

六、その他、目的を達成するために必要な事業

第五条 本会は、理事会の議決を経て必要な地に支部をおくことができる。

支部に関する規定は、総会においてこれを定める。

第三章 会員

第六条 本会の会員は、次のとおりとする。

一、通常会員　本会の目的に賛同し、本会の定める入会金五百円および年会費八百円を納める個人または団体

二、終身会員　本会の目的に賛同し、本会の定める入会金五百円および終身会費（一時金）五万円を納める個人または団体

三、賛助会員　本会の事業を後援し、特別な寄与をなしたもので、評議員会が推薦した個人または団体

四、名誉会員　本会に対し特に功労のあった者のうちから、評議員会が推薦した者

第七条 会員になろうとするものは、入会金と年会費を添えて会員二名の紹介により入会申込書を提出し、理事会の承認を受けなければならない。

団体が入会しようとするときは、入会申込書にその団体の代表者名を明記しなければならない。ただし団体の代表者に変更のあったときは、入会金の払込を必要としない。

第八条 会員は、機関誌「山岳」および「会報」の配布を受け、本会の開催する各種の集会に出席し、かつ、本会備付の図書の閲覧をすることができる。

第九条 会員は、次の事由によってその資格を失う。

一、退会

二、禁治産および準禁治産の宣告

三、死亡、失そうの宣告および団体会員の解散

四、除名

第十条 会員が本会から退会しようとするときは退会届を提出しなければならない。

第十一条 会員が次の各号の一に該当するときは、総会の議決を経てこれを除名することができる。

一、会費の支払を滞納したとき

二、本会の名誉を傷けたとき

第十二条 既納の入会金および会費は、これを返還しない。

第四章 役員評議員および職員等

第十三条 本会には、次の役員および評議員をおく。

理事　十五名以上二十名以内（うち会長一名、副会長二名以内、および常務理事若干名）

監事　二名

評議員　十五名以上二十名以内

第十四条 理事および監事は、入会後満二年以上を経た会員（賛助会員を除く）のうちから総会がこれを選挙する。

2　会長および副会長は、理事のうちから総会がこれを選挙する

3　理事は、互選で常務理事若干名を定める。

4　監事は、評議員会の推挙する候補者のうちから総会がこれ

を選挙する。

第十五条　評議員は、会員のうちから総会がこれを選挙する。

評議員は、互選で常任評議員若干名を定める。

評議員は、理事を兼ねることができない。ただし会長および副会長はこの限りではない。

第十六条　会長は、本会の業務を総理し、本会を代表する。

2　副会長は、会長を補佐し、会長に事故があるとき、または欠員となつたときは、会長があらかじめ指名した順序によつて、その職務を代行する。

3　常務理事は、会長および副会長を補佐し、理事会の決議にもとずき日常の事務に従事し、総会の決議した事項を処理する。

第十七条　理事は、理事会を組織し、この定款に定めるもののほか、総会の権限に属する事項以外の事項を決議し執行する。

第十八条　監事は、民法第五十九条の職務を行う。

第十九条　評議員は、理事会の諮問にこたえ、会長に対し必要と認めた事項について助言する。

第二十条　役員および評議員の任期は次のとおりとし、再任を妨げない。

会長および副会長	三　年
その他の理事	一　年
監　事	二　年
評議員	三　年

2　補欠または増員により選挙された役員および評議員の任期は、前任者、または現任者の残任期間とする。

3　役員および評議員は、その任期満了後であつても、後任者が就任するまでは、なお、その職務を行う。

4　役員および評議員は、本会の役員および評議員としてふさわしくない行為のあつた場合、または特別の事情で、その任に耐えないと認められた場合には、その任期中であつても、総会および理事会の議決によつて、会長がこれを解任することができる。

第二十一条　本会には顧問若干名をおくことができる。

2　顧問は理事会および評議員会の議決により、会長がこれを委嘱する。

3　顧問は、本会の事業の運営について、会長の相談に応じ、必要と認める事項について会長に助言する。

第二十二条　本会の事務を処理するため、主事、書記等の職員をおくことができる。

2　職員は、会長がこれを任免する。

3　職員は、有給とする。

第五章　会　　議

第二十三条　理事会は、毎年二回会長がこれを招集する。ただし、会長が必要と認めた場合、または理事現在数の三分の一以上から会議の目的たる事項を示して請求のあつた場合には、会長は、臨時の理事会を招集しなければならない。

2　常任評議員は、理事会に出席し意見を述べることができる。

3　理事会の議長は、会長とする。

第二十四条　理事会は、理事現在数の三分の二以上が出席しなければ議事を開き議決することができない。ただし、当該議事について書面をもつて、あらかじめ意思を表示したものは、出席者とみなす。

2　理事会の議事は、この定款に別段の定めがある場合を除くほか、出席理事の過半数をもつて決議し、可否同数のときは議長の決するところによる。

第二十五条　評議員会は会長がこれを招集する。

評議員会は会長、副会長および評議員で組織する。

2　評議員会の議長は、会長とする。

第二十六条　評議員会は、当該評議員総数の二分の一以上が出席しなければ議事を開き議決することができない。ただし、当該議事について書面をもつてあらかじめ意思を表示したものは、出席者とみなす。

2　評議員会の議事は、出席評議員の過半数をもつて決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

第二十七条　通常総会は、毎年一回会計年度終了後二か月以内に会長がこれを招集する。

2　臨時総会は会長、理事会または監事が必要と認めたとき、いつでもこれを招集することができる。

第二十八条　会長は、会員現在数の五分の一以上から会議に付すべき事項を示して総会の招集を請求された場合には、その請求のあつた日から二十日以内に臨時総会を招集しなければならない。

第二十九条　通常総会の議長は会長とし、臨時総会の議長は、会議のつど会員の互選で定める。

第三十条　総会の招集は、その開催日より十日以前に会議に附議する事項、日時、および場所を記載した書面をもつて通知する。

第三十一条　次の事項は、通常総会に提出してその承認をうけなければならない。

一、事業計画および収支予算に関する事項
二、事業報告および収支決算に関する事項
三、財産目録
四、その他理事会で必要と認めた事項

第三十二条　総会は、会員現在数の二分の一以上が出席しなければ、その議事を開き、議決することができない。ただし、当該議事について書面をもつて、あらかじめ意思を表示したものは、出席者とみなす。

第三十三条　総会の議事は、この定款に別段の定がある事項を除くほか、出席者の過半数をもつて決し、可否同数のときは議長の決するところによる。

第三十四条　総会の議事の要項および議決した事項は、会報によつて会員に通知する。

第三十五条　総会および理事会の議事録は、議長がこれを作成し、議長および出席者代表二名以上が署名押印のうえ、これを保存する。

第六章　資産および会計

第三十六条　本会の資産は、次のとおりとする。
一、別紙財産目録記載の財産
二、入会金および会費
三、事業に伴う収入
四、資産から生ずる果実
五、寄附金品
六、その他の収入

第三十七条　本会の資産を分けて、基本財産および運用財産の二種とする。

2　基本財産は、別紙財産目録のうち、基本財産の部に記載する資産および将来基本財産に編入される資産で構成する。

3　運用財産は、基本財産以外の資産とする。

4　寄附金品であつて、寄附者の指定あるものは、その指定に従う。

第三十八条　本会の基本財産のうち現金は、理事会の議決によつて確実な有価証券を購入するか、または定期郵便貯金とするか、もしくは信託銀行への信託、または定期預金として、会長がこれを保管する。

第三十九条　本会の基本財産は、消費し、または担保に供してはならない。ただし、本会の事業遂行上やむを得ない理由があるときは、理事会および総会の議決を経、かつ、文部大臣の承認を受けてその一部に限り処分し、または担保に供することができる。

第四十条　本会の事業遂行に要する費用は、入会金、会費、事業に伴う収入および資産から生ずる果実等の運用財産をもつて支弁する。

第四十一条　本会の事業計画およびこれに伴う収支予算は、毎会計年度開始前に、会長が編成し、理事会の議決を経て文部大臣に届け出なければならない。事業計画および収支予算を変更した場合も同様とする。

第四十二条　本会の収支決算は、毎会計年終了後二ヵ月以内に会長がこれを作成し、財産目録、事業報告書および会員の移動状況書とともに、監事の意見を附して理事会および総会の承認を受けて文部大臣に報告しなければならない。

2　本会の収支決算に剰余金があるときは、理事会の議決および総会の承認を受けて、その一部もしくは全部を基本財産に編入し、または翌年度に繰り越すものとする。

第四十三条　収支予算で定めるものを除くほか、新たに義務の負担をし、または権利の放棄をしようとするときは、理事会および総会の議決を経、かつ、文部大臣の承認を受けなければならない。借入金（その会計年度内の収入をもつて償還する一時借入金を除く。）についても同様とする。

第四十四条　本会の会計年度は、毎年四月一日に始まり、翌年三月三十一日に終る。

第七章　定款の変更ならびに解散

第四十五条　本定款は、理事会および総会においておのおのの出席者の四分の三以上の議決を経、かつ、文部大臣の認可を受けなければ変更することができない。

第四十六条　本会の解散は、理事会および総会において、おの

おのの出席者の四分の三以上の議決を経、かつ、文部大臣の許可を受けなければならない。

第四十七条　本会の解散に伴う残余財産は、理事会および総会において、おのおのの出席者の四分の三以上の議決を経、かつ、文部大臣の許可を受けて、本会の目的に類似の目的を有する公益事業に寄附するものとする。

第八章　補　則

第四十八条　この定款施行についての細則は、理事会および総会の議決を経て別に定める。

（昭和三四年三月一八日改正認可）

SANGAKU

The Journal of The Japanese Alpine Club

Vol. LIII **Issued in July, 1959**

Contents

(in English)

Expedicion Chileno Japonesa Andes Patagonicos 1958
.....By Kaoru Tanaka..... 1

To the Upper Swat and the Eastern Hindu Kush
.....By Susumu Matsushita..... 3

Journeys with Dogs during the First Wintering (Feb. 1957-Feb. '58),
Japanese Antarctic Research Expedition.....By Taiichi Kitamura..... 7

From Jugal Himal to Langtang Himal.....By Kyuya Fukata..... 11

.....

(in Japanese)

The First Ascent of Cerro Arenales.....By Kobe University Alpine Club..... 1

To the Upper Swat and the Eastern Hindu Kush.....By Susumu Matsushita..... 25

Journeys with Dogs during the First Wintering,
Japanese Antaractic Research Expedition.....By Taiichi Kitamura..... 41

From Jugal Himal to Langtang Himal .....By Kyuya Fukata..... 62

On tactics of scaling 8000 metres-Peaks.....By Yuichi Matsuda..... 73

Centenary of the Alpine Club..... By Saburo Matsukata..... 88

Swiss revisited after thirty years.....By Yuko Maki.....102

Of the accident by avalanches on Mt. Fuji.....By Ichiro Kanesaka.....109

Some winter climbs on Mt. Tsurugi.....By Dōshisha Univ. Alpine Club.....119

A traverse of the "Lower Gorge" of the Kurobe
.....By Osaka Univ. Alpine Club.....133

In Memoriam :
.....Jinbei Tokato, Kinjiro Okano, Kiyohide Matsuo.....146

Mountaineering Notes.....162

Club Proceedings.....167

.....

Editor : T. Mochizuki

Associate Etditors : H. Tajima, Y Yamazaki

The Japanese Alpine Club

Address : 6-4 chome, Kanda-Surugadai, Chiyoda-ku, Tokyo.

.....

(April, 1958～March, 1959)

President : Sadatoshi Bekku
Vice-Presidents : Shinrokuro Hidaka, Saburo Matsukata
Honorary Secretaries : Iwao Naruse, Kenichi Orii
Honorary Editors : Tatsuo Mochizuki, Hiroshi Tajima

.....

Committees

Masao Hamano
Shojiro Ishizaka
Hideo Matsumaru
Junjiro Muraki
Hideo Ochi
Hiromi Ohtsuka
Hiroshi Tajima
Hirokichi Tatsunuma
Yasuji Yamazaki
Hajime Hatori
Yuichi Matsuda
Yukio Matsuzawa
Saburo Noda
Takashi Ohta
Kenichi Orii
Senichi Tamura
Tamao Tokuhisa

.....

Counsilsors

Unpei Fujii
Tanezo Hayakawa
Kinji Imanishi
Hidegoro Itoh
Takeichi Katano
Tatsuo Mochizuki
Iwao Naruse
Katsuro Ohara
Gunji Shinoda
Soichi Tsuji
Kyuzo Fujiki
Yaichi Hotta
Fumiaki Irisawa
Nobuo Iwanaga
Yukio Mita
Yukichi Nakada
Eizaburo Nishibori
Tatsumi Shimada
Sakuta Takebushi
Kohei Watanabe

Expedicion Chileno Japonesa Andes Patagonicos 1958

by Kaoru Tanaka

(Prof. of Geography, Kobe University, leader
of the Japanese team of the expedition)

This expedition originated from a free talk between Mr. Boris Kraizel Loy, the president of the "Federacion de Andinismo y Excursionismo de Chile" and myself, at Santiago in Nov., 1956.

It was to be sport only for the Chileans while I tried to cover also the scientific field, particularly with regard to glacial geomorphology.

This international expedition was successful thanks to an even collaboration of the two nations, and we were extremely grateful fo rthe strong support of the Chilean Government and particularly that of the Chilean Air Force who offered us eight carrier planes without which our heavily equipped party could not have even approached the mountains.

The Japanese team consisted of seven members (K. Tanaka, leader-geographer; M. Takagi, sub-leader anthropologist; M. Takaya; M. Mori; M. Emmanji; A. Morita; S. Maeda; T. Yoda, cameraman; S. Tanaka, cameraman) belog all, except the cameramen, to the "Kobe University Alpine Club", while the "Federacion" chose the eight members of the Chilean team (G.H. Mills Parades, leader; E. Garcia Soto, subleader; A. Yanes del Villar, doctor; Captain C. Piderit; W. Itrriaga Simken; K. Claussen Sparenberg; G. Muga Royo; C. Lucero Martinez) among climbers of the entire country and included an officer of the military alpine training college.

On Jan. 19th, 1958, we assembled at Santiago, and successively set out by air to Hielo Patagonico Norte looking out for "Cerro Arenales" (3437 m) standing on a continental ice field 25 kilometer off the Colonia Glacier. Having traced up the Rio Baker and Rio Colonia Valleies, we crossed the virgin water of Lago Colonia for the first time in a rubber

life boat to the unexplored shore where we set up our base camp at the edge of the glacier at an altitude of 240 m.

It was sun set time on March 6th when our first ascending party stood on the summit of Cerro Arenales after a twenty-three-hour-work from the fourth camp, established above the great ice-falls. Two other parties, four Chileans and two Japanese were also successful in the coquest.

The climbing itself required no high technique except at the ice-falls hunging just above the base camp 3, which as we ascertained, stood almost on the snow line, 1,300 m of altitude. However, it was a hard job to cover 25 kilometers of direct distance between the base camp and the summit without a single porter. Thus it took us 62 days to move from and back to Lago Colonia.

The polar method was for the first time applied in the region, and one of the principal summits, other than those located at the edge of the ice field in Patagonia, had never been conquered before. The entire party was equipped with Japanese materials.

Among new informations we gained, were three important ones:
(1) The weather was rather more stable than we previously expected, so we had more than a week of either continuous good or bad weather. (2) The climate was fairly arid even at the end of the Colonia Glacier (east side of the Andes), and the fluvio-glacial drifts have turned to a desert. (3) The glaciers beneath the snowline were in ever melting condition throughout our expedition, and presented very dangerous structure.

The scientific finds were of secondary importance, however interesting to me. (1) I proved the hypothesis that the mysterious flood which occurs once every summer along the Rio Baker, might be caused by water from the Lago Arco (so nomed by us) located in the Colonia Glacier. (2) We discovered a plant-leaf-fossil bearing limestone pebbles considered to belong to the nesozoic period, along the tongue of the glacier. (3) I observed an unusual example of gigantic glacial strie near the Lago Arco, and many other interesting fluvo-glacial topographies contributing

much to the glacial geology of the region.

The account of the expedition in Japanese has been published in Oct. 1958, and the scientific report of the Japanese group will be published in a more international form within this year.

To the Upper Swat and the Eastern Hindu Kush

by Susumu Matsushita

In the Kyoto University Scientific Expedition to the Karakoram and Hindu Kush which was performed in 1955, the western half of the Karakoram and the main part of the Hindu Kush were explored from angles of biology, anthropology and geology. In the next year the syntaxial bend part of the mountain range connecting the Karakoram to the Hindu Kush in the Gilgit-Ishkuman-Yasin area was surveyed in geology, biology and mountaineering by the First Panjab University (Pakistan)-Kyoto University (Japan) Joint Expedition party composed of three Pakistanis and three Japaneses. The Eastern Hindu Kush and the Upper Swat which are situated adjoining to the west to the southwest of the Gilgit-Ishkuman-Yasin area mentioned above were explored in 1957 from angles of geology, biology and mountaineering by the Second Panjab University-Kyoto University Joint Expedition party led by Prof. A.H. Beg. The members of the last named party are listed below.

Pakistani members:

Prof. Abdul Hamid Beg, 57, Vicc-Principal of the Islamia College and Professor of Physics,

Dr. M.S. Zahoor, 32, Professor of Botany, Panjab University,

Mr. K. Mubashir L. Khan, 26, Lecturer of Geography, Panjab University;

Japanese members:

Dr. Susumu Matsushita, 54, Professor of Geology, Kyoto University,

Mr. Katsuichi Honda, 24, Student of Agricultural Biology, Kyoto University,

Mr. Kazuhiko Ogino, 22, Student of Forestry, Kyoto University,

Mr. Goro Iwatsubo, 24, Student of Forestry, Kyoto University,

Mr. Fumio Okitsu, 22, Student of Geology, Kyoto University;

Liaison Officer:

Mr. Rasir A. Khan Tahirkheli, 28, Geologist of the Geological Survey of Pakistan.

After having been organized in Lahore at the beginning of July, 1957, the expedition party left Peshawar for the expedition on the 9th of that month to the Upper Swat and the Eastern Hindu Kush, and came back to Peshawar on September 4. The course of the journey was: Peshawar-Saidu Sharif-Kalam-Dadarili An-Ghizar-Gupis-Yasin-NazbarAn-Ano Gol-Zagar An-Mastuj-Chitral-Dir-Peshawar. The party proceeded by bus from Peshawar to Kalam, on foot from Kalam up to Mastuj, on horseback or on foot from Mastuj to Chitral town, on a truck from Chitral to Peshawar. The distance from Kalam to Mastuj is 470 km.

The Swat State passed through by our party is a mountainous state in the northern part of the Northwestern Frontier Province of Western Pakistan and is ruled by the Wali of Swat whose palace lies at Saidu Sharif in the southern part of the state. The area and population of the Swat are 10,000 km^2 and 570,000 respectively. The Swat State is elongated from north to south and is drained by River Swat running southward.

The Upper Swat is a high mountainland with many alpine peaks over 55,000 m. above sea level, and being effected by the summer monsoon, is given sufficient rainfall for forests of Himalayan cedar, oak and birch. This is one of the rare cases in arid Western Pakistan. The Upper Swat with its snow-capped peaks, forested slopes and clear streams is becoming a sightseening place. Swat Kohistan, the northern part of the Upper Swat with its administrative center at Kalam is a higher mountainland with small galciers and relics (cirques, hanging valleys, U-shaped valleys, moraine walls etc.) of Pleistocene glaciation and is a tribal area, for the

most part uninhabited and has not yet been surveyed and had never been passed through by foreigners nor plainsmen till 1957, when our expedition was carried out.

On July 18 we left Kalam (2,000 m) for Swat Kohistan on foot, employing 70 porters and 6 guards. In the upper valley where no permanent village is seen, we often saw pasturing tribesmen. During our march through Swat Kohistan it rained occasionally. After having camped at five places on the way, we crossed the snow-covered Dadarili Pass (5,060 m) and entered the Gilgit Agency and at the same time the Eastern Hindu Kush. In strong contrast to the humid southern side, the northern side of this water-shed is arid, not forested nor grass-covered. A few willows and flowering plants are seen only on the valley bottom. Having descended the valley of Shunji Gol, which is U-shaped, but modified by talus, we arrived at Ghizar (2,900 m) at the junction of Shunji Gol and River Ghizar on July 27. From here the Swat porters and guards went home. We found a glaciated bed-rock near our Ghizar camp.

On both sides of the deep valley of River Ghizar, the upper course of River Gilgit flowing from west to east, there are well developed two or three river terraces. Though the precipitous slope on both sides of this valley with scanty rainfall is bare of vegetation, the terraces and alluvial fans are often irrigated, cultivated and inhabited, because the eternal snow in the river source supplies plentiful water. The 5,000–5,500 m. class peaks are capped with snow. We walked from Ghizar to Gupis in four days, taking the Gilgit-Chitral highway which is partly jeepable but on which we never found wheels. It was fairly hot to walk in the daytime in this arid and shade-less valley. We sometimes tasted delicious fruits of apricot in the village with a height below 2,500 m.

The village of Gupis lying near the confluence of the two rivers of Ghizar and Yasin is a small administrative center with the Raja and the resident officers of the Agency. The author of "This My Voyage", Dr. T. Longstaff resided here as an officer during the First World War in 1916 and 1917. During our stay at Gupis, my Pakistani colleagues and I made a return trip by jeep to Gilgit 110 km. downstream to visit

Political Agent Mr. M.Z. Kiani.

On August 7 we proceeded on foot from Gupis to Yasin 24 km. north of the former. It was interesting to observe that River Yasin is much turbid while River Ghizar is rather clear. At the junction of these two rivers the boundary between their waters is very marked. Two days later we entered westward the valley of Nazbar, a tributary of River Yasin, accompanied by about 50 porters. In the upper valley there is no permanent village, but we often met with shepherds there.

From the top of Nazbar An (4,977 m) on Aug. 11, we had a magnificent view of the Eastern Hindu Kush with many snow- and ice-capped peaks. The same day we pithed camp at Ano Gol (3,850 m), a tributary of the Bahushtaro river and the following day the climbing team started for Mt. Shahan Dok (6,237 m). The Bahushtaro valley was lively with many pastors and cattles. Over Zagar An (5,007 m) the main party entered the Chitral State and reached Mastuj on the Yarkhun river on Aug. 18. Early next morning I found to the west Mt. Tirichi Mir (7,740 m) glittering in the morning sunshine and rising high above other mountains.

As for our climbing team to try the first ascent of Shahan Dok, three students (Honda, Ogino and Iwatsubo), after having ascended a steep glacier, reached the height of about 6,180 m in the evening of Aug. 18, but they were compelled to come back from there, on account of the lack of time.

On Aug. 24 the climbing team joined the main party at Mastuj which the whole party left for Chitral two days afterwards. Now our scientific works have almost finished. Honda, Ogino and Iwatsubo collected about 5,000 specimens of wild plants, over 300 specimens of insects and abundant seeds of cultivated plants. I myself, being assisted by Okitsu, made geological and topographical reconnaissance maps along my route from Kalam to Mastuj and collected about 400 specimens of rocks and fossils. In three days and a half we arrived at the Chitral town, the capital of the Chitral State, and we started on our way home on Sept. 2.

Journeys with Dogs during the First Wintering (Feb. 1957—Feb. '58), Japanese Antarctic Research Expedition

(Part I)

by Taiichi Kitamura

It was not fine in the morning on August 12, 1957, at "Syôwa-Base" (69°00′29″S, 39°35′10″E), but the atmospheric-pressure seemed not so remarkably low, so we did not care much of the weather. As we—Dr. NAKANO, Mr. KIKUCHI, Mr. SAEKI and I—went on toward the south, the field of vision got narrower, and at noon time of the day the weather changed into a threatening one. Relying on the magnetic compass (The deflection is 43°W), we moved on to the "Yutre" Island, at where we were going to study the ecology of penguin, however, they were not yet there, and we four, with 15 dogs, entered into the place to be seemed an inlet on the south side of the island at 14 : 30. Beneath us was very hard sea ice of Lützow-Holm Bay, and it was covered with soft 5-cench-meter-deep snow. The fog was dense, and we could see only as far as 200 or 300 meters ahead. There was no winds and the powdery snow was falling quietly.

"Let's go farther, and camp where the snow is deep", said NAKANO. I went forth with him to look for the camp site. In a short time, I got back and said "We have found a good place to camp". We consulted together over the map.

Then, just then !!

"Whiz !!"

There was a sound and at the same time we felt ourselves pressed vaguely, so we looked up from the map.

"Ah !! It's a blizzard !" We cried. The blizzard was approaching, sweeping the "Yutre" Island like dark clouds.

"Here it come!" Next moment, we were environed with the raging blizzard. One of the matress for camp, which was placed on the dog sledge, was blown off toward the lee. NAKANO was following up his own footmarks to draw near back to us. The ice freezed so hard that the tent could not be set up, so we made our every effort to go ahead, but could not move any more feet.

"Let's pitch a tent hereabout!" said we and stopped the sledge. "Don't get anything flown off!!" The hemisphere-shaped polar tent flattered, being swept by the strong winds. Beneath was ice. The peg which was made of soft metal of duralumin was no good, and we used "ice-piton".

After one hour's struggle, we four rolled in the tent at last, and felt relieved. The dogs crouched on the ice, wearing the new snow over their heads and bodies, and they looked warm.

This is the narratives of our experience at the "Yutre" Island. We had a dog team formed by 15 dogs, and after the quiet rest during the hard winter, we started to make some journeys with them. The "Blizzard at the Yutre", which mentioned above, was one of the experiences we got at the beginning of the journey season.

At October and November, the dog sledge journeys came their climax, namely, we went to the "Botnnuten" (Bottom-mountain), a nunatak located about 50 kilometers inland from the head of Lützow-Holm Bay, and 200 kilometers from the "Syowa-Base" at Ongul Island.

A party of three—Dr. S. NAKANO (surgeon) as a leader of the party, and Mr. T. KIKUCHI (geologist) and I (geophysicist), in charge of 15 dogs, set out the "Syowa-Base". It was October 16, '57.

The 27 days which followed is but a little journey compared to those large-scale exploration promoted by foreign nations. To us, however, this is the essence, the culmination of all and great efforts rendered by everybody concerned in the enterprise. A honor, as it were, to carry up the last one of the topmost stones of a pyramid which has been accumulated by our collaborators, and, naturally, a realization of our dream! The 15 dogs we took with us, worked hard, in fact, more than

we had expected of them, bringing to fruition our many labors in training them for the journey. As we daily watched and followed them, our heart warmed up to the unsharing canine efforts.

The "Enkyu Hyozan Gun" (Group of Dome Icebergs), which blocks the course on the east side of the "Padda" island, is a collection of big, old, decrepit icebergs, all of which are about 50 meters high, and mostly one kilometer in diameter. Because they are contigunously distributed over the area, we have to climb up and down the icebergs, and are not allowed to make a detour. So we rode across this group of icebergs. Our loads were great; the snows were deep; but the dogs all endured well.

On October 21, starting from our depot at the landing place, we set foot on the continent and proceeded towards the south, and more south. There were no big crevasses on the course. But we had to march in the teeth of strong winds which brought on snows that hurt our faces. It was hard to walk looking forward. Frostbite left its mark on the face. As for the dogs, they were no better than ourselves. It probably made it difficult for them to steer straight ahead against the wind, seeing them prone to go in the wrong direction.

In this way, on the afternoon of October 25, the three-man party and the 15 dogs reached the foot of "Botnnuten". At that point, the altitude is approximately 1,000 meters above the sea-level, the temperature was in the neighborhood of −20°C, and, as usual, snowdrifting was severe. The next morning, October 26, the mercury read −26°C with a strong wind blowig at 15 m/s. Usually, this wind has a tendency to subside in the afternoon, so we tide over it by keeping ourselves in the tent while it lasts. In the afternoon, we got on the unloaded sledge and made a round trip of "Botnnuten". This mountain mass, having a circumference of 4–5 km, is not so big. However, it is cut on all sides by glaciers, so that there is no likelihood of it being climbed easily.

We named temporarily the several peaks of this mountain mass; viz., "To-hô" (meaning East Peak), "Shu-hô" (Main Peak), and "Sei-hô" (West Peak). And a little peak located on their western side got the

name of "Inu-yama" (Dog Mountain) in recognition of our dogs' contribution to the journey.

The prospective routes determined through reconnaissance as possibly climbably are:—

1. To ascend along the west ridge of "Botnnuten" from the pass running bewteen "Inu-yama" and "Sei-hô", which we temporarily called "Inuyama-Tôge" (Pass of Dog Mountain).

2. The gully which is found on the southern side of "Botnnuten", between "Shu-hô" and "Sei-hô".

3. And, on the northern side, the gully located between "To-hô" and "Shu-hô".

Other than thes three mentioned above, there is apparently no more route elsewhere that promises an easy climb.

Towards the evening of that day, at 16:40, the three men, leaving the dogs at the camp, started on Route 1. to attack the top. The party climbed, step by step, up the hard ice, as far as "Inuyama Tôge". Shortly after making the pass, the three men did "Anseilen". A real climbing is about to begin—along the west ridge. At the top is leader NAKANO, and the last wound up by KIKUCHI. Because of much rock-climbing being required, we are not equipped with "Steigeisen". We reach an ice slope; we cut big steps. Old alpinist NAKANO, at the top, swings his "Pickel", from whose tip come down, sweeping over our heads, glinting broken pieces of ice. Looking down, the dogs we left appear like so many peas lined up at the camp. At 18:20, leader NAKANO found himself below a large overhang.

"What is he going to do?" We wondered anxiously, as we looked up to the veteran climber. It is a real overhang, standing about 3 m. high!

"Let's quit", voiced our leader NAKANO, making his decision.

The next day, October 27, it is also windy through the morning. We put on "Steigeisen" and left the camp at 14:10. Following Route 2. we arrived at the gully on the southern side "Botnnuten". For today, KIKUCHI topped the party, with NAKANO coming last. Taking caution

against avalanches, we climbed by degrees. The mercury registered −20°C. The hand that grasped the "Pickel" perspired. At 16:05, the three of us topped together the mountain, (1,500 m approx. above sea-level)—a moment of deep emotion!

While at the top of "Botnnuten", we made various investigations. And, on the 27th day after departure, we returned to "Syôwa-Base".

(to be continued)

From Jugal Himal to Langtang Himal

by Kyuya Fukata

Our team was quite a queer little party consisting of four members, a writer, an artist, a mountain photographer and a docter with an average age of 45. On 17th April 1958, these four members left Kathmandu with one liaison officer, three Sherpas and eighty porters. After eleven days caravan we arrived at a point about 4100 metres high on Jugal Himal and set up a Base Camp there.

With the intention of climbing Big White Peak (7084 m), the highest one, we first reconnoiterd Dorje Lakpa Glacier but on learning that it was difficult to try, we changed our plan and took Purbi Chachumb Glacier.

A week passed before we were able to set up Camp 3 at a point on the glacier, 4900 metres high owing to several days bad weather. We waited for three days in Camp 3 for an improvement in the weather, but the highest point we reached was nearly a ridge on the frontier (about 5500 meters).

After we returned to Base Camp, we made our way to Langtang Himal. Tackling the Panch Pokhari ridge, we passed through the Helm district and arrived Tarke Gyang through the center of that district, then went over Ganja La and down to Langtang Khola. In the Survey of India, Ganja La was marked as 5624 metres on the map, but my altimeter

which had brought from Japan did not indicate more than 5050 metres.

Time and money did not allow us to go further than Langsisa before we returned although we had intended to climb to the source of the Langtang Himal Glacier. Making our way from Langtang to the Trisul River we returned to Kathmandu on the 11th of June.

Our small private expedition was not able to achieve any fresh results in the way of mountaineering record, but we were rewarded with a lot of photographs and sketches.

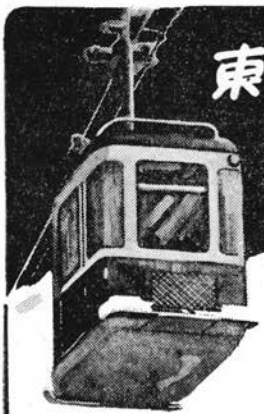
ヒマラヤから南極へ

登頂に
観測に

このマークがお
伴いたしました

I	1936年	立教大学	ナンダコート登山隊
II	1952年	日本山岳会	マナスル踏査隊
III	1953年	〃	マナスル登山隊
IIII	1954年	〃	第二次マナスル登山隊
V	1954年	京都大学	アンナプルナ登山隊
VI	1955年	〃	カラコラム学術調査隊
VII	1956年	日本山岳会	第三次マナスル登山隊
VIII	1957年	文部省学術会議	南極予備・本観測隊
IX	1958年	神戸大学	パタゴニヤ登山隊
X	1958年	深田隊長	ジユガールヒマール探査隊
XI	1959年	日本山岳会	ヒマルチュリー登山隊

千代田区神田須田町 2-23　株式会社 **細野テント**　Tel.(25) 6428



東洋一を誇る！

八方尾根 **白馬ケーブル**

スキーに・春山に・夏山に・紅葉に

無休運転

ケーブル		料金	
基点	名木山ゲレンデ横	上り	150円
定員	6名	下り	130円
時間	8時——5時	往復	250円
間隔	1分30秒	回数券	600円 5回分

近代的なロッヂ八方山荘（直営） 海抜1400米兎平ケーブル終点
収容人員70名，料金 600円より 2食付 スキーヤスペット・和室・特別室，食堂・売店
浴室，乾燥室の完備 ケーブル・イン（直営） 食堂・売店・休憩所

白馬観光開発株式会社 本社 東京都渋谷区大和田町98東京急行内 TEL (46) 1111～9
白馬営業所 長野県北安曇郡白馬村細野 TEL 北城 117

山日記 1959 年版日本山岳会編 ¥ **250**

赤い表紙でおなじみの岳人必携の書。24集のよき伝統を重ねていますが内容はいつも新鮮さを失わず年々若々しい歩みを続けています。

山で唄う歌 戸野 昭・朝倉 宏編
A6ポケット版 I ¥ **130** II ¥ **160**

Iは赤いカヴァー IIは濃緑色のカヴァーです。Iのカットには各国の山岳会のマークとピッケルのマークが入れてあります。IIのカットは串田孫一氏の楽しい山のスケッチを豊富にいただくことが出来ました。
附録の解説は読んで面白く愛唱する歌にますます親しみが増すことでしょう。

山なみ 随筆集 朝比奈菊雄・村山雅美 雨宮淳三編 ¥ **480**

山を愛する人達が描き綴る珠玉編。坂本直行氏の絵が更に精彩をそえております。蔵書棚に加えていただきたいと思います。

アンナプルナ日記 京都大学山岳会著
原色版3葉 写真28頁 地図2葉 ¥ **690**

これは小人数（7人）の貴重なヒマラヤ遠征の記録です。
出発前の準備から南面の障壁、困難な峠を越えて北面への大迂廻、頂上アタックを前にして、ジエット気流の嵐に最前線キャンプを吹き飛ばされて敗退するまでの克明な記録。

山岳 日本山岳会機関誌 年1回発売
在庫 46，47 年合併号 ¥ **400** 48 年 ¥ **400** 50，51，52 年 ¥ **500**

南極新聞 1956—7 南極研究会発行
B5版 横トジ230頁 写真16葉箱入 ¥ **600**

第一次南極観測隊の記録集大成、公共、学校図書館必備の極地文献、学校新聞部、職域新聞部等の好資料読物としても遠征記録としても抜群。

書店に注文下さればどこの店でもすぐ取寄せてくれます。

東京神田 駿河台2の1 **茗渓堂** 電話 (29) 2811

まず1万円そして100万円!

三井の

貸付信託

1口1万円
元本保証

配当率
5年もの年7分8厘
2年もの年 7 分

(お葉書きくだされば、くわしい説明書をお送りします)

三井信託銀行

本店 東京・日本橋室町・三井本館
支店 全国主要都市25ケ店

輝く歴史と大きな信用!

明るく楽しい生活の設計には…
当社の生命保険をご利用下さい

明治生命

東京・千代田・丸の内2の16
電話(28)0621・0631・0641・0651

A5—2

東京瓦斯株式会社

取締役社長 本田弘敏
取締役副社長 安西浩

東京都中央区八重洲1の3
電話(28)0111-10・0121-10・1121-10

強靭のロープ

東レのナイロン・倉レのクレモナ・各種合繊・マニラ麻

［登山用ザイル・コード類・造船船舶・漁業・農耕
一般工業用資材向各種製造］

特にナイロンザイル・応用範囲の広いナイロンユニバーサルコードを

御使用下さい

強靭繊維興業株式会社

本　社　東京都中央区日本橋芳町（66）4038・2596・4019
工　場　埼玉県・久喜町・電話久喜（50）134

アルプスと高原

日本山岳会監修

日本山岳会のベテラン24氏の執筆

山の遭難は自己に対する無責任からだ!! この秋は事前に防止しよう。登山心得帳と実際のコース指導を詳細に収載したのが本書である。

（内容の一部）

北アルプス二九コース。中央アルプス六コース。南アルプス八コース。御嶽山五コース。白山・八ガ岳と蓼科八コース。霧ガ峰と美ガ原五コース。頸城群。上信国境の山と高原。上越国境。日光、尾瀬。那須岳。奥秩父と多摩の山。富士山。丹沢山。

主要駅までの時間と運賃。私鉄バス案内。

B6上質紙二八〇頁口絵写真

一二頁コース地図付

定価二八〇円 〒五五円

5版 外国旅行案内

B6 一〇〇〇頁上製

箱入アート写真一六頁地図多数

定価一〇〇〇円

一、〇〇〇円の世界旅行は本書で。

5版 旅程と費用

日本全国の地理、歴史、産業、行事、伝説等網羅した実用向きの旅行案内書

B6 一〇〇〇頁上製

箱入アート写真三二頁地図多数

定価 一、二〇〇円

発行所 日本交通公社 東京都千代田区丸の内一の一 振替東京29403番

初夏に贈る技報堂の理工学優良図書

気象学ハンドブック
同編集委員会編 A5・1200頁 価2300円
気象学の基礎理論から応用までを気象庁第一線技術者が詳述

近代気象調査法
渡辺次雄著 B6・310頁 価450円
調査の方法，資料の纏め方，調査指針をわかりやすく解説す

栄養学ハンドブック
同編集委員会編 A5・1240頁 価2100円
栄養学の一大体係で我が国唯一の便覧と好評の書関係者必携

放射線とその測定
木村一治他共著 B6・400頁 価450円
放射線の測定と各種の測定装置の作動原理を詳解した必読書

建築の透視図と模型
中村伸編 B5変型・160頁 価500円
透視図の描き方から三点透視図までを色刷を多数収録詳述す

鋼橋 Ⅲ 土木学会監修 土木工学叢書
平井敦著 B5・550頁 価1800円
定評ある博士の鋼橋の続刊で著者多年の研究をもれなく詳述

東京都港区赤坂溜池5
振替口座東京一〇番
技報堂

軽　快　・・・

Toray

東レナイロン

スポーツ用品

●テント
●ザイル
●ロープ
●ゴルフバッグ
●スリーピングバッグ
●リュックサック
●スポーツシューズ

東洋レーヨン株式会社

野に山に

信用あるこのマーク

K&K

國分の優良鑵詰

発売元　株式会社　国分商店

東京・日本橋

旅行・ハイクに
持って行けます

皇室御用品

ヒゲタしょうゆ

★フリカケビンづめ
180ml・35円

★有名店にあります

水を加えるだけで
ご飯になる
登山家必携食

尾西アルファポ

内地米に科学的プロセスを加えてアルファ化したものですから決して変質しません

火を使わずに水だけで簡単にご飯ができますので携行食糧、非常食糧として好評です

目方が軽いことも大きな特長です。一袋、160gですが、ご飯にすると約400gとなり大人1食通常300gを越える量になります

栄養価及びカロリーは普通のご飯と変りありません。安心して召し上がれます

尾西食品株式会社
東京都港区芝車町43番地
電話 白金(44)0483

有名デパート・運動具店にあります 定価60円

合宿 のカレーライスに

たった5分でおいしくできる
即席エスビーカレーを

マナスル登山隊愛用
電話 (67) 0526

スキー用品

Constant
K.S.C.

金沢の特製優良品多数陣列
内外一流品豊富取揃
カタログ進呈

日本信販加盟店

株式会社 金沢

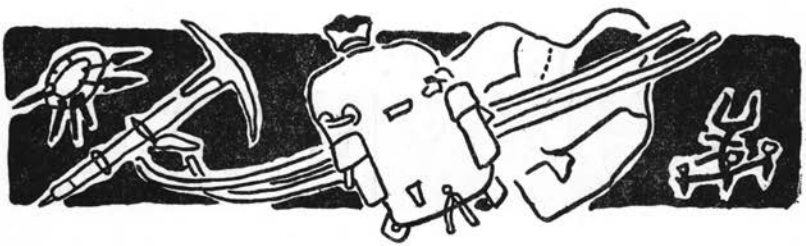
東京神田小川町電停前
TEL
卸部 (29) 2234 2235
2231 2232 2233

片桐のキスリング型ルックサック

キスリング型ザック

No. 3	小型	1.65×2.3
No. 4	中型	1.6 ×2.5
No. 5	大型	2.0 ×2.8
No. 6	特大	2.2 ×2.8

札幌門田作　ピッケルアイゼン



東京都文京区
湯島天神町三の十九

片　桐

電話下谷(83)1794番

片桐盛之助

山靴は

クライマーのいのち

マナスル登山隊　御用命

登山靴・スキー靴 専門 製作

千代田区神田
神保町 3—12

森田靴店

専修大学前
TEL (33) 3716

Sherpa

SHERPA

ピッケル，アイゼン
クッカーセット
特製キスリング各種
別製登山靴
シエルパスストーブ
新発売

精魂を打込んだ!!

シェルパの山岳用品

東京製網登山ザイル総発売元

株式会社 上山運動具店

東京都港区芝田村町二丁目九番地
電話代表東京 (59) 3306～7

全国有名運動具店・百貨店にあります
カタログ郵税同封申込下さい。

キスリング・サブルック・ヤッケ・ズボン・シューズ・手袋・マット

登山用各種天幕 専門製作

カタログ進呈

吉田テント

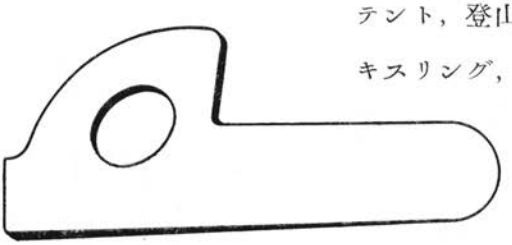
東京・杉並・中通町・1
TEL.398—2548

登山用具専門店

各有名メーカー

ハイキング
春山用品
その他
登山用具
全　般

テント，登山靴
キスリング，内田ピッケル
アイゼン



大阪市北区
曽根崎上 1-24

山の店

TEL
34
4192

放　出　登　山　用　具

寝袋　　ポンチヨ　　ヤッケ
エアーマット　手袋　天幕等

第三次マナスル登山隊　御用命

台　東　区
下谷町1～1

北岡商店

TEL (83)1101
(96)8213

登山とスキーの
日本最古の
専門店
好日山荘

東京店	大阪店	神戸店	福岡店
東京都中央区銀座西2の5	大阪市北区老松町3の13 日新ビル1階	神戸市生田区三宮町1の32の1	福岡市因幡町27 福ビル2階
電話 (56) 3600	電話 (34) 2180	電話 (2) 5の51	電話 (4) 1344
振替東京 113657	振替大阪 68763	振替神戸 21352	

TOKYO SKI

山に!!
ゲレンデに!!
競技に!!

東京スキー

主な生産品

スキー用品全般　野球用バット　卓球台
ゴルフクラブ　体操用器具
ファルトボート

TOKYO SKI

金沢運動具製作所

東京都北区田端新町 1-26　TEL (89) 6590

「山岳」投稿規定

一、投稿は誰でも自由である。日本山岳会員である必要はない。
一、原稿の採否は山岳編集委員会で決定する。
一、原稿は返却しない。
一、研究並に紀行には、その概要を付けること。
一、紀行にはなるべく概念図を添付すること。
一、写真は光沢印画紙に焼付け必ず説明を付けること。
一、地図、人名、数字、外国語は特に明確に記し、特殊な地名、人名等には必ず振仮名を付けること。
一、編集者は原稿の一部を削除または訂正することがある。
一、校正は編集者に一任されたい。

送り先　東京都千代田区神田駿河台四ノ六
日本山岳会「山岳」編集部

編集委員　望月達夫　山崎安治　田島汎

一九五九年七月十五日　印刷
一九五九年七月二十日　発行

定価　五〇〇円

発行所　東京都千代田区神田駿河台四ノ六
日本山岳会
電話神田(25)八九五二番

編集兼発行者　日本山岳会内　望月達夫　東京都港区赤坂溜池五

印刷者　株式会社技報堂　東京都中央区湊町二ノ一七

写真原色版印刷　株式会社京橋原色版印刷所

発売所　東京都千代田区神田駿河台二ノ一　株式会社茗渓堂　電話神田(29)〔二〇二一番〕〔六五二一番〕　振替口座東京二四七二三番

本誌掲載の記事写真および地図の無断転載を禁ずる

世界の屋根を征く

日本の最高峰

ホープ印

マナスル登山隊
南極観測隊御使用品
ヒマルチュリ登山隊

トレビアン Tres bien
マナスル Manaslu
アルペンローゼ Alpine Rose
アルピニスト Alpinist
グランツ Glanz

飯塚運動具製造株式會社

ホープ上野サービスステーション
東京都台東区西黒門町56
TEL (83) 4362

スワートと東部ヒンズークシ

UPPER SWĀT AND EASTERN HINDU KUSH

72° 73° 74°

36°

ソ連 U.S.S.R.
アフガニスタン Afghanistan
オクサス川 R. Oxus
ヒンズークシ HINDU KUSH
カラコラム KARAKORAM
チトラール州 CHITRAL STATE
スワート・コヒスタン SWĀT KOHISTAN
インダス・コヒスタン INDUS KOHISTAN
スワート・ヒマラヤ SWĀT HIMALAYA
スワート州 SWĀT STATE
ディール州 DĪR STATE
パキスタン Pakistan
新疆 Sinkiang
チベット Tibet
インド India
ネパール Nepal
ブータン Bhutan
東パキスタン

バロギル峠 Baroghil Pass
ダルコット峠 Darkot Pass
チアーンタル氷河 Chiantar Glacier
ダルコット Darkot
イシュコマン峠 Ishkumān Pass
イシュコマン Ishkuman
イミット Imit
ナルタル峠
バツーラ氷河 Batura Glacier
カンピーレ・ディオール
フンザ Hunza
ナガール Nagar
ラカポシ Mt. Rakaposhi
ギルギット Gilgit
グピス Gupis
ヤシン Yasin
ナズバール Naz Bar
ナズバール・アン Naz Bar An
アノ・ゴル Ano Gol
バフシュタロ・ゴル Bahushtaro Gol
ギザール川 R. Ghizar
ギルギット川 R. Gilgit
フンザ川 R. Hunza
インダス川 R. Indus
マスツジ Mastuj
マスツジ川 R. Mastuj
チュマルハン峠 Chumar Khan Pass
ギザール Ghizar
シャマラン Shamaran
シャンドル峠
チトラール Chitral
ドロシ Drosh
ダダリリ・アン Dadarili An
バラ・アン Bala An
パロガ Paloga
カラム Kalam
ファラクサール Mt. Falaksar
シャハンドク Mt. Shahan Dok
ヤルクン川 R. Yarkhun
ザガール・アン Zagar An
ドク・シャル Dok Shal
ティリチ・ミール Tirich Mīr
ブーニ・ゾム Būni Zom
ラワライ峠 Lawarai Pass
デリー Delhi
カラチ Karachi
ガンジス川 R. Ganges
ブラマプトラ川 R. Brahmaputra
エベレスト Everest
ラサ Lhasa
カルカッタ Calcutta
ナンガ・パルバット Nanga Parbat

6,272 6,677 6,312 6,089 6,872 6,507 6,317 6,872 6,523 6,191 6,030 6,518 5,933 4,575 7,144 7,784 7,611 5,798 5,550 5,532 4,927 5,852 7,485 7,038 7,106 5,708 5,170 5,660 5,714 6,237 5,009 4,977 5,561 5,628 5,646 5,950 5,273 5,551 5,873 5,320 7,740 5,372 4,344 5,240 5,135 5,087 5,291 5,242 5,905 5,857 5,580 5,751 5,293 5,000 4,939 4,894 4,124 5,749 4,864 4,942 4,670 8,125 7,783 5,918 6,257 4,955 4,821 5,725 4,287 3,720 3,118

1 ラホール Lahore
2 ペシャワル Peshawar
3 サイド・シャリフ Saidu Sharif
4 バハレーン Bahrain
5 ギルギット Gilgit
6 チトラール Chitral

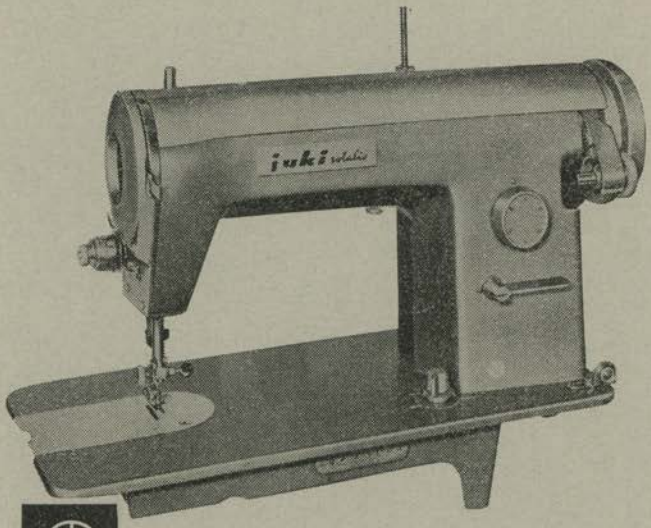
0 10 20 30 40 50 Km

0 1,000 Km

---------- 探検ルート Expedition route

-----o----- キャンプ地点 Camping place

高度はメートルで示す Heights are in metres



JUKI

恩賜発明賞受賞

日，米，英，仏，西独，伊，瑞西，加，伯，印　特許

ジューキミシン

東京重機工業株式会社

本社工場　東京調布　　本社営業部　東京新宿

出張所　大阪，名古屋，福岡，広島，仙台，札幌，高松，富山

The Journal of

The Japanese Alpine Club

SANGAKU

Vol. LIII 1959